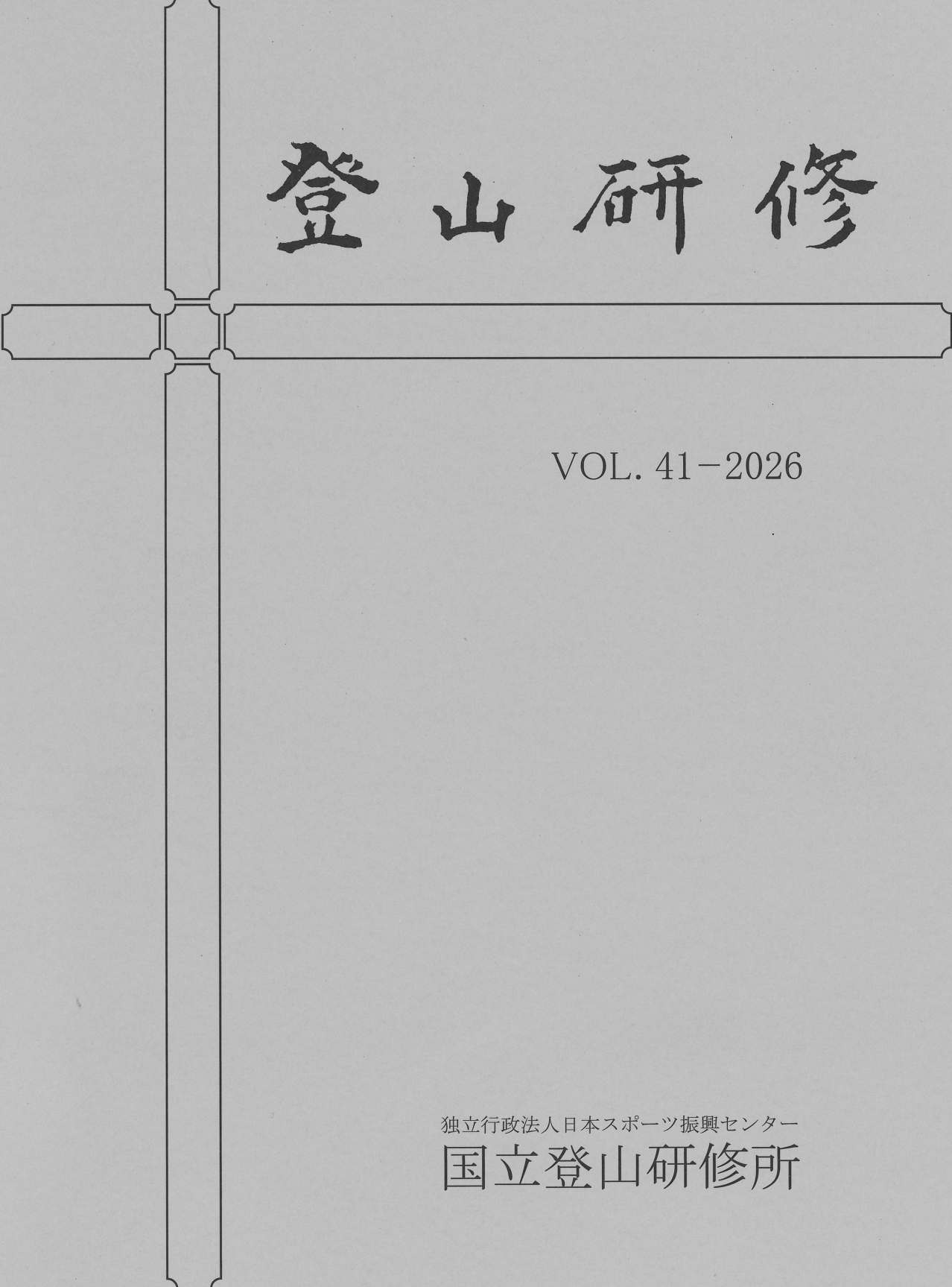


A large, thin-lined crosshair graphic is centered on the page. It consists of a vertical bar and a horizontal bar that intersect at their centers. The ends of the bars are slightly flared, giving it a traditional Japanese architectural feel.

登山研修

VOL. 41-2026

独立行政法人日本スポーツ振興センター

国立登山研修所

ま え が き

警察庁が公表した令和7年夏期の速報値によれば、山岳遭難は808件、遭難者数917人といずれも前年より増加しました。加えて、猛暑の影響による雪渓の消失や熱中症の遭難事案も報告されており、山岳安全対策の重要性が一層高まっていると認識しています。

国立登山研修所では、専門調査委員会の調査研究部会において、警察庁及び長野県警察から提供を受けた2021年から2023年までの山岳遭難データに関する分析を行い、結果の一部を令和7年度全国山岳遭難対策協議会にて紹介するとともに登山研修所のウェブサイトでも公表しました。その概要については、本誌にも掲載いたしましたので御高覧ください。

また、昨年より始まった施設の大規模改修工事が本格化し、今年度は、3階宿泊室、2階事務室・食堂・浴場を含む広い範囲で耐震補強・断熱改修・空調設備・屋上防水工事等が実施されました。利用者の皆様に御不便をおかけしておりますが、安全で質の高い研修環境整備のため、何卒御理解と御協力をお願い申し上げます。

「登山研修 vol.41」では、国内外の登山事情や海外登山の貴重な報告、併せて先にお伝えした調査研究部会による山岳遭難データに関する分析結果など、多岐にわたる内容を掲載しています。より多くの皆様に御覧いただき、安全登山の普及と発展に寄与することを願っております。

末筆ながら、御多用のところ御寄稿くださった執筆者の皆様、編集委員の皆様にご心より御礼申し上げます。

令和8年3月

国立登山研修所長 米 山 隆

目 次

1. 登山に関する調査研究

(1) スポーツクライミング3種目化に伴う2028年ロス五輪への マイルストーン	安井博志	1
(2) 剣沢雪渓の最近の変動Ⅳ	飯田肇他	4
(3) 登山研修所における積雪観測結果 2024～2025年冬期	飯田肇他	9
(4) 気候変動に伴う日本の山岳環境の変化と登山時の留意点	猪熊隆之	13
(5) ヤブを漕ぐ	山本宗彦	37

2. 登山界の現状と課題

(1) UIAA安全委員会の2025年次総会と関連小委員会・記念講演会	北村憲彦	43
(2) 登山道の管理と責任	溝手康史	50
(3) 減災の視点から見た、登山の技術・知識を普及する意義	田渕幹敏	59
(4) 障害者の登山に関する課題と展望	池谷航介	68
(5) さあ、まだ見ぬ壁が待っている。 ～障害者クライミング普及20年、歩み続ける先に描くインクルーシブな社会～	小林幸一郎	76
(6) 「疫学／一次予防の視点からの山岳遭難対策：全国山岳遭難対策 協議会シンポジウム発表の山岳遭難データ分析から」	村越真	86
(7) ツキノワグマ対策「with Bear」時代の登山術Ⅱ ～立山地域および薬師岳方面における近年の出没状況と軋轢～	白石俊明	92

3. 海外登山記録

(1) パキスタンカラコルム Lachet Valley Hasho PeakⅡ East Pillar 初登 ～情報の無い山域において登攀対象を探るプロセスを考える～	鳴海玄希 山本大貴 鈴木雄大	100
(2) パキスタン KOZ氷河クライミングツアー	佐藤裕介	108
(3) グレート・ヒマラヤ・トラバース5,000キロの旅	重廣恒夫	115
(4) 中国四川省ミニヤコンカ山群 ロンシャン（龍山/Longshan、6,684m）登山報告	桑原郁美	139
(5) 日本のヒマラヤ登山最盛期	尾形好雄	144

4. その他

(1) 山岳遭難データの分析に至る経緯	村越真他	153
(2) 2025年度大韓民国国立公園公団・国立公園教育院との交流事業	国立登山研修所	159
(3) 国立登山研修所友の会の活動について	恩田真砂美	167

5. 既刊「登山研修」索引

スポーツクライミング3種目化に伴う2028年ロス五輪へのマイルストーン

安井 博 志 ((公社)日本山岳・スポーツクライミング協会)

1. はじめに — 3種目化の歴史的意義

スポーツクライミング競技は、近年のオリンピック競技の中でも最も急速な進化を遂げている種目の一つです。

東京2020オリンピックでは、リード・ボルダー・スピードの3種目を統合したコンバインド1種目のみで実施されました。この形式は競技の多様性を示すものであり、スポーツクライミングという競技の全体像を世界に示す役割を果たしました。一方で、各種目の専門性を十分に評価する仕組みではなく、選手は専門外種目にも対応する総合力を求められました。

続くパリ2024オリンピックでは、ボルダー&リード(B&L)とスピードの2種目制へ移行しました。これによりスピードは独立種目となり、専門性が一定程度確保されました。しかしながら、リードとボルダーは統合形式であったため、完全な専門分化とは言えない過渡的段階にありました。

そしてロサンゼルス2028オリンピックでは、リード・ボルダー・スピードの完全3種目制が採用されます。これは競技構造上の大きな転換点であり、各種目のスペシャリストが真に評価される舞台が整備されたことを意味します。

3種目制の導入により、メダル数は増加し、出場選手層の拡大が見込まれます。同時に、世界水準の競技力は一層高度化し、各国の強化戦略もより専門的かつ科学的なものへと進化していくことが予想されます。本報告では、その環境変化を踏まえ、日本代表チームの現状分析とロサンゼルス大会に向けた

マイルストーンを整理いたします。

2. 世界ランキングに基づく日本代表の現状分析

国際スポーツクライミング連盟(IFSC)が公表したワールドカップ2025シーズン終了時点のランキングにおいて、日本はリードおよびボルダーの国別ランキングで1位となっています。これは単年度の成果ではなく、複数年にわたる強化施策の積み重ねによる結果です。

(1) ボルダー種目の状況

男子では、安楽宙斗が世界ランキング1位に位置しています。加えて、4位天笠颯太、5位榑崎智亜、6位榑崎明智と、トップ6に4名が入っています。このように、単独の突出した存在に依存するのではなく、複数名が安定的に上位を維持している点が特徴です。



頂点を目指す安楽

女子では、3位中村真緒、5位関川愛音、6位野中生萌が上位に位置しています。若手と経験豊富な選手が混在する構成は、今後の世代交代と競技力維

持の両立という観点でも好ましい状況です。



チームで

(2) リード種目の状況

男子では1位吉田智音、4位安楽宙斗、5位鈴木音生、9位小俣史温と、トップ10に4名が入っています。リード種目は持久力、戦略性、ルート読解力が求められる種目であり、安定した強化体制が成果に直結します。日本は長年にわたりリードを重点強化種目として取り組んできた経緯があり、その成果が現在のランキングに反映されています。



リード吉田智音

女子リードについても、世界大会で安定して決勝進出を果たす選手が育成されており、国際舞台での競争力は維持されています。

(3) スピード種目の状況

スピードでは大政涼が世界ランキング7位に位置しています。スピード種目は、純粋なタイム競技であり、技術の再現性と爆発的パワーが勝敗を分けま

す。近年は世界的に記録更新が進み、競技水準は急速に向上しています。

総じて、日本代表は3種目すべてにおいて世界ランキング10位以内に複数名を擁しており、ロサンゼルス大会に向けて全種目でメダル獲得を目指せる競技力水準にあります。

3. ロサンゼルス2028大会へのマイルストーン

2026年2月にロサンゼルス大会の予選システムが発表されました。

出場枠は以下のとおりです。

- ・リード：男女各12名
- ・ボルダー：男女各12名
- ・スピード：男女各14名

予選対象大会は、

1. 世界選手権大会
2. アジア大陸予選
3. オリンピック予選シリーズ

の3イベントです。

まず国内において日本代表選手として選出されることが前提条件となります。そのうえで、これら国際大会で明確な成果を挙げる必要があります。出場枠は限られており、わずかな失敗が出場権逸失につながる厳しい競争が予想されます。

そのため、年間計画の精度向上、ピークパフォーマンスの時期設定、遠征スケジュールの最適化、栄養管理およびコンディショニングの高度化が不可欠です。また、心理的プレッシャー下でのパフォーマンス維持も重要な要素となります。

日本代表チームは「金メダルを含む複数メダルの獲得」を明確な目標として掲げています。この達成には、競技力のみならず、組織全体のマネジメント能力が問われます。

1. 登山に関する調査研究

4. 強化の方向性

(1) リード・ボルダー種目の強化方針

国内合同トレーニングを定期的実施し、トップ選手同士が相互に刺激を与え合う環境を整備しています。国内の競争環境の質を高めることが、国際大会での優位性につながります。

また、高強度練習に伴う故障リスクへの対応も重要です。フィジカルチェック、可動域評価、筋力バランス測定などを定期的に実施し、怪我の予防と早期対応に努めています。



ボルダー 榑崎智亜

若手育成については、ジュニア世代からの一貫指導体制を強化しています。ベテラン選手の経験と若手の勢いを融合させ、厚みのある代表チームを形成します。

日本スポーツ振興センターの課題解決型アスリート育成パスウェイ構築事業を活用し、国内外合宿や国際大会への派遣を通じて実戦経験を積ませています。

(2) スピード種目の強化方針

スピードは医科学的支援の重要性が極めて高い種目です。国立スポーツ科学センター研究員と連携し、AIを活用した動作分析アプリの開発を進めています。

動作軌道、接地時間、反応速度、重心移動を数値化し、より直線的で無駄のない動作を追求しています。これにより、タイム短縮を科学的に支援します。

さらに、ボルダーとの併用トレーニングにより、瞬発力と身体操作能力の融合を図っています。これ

は日本独自のアプローチとして、国際的競争力向上に寄与すると考えています。



スピード 大政涼

5. 選手の健康管理と持続可能性

競技水準の向上に伴い、トレーニング強度も高まっています。その中で選手の健康管理は最優先事項です。

IFSC が推進するRed's プログラム（低エネルギー問題対策）への対応を強化し、栄養管理、体重管理、心理的ケアを含む包括的サポート体制を整備しています。

競技力向上と健康維持は両立可能であり、長期的視点に立った育成が不可欠です。

6. 総括

ロサンゼルス2028大会における3種目制の導入は、スポーツクライミング競技の成熟を象徴する出来事です。専門性の高度化は避けられず、国際競争は一層激化します。

日本代表は現時点で世界上位の競技力を有していますが、これに満足することなく、強化体制のさらなる高度化を図ります。国内競争力の維持、科学的支援の充実、育成構造の整備、健康管理体制の強化を総合的に推進します。

3種目すべてで世界の頂点を目指すという目標は容易ではありません。しかし、明確なマイルストーンと組織的支援体制のもと、着実に準備を進めてまいります。

劔沢雪溪の最近の変動Ⅳ

飯 田 肇（富山県立山カルデラ砂防博物館）
福 井 幸太郎（富山県立山カルデラ砂防博物館）

はじめに

劔岳の劔沢雪溪は秋期の残雪面積が大きい多年性雪溪として知られ、遅い時期まで登山路として利用されている。しかし近年、雪溪の消耗が激しい年が続き、8月に入ると登山路としての利用が出来なくなった年もみられる。そこで、現地写真データや航空測量写真データ等の収集を行い最近の劔沢雪溪の変動について予察的に検討したので、ここに報告する。

1. 2024年の平蔵谷雪溪、長次郎谷雪溪の変動

2025年夏期から秋期にかけて、真砂沢ロッジ主人の坂本心平氏が継続的に劔沢周辺の雪溪の撮影を実施していたので、これらの写真データから雪溪の変動をみてみる。

1-1 2025年の平蔵谷雪溪の変動

図1に、平蔵谷雪溪の変化を示す。8月3日の写真を見ると、ほぼ連続して存在していて登山路としての利用が可能となっている。2024年の同時期では、雪溪が下部で分断し早い時期から登山路としての利用が困難になっていたが、それよりは残雪が多い。

次に9月28日になると、雪溪は平蔵谷中流部のみに残存するが全体にわたり沢床が多く露出した。

2025年では、平蔵谷雪溪は8月中までは連続して存在し登山路としての利用が可能だったが、9月に入ると下部で分断がみられ、9月下旬には登山路としての利用が困難となっていた。

1-2 2023年の長次郎谷雪溪の変動

図2に、長次郎谷雪溪の変化を示す。8月3日の写真を見ると、雪溪はほぼ連続して存在している。2024年の同時期では、中流部の幅が狭まっていたが、2025年ではまだその傾向はみられず登山路としての利用が可能な状態だった。

次に9月23日を見ると、雪溪の大部分がほぼ消失している様子がうかがえ、登山路としての利用が困



図1 平蔵谷雪溪の変化 2025年
上：2025年8月3日 下：2025年
9月28日（写真提供 坂本心平）



図2 長次郎谷雪溪の変化 2025年
上：2025年8月3日 下：2025年
9月23日（写真提供 坂本心平）

1. 登山に関する調査研究

難になっている。また、劔沢との出合付近を見ると、2023年では雪渓はほとんど消失していたが、2025年ではまだ広く残存していることがわかる。これらより、2025年の長次郎谷雪渓は、登山路としての利用が、8月では可能だったが9月に入ると困難になったと考えられる。

2. 劔沢雪渓の最近の変動比較

図3に、2023年、2024年、2025年秋期に富山県立山カルデラ砂防博物館の調査で取得した劔沢雪渓の航空写真を示す。また、図4に、航空測量写真より解析して得られた劔沢雪渓の平面図を示す。これらより、劔沢雪渓の最近の変動傾向を以下に比較した（飯田他、2024）。

まず図3の2025年9月26日を見ると、雪渓は3つに分断されていた。標高約2,120m～2,220m付近に上部雪渓、標高約2,050～2,100m付近に中間雪渓、標高約1,900～2,000m付近に下部雪渓が残存している。2025年の雪渓が残存している標高域は、2023年、

2024年とほぼ同様で、近年では9月下旬から10月上旬になると劔沢雪渓が同様の標高域で3つに分断される傾向があることがわかる。劔沢雪渓は、過去には、秋になっても一続きの長い雪渓が続き登山路として利用されていたが、近年では、9月に入ると分断が進み登山路としての利用が困難となることが多い。

各雪渓とも幅が狭く雪渓上のスノーブリッジが顕著に発達していて、消耗が大きいことがうかがえる。また、近づいて観察すると、雪渓表面には年層境界を含む下層の万年雪（多年性雪渓）が露出していて、多数のクレバスが分布している。これらから、残存する積雪は多年性のフィルン（硬雪）あるいは氷体だと考えられる。

図4に、2016年、2017年、2020年、2023年、2024年、2025年秋期の劔沢雪渓の航空測量写真を比較のために示す。劔沢雪渓は、2016年秋期に大きく消耗してはじめて3つに分断した。しかし、2017年秋期

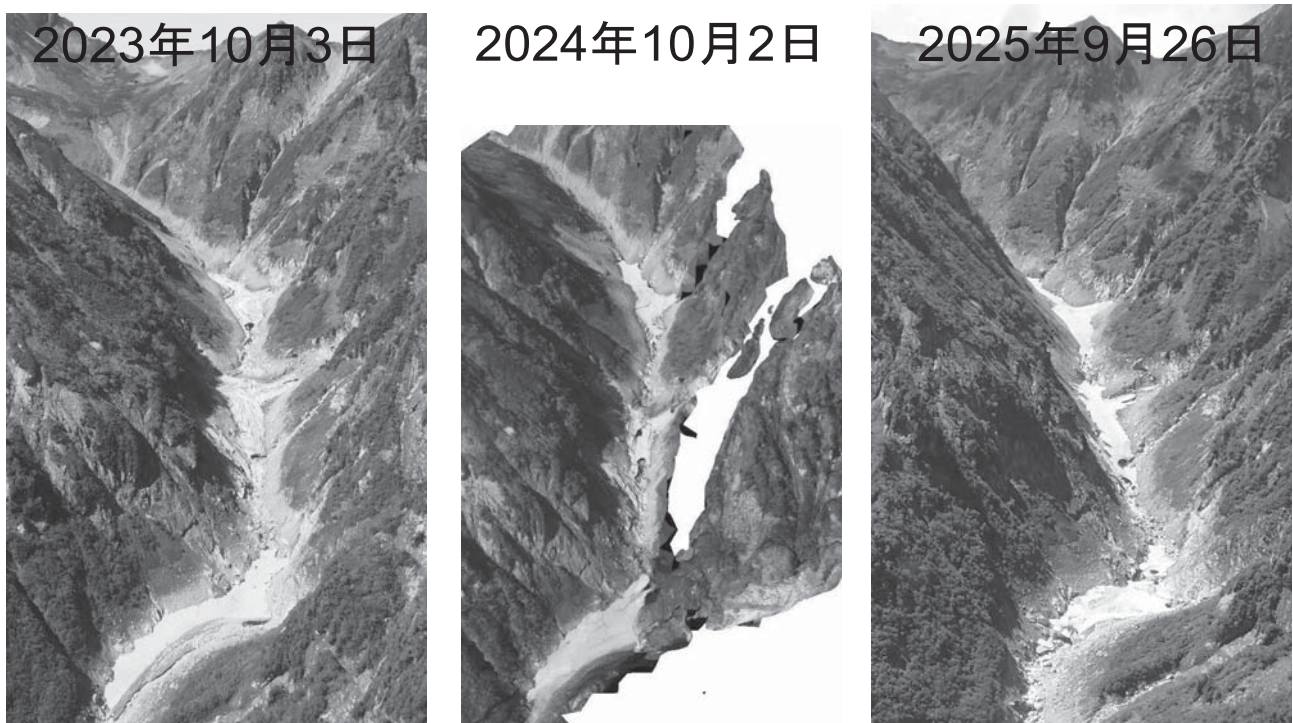


図3 劔沢雪渓 左：2023年10月3日 中央：2024年10月2日 右：2025年9月26日

には再び一続きの雪渓となった。しかしその後、2020年秋期に再び大きく消耗して3つに分断され、下部雪渓はわずかな塊を残すのみでほぼ消失して河床が露出した。このため2020年の消耗量は過去最大となった。さらに、2023年秋期、2024年秋期に再び3つに分断された。兩年とも上部雪渓、中間部雪渓の消耗が顕著だったが下部雪渓は残存面積が比較的大きかった。2025年秋期も2023年、2024年とほぼ同様に3つに分断されたが、下部雪渓の消耗が兩年より特に激しかった。

図5に、図4から測定した2016年、2017年、2020年、2023年、2024年、2025年の上部雪渓、中間部雪渓、下部雪渓の面積を示す。また、各年の雪渓の総面積もあわせて示す。まず総面積を見ると、一続きとなった2017年が約 $10 \times 10^4 \text{ m}^2$ (10 ha) で最大となった。はじめて3つに分断された2016年は約 $6.0 \times 10^4 \text{ m}^2$ (6 ha) で2番目に大きかったが、次に3つ

に分断された2020年は約 $3.0 \times 10^4 \text{ m}^2$ (3 ha) で最小となった。下部雪渓がほぼ消失したことが影響したと考えられる。さらに3つに分断された2023年は約 $4.0 \times 10^4 \text{ m}^2$ (4 ha)、2024年は約 $4.1 \times 10^4 \text{ m}^2$ (4.1 ha) でほぼ同様の値であった。2020年と比較して、上部、中間部雪渓は減少しているが、2020年にほぼ消失した下部雪渓が大きく増加していることが特徴的である。2025年の総面積は約 $3.5 \times 10^4 \text{ m}^2$ (3.5 ha) で、2020年に次ぐ小さい面積であった。

まとめると、長期間一続きの万年雪（多年性雪渓）として知られていた釧路雪渓が、2016年の少雪年に3つに分断してしまった。図4の写真より、2016年のような少雪年に残存した雪渓は、表面形状等から万年雪（フィルン）や氷体で構成されていると考えられる。これより、2016年には、雪渓下層に分布していた氷体のかなりの量が融解して消失してしまったと考えられる。しかし、2017年が多雪年だったこともあり、雪渓はほぼ元の大きさに戻った。

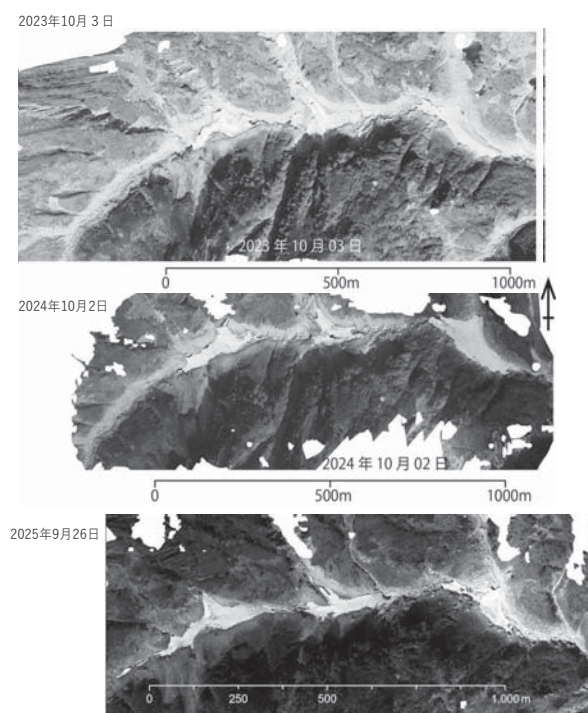
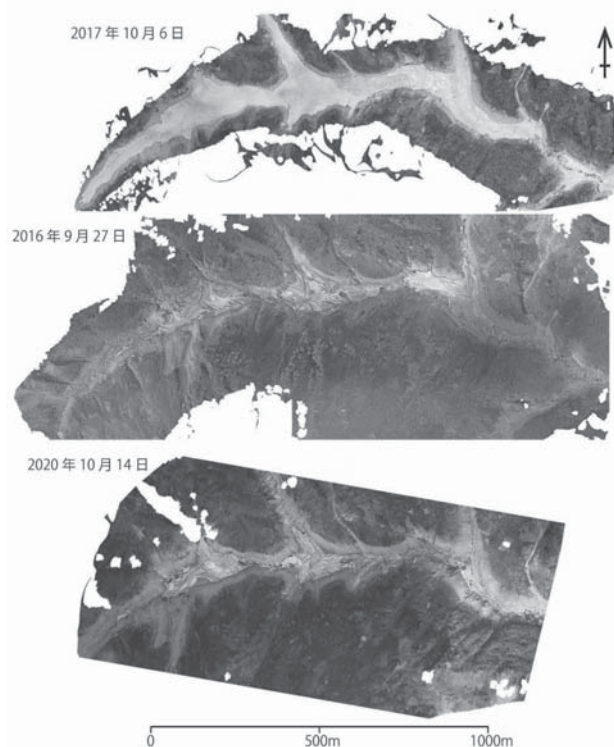


図4 2016年、2017年、2020年、2023年、2024年、2025年秋期の釧路雪渓の航空測量写真による比較（左：上流側）

1. 登山に関する調査研究

しかし、2016年の氷体の損失分は雪で覆われたただけだったので氷体と比べると融解しやすく、2020年の顕著な少雪年に雪渓は再び3つに分断して、最下部の長次郎谷出合付近の万年雪（多年性雪渓）がほぼ消失してしまった。山岳関係者に聞き取りを行っても、この場所の雪渓がほぼ消失して河床が露出したのはここ数十年間見たことがない、ということだった。さらに、2023年、2024年も顕著な少雪年だったため、2016年、2020年に消失した氷体の分を埋めた積雪の融解が選択的に速く進み、再び同様の位置で3つに分断されてしまったと考えられる（飯田他、

年	上部 ha	中間部 ha	下部 ha	総計 ha	比率 2017年を1
2016	2	2	2	6	0.6
2017				10	1
2020	1.4	1.4	0.2	3	0.3
2023	1.2	1.5	1.3	4	0.4
2024	1.3	0.9	1.9	4.1	0.41
2025	1.5	1.1	0.9	3.5	0.35

図5 釧沢雪渓 年変動比較

2023)。また、2025年は少雪年ではなかったが、夏期の気温が高く消耗量が多かったこと、毎年分断される箇所万年雪の涵養が進まないこと等から、同様の位置で3つに分断されたと考えられる。

3. 釧沢雪渓と雪の大谷・雪の壁との変動比較

2016～2025年には特徴的な少雪年や多雪年が見られ、それに伴って釧沢雪渓は大きく変動した。各年の秋期の雪渓総面積比は、最近では最大となる2017年を1.0とすると、2016年が0.6、2020年が0.3、2023年が0.4、2024年が0.41、2025年が0.35となり、2020年の雪渓の消耗がいかに大きかったかがうかがえる。次いで2023年、2024年、2025年も雪渓が大きく消耗した年であった。

雪渓の増減を決めるのは、冬期の積雪の涵養量と夏期の積雪の消耗量の収支である。そこでまず、冬期の涵養量と最近の釧沢雪渓の変動について検討してみる。冬期の涵養量の指標として、室堂平周辺で特に積雪の多い雪の大谷・雪の壁の4月の最大積雪深期の値を図6に示す。

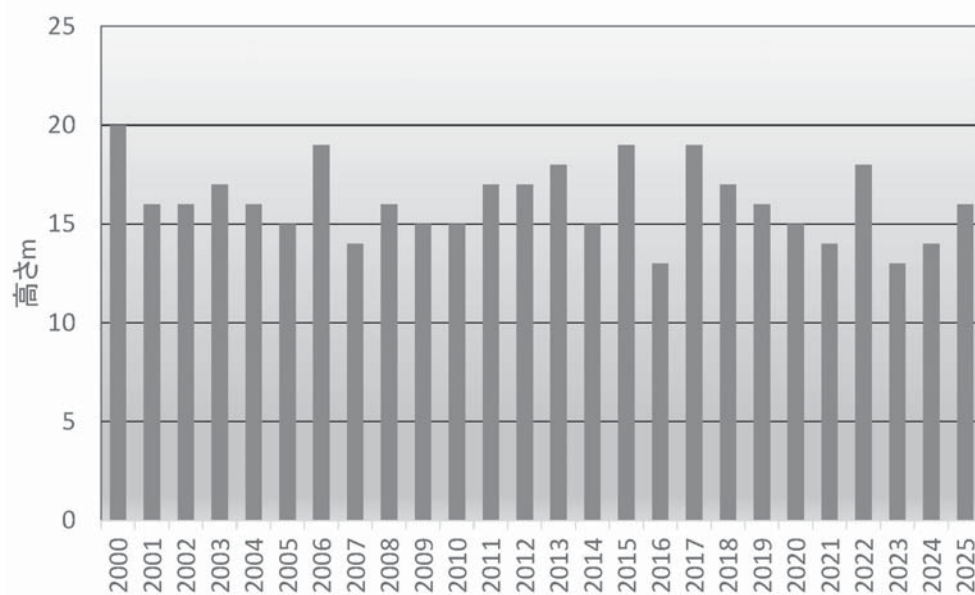


図6 雪の大谷・雪の壁の高さの変化 (m)

図より、雪渓面積の観測年の雪の壁の高さは、2016年で13m、2017年で19m、2020年で15m、2023年で13m、2024年で14m、2025年で16mであった。雪の壁の高さの最近20年間の平均値は16m、最大値は20m、最小値は13mであり、劔沢雪渓の消耗年（2016年、2020年、2023年、2024年、2025年）は雪の壁の高さの少雪年とよく一致していた。また、2017年の劔沢雪渓の多雪年では、雪の壁の高さは19mで20年間で2位の値であった。これより、劔沢雪渓の大きさと雪の大谷・雪の壁の高さとの間に良い相関があることがうかがえ、劔沢雪渓の変動には冬期の涵養量がより大きく関与していると考えられる。

おわりに

劔沢雪渓は登山路として利用されている雪渓であるため、一度多年性雪渓が消失した場所ではその後の氷体の涵養が進まず、不安定な状態が続くことが危惧される。特に2020年には、長次郎谷出合付近の下部雪渓がほぼ消失した。（飯田他，2020）。また、2023年、2024年、2025年も同様に雪渓の消失が激しく、2020年に次ぐ消耗量となった。今後、多雪年があっても積雪が涵養されたとしても、新しい積雪はまだ密度が低くて厚い氷体は形成されないため、再び暖冬少雪年があると、これらの新しい積雪部分が弱点となって選択的に融解が進み、劔沢雪渓は早い時期から分断されやすくなることが考えられる。

長く登山路として利用され親しまれている劔沢雪渓であるが、最近の温暖化により、その姿が大きく変わりつつある。今後も登山路として利用していくためにも、毎年、雪渓状況についてのモニタリングを継続して実施していくことが強く望まれる。

文 献

- 飯田 肇（2020）日本の現存氷河の概要、登山研修VOL.35、16-23
- 福井幸太郎・飯田 肇（2017）2016年秋の飛騨山脈北部の氷河・雪渓の融解状況、日本地理学会2017年春季学術大会講演予稿集
- 飯田 肇・福井幸太郎（2020）劔沢雪渓の最近の変動、登山研修VOL.36、108-114
- 飯田 肇・福井幸太郎（2024）劔沢雪渓の最近の変動Ⅱ、登山研修VOL.39、29-33
- 飯田 肇・福井幸太郎（2025）劔沢雪渓の最近の変動Ⅲ、登山研修VOL.40、15-19

登山研修所における積雪観測結果 2024～2025年冬期

飯 田 肇 (富山県立山カルデラ砂防博物館)

黒 川 和 英 (国立登山研修所)

沓 掛 栄一郎 (国立登山研修所)

朽 見 太 朗 (国立登山研修所)

1. はじめに

国立登山研修所（以下 登山研）では、2009年冬期より、大日岳への稜線上の冬山前進基地（標高1,300m）において積雪深と気温の自動計測及びデータ通信を継続している。これにより、これまで未知だった1,000～1,500m付近の気象条件をリアルタイムにモニターできるようになり、得られたデータは研修会等での行動判断に活用している。ここでは、2024～2025年冬期の冬山前進基地（以下 前進基地）での観測結果を中心に報告する。

2. 2024～2025年冬期の前進基地での観測

標高1,300mの前進基地に620cmポールを設置し、1時間毎にレーザー積雪深計にて積雪深の観測を実施した。また、1時間毎に気温も測定した。結果を次に示す。

(1) 積雪深

図1に、2024～2025年冬期の前進基地における積雪深変化を示す。比較のために、2020～2021年冬期と2021～2022年冬期、2022～2023年冬期、2023～2024

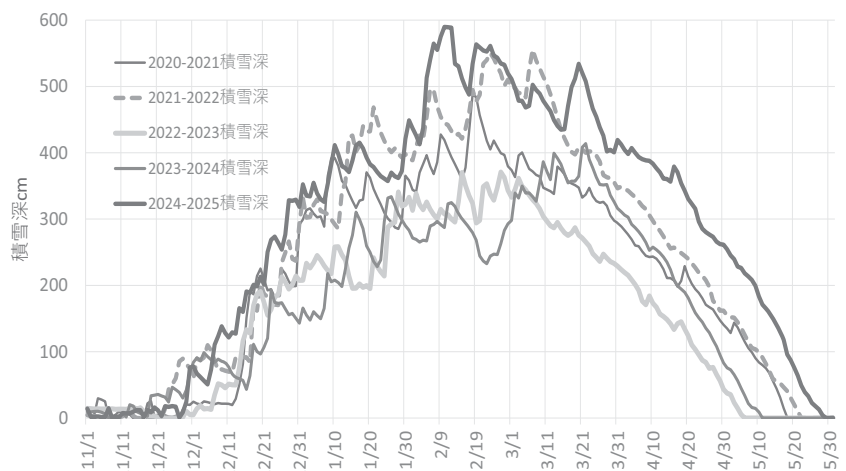


図1. 前進基地における積雪深(2020年11月～2025年5月)

表1. 前進基地における積雪深(9時)(2024年11月～2025年5月)

2024年	積雪深	2024年	積雪深	2025年	積雪深	2025年	積雪深	2025年	積雪深	2025年	積雪深	2025年	積雪深
11/1	14	12/1	78	1/1	352	2/1	437	3/1	511	4/1	413	5/1	254
11/2	2	12/2	67	1/2	335	2/2	426	3/2	497	4/2	404	5/2	245
11/3	2	12/3	62	1/3	334	2/3	413	3/3	479	4/3	398	5/3	240
11/4	2	12/4	56	1/4	355	2/4	437	3/4	478	4/4	407	5/4	228
11/5	2	12/5	51	1/5	339	2/5	513	3/5	468	4/5	400	5/5	226
11/6	2	12/6	73	1/6	330	2/6	540	3/6	471	4/6	394	5/6	218
11/7	15	12/7	111	1/7	326	2/7	565	3/7	503	4/7	390	5/7	213
11/8	0	12/8	124	1/8	352	2/8	555	3/8	495	4/8	389	5/8	208
11/9	2	12/9	138	1/9	382	2/9	575	3/9	489	4/9	388	5/9	199
11/10	2	12/10	128	1/10	411	2/10	590	3/10	478	4/10	384	5/10	183
11/11	7	12/11	122	1/11	398	2/11	589	3/11	470	4/11	377	5/11	171
11/12	7	12/12	129	1/12	380	2/12	589	3/12	463	4/12	371	5/12	165
11/13	7	12/13	127	1/13	377	2/13	534	3/13	449	4/13	361	5/13	159
11/14	10	12/14	166	1/14	371	2/14	530	3/14	441	4/14	360	5/14	150
11/15	12	12/15	160	1/15	388	2/15	512	3/15	435	4/15	356	5/15	140
11/16	12	12/16	191	1/16	411	2/16	498	3/16	436	4/16	379	5/16	131
11/17	1	12/17	189	1/17	415	2/17	488	3/17	470	4/17	371	5/17	118
11/18	12	12/18	201	1/18	407	2/18	534	3/18	499	4/18	354	5/18	96
11/19	9	12/19	199	1/19	393	2/19	564	3/19	512	4/19	343	5/19	87
11/20	16	12/20	213	1/20	383	2/20	559	3/20	534	4/20	330	5/20	76
11/21	12	12/21	201	1/21	379	2/21	554	3/21	521	4/21	323	5/21	64
11/22	3	12/22	250	1/22	371	2/22	553	3/22	508	4/22	316	5/22	49
11/23	18	12/23	269	1/23	365	2/23	561	3/23	486	4/23	296	5/23	39
11/24	17	12/24	274	1/24	361	2/24	547	3/24	466	4/24	285	5/24	33
11/25	18	12/25	264	1/25	357	2/25	543	3/25	454	4/25	280	5/25	23
11/26	17	12/26	254	1/26	370	2/26	535	3/26	438	4/26	277	5/26	18
11/27	1	12/27	277	1/27	365	2/27	533	3/27	426	4/27	273	5/27	13
11/28	9	12/28	328	1/28	362	2/28	520	3/28	402	4/28	266	5/28	4
11/29	25	12/29	328	1/29	373	2/29	287	3/29	404	4/29	262	5/29	0
11/30	76	12/30	329	1/30	421			3/30	401	4/30	261	5/30	0
		12/31	319	1/31	449			3/31	419			5/31	0

年冬期の積雪深変化をあわせて示す。また、表 1 に 2024～2025年冬期の前進基地の積雪深の数値データを示す。

2024～2025年冬期を見ると、1 降雪期間中で50cm以上の顕著な積雪深の増加は、11月27日～12月 1 日で72cm、12月 5～9 日で87cm、12月13～20日で98cm、12月21～24日で72cm、12月26～28日で74cm、1 月 7～10 日で85cm、1 月28～31 日で87cm、2 月 3～10 日で177cm、2 月17～19 日で76cm、3 月16～20 日で99cmとなり10回記録した。期間中の最大積雪深は2 月10日の590cmであり、積雪日数は11月 6 日～5 月29日の間の204日間で、年間の55%が雪で覆われていたことになる。

12月上旬から1 月上旬までにまとまった降雪があり積雪は4 mまで漸増した。しかし、1 月中～下旬では顕著な積雪増加は見られず堆積中断期がみられた。しかし、1 月下旬～2 月上旬に顕著な積雪増加があり2 月10日に590cmの最大積雪深を記録した。その後、2 月中旬と2 月下旬から3 月中旬に大きな積雪減少期間があったが、3 月中旬に100cmの積雪増加があった。3 月下旬以降は融雪期となり急激に積雪が減少したが、冬期の積雪が多かったため消雪は5 月29日と大きく遅れた。

次に、2020～2021年冬期、2021～2022年冬期、2022～2023年冬期、2023～2024年冬期の値と比較して見る。70cm以上の顕著な積雪深の増加期間の回数は、2020～2021年で9 回、2021～2022年で7 回、2022～2023年で4 回、2023～2024年で7 回であったが、2024～2025年では10回となり顕著な多雪年であったことがわかる。また、冬期の最大積雪深を見ると、2020～2021年は2 月18日の488cm、2021～2022年は3 月 7 日の555cm、2022～2023年は

2 月26日の371cm、2023～2024年は3 月22日の414cmであったが、2024～2025年は2 月10日の590cmとなり、2020年以降では最も多雪年であり、2 月上旬までに積雪がほぼ形成された。

近年では寡雪年であった2022～2023年の最大積雪深を1 とすると、2020～2021年は1.5倍、2021～2022年は1.3倍、2023～2024年は1.1倍、2024～2025年は1.6倍となり、今冬期の積雪は近年ではたいへん多かったことが示唆される。次に積雪期間を比較して見る。2022～2023年の140日間を1 とすると、2020～2021年の173日間は1.2倍、2021～2022年の181日は1.3倍、2023～2024年の182日は1.3倍、2024～2025年の204日は1.5倍となる。これらより、2024～2025年冬期は過去5 冬期間では積雪深、積雪期間ともに最も多い多雪年であったことがわかる。

(2) 日積雪深差

図 2 に、前述の5 冬期間の1 日毎の積雪深差を示す。積雪には沈降があるため積雪深差と降雪量は必ずしも一致しないが、1 日の降雪量を反映した量であると考えられる。

一般的に、日降雪量が30cmを超えると大雪となり、歩行が困難になったり雪崩発生リスクが高ま

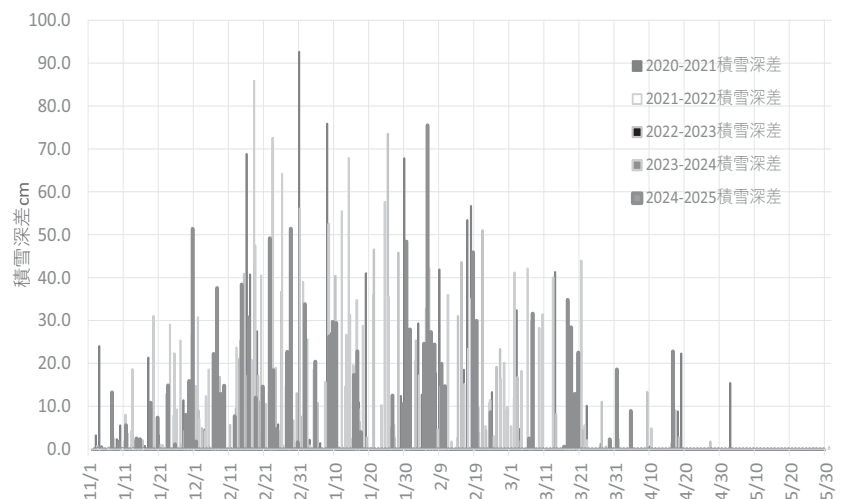


図2. 前進基地における日積雪深差(2020年11月～2025年5月)

1. 登山に関する調査研究

るといわれている。さらに50cmを超えると豪雪となり、歩行は大変困難となり、また自然発生雪崩が起きる確率もより高まる。ここでは各冬の日積雪深差の特性を見てみる。

2024～2025年冬期をみると、日積雪深差が30cm以上の日が15回、そのうち50cm以上の日が5回みられた。日積雪深差の最大値は76cmであった。

2020～2021年冬期では、日積雪深差が30cm以上の日が13回、そのうち50cm以上の日が6回みられ日積雪深差の最大値は93cmであり、山岳地域としてもたいへん大きな値であった。次に2021～2022年冬期では、日積雪深差が30cm以上の日が15回、そのうち50cm以上の日が5回みられ、日積雪深差の最大値は86cmとたいへん大きな値を示した。2冬期とも、日積雪深差（日降雪量に相当）がたいへん多い冬期だったことがうかがえる。特に、両年とも50cmを超える日積雪深差（日降雪量に相当）が5回以上もみられ、短期間に降雪量が急増する傾向が示唆された。

それに対して2022～2023年冬期をみると、日積雪深差が30cm以上の日が9回、そのうち50cm以上の日が2回みられ、日積雪深差の最大値は73cmであった。また、2023～2024年冬期をみると、日積雪深差が30cm以上の日が14回、そのうち50cm以上の日が3回みられ、日積雪深差の最大値は74cmであった。両年とも、50cm以上の顕著な日積雪深差の増加が少なく寡雪年であったことがわかる。しかし、日積雪深差の最大値は74cmと大きく、頻度は少なかったが豪雪となる日もあったことが示唆される。

これらと比較してみると、2024～2025年冬期は2020～2021年冬期、2021年～2022年冬期と似た傾向があり、降雪日数、日降雪量がともに多い多雪年であっ

たことがわかる。しかし、他の寡雪年でも日積雪深差の最大値は73cmと大きく、頻度は少ないものの豪雪となる日もあったことがうかがえる。

各年とも、日積雪深差が大きい時の天気図型をみると、そのほとんどが西高東低の冬型の気圧配置であり、これまでの結果と一致した（飯田他，2018）。これより、立山地域での積雪の急増のほとんどは冬型の気圧配置によりもたらされることが示唆される。

(3) 気温

図3に、2024～2025年冬期の旬平均気温の変化を示す。

図より、2024～2025年冬期は、12月上旬から3月中旬まで旬平均気温がマイナスの値を示し、十分に雪が降れる条件があったことがうかがえる。特に、12月中旬から2月下旬にかけては -5°C 付近まで低下して、周期的に寒気が襲来していたことがうかがえ積雪深が一気に増加した。しかし、3月下旬以降は旬平均気温が上昇し、この期間には降雪がみられず積雪が急減している。4月以降も平年値よりは低温傾向で推移し消雪も5月末となり平年より大きく遅れた。

図中の各冬期と比較してみると、2020～2024年冬期では、12月上旬から2月下旬までは寒暖差がある

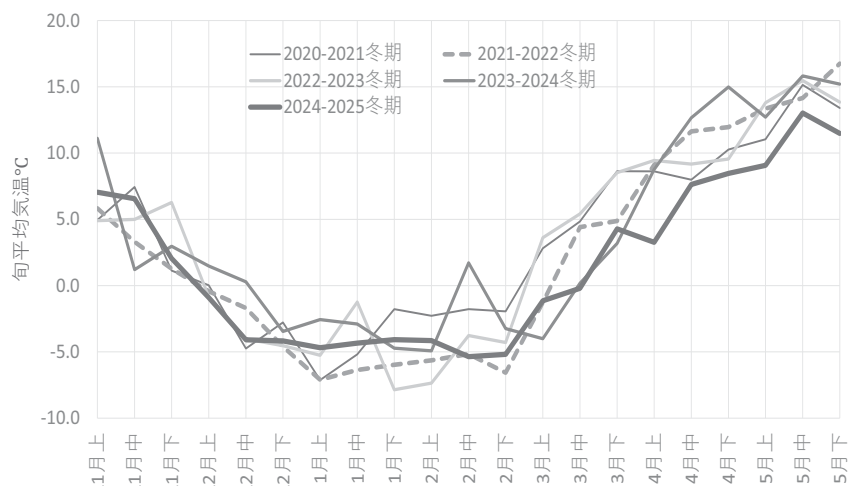


図3. 前進基地における旬平均気温(2020年11月～2025年5月)

ものの旬平均気温が0℃以下を示しているが、3月上旬以降は旬平均気温がプラスの値を示し積雪増加が見られなくなり融雪が一気に進んだ。各年とも5月上中旬までには消雪した。それに対して2024～2025年冬期では、0℃以下の低温期間が長く続き、特に12月中旬～2月下旬までの期間は-5℃付近の低温傾向で推移したことが特徴的であった。

以上、前進基地の積雪観測結果の一部を示したが、今後も観測を継続することにより、標高1000m級の中標高山岳地域の積雪が、温暖化に対してどのような応答特性を示すのかを明らかにしていきたい。この標高域は冬山登山で必ず利用される地域であることから、この観測が立山大日岳地域の冬山の遭難事故防止の一助となれば幸いである。

参考文献

- 飯田 肇・宮田健一郎（2019）登山研修所における積雪観測報告2017～2018年冬期、登山研修Vol. 34、145-147
- 飯田 肇・金山康成・和田真幸（2021）登山研修所における積雪観測報告2018～2020年冬期、登山研修、Vol.36、25-28
- 飯田 肇・金山康成・和田真幸（2023）登山研修所における積雪観測報告2020～2022年冬期、登山研修、Vol.38、36-38
- 飯田 肇・黒川和英・和田真幸（2024）登山研修所における積雪観測報告2022～2023年冬期、登山研修、Vol.39、34-36
- 飯田 肇・黒川和英・沓掛栄一郎（2025）登山研修所における積雪観測報告2023～2024年冬期、登山研修、Vol.40、11-14

気候変動に伴う日本の山岳環境の変化と登山時の留意点

猪 熊 隆 之（株式会社ヤマテン）

「歴代と比較しても圧倒的な高温で異常気象だといえる」。これは2023年8月28日、気象庁の「異常気象分析検討会」（以下、検討会）で結論づけられた内容である。ところが、そのわずか2年後の2025年夏は、それを大きく上回る暑さになった。基準値（注1）より 2.36°C 高く、1946年の観測開始以降、これまでもっとも高かった2023年、2024年の $+1.76^{\circ}\text{C}$ を大幅に上回る記録となった。

気温の上昇は夏よりも春（3～5月）、秋（9～11月）の方が顕著である。2025年までの100年間の気温上昇は、基準値に比べて春は $+1.67^{\circ}\text{C}$ 、夏が $+1.38^{\circ}\text{C}$ 、秋が $+1.47^{\circ}\text{C}$ 、冬が $+1.23^{\circ}\text{C}$ となっている。夏以外のすべての季節が短くなっており、特に春と秋の高温化が目立っていて二季化が進んでいる。気温だけでなく、雨や雪の降り方も変わってきており、極端な気象現象が増えてきているのは間違いない。こうした変化をもたらしているのが地球温暖化である。

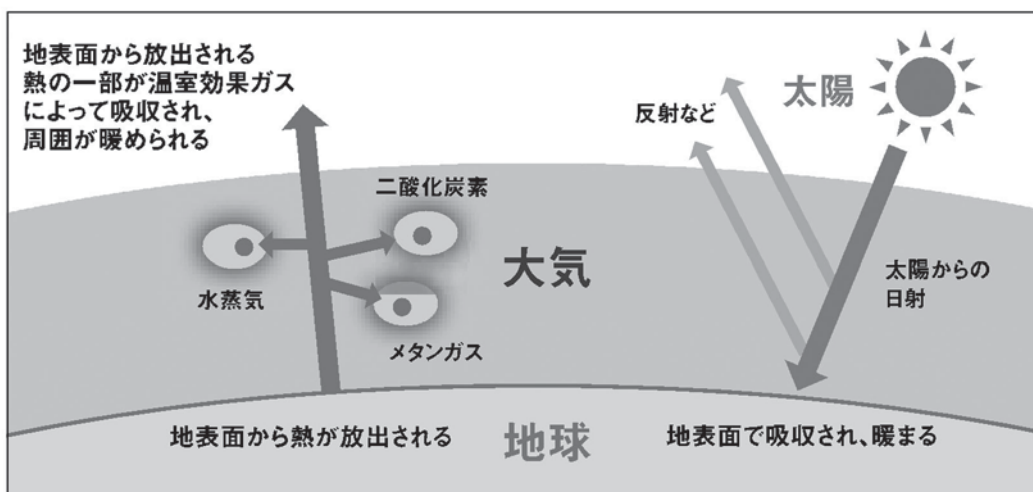
そこで、まずは地球温暖化がどうして起きるのかについて述べていく。

1. 地球温暖化とは

(1) 地球温暖化が起きる仕組み

地球温暖化（以下、温暖化）とは、人間の活動によって増えた温室効果ガス（注2）の影響で、対流圏内における地球の平均気温が上がっていく現象のことである。現在、地球の地上付近の平均気温は約 $14\sim 15^{\circ}\text{C}$ であるが、大気中に温室効果ガスがなかったら、地球の平均気温は約マイナス 18°C になり、酷寒の星になってしまう。太陽から届く光は、大気をほとんど温めずに地表面を直接温める一方で、地球は地表面から宇宙へと熱を赤外放射という形で放出している。ここで重要な役割を果たしているのが、温室効果ガスである。温室効果ガスは、地表面から放出される熱を吸収し、大気を暖める。その働きは、まるで地球を包む「布団」のようなものだ（図1）。

図1 地球温暖化のしくみ(図：山岳気象大全「山と溪谷社」猪熊隆之著より)



地表面から放出される熱の一部が温室効果ガスによって吸収され、周囲が暖められる

この布団があるおかげで、地球は生命が活動しやすい温度になっている。

温室効果ガスは、水蒸気やオゾン、二酸化炭素などであり、元々地球の大気中に存在する。この中で最も量が多いのは水蒸気で、温室効果も大きいですが、水蒸気の量は長い目で見るとあまり変化しないため、温暖化の直接の原因とは考えられていない（ただし、気温や海水温が上がることで大気中の水蒸気が増え、温暖化をさらに進めてしまう効果はある）。一方、二酸化炭素やメタンガスは、人間の活動によって増えてきた温室効果ガスである。産業革命以降、工場や発電、車の利用などが増えたことでその量は急激に増加しており、温暖化の主な原因とされている。

(2) 産業革命以降、現在までの気温上昇

IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change : 気候変動に関する政府間パネル、注3) は、2007年に発表された第4次評価報告書で、「温暖化にはもはや疑う余地がない」と断定し、2021年8月9日に第6次報告書では、「熱波や豪雨などの現象は、人間の影響によるものだ

という証拠がより強固になっている」と温暖化による気候変動についてもさらに踏み込んだ表現をしている。

実際、産業革命以降、地球の平均気温は上昇し続

図2 1891年から2025年までの世界の地上平均気温の変化（気象庁ホームページより）

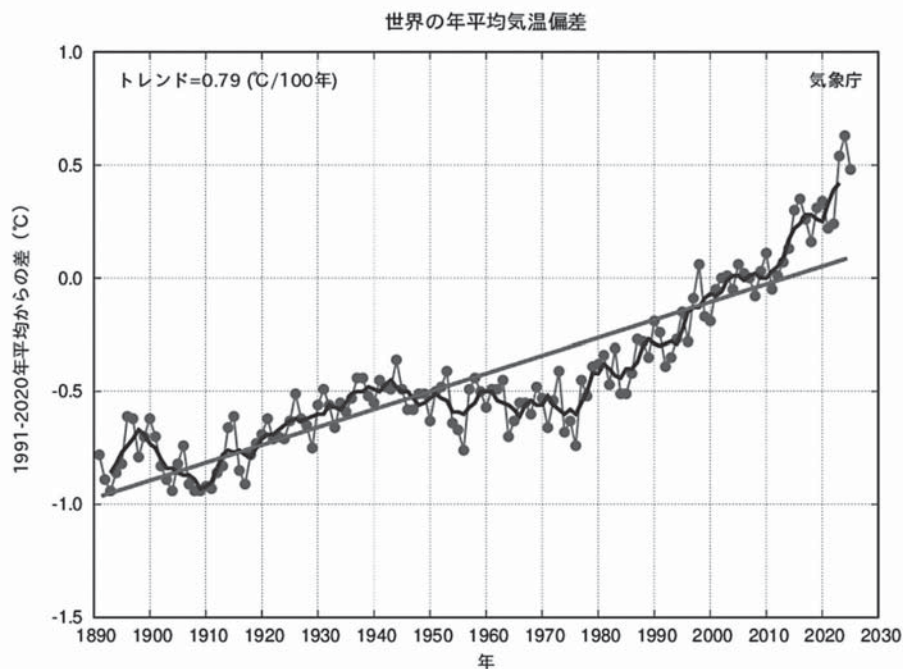
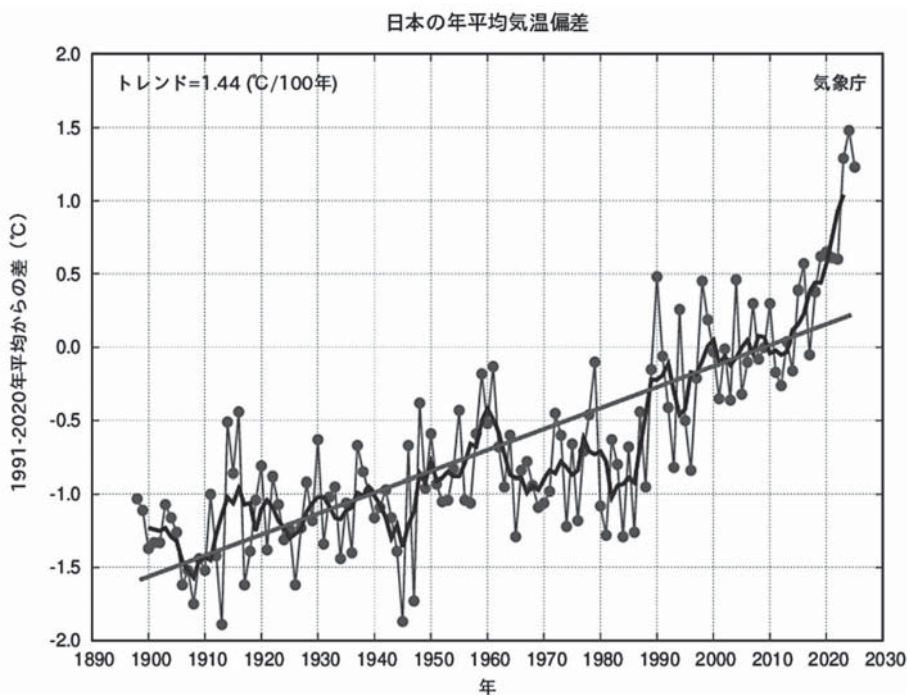


図3 日本の年平均気温の偏差の経年変化（気象庁ホームページより）



細線（黒）：各年の平均気温の基準値からの偏差、太線（青）：偏差の5年移動平均値、直線（赤）：長期変化傾向。
基準値は1991～2020年の30年平均値。

1. 登山に関する調査研究

けている。2025年の世界の年平均気温は1890年代に比べて約1.5℃上昇した（図2）。

日本では、その傾向がさらに顕著である。2025年の年平均気温は1900年代に比べて約2.7℃も上昇している（図3）。「たった2～3℃の上昇か。」と思われるかもしれないが、東京の1991年から2020年までの年平均気温は15.8℃で宮崎は17.7℃、鹿児島が18.8℃である。つまり、この125年の間に東京の気温が鹿児島や宮崎に相当する気温に変化したことになる。2～3℃の気温上昇が、人間や生き物、自然環境に与える影響がいかに大きいかが分かるだろう。

さらに重要なのは、この気温上昇のスピードである。図4は過去34万年にわたる地球の気温変化を示したものである。地球はこれまで、氷河期と呼ばれる寒い時代と、間氷期と呼ばれる暖かい時代を繰り返してきた。過去にも温暖な時代はあったが、その変化は5,000年かけて4～7℃という、ゆっくりとしたものであった。それでも、その気温変化に対応できず、多くの生物が絶滅してきた。ところが現在の地球温暖化では、わずか100年ほどで数℃も気温が上昇するという、地球の歴史の中でも極めて異例で深

刻な変化なのだ。

(3) 今後の気温上昇の予測

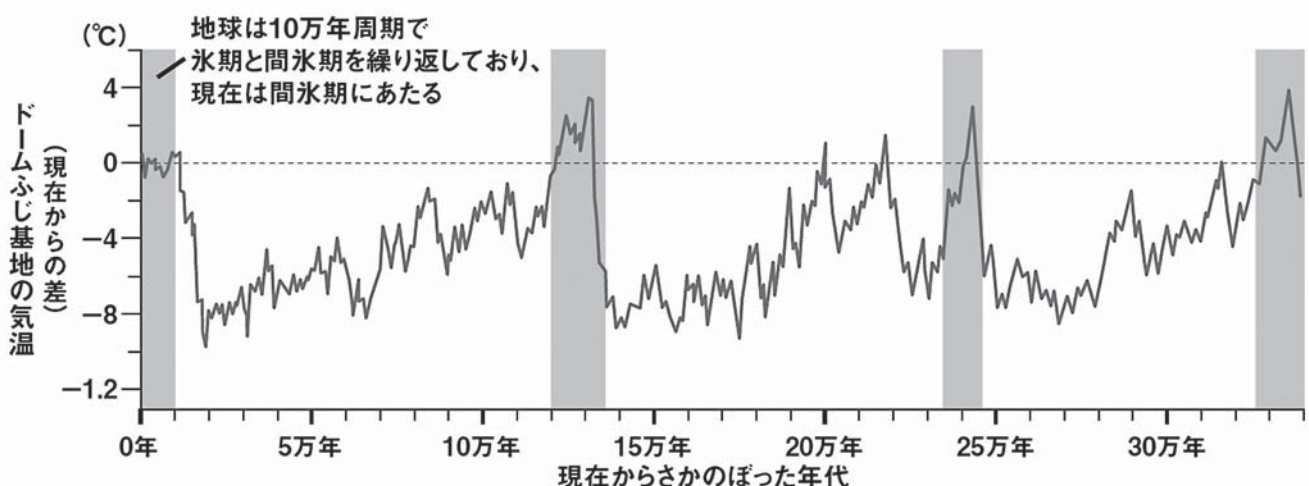
IPCCの第6次報告書では、今後数十年のうちに地球の平均気温が産業革命前より1.5℃以上、上昇する可能性が高いことが示されている。そして、温室効果ガスの排出を「今すぐ」「大きく」減らさなければ、1.5℃どころか、2℃以内に抑えることさえ難しくなると警告している。実際、2025年の世界の平均気温はすでに産業革命前より約1.5℃上昇している。

将来の気温を予測するために、IPCCはいくつかの「将来シナリオ」を使っている。これは、

- 今と同じように温暖化対策をほとんど行わなかった場合
- 温室効果ガスを大幅に減らす対策を行った場合など、人類の選択によって未来がどう変わるかを示したものである（図5）。

その結果、温暖化対策をほとんど取らなかった場合、今世紀末には世界の平均気温が、1986～2005年の平均よりも2.4～4.8℃上昇する可能性が高いとさ

図4 ドームふじ基地（南極）の氷床コアより得られた過去34万年にわたる気温の変化（山岳気象大全より 国立極地研究所・出展7より作成）

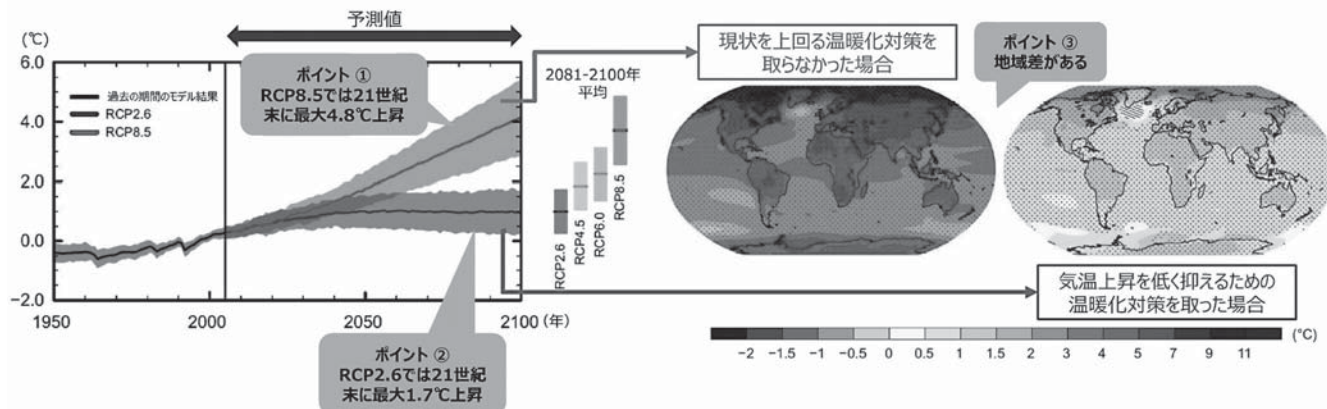


出典：AR5 WG1 政策決定者向け要約

図5 世界の平均気温の変化予測（AR5（注4）によると、RCP各モデル（注5）における将来気候の計算結果）

■ 世界の平均気温の変化の予測
（1986～2005年平均を基準とした変化）

■ 21世紀末における年平均気温変化の予測
（1986～2005年平均を基準とした変化）



出典：AR5 WG1 政策決定者向け要約 Fig SPM.7(a)、 Fig SPM.8(a)

れている。一方で、強力な温暖化対策を行った場合でも、0.3～1.7℃の上昇は避けられないと予測されている。また、気温の上昇は世界中で同じように起こるわけではなく、北半球の高緯度地域（北極周辺など）では、平均よりも大きな気温上昇が起これと考えられている。

2. 日本の山岳における気候変動の影響

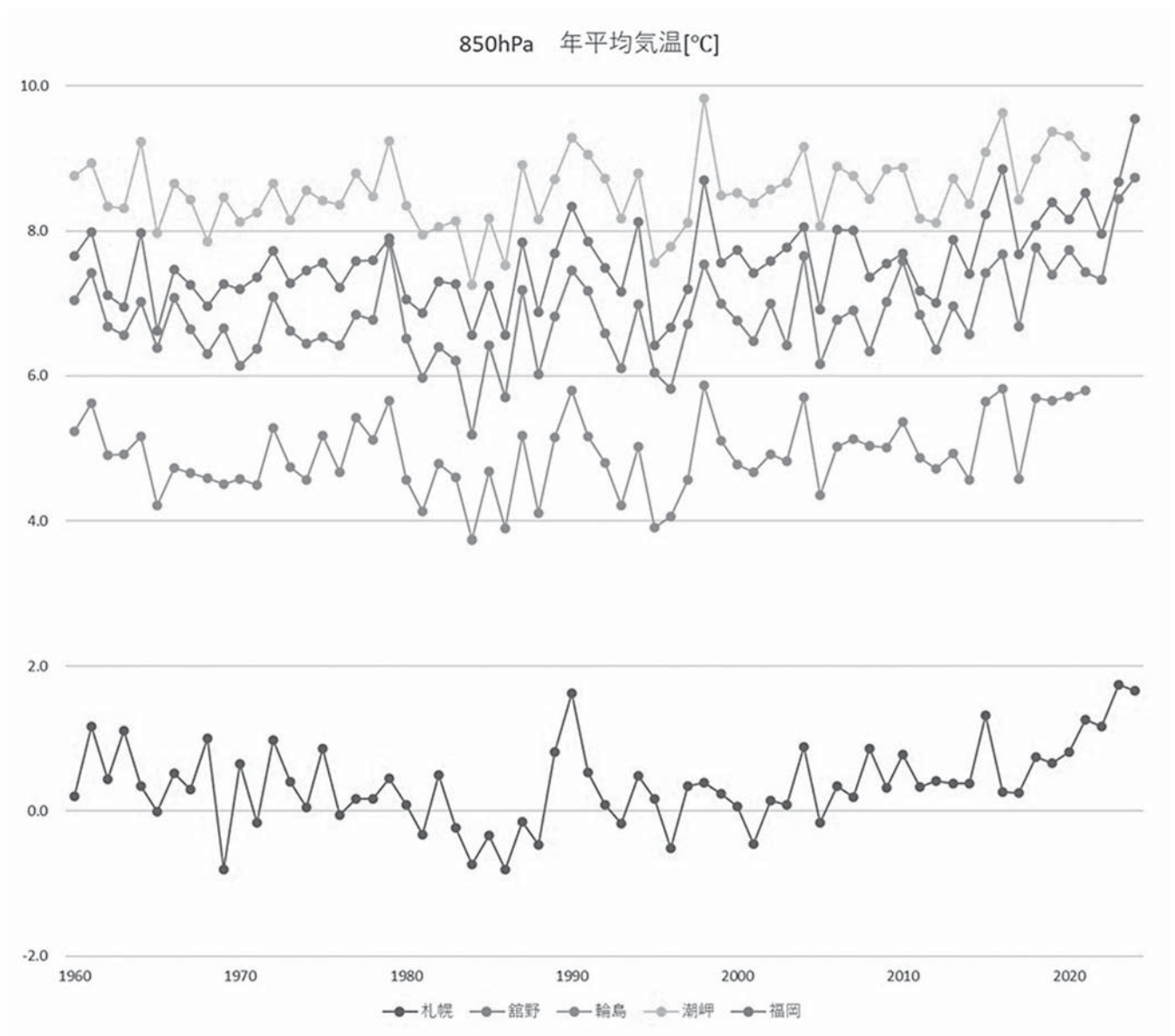
ここからは、日本で実際に起きている最近の気象の変化と今後予想される気候変動への影響を見ていく。日本でも近年、温暖化の影響と考えられる気温や雨、雪の降り方の変化がはっきりと現れており、今後はさらにそれが顕著になると予想されている。

(1) 各高度における平均気温の変化

地上付近の日本の平均気温の変化については、図3で示した通りだが、山においても同じような変化が起きているのだろうか。また、標高によって温暖化の影響は違うだろうか。それらを検証することは温暖化の影響を考えるうえで重要である。しかしながら、山岳では長期間にわたる気象観測データが存在するのは富士山だけである。そこで、富士山及び、850hPa（上空約1,500m）、800hPa（上空約2,000m）、700hPa（上空約3,000m）における平均気温の変化を見ていく。

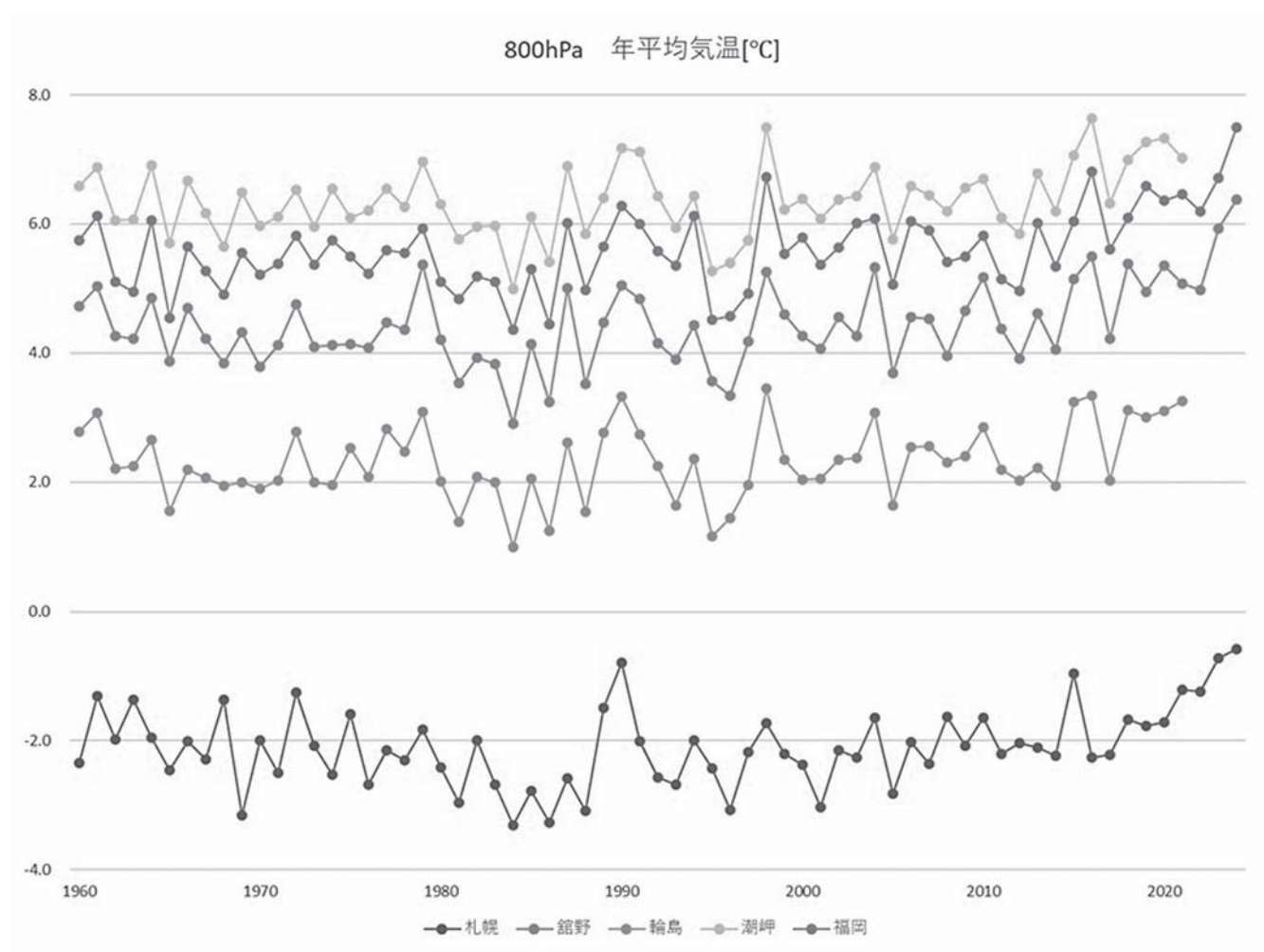
1. 登山に関する調査研究

図6 5地点（注6）における850hPaの年平均気温の変化 気象庁「過去の気象データ検索」
<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/upper/index.php> を加工して作成



850hPaにおける年平均気温は、各地点ともに長期的に気温の上昇傾向が見られる。1980年代前半は気温が低くなっている地点が多く、2010年代後半から気温の上昇傾向が明瞭になり、特に2022年以降は上昇が著しくなっている。

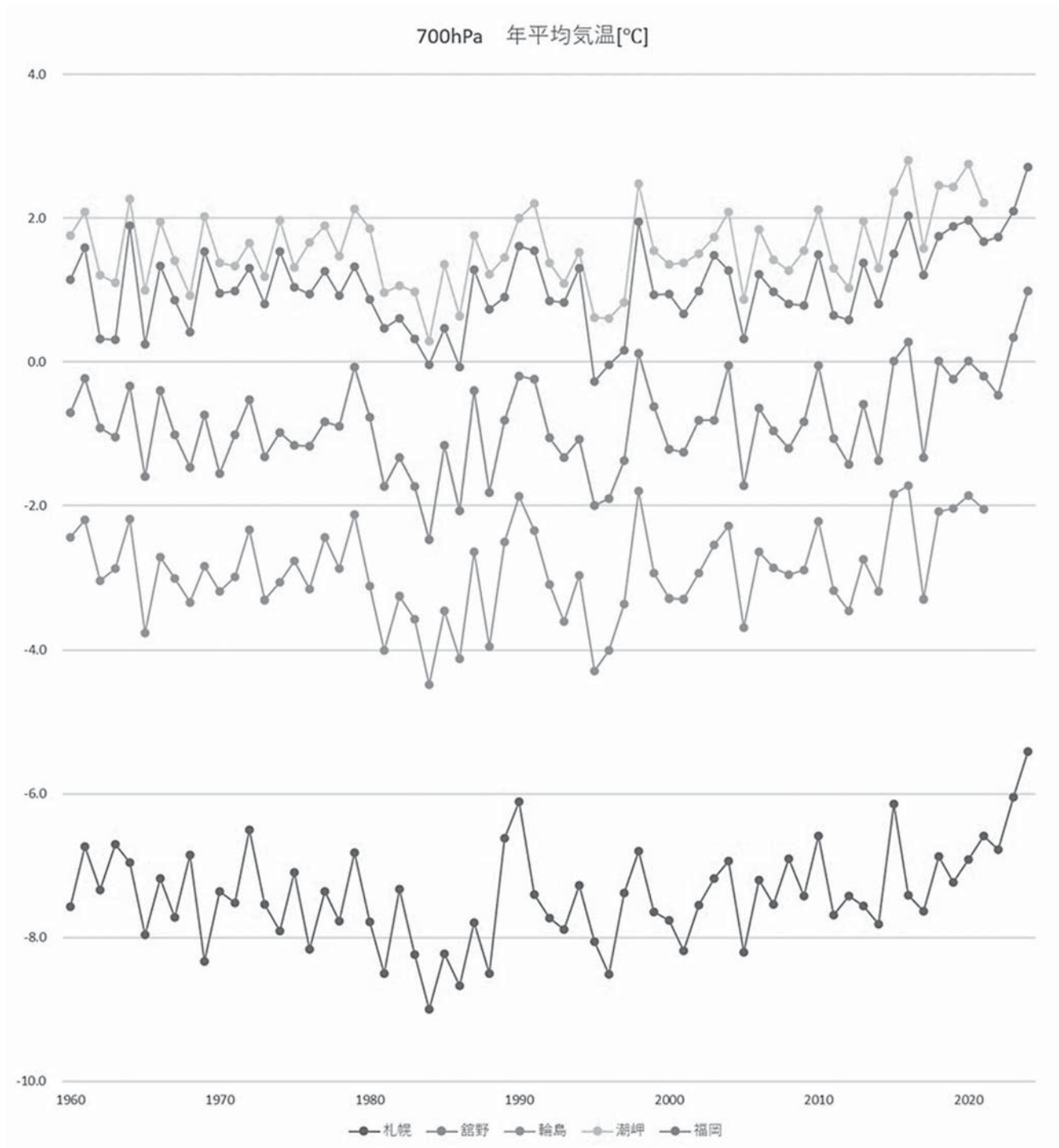
図7 5地点における800hPaの年平均気温の変化 気象庁「過去の気象データ検索」
(<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/upper/index.php>) を加工して作成



800hPaにおいても850hPaと同様の傾向が見られる。850hPaと同じで近年は札幌の気温上昇傾向が顕著である。

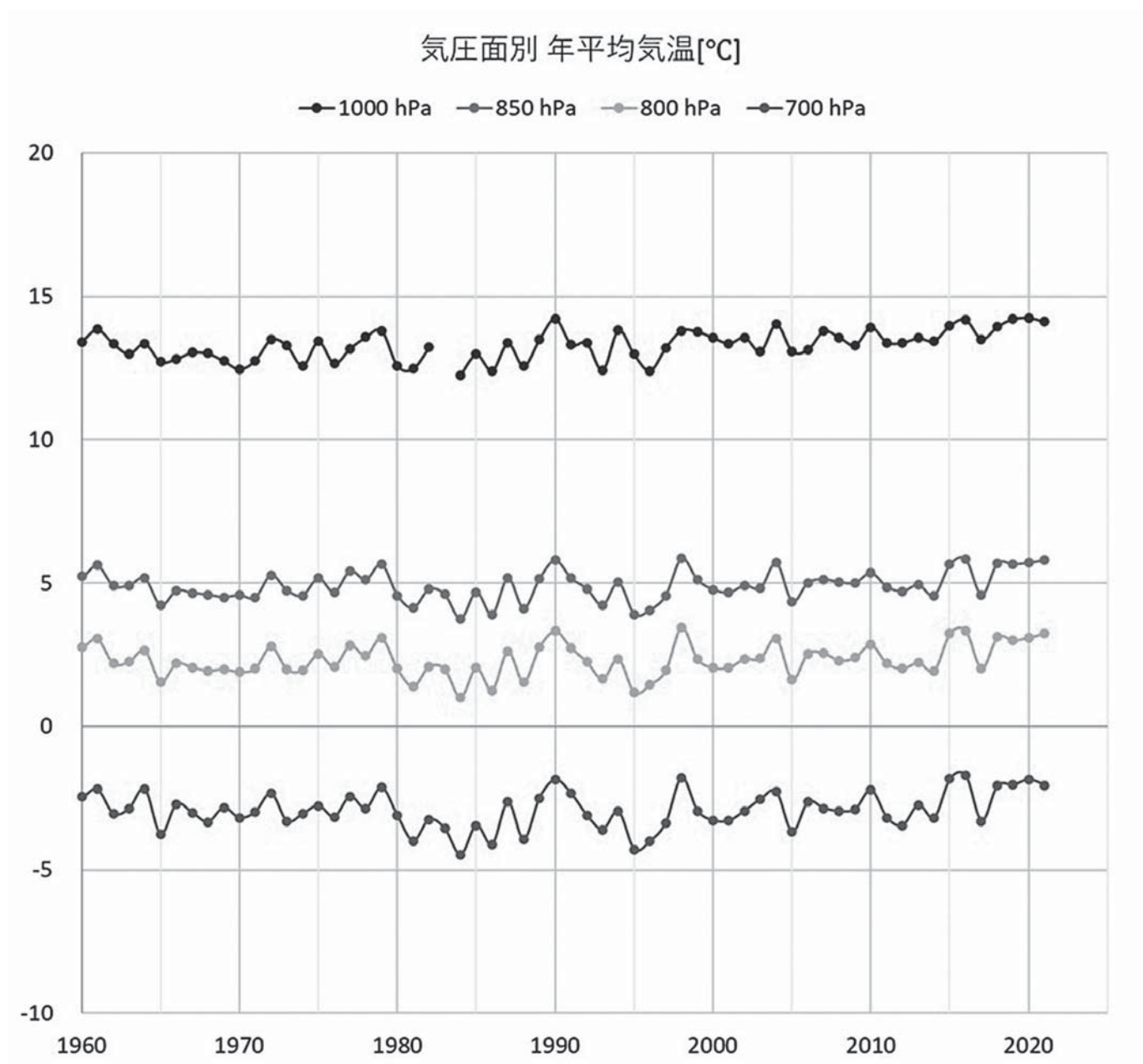
1. 登山に関する調査研究

図8 5地点における700hPaの年平均気温の変化 気象庁「過去の気象データ検索」
(<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/upper/index.php>) を加工して作成



700hPaも850hPa、800hPaとは変わらない傾向にある。図6～8では、同じ地点における各高度ごとの違いが分かりにくいので、輪島における高度ごとの年平均気温の推移を見ていく。

図9 輪島の各高度面（1,000hPa、850hPa、800hPa、700hPa）における年平均気温の変化
気象庁「過去の気象データ検索」(<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/upper/index.php>) を加工して作成



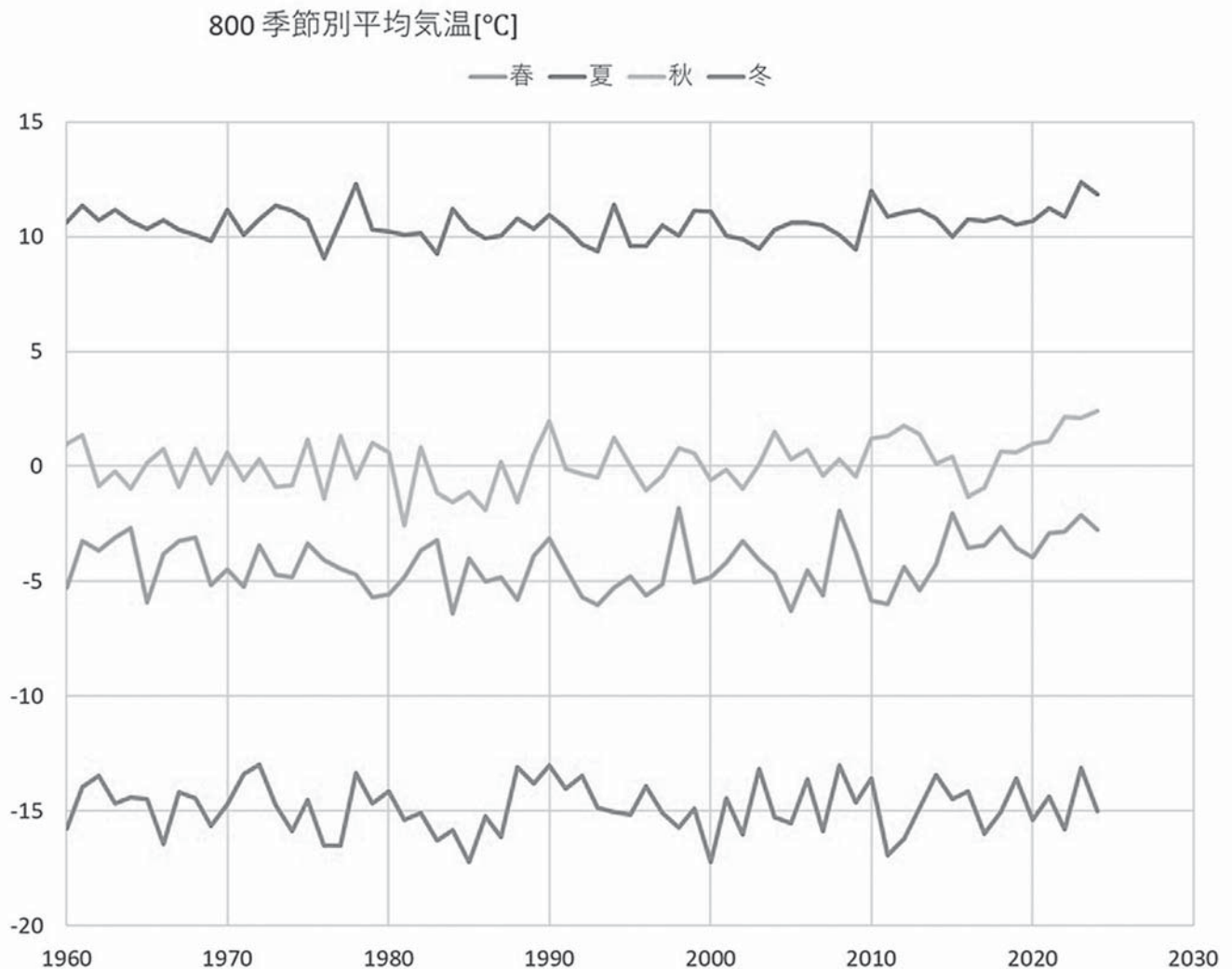
輪島では、気温が顕著に上昇している2022年以降の観測データがないが、800hPaと700hPaにおいて1,000hPa（地上付近）や850hPaよりも気温の年ごとの変化が大きくなっており、温かい年と寒い年の差がより大きくなる傾向にある。各高度ともに、紙面の関係で他の地点のグラフは表示できないが、どの地点でも同じような傾向が見られた。

(2) 季節ごとの平均気温の変化

次に、季節ごとの変化を見ていく。日本の地上付近では、春や秋において気温の上昇率が大きい、山岳でも同じような傾向になるのかどうかを確かめ

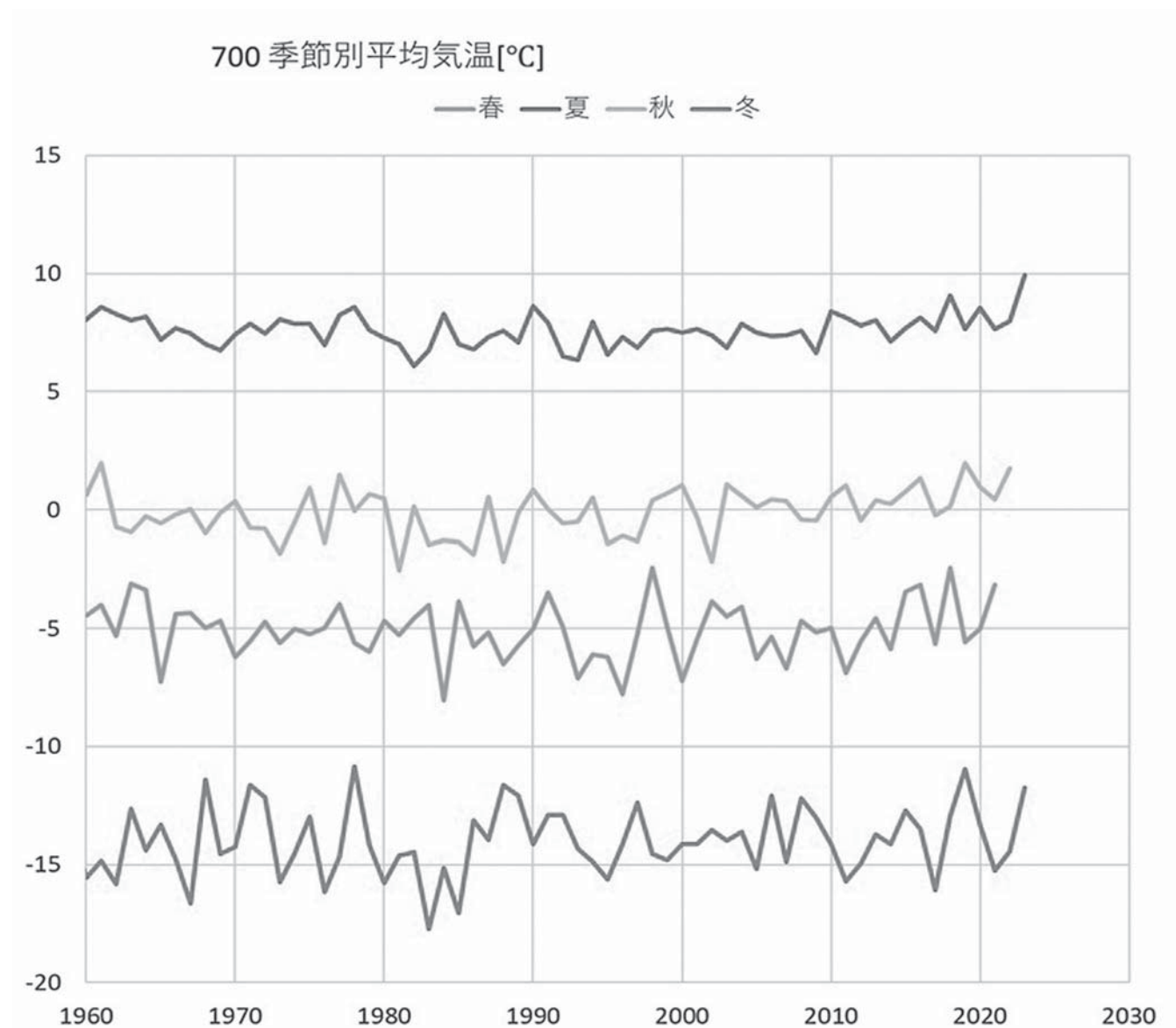
るために、高度ごと季節ごとに平均気温の変化を調べた。

図10 札幌の800hPaにおける季節ごとの平均気温の変化 気象庁「過去の気象データ検索」
(<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/upper/index.php>) を加工して作成



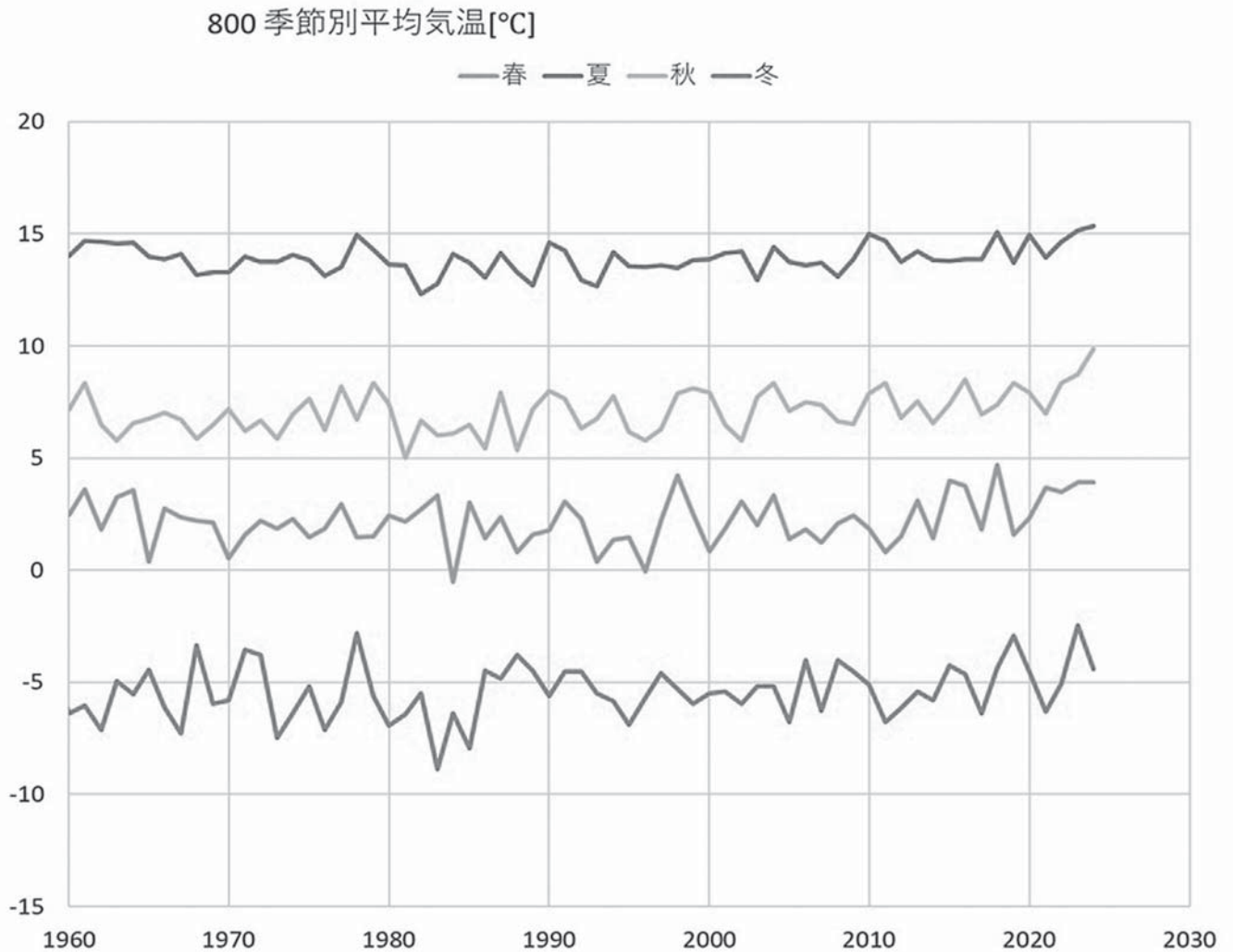
札幌では大雪・十勝山系や幌尻岳とほぼ同じ高さの800hPaにおける平均気温の変化を見ていく。冬は大きな長期的変化が見られないのに対し、夏は2010年以降、春は2015年以降に上昇傾向が見られ、秋は近年の気温上昇傾向が著しい。

図11 輪島の700hPaにおける季節ごとの平均気温の変化 気象庁「過去の気象データ検索」
(<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/upper/index.php>) を加工して作成



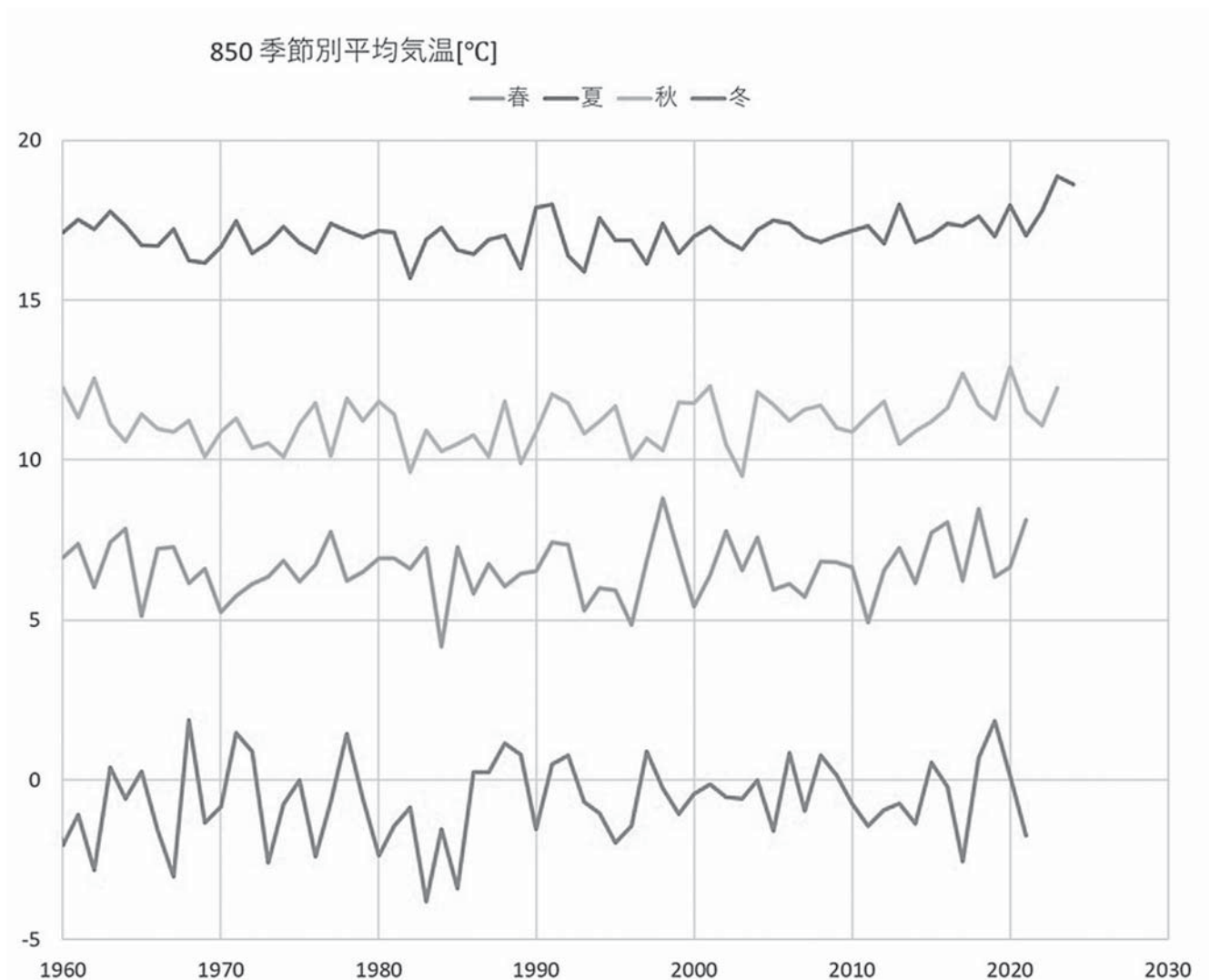
輪島では日本アルプスの稜線とほぼ同じ700hPaの気温変化を示した。2022年まで（春は2021年まで）の記録になるが、冬は年ごとの変化が大きいものの、長期的な変化があまり見られない。その他の季節は長期的に上昇傾向が見られるが、夏と秋の上昇率が他の季節に比べて大きい。近年、夏の日本アルプスや八ヶ岳の稜線で昔に比べて気温の上昇を感じる事が多くなったが、それを裏付けているデータと言える。

図12 館野（茨城県つくば市）の800hPaにおける季節ごとの平均気温の変化
気象庁「過去の気象データ検索」(<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/upper/index.php>) を加工して作成



館野では関東山地の2,000m級の山とほぼ同じ高度である800hPaの気温変化を示した。長期的な気温上昇傾向はどの季節でも見られるが、冬がもっとも不明瞭で、秋は近年の上昇傾向が顕著である。春も2010年代から上昇傾向が続いている。

図13 潮岬の850hPaにおける季節ごとの平均気温の変化 気象庁「過去の気象データ検索」
(<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/upper/index.php>) を加工して作成

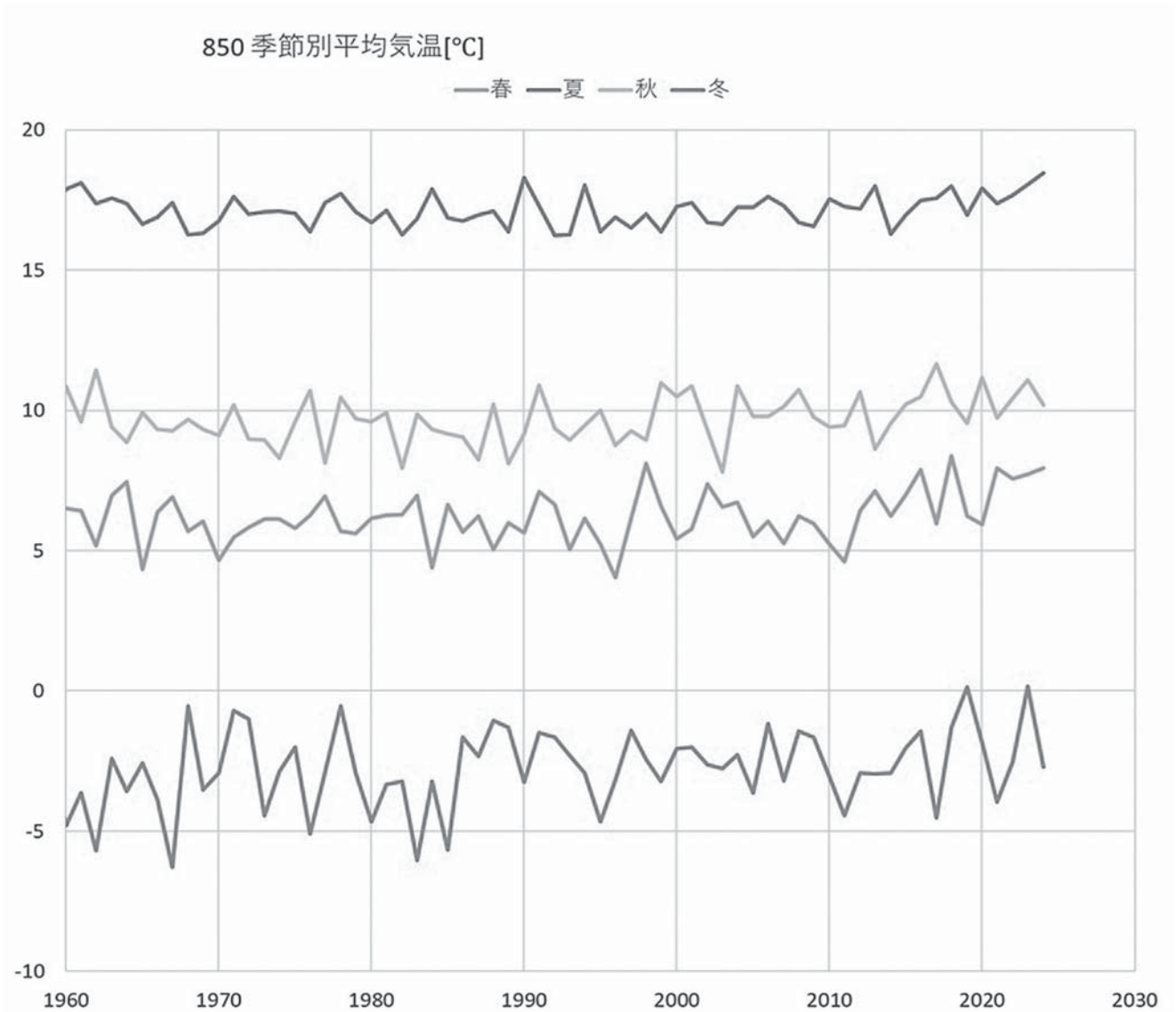


潮岬では紀伊山地の1,500m級の山とほぼ同じ高度の850hPaの気温変化を示した。

冬は長期的な変化がほとんど見られないが、春と秋は2010年代以降やや上昇傾向で夏は2020年代に入ってから上昇傾向にある。他の地点ほど春と秋の上昇率は高くない。

1. 登山に関する調査研究

図14 福岡の850hPaにおける季節ごとの平均気温の変化 気象庁「過去の気象データ検索」
(<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/upper/index.php>) を加工して作成



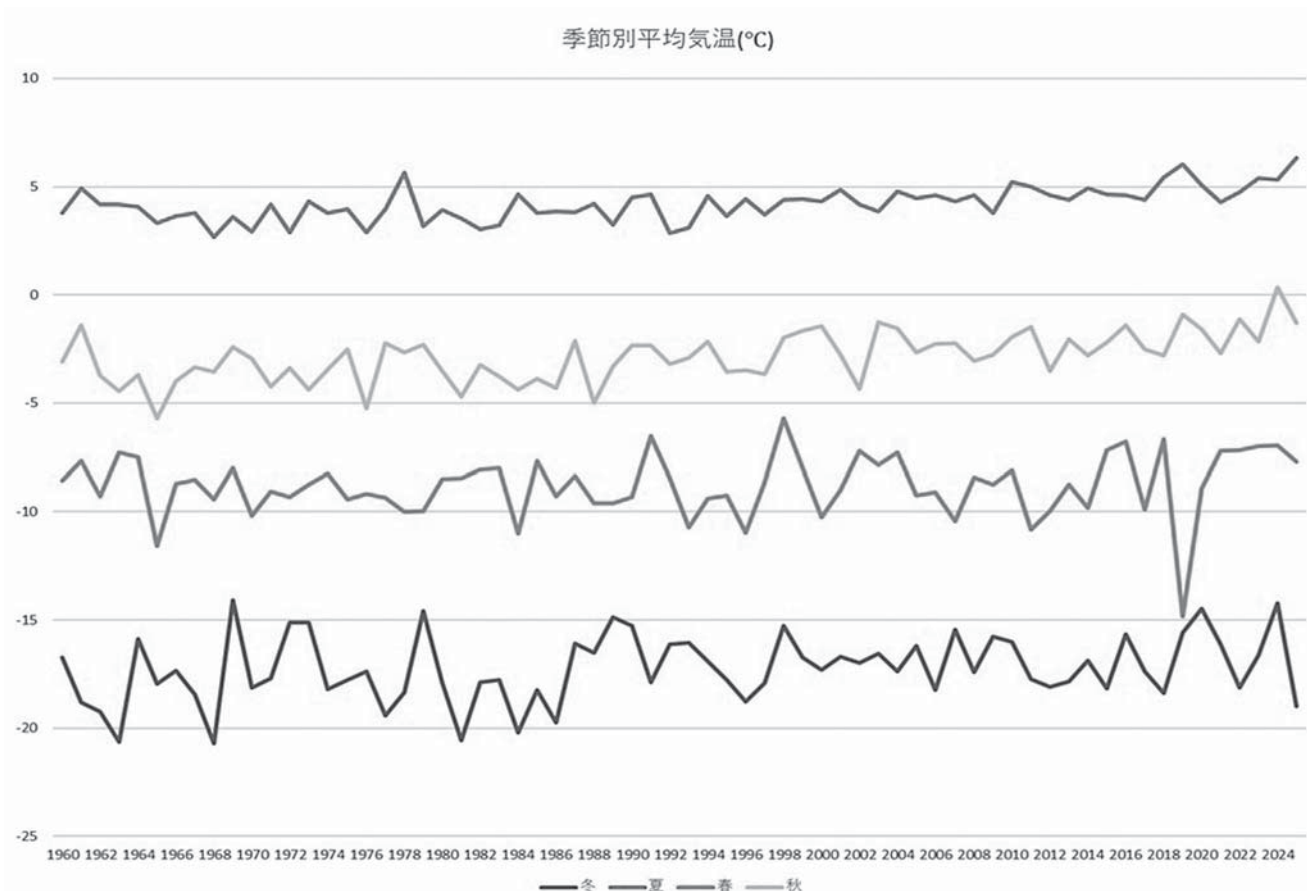
福岡では九州山地の1,500m級の山とほぼ同じ高度の850hPaの気温変化を示した。
他の地点と異なり、冬も上昇傾向が見られる一方、秋と夏は他の地点に比べて上昇率が低い。

図15 富士山の年平均気温の変化（1960～2025年） 気象庁「過去の気象データ検索」
 (https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/index.php?prec_no=49&block_no=47639&year=&month=&day=&view=)
 を加工して作成



富士山においては、気象庁の観測データがあるので、それを使用する。年平均気温が長期的に上昇傾向なのは、850hPa、800hPa、700hPaの各高度における各地の傾向と変わらない。年ごとの変化が大きいのは、高度が高くなるごとに顕著になる傾向に合致している。

図16 富士山の季節別平均気温の変化（1960～2025年） 気象庁「過去の気象データ検索」
https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/index.php?prec_no=49&block_no=47639&year=&month=&day=&view=
を加工して作成



季節ごとの変化においては、冬と春の変化が少ない一方で、夏と秋で上昇傾向が見られる。特に秋の上昇が顕著である点は、東日本の各高度における傾向とほぼ同じである。

(3) ここまでの観測データから読み取れること

これらのデータから読み取れるのは、以下の点である。

- ・北に行くほど気温上昇の傾向は顕著であること。
- ・高度による差はあまりないが、高度が上昇するほど年ごとの気温差が大きい。
- ・札幌では春と秋、富士山と輪島、館野、潮岬では夏と秋、福岡では春と冬に気温上昇の傾向が見られる。

ここでの観測データは富士山を除き、上空で観測したものであるため、地表面で受ける太陽光の吸収

や放射冷却の影響が小さくなる傾向にある。したがって、そのまま鵜呑みにはできないが、以下のようなことが言える。地球温暖化の影響は、北日本や東日本の山ほど大きく、標高の高い山ほど年ごとの気温変化が大きくなる傾向にあること。札幌で冬の気温上昇傾向は見られないのは、北日本にはたびたび北極からの寒気が流れ込み、その影響を受けやすいことが影響していると思われる。福岡で冬に気温上昇が見られるのは、西日本に寒気が南下する回数が近年、減ってきていることが影響していると思われる。風や日射、積雪など同じ山においても場所によって気象条件は大きく異なるため、一概には言えないが、

それぞれの場所に順応した生態系が育まれているため、年ごとの変化が大きい高山では植生などへの影響が大きくなることが懸念される。

(4) 雨の降り方の変化

「1 mm以上の降水日数は減少している（図17）にも関わらず、1時間降水量80mm以上、3時間降水量150mm以上、日降水量300mm以上など強度の

強い雨は、1980年頃と比較しておおむね2倍程度に頻度が増加している（図18）」。（ここまで気象庁ホームページより）つまり、しとしとと降る“優しい雨”は減り、短時間に激しく降る大雨が増えている。近年、毎年のように大雨による災害が発生している背景には、こうした雨の降り方の変化が影響している。そして、このような傾向は、地球温暖化が進むと、さらに進んでいくと思われる。

図17 日降水量1.0mm以上の年間日数の経年変化（気象庁ホームページより）

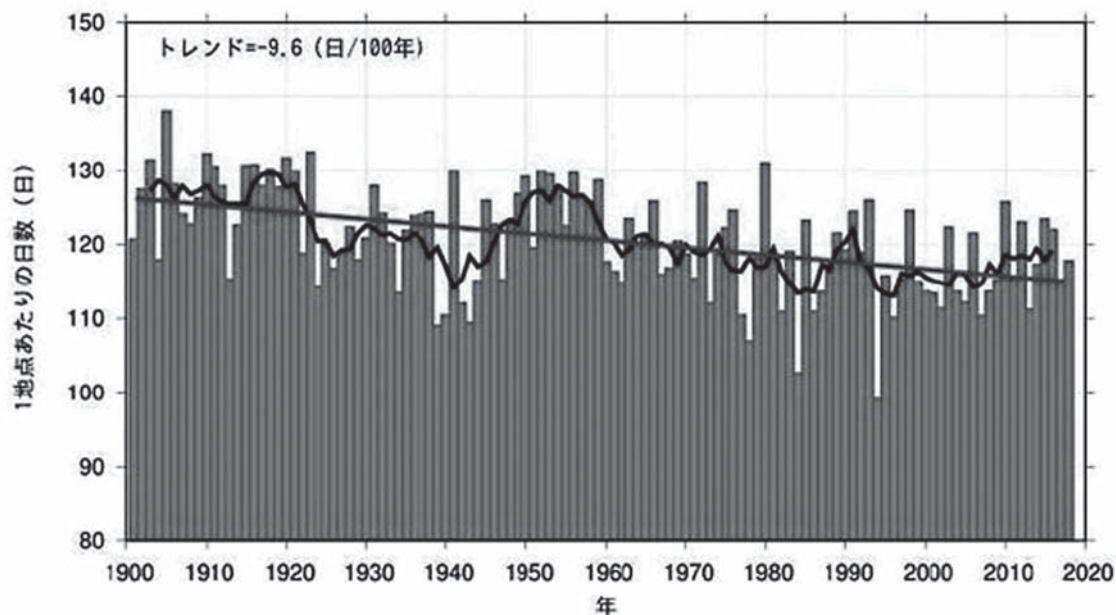
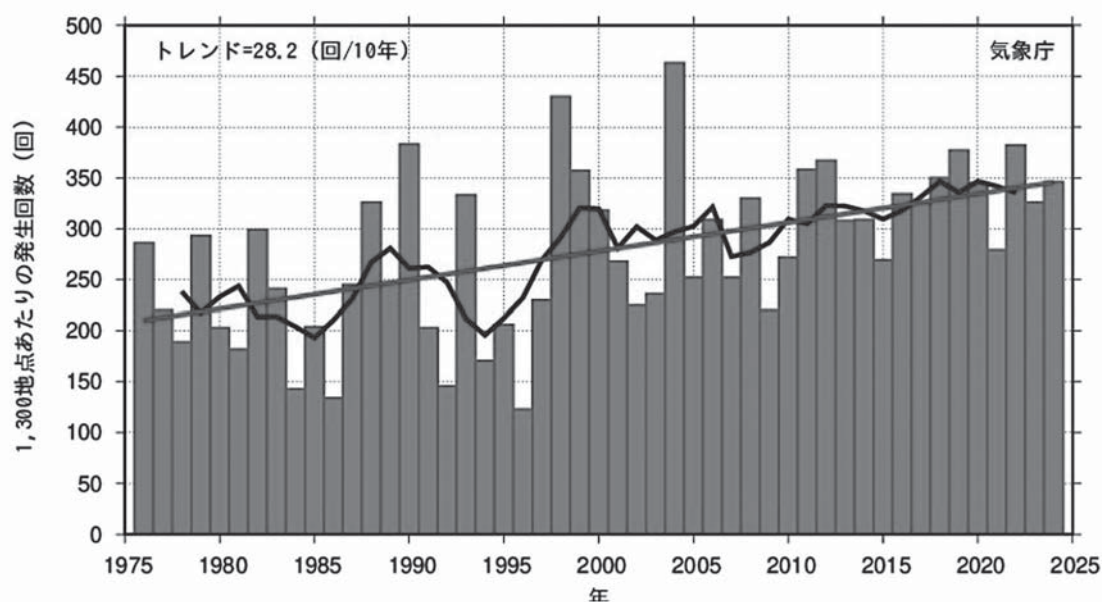


図18 全国のアメダスにおける1時間50mm以上の年間発生回数（気象庁ホームページより）



1. 登山に関する調査研究

(5) 雨が降る場所の変化

温暖化の進行によって、梅雨前線が日本海に停滞しやすくなることが予想される。そのため、東北地方の日本海側、北陸地方では梅雨末期に大雨になる頻度が増えると思われる。それに加えて、これまで梅雨期の大雨が少なかった静岡県や関東地方の沿岸部でも湿った空気の入り方が変わってきており、2021年7月の熱海市伊豆山土石流災害のように、局地的な豪雨が発生している。

また、温暖化の進行により、南西風が吹く気圧配置が増えると予想されていることから、北日本の日本海側や九州地方、剣山地、紀伊山地のそれぞれ西側、京阪神エリア、御嶽や白山、中央アルプス、富士山や箱根周辺など南西から湿った空気が入りやすい地域の山で雨や雪が増えることが考えられる。このほか、全国的に局地的な豪雨や落雷が増加し、落雷や沢の増水、土砂崩れなどの気象リスクが増えることが懸念される。

(6) 雪の降り方の変化

冬の雪の降り方も大きく変わってきた。暖冬の年

には、日本海側の低山を中心に降雪や積雪が少なくなる一方で、強い寒気が流れ込むと、局地的な豪雪になることがある。北極海の海水が減少している影響で、バレンツ海にブロッキング高気圧ができやすくなり、寒気が日本付近へ流れ込みやすくなっているという研究も報告されているが、北極からの寒気が流入しやすい年と流入しにくい年との差が大きくなり、気温や降雪量の年ごとの変動が激しくなっている（図19）。

「温暖化が進行すると、日本海側の標高の高い山では雪が増える可能性が高い」という意見もある。これは、気温が数度上昇しても氷点下である高山では、海水温の上昇とともに、大気がより不安定になって雪雲が発達しやすくなることや、空気中の水蒸気量が増えることで雪が増える可能性がある、という考えに基づいている。この予測は「冬型の気圧配置（山雪型）が今と同じ頻度で出現する」という前提に立っているが、冬型の気圧配置が出現する日数は減少傾向にあり、冬に多く出現する冬型の気圧配置の性質も変わってきている。少し前までは、等圧線が日本付近で縦縞模様を描く「山雪型」と呼ばれる

図19 北陸地方の年最深積雪の経年変化（気象庁ホームページより）

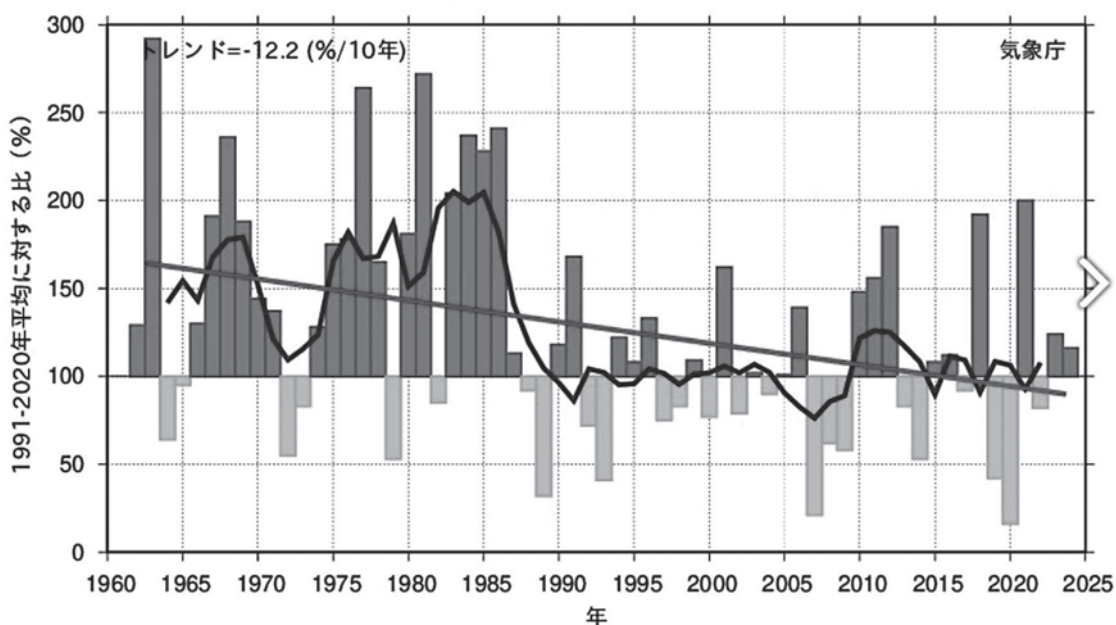
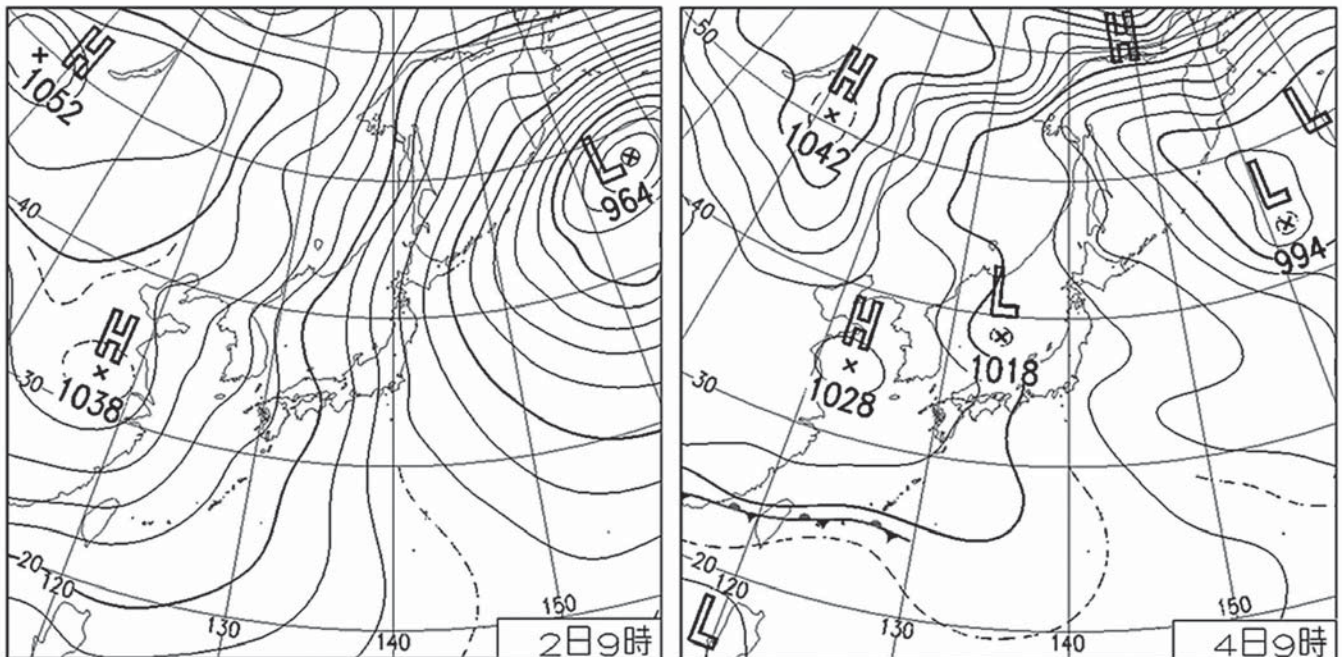


図20 山雪型（左）と里雪型（右）の地上天気図



山沿いで大雪になるタイプの冬型（図20左）が多かったが、最近では日本海に低気圧や谷が出現して等圧線が袋状になる「里雪型」（図20右）と呼ばれる、沿岸部で大雪になるタイプの冬型が増えている。

実際、2018年には福井市で147cm、新潟市で80cmを記録し、2021年1月には上越市高田で249cmを記録するなど、平野部や沿岸部での大雪が相次ぎ、交通障害など大きな被害が発生した。里雪型が増えている背景には、日本海の海水温が上昇していることが関係している可能性がある。海水温が上昇すると、海上での低気圧の発生頻度が増加し、それに伴って里雪型の気圧配置が形成されやすくなると考えられる。里雪型の出現が増加する場合、山岳域における降雪量はむしろ減少する可能性がある。降雪量を減らす可能性があるもうひとつの要因は、冬型の気圧配置が長続きせず、出現日数が減少していくことが挙げられる。冬型が長期間持続しにくくなる背景には、偏西風の蛇行が拡大していることが影響していると考えられる。偏西風の蛇行が大きくなると、寒

気の流入期と暖気の流入期が交互に訪れやすくなり、寒気が長期間停滞する状況が生じにくくなる。この影響により、冬型の気温変動が大きくなる傾向も説明できる。冬型の期間短縮は、降雪量だけでなく積雪量にも大きな影響を及ぼす。冬型が持続する場合には、降雪が継続すると同時に気温が低く保たれるため積雪が増加しやすい。一方、冬型が短期間で終了すると、寒気が後退した直後に急激な昇温が生じやすく、積雪は融解・減少しやすいと考えられる。温暖化の進行とともに、寒気が抜けた後の昇温が著しくなっており、この傾向はさらに強まっていくと思われる。こうした背景から、北陸地方および山陰地方では、標高の低い山地において既に冬季の降雪量や積雪量が減少傾向にあると考えられる。また、この減少傾向が今後、より標高の高い山岳域へ拡大する可能性も否定できない。

ただし、海水温の上昇や水蒸気量の増加によって、強い寒気が入ったときには、短期間で100cmを超えるような大雪が発生する。このことは、雪が降る日は

1. 登山に関する調査研究

減少する一方で、短時間に強い雪が降る日は増える可能性があることを示唆している。

冬型以外の降雪の傾向としては、北海道の道東地域では平地も含めて短時間に集中的に降る大雪が増えてきている。2025年2月3日には、帯広で12時間に120cmという国内の観測史上最大値を記録した。これは、三陸沖から北海道の東岸を通過する低気圧が増える傾向にあるからであり、温暖化が進むと、平地では雨やみぞれになる可能性があるが、日高山脈の十勝側や道東の山岳ではこうした雪の降り方が増えることも考えられる。

そして、春と秋の降雪量は確実に減少していく。冬季と比較して春・秋の気温上昇の影響がより顕著であり、従来は雪が降っていた時期に雨が降ることが多くなるからである。さらに、高温化の進行に伴い、融雪の時期が早まって、雪渓の消失が早まる傾向が強まっている。実際に、白馬大雪渓や劔岳など北アルプスの各雪渓では近年、雪渓の消耗が激しくなっており、安全に雪渓上を歩行できる期間が短縮している。劔沢雪渓の最近の変動については、「登

山研修」VOL.36の劔沢雪渓における最近の変動、VOL.39の劔沢における最近の変動Ⅱ（いずれも飯田肇 他）、「登山研修」VOL.39の2023年の記録的な猛暑の原因と山への影響（猪熊隆之）に詳しい。

この傾向がさらに進行した場合、雪渓を登山ルートとして利用できなくなる可能性がある。あるいは、雪渓消失後に露出するガレた斜面を通過できるよう、新たな登山ルート整備が必要となる可能性も想定される。ただし、雪渓が消失する時期は年による変動が大きく、ルート維持や整備を一律に進めることは容易ではない。したがって、雪渓の存続状況を継続的に把握し、登山道管理や安全対策に反映させる体制が重要である。

(7) 温帯低気圧と寒冷低気圧

地球温暖化の進行により偏西風の蛇行が増大する可能性がある、という指摘がなされている。偏西風の蛇行と温暖化の因果関係については複数の仮説が存在し、現時点で統一的な理解が得られているとは言い難い。しかしながら、近年、偏西風の蛇行が顕

著となり、波長が短くなってきていることは観測的事実として指摘されている。上空の流れが南北方向に大きく振幅し、南から北へ張り出す領域では暖気の流入により高温傾向となる一方、北から南へ南下する領域では寒気が流入して低温化しやすい。こうした暖気と寒気の境界域では水平温度傾度が強まり、位置エネルギーが運動エネルギーに変換して温帯低気圧が発達しやすくなる。特に、暖気が優勢な領域へ寒気が流入する構造（東側に暖気、西側に寒気が分布する場合）では、温帯低気圧が発達しやすい条件が整うと

写真1 長次郎谷出合付近で陥没した雪渓（2023年7月中旬）



写真提供：岩瀬智彦

考えられる。このため、偏西風の蛇行が増大した場合、温帯低気圧の発生回数が増加し、発達しやすくなる可能性がある。上空の流れから切り離された寒冷低気圧（切離低気圧）や、ブロッキング高気圧が形成されやすくなることも想定される。したがって、蛇行の増大が進行する場合、温帯低気圧だけでなく、切離低気圧やブロッキング高気圧の発生頻度も高まって、落雷や局地的な強雨と記録的な高温、少雨が発生する頻度がいずれも多くなることが懸念される。

(8) 梅雨や秋雨の変化

近年、梅雨の気候特性にも変化が認められる。以前は、梅雨期にはオホーツク海高気圧が停滞し、「やませ」と呼ばれる冷たい北東風が吹いて、関東地方や北日本の太平洋側では気温が上昇しにくい「梅雨寒」の状態が数日間持続することが多かった。ときには2週間以上続くこともあり、そのような年は冷害が発生した。しかし近年は、オホーツク海高気圧が出現することが少なくなり、梅雨寒となる日が減っている。その結果、6～7月の北日本太平洋側では気温上昇が顕著である。オホーツク海高気圧が発達しなくなっている理由は、オホーツク海の海面水温の上昇に加え、東アジアの上空における偏西風（ジェット気流）の変化が関与している可能性がある。オホーツク海高気圧は偏西風が北に蛇行して上空にブロッキング高気圧ができると、長期間停滞する傾向がある。しかしながら、近年では6～7月にこの偏西風が弱まってきている。それは、中国大陸の気温が著しく、南北の温度差が小さくなることで偏西風が弱まり、オホーツク海付近で蛇行しにくくなっているからと思われる。

また、近年、梅雨の時期が年ごとに大きく変わる傾向にある。温暖化が進めば、この傾向は益々顕著

になり、梅雨がほとんど現れないまま6月上旬から猛暑が続く年や、8月になっても北陸地方や北日本など、梅雨が明けない年が現れる可能性がある。このような変化が続くと、梅雨期間中でも晴天日が増える一方で、短期間に強い雨が集中するなど降水の極端化が起こりやすくなる。また、夏山シーズンにおいて「この時期は天候が安定する」と見なせる期間が不明瞭となり、登山計画の適切な時期設定が難しくなることが懸念される。

(9) 台風の勢力や進路の変化

近年、日本に接近・上陸する台風について、強い勢力を維持したまま接近する事例が増えている。台風は海面から供給される熱および水蒸気をエネルギー源として発達するため、海面水温が高い海域を通過すると勢力を維持・増大しやすい。地球温暖化の進行に伴い日本近海の海面水温が上昇していることから、今後は台風が日本付近に接近しても衰弱せず上陸するケースが増加する可能性がある。実際に、2018年の台風21号（Jebi）は近畿地方を中心に大きな被害をもたらした。また2019年には、台風15号（Faxai）と19号（Hagibis）が相次いで東日本に接近・上陸して暴風による大規模停電（台風15号）や大河川の相次ぐ氾濫（台風19号）など、強い勢力の台風による被害が顕在化している。これらの台風による山岳の被害について興味のある方は、「登山研修」VOL.36（国立登山研修所発行）を参照していただきたい。

台風の進路にも近年、変化が見られる。2018年の台風12号では、関東の東海上から西日本へと台風が東から西に進み、富士山では登山指導員1名が低体温症で死亡している。東北地方の太平洋側では2016年8月に岩手県に上陸して大きな被害をもたらした「平成28年台風10号」や2021年の「令和3年台風8

1. 登山に関する調査研究

号」、2024年の「令和6年台風5号」など近年になって、上陸する台風が相次いでいる。いずれも7～8月の台風であり、これまではない傾向である。このような進路変化の背景として、太平洋高気圧の張り出し方や位置の変化が影響している可能性がある。

従来、日本の夏は太平洋高気圧に覆われるため、台風が日本付近に接近しにくかった。接近するにしても、太平洋高気圧と中国大陸にあるチベット高気圧とが分かれてその間を進んできたり、高気圧の勢力が東海上に後退するなどして西日本に接近するケースが多かった。それが近年は、太平洋高気圧の勢力が日本の北に移って、日本付近は熱帯地域で吹く偏東風（北東貿易風）の影響を受ける場に入って台風が東風に流されて西進したり、上層の低気圧が南海上にできて、その周囲を吹く風に流されて複雑な動きをするなど、従来とは異なる動きをする台風が出現してきている。今後の台風による山岳への影響を評価する上では、台風の勢力だけでなく、台風進路の変化が山岳域の被災リスク分布を変える点に留意する必要がある。一般に台風は進行方向の右側（危険半円）で風が強まりやすく、被害が大きくなりやすい。したがって、台風が従来と異なる進路を取る場合、危険半円（進行右側）に入る山域が変化し、これまで想定されにくかった地域で被害が拡大する可能性がある。

（10）登山道やアプローチの林道への影響

温暖化の影響で、1時間に50mmを超える非常に激しい雨や、大雨の回数が増えると考えられている。また、勢力の強い台風が日本に接近・上陸する回数も増えると予想されている。これらの影響で、土砂災害や暴風による倒木などによって登山道やアプローチの林道が被害を受けたり、沢の氾濫や鉄砲水によって橋が流されたりすることも考えられる。

これらの被害で長期間、特定の登山道が閉鎖されると、登山道の維持、補修にかかる費用が増加することが懸念される。

（11）山火事の増加

大雨が降る場所では災害級の豪雨になるが、降らない所では全く降らないという二極化が進み、空気が乾燥して山火事が多発する恐れがある。それが森林の消失を招き、生態系に影響を及ぼすだけでなく、二酸化炭素を吸収してくれる森林が失われることで、温暖化をさらに加速させてしまう悪循環に陥いる可能性もある。

（12）気象遭難の増加

寒冷低気圧の増加や、地上付近の日中の気温上昇や水蒸気量の増加により、局地的な豪雨や落雷が増えることが予想される。そのため、増水した沢を渡渉しようとして流されたり、鉄砲水や土石流、土砂崩れ、落雷による気象遭難が増加したりすることが懸念される。また、冬や春を中心に、温帯低気圧が発達する回数が増えると、暴風雨（雪）に見舞われ、低体温症による遭難が増える可能性がある。

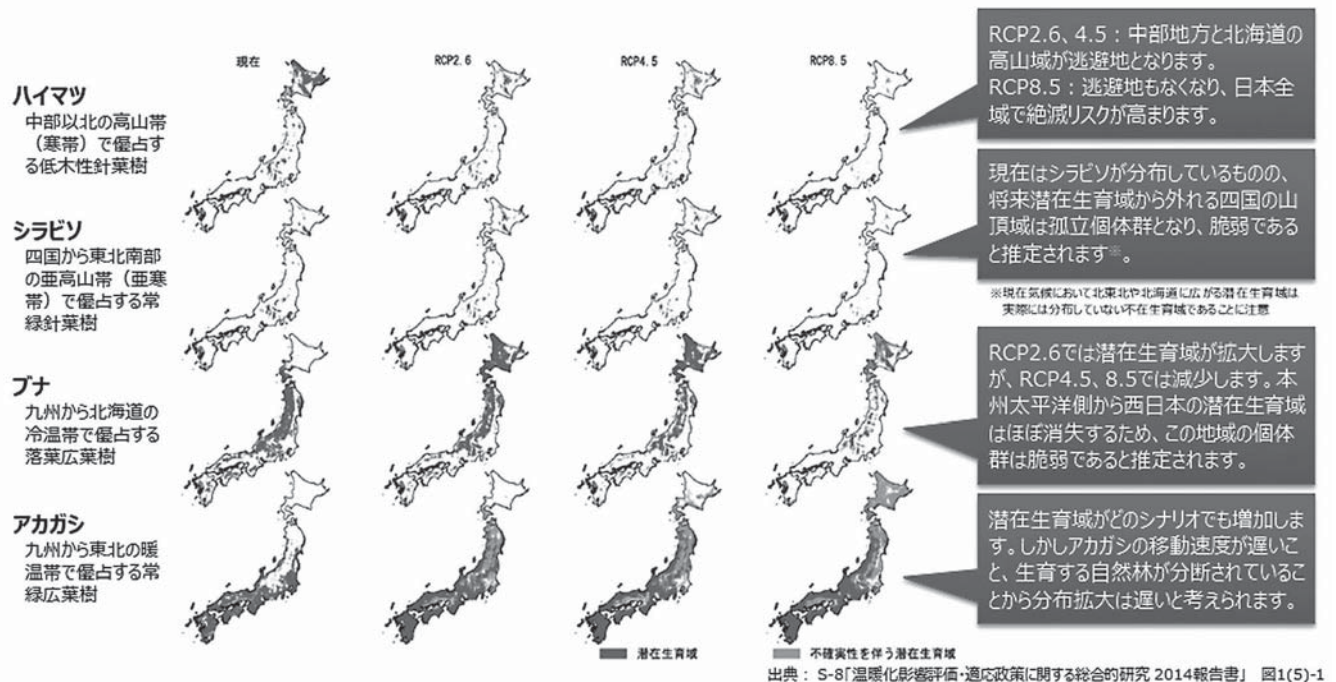
（13）熱中症の増加

地球温暖化が進むと、極端に暑い日が増え、熱中症のリスクが高まる。山では、標高が高くなるほど気温は下がるが、その一方で直射日光は強くなる。森林限界を超えた場所では、日陰がほとんどなく、標高の高い場所でも熱中症を発症するケースが増える可能性がある。登山中の熱中症対策がこれまで以上に重要になってくる。

（14）植生への影響

地球温暖化によって気候が変わるスピードが、動

図21 各気候帯の優占種4種における現在気候と3つのRCPの将来気候シナリオで予測された2081年-2100年における潜在生育域



植物が移動したり適応したりするスピードを上回ると、多くの生き物が生き残れなくなる。IPCC第4次評価報告書では、世界の平均気温が産業革命前より1.5～2.5℃以上上昇した場合、動植物の20～30%が絶滅の危機にさらされる可能性が高いと予測されている。

日本の山で特に心配されているのが、ブナ林への影響である。新緑、黄葉が美しく、保水能力に優れ、「森のダム」とも呼ばれるブナは、温暖化に伴い、現在ブナが育っている多くの地域が生育に適さない気候に変わると考えられている。(図21)。同じく新緑、黄葉が美しいミズナラも近年、「ナラ枯れ」と呼ばれる被害が全国で広がっている。その直接的な原因は、カシノナガキクイムシ（あだ名はカシナガ）によるものだが、カシナガが分布域を拡大したのは温暖化の影響があると考えられており、高温によって木の抵抗力が弱っている可能性もある。また、積雪の減少によって、これまで雪が多くて生息できなかったシカが高い標高まで進出し、高山植物を食べ

てしまう問題も深刻化している。温暖化が進めば、この影響はさらに強まると考えられている。気温の上昇そのものも、高山に生きる動植物にとって大きな問題だ。すでに山の上にしか生きる場所がない高山植物やライチョウ、高山性のチョウなどは、これ以上逃げ場がなく、絶滅の危険が高まっている。

このように、温暖化は一部の植物だけでなく、山の生態系全体に大きな影響を与えると予想されている。私たちが当たり前のように楽しんできた、新緑、紅葉、高山植物、雪渓、野生動物や鳥たちの姿が、将来は見られなくなるかもしれない。近年の熊の異変も生態系が破壊されているという警告かもしれない。

(15) その他の影響

他にも地球温暖化の進行によって次のような影響が考えられる。

第一に、最低気温の上昇が顕著であることから、夜間から早朝にかけての冷え込みが弱まりつつあ

1. 登山に関する調査研究

る。この変化は、高標高域における生物環境にも影響を及ぼす可能性がある。具体的には、従来は気温条件により生息が制限されていた昆虫が高地でも大量発生するほか、野生動物の行動範囲が標高の高い領域へ拡大し、生態系構造が変化する可能性が懸念される。これは、アルプスを含む高山帯や北海道の2,000m級の山域においても生じうる影響である。

第二に、大気中の水蒸気量が増加することにより、山岳地域では夏季を中心として霧の発生頻度が増加する可能性がある。霧の増加は熱中症の影響を和らげる可能性がある一方、視界不良による道迷いなど登山リスクを高めるだけでなく、日射条件や植生環境にも影響を与える要因となり得る。

これらの変化は、これからの登山ではこれまでの常識や経験が通用しなくなることを意味している。自然の変化を正しく理解し、安全な行動につなげていくことが、ますます重要になっていく。

注1) 地球温暖化等の長期的な気候変動の監視に用いる15地点の観測値による日本の夏の平均気温

注2) 水蒸気、二酸化炭素、オゾン、メタンガスなど地表面から逃げていく熱を吸収することによって、大気を暖める効果のあるガス（気体）。このうち、人間活動によって近年、急激に増加している二酸化炭素やメタンガスが温暖化を促進させるガス（気体）として、その排出規制の重要性が叫ばれている。

注3) 気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、気候変動に関連する科学的評価を担当する国連機関である。気候変動、その影響とリスクに関する科学的評価を政治指導者に定期的に提供するとともに、適応と緩和の戦略を提案

することを目的に、国連環境計画（UNEP）と世界気象機関（WMO）によって1988年に設置された。国連総会は同年、WMOとUNEPによるIPCCの共同設立に支持を表明した。IPCCには195カ国が加盟している。（国際連合広報センターホームページ より）

注4) IPCC第5次評価報告書

注5) RCP（Representative Concentration Pathway）シナリオは（図8-9）、代表的濃度経路に関する将来シナリオであり、AR5で主に用いられている。RCPシナリオは、IPCCの要請により開発されたものである。これは既存のSRESシナリオが更新（排出の基準年）や対象範囲の拡大（ガス種の増加、SRESで考慮されなかった450ppm CO₂換算のような低濃度のシナリオなど）を必要としていたためである。

注6) ここでの5地点は、長期的な観測データがある札幌、輪島、館野（茨城県つくば市）、潮岬、福岡である。

参考・引用文献

IPCC第6次評価報告書第1作業部会報告書の解説資料(基礎編/導入編) 気象庁ホームページより

基礎編 https://www.mext.go.jp/content/0230531-mxt_kankyou-100000543_9.pdf

導入編 https://www.mext.go.jp/content/230531-mxt_kankyou-100000543_10.pdf

IPCC AR6 WG1報告書 政策決定者向け要約（SPM）暫定訳（2022年12月22日版）

https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ipcc/6/IPCC_AR6_WGI_SPM_JP.pdf

猪熊隆之（2011年6月1日発行）山岳気象大全、山と溪谷社

飯田肇 他（2021年）釧路雪溪の最近の変動、登山

研修VOL.36

飯田肇 他（2024年）釧沢における最近の変動Ⅱ、
登山研修VOL.39

猪熊隆之（2024年）2023年の記録的な猛暑の原因と
山への影響、登山研修VOL.39

[https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/tabid/83/
Default.aspx](https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/tabid/83/Default.aspx)

飯田肇 他（2022年3月25日発行）新・高みへのス
テップ第2部、勝美印刷、P125～128

国立極地研究所「2025年度研究結果・トピックス一
覧」

<https://www.nipr.ac.jp/info2025/20251113.html>

温室効果ガス年報第21号 世界気象機関（WMO）令
和7年11月12日

[https://www.data.jma.go.jp/env/info/wdcgg/
GHG_Bulletin-21_j.pdf](https://www.data.jma.go.jp/env/info/wdcgg/GHG_Bulletin-21_j.pdf)

ヤブを漕ぐ

山 本 宗 彦（陀羅仏同人・明治大学体育会山岳部炉辺会）

白ハゲ西稜3級、白萩尾根5級…これを聞いてすぐにピンとくる人はまずいないと思う。そもそもこれらのルート名など聞いたことがないだろう。なぜならこれらのルート名は山本が勝手に名付けて自分のごく親しい人に話す時しか使っていないし、そもそもルートとして認知されているはずもないと思う。この2つのルートは、いずれも劔岳の西面に流れる白萩川をアプローチにして取り付く劔岳北方稜線の支稜である。そしてこの等級は夏季（無積雪期）の等級であり、いずれも山本が自分を納得させるために戯れに付けたに過ぎない。昨年秋に国立登山研修所のO氏から「昔ヤブ漕ぎのグレードを作っていましたよね。そのことを書いてくれませんか。」という電話をもらったとき、私は即座に「そんなことは私個人が好きでやってきたことを戯れに話しただけなので、人が読むに値する文章にはなりませんよ。」とお答えしたのだが、おだてられて結局書く気になってしまった。しかしこのようなカテゴリーの話など誰が読むのだろと正直思う。なぜならヤブ山とかヤブ漕ぎという話題のほとんどがあまり歓迎されない文脈で話されることが多いことからそのような山やそのような行為はできれば避けたい余計なことであることは間違いないのではないか。沢登りの源頭部分で水がなくなったあとにヤブ漕ぎがなければラッキーであり、もしヤブ漕ぎとなった場合でもそれは明らかに沢登りがメインだったのであって、源頭部分のヤブ漕ぎは絶対に歓迎されていないことは間違いないと自信を持って言える。そのような扱いをされているヤブ山とヤブ漕ぎが話題になるわけではないとい

う確信が私にはあった。私はかつて後輩のOと越後駒ヶ岳のセンノ沢を登ったとき、遡行後に出た郡界尾根をそのまま忠実に最後までヤブ漕ぎして駒の小屋に着いた。そのときの小屋の主人の第一声は「郡界尾根を最後までヤブ漕ぎしてここまで来た奴は初めて見た。大概是ヤブを避けてオツルミズ沢の源頭部を登ってくるんだけどなあ…。変わってるな。」だったことを今でも覚えている。そうなのだ。我々も郡界尾根からオツルミズ沢の源頭部が見えたときに「沢登りは気持ちいいだろうなあ。」と思ったのだ。オツルミズ沢の強い誘惑を振り切って最後までヤブを漕いだのはオツルミズ沢の源頭部を登ることを計画書に書いてなかったということもあったが途中でより楽な方にルート変更することはなんだか逃げるみたいな気持ちを感じたことと、やっぱり最後まで郡界尾根を歩き通さないと郡界尾根に失礼かなという気持ちもあったことは否めない。要するにどうかしているのである。そしてどうかしている人の話など、どうかしている人しか興味を持たないであろう。

かつて私の師匠の一人は「登山は未知との遭遇である」から、どんなに易しくてもいいのでルート開拓をやるのが一番いいと言っていた。登山の楽しみ方は色々あるだろうが、そこに共通することは非日常との出会いだろうと思う。仮に整備された夏道であつてもそこは非日常であるが、その最たるものは誰も行ったことがないところを登るとか情報の無いところを登ることだろうと思う。要するに未踏のルー

トは未知との遭遇ができるチャンスなわけだが、未踏ルートというと、岩壁の未踏ルートとか冬季未踏ルートなどを連想するのであって、ヤブ山に行くと聞いた時に仮にそこが未踏ルートだったとしても同じように感じるだろうか。さらに、そこには開拓者精神や挑戦者魂みたいなものを感じることがあるだろうか。しかも、夏道を登っていて道を見失うことでヤブ漕ぎを強いられることや、道はあるのだけれどなどの仮払いがされていなくてヤブを漕ぐことはどこでもありうるのだが、それはあくまでもイレギュラーな場合であり、敢えてヤブを漕ぎに行くというレギュラー登山としてヤブ漕ぎが認知されているとはとても思えない。繰り返すが、道が無いからヤブ漕ぎを強いられるのであるが、道がないということは、そこは誰も登ったことがない山やルートかもしれないのだ。しかし未踏かもしれないのに、価値があるとは思われない雰囲気があって、より困難を求めるフロンティアスピリットはおそらく誰も感じない。そこにいるのはただの物好きな、ちょっと変態チックな変わり者という目で見られるのがオチだ。しかし鹿島槍ヶ岳北壁の初登攀は夏であったし、小窓尾根夏季初登攀の記録は寡聞にして知らないが、冬季初登攀の前に間違いなく登られているだろう。私のいた明治大学体育会山岳部の先輩が1960年に北鎌尾根の冬季縦走の前に無積雪期の偵察をしたときのことを「まだ北鎌尾根に踏み跡がなかった頃」と言っていた。さらにさかのぼれば身内の話で恐縮だが、明治大学を創部メンバーの一人である馬場忠三郎氏は、1927(S2)年7月に槍ヶ岳硫黄尾根の夏季初縦走を行っている。私は中学生のときから硫黄尾根を夏に歩いてみたいと思っていたのでこの記録のことを知った時は心が震えた。だからこそ、私は創部者に敬意を表するためには100周年の時に硫黄尾根の夏季縦走をするべきであると提案した。しかし残念

ながら相手にされることは無かった…。

かつて山岳部の口の悪い仲間の一人が次のような替え歌を作って喜んでいて。

やぶがざわざわ 行く手をはばむ

漕いでも漕いでもまだ漕ぎやまぬ

山本喜びヤブ駆け回る

俺はテントでまるくなる

どうしようもないやりきれない歌だが、メロディーは「雪」である。私は喜んで駆け回っていたわけではないが、他の人よりも積極的に、または厭わずに（見えたようである）登っていたように感じられたせいで「ヤブの山本」などというおよそ山岳部らしくない、あまり名誉とは言えない名前までいただいてしまった。歌を作った仲間とは学生の時に奥多摩の川苔山真名井北稜に行ったことがあったが、そこはせいぜい1級から2級マイナスくらいだったと思う。彼は買ったばかりのミレー一本絞めザックを誇らしげに担いできたのだが、そのザックがヤブ（繁茂した木の枝）のせいで汚れたり傷がついたりしてかなり憤慨していたことを思い出す。このルートは登山地図に名前が書いてあるくらいのところなので大したことはないのだが、ヤブルートに対する感情というのは彼の反応がごく一般的だと思う。

ヤブ山とは道のない山であり、ヤブルートとは道のないルートである。基本的に人が行かない山なのだが、ヤブというのはただの厄介な障害であって解決すべき課題とみられることはまずないので、ヤブルートは敢えて主張するものではないと考えてきた。他にきちんと目標や課題があり、結果的にそこにヤブがあったという程度のもので、いざとなれば誰でも行けるところであり、特別に取り上げるものではないというところが登山者一般に共通する思い

1. 登山に関する調査研究

ではないだろうか。しかし、ヤブがあるということは山が整備されていないのだから山はありのままの姿に近いということでもあり、これは大事なセールスポイントだ。それに道のない山はヤブ山だけではなく、岩壁にも本来は道はない。そこで登山において道とは何かという議論もできそうだが、そもそも道があると思うから道迷いなどという遭難が起きるのであって、最初から道があることの方がイレギュラーなのだという視点に立てば「道迷い＝道を失うことによる遭難」は無くなるのではないかとさえ思う。そもそも日本のように森林限界が高く、降雨量に恵まれた山容の穏やかな山では樹木に覆われていることは当たり前という意味からもヤブ漕ぎが話の主題に上ることはなかったのだろう。

それにヤブ漕ぎという行為は、ヤブが行く手を阻んだときに仕方なく行うことであり、それができなくて登れないという意味で技術的に認知されているものではない（ような気がする）。つまり登山行為の中で「岩登り技術」とか「冬山登山技術」のように一つのカテゴリーとして確立されていて、三点支持とかアイゼンワークという技術練習と同じように練習が必須であると考えられているとは思えない。夏山におけるテント設営なども練習をするが、ヤブ漕ぎ技術を練習するということは寡聞にして聞いたことが無い。そもそも技術として成立するとは思われていないだろう。ヤブが現れたら諦めて突っ込むだけであり、あとは体力に任せて力づくで行くだけであると思われているのではないだろうか。しかしヤブ漕ぎが上手な人を見ていると、あたかもモーゼの十戒のようにヤブが自ら道を開いてくれているかのように見えることがある。一口にヤブと言っても相手は生きている植物なのであってただの障害と考えてはいけない。草木の生え方、枝の張り方は千差万別であり、それぞれしなりやすい向きや力を逃が

しやすい掴み方があるので、できるだけ周囲を見ながら草木の伸びる摂理に沿って力をかけ、草木の伸びたい方向に無理をかけないように漕ぐのがコツなのである。力任せの強引なヤブ漕ぎは草木を完全な敵にしてしまうが、相手の都合に沿ってヤブを漕ぐと友だちになってくれる。これはとてもデリケートな技術だが、そこに山があるから登られたエヴェレストやそこに大岩壁があるから登られた唐沢岳幕岩のように、そこにヤブがあるから登られたというヤブ尾根ルートを私は知らない。もちろん必ず最初に登った人間がいるわけだが、それが話題になるのは劔岳や槍ヶ岳くらいだろうか。登攀史の中でも夏季初登ということが話題になったことを私は寡聞にして知らない。また日本ではヤブが行く手を阻むルートは残雪期に登ることが常識でもあることも影響しているかもしれない。岩壁の場合はどんなに易しいルートであっても最初に登れば初登攀だが、ヤブルートの場合はなんというのだろうか。初漕ぎなどということは聞いたことはないし、岩壁と違ってヤブルートについては記録を残さない方が多いと感じるので判然としないこともあるだろう。私はかつて白萩尾根や大窓の頭西稜を夏に登ったことがある。両方ともに残雪期に登られたことがあることは知っていたが、夏については地元の友人知人も誰も聞いたことがないと言っていたのでひょっとしたら夏季初登かもしれない。もちろん誰かが登っている可能性は十分ある。しかしそのときに感じたことは、ヤブ山（ルート）というと一見無価値な印象を持たれかねないこれらのルートは、実はかなりエキサイティングでワクワクドキドキの宝庫でもあったという事実である。20歳の時に白萩尾根～小窓～小窓雪渓～池の平～ガンドウ尾根～十字峽～別山沢という計画を実行したとき、小窓雪渓の途中から池平山側の斜面のヤブに入った。まだ池平小屋へ通じる道は無かつ

た頃で我武者羅に夏道を目指したが、途中で古い坑道の入り口を2～3ヶ所見つけた。思いもかけない発見だったが、珍しいものを見つけた高揚感は今でも憶えている。その時はさらに仙人池からガンドウ尾根を下ったが、一日に標高差で約90mしか下れない日もあった。ヤブ尾根は下らない方がいい。また、白萩尾根と大窓の頭西稜では、他の山から見るとただのヤブルートに見えるのだが、生い茂った樹木がその尾根の真の姿を隠していたことが登ってみて明らかになった。樹木に覆われているので実際に登るまで分からなかったのだが、白萩尾根は終了点近くに小さなチムニーがあり、初めて登った時はロープを使って登った。また大窓の頭西稜にもチムニー状の岩場があり、このときはパートナーの肩の上に乗って突破した。この時は取り付きの西仙人谷の出合に滝があり、そこを登るのにボルトまで打ったが今の人たちならもっとスマートに登るだろう。つまりヤブルートというのはそもそも情報が無いことに加え、樹木に覆われていることから複雑な状況が隠されていることが多々あるので、その場での対処療法的な対応が求められるルートでもあるのだが、そう考えるとただのしんどいルートではなく、自身の対応力が要求される割と可能性と創造的な面もあるルートであると言えるのではないだろうか。そういったわけで一見して大した価値のないと認知されたルートであると決めつけることなく、人が見向きもしないからこそ私はひそかに価値を感じている。人が見向きもしないことに価値を見出すということは負け惜しみのように聞こえるかもしれないが、ルート図を片手にしてそれと現場を照合しながら登るのとは違う精神の充実感と高揚感を感じる。ヤブ漕ぎを厭わない者は、別にヤブを漕ぎたくて山に行っているのではなく、未知との遭遇を求めて“道の無い山＝既成ルートの定められていない山”に行くのであり、

そこに行くにあたりルート状況の予測や推測はするものの予想外の何かに会うことを密かに期待しているのだ。ルート図片手に登るというのは、今ならスマホ片手に…となるのだろうが、ヤブルートはおそらくスマホは役に立たないだろう。何故なら現在位置が分かっても、その場所の状況が分かるわけではないからである。だからわざわざヤブを漕ぎに行くと考えるのではなく、道が無いのだから未知の要素のあるルートに登るというルート開拓につながる視点で見直せば、多少なりともワクワクした気持ちをどこかで持てるということではないだろうか。そして何よりも、ヤブルートは登山の三大要素である「不安・不快・不便」が凝縮されているが、この三大要素は日本の冬山に十分に通じるものがあるので、冬山を登るための訓練にも最適だ。

登山はどんな登り方であってもそこに共通することは非日常的な世界との出会いであり、最大の非日常は情報のない未踏ルートだが、自分にとっての未知であればその体験の幅は大きく広がるはずだ。とは言っても既に存在する夏道は整備された競技場のような側面もあるので、ポピュラーな夏道ルートという整備された完全既知のルートから人跡未踏の完全未知のルートという二極の中間に位置し、双方の要素を程よくもつ橋渡しの存在が、いわゆる「道の無い山」としてのヤブ山なのではないだろうか。道の無いルートという言い方は矛盾した冗談のような言い方だが、道の無い山には既成のルートはないので自分が歩いたところがルートになる。何しろルートの真の状態は草木に隠されているのだから当たり前なのだが、情報のないところを登るとそういったことはよくある。要するに行ってみなければ分からないのである。

こうした発見？や遭遇？に関しては2020年9月に

1. 登山に関する調査研究

後輩のTと登った有明山東南尾根（仮称）で珍しい経験もあった。それは有明山中央峰から黒川沢と中房川の出会いに向かって落ちる尾根だが少なくとも地形図上には道はないし、燕山荘の社長をはじめ、地元の数人の方に訊いてみたがポピュラールート以外で少なくとも南面の中房川の側から登る道の存在は知らないと聞いていた。ところが行ってみると驚いたことに所々に踏み跡があり明らかに人為的に切った木の幹が確認できた。さらに驚いたのは頂上直下に5mほどの露岩帯があり、そこにハーケンが打たれていて木の橋をかけた残骸が確認できたことだ。このときは、こちらの調査不足ではあるが道が無いはずだと思って入ったヤブ尾根に道があったという誰も知らない事実を発見してかなり興奮した。この時は露岩帯を突破できる用意が無かったのでそこから引き返して帰りはビバークとなってしまったことで、もう一度登って真相を突き止めなければならなくなってしまった。

これらのルートはいずれも事前の情報はない。私の情報収集力の不足もあるだろうが大概の場合地元の岳友も知らないことが殆どだったので、ある意味それが魅力とも言えるのではないだろうか。これらの中には残雪期には登られた記録があったものもあるが、それも行動記録が読めたわけではなく、まして夏期の記録は見たことも聞いたこともなかったので、仮に登られていたとしても新鮮この上ない。つまり、行ってみなければ分からないのであった。勿論行ってみたら本当に辛いだけのヤブルートもあったが、行ってみなければ分からないということは、予想外の状況に遭遇した時にその時の持てる力で乗り切るしかなく、それこそが山にぼる醍醐味であり、まさに生きている実感を与えてくれる。まるで悟りの境地のように達観してヤブを漕ぎ、木登りをしたりヤブに覆われているとはいえ急峻な地形にロープ

を使ったり、懸垂下降を強いられることもあった。ヤブ山は未踏の岩壁や厳冬期登山のような荒々しさも派手さも、そしてアピール度もないが、行ってみなければ分からないという魅力に満ちている。ヤブ山のことを縷々書いてきたが、ヤブ山へ行くことがこの本質なのではない。未知の世界に分け入り、目の前に現れた課題をその時の持てる力で乗り越えることが面白くないわけではない。そしてそれは登山の原点ともいえるのではないだろうか。ただし、道がないので、そこには結果的にヤブがあった…ということだろう。そしてそのヤブを漕ぎながら、未知との遭遇を期待してヤブの先にある未来に希望を託すのだ。

付録

今まで登った主なヤブ尾根を示します。中にはルート全体が深いヤブの場合もあればルートの一部が深いヤブである場合もあります。また現在はしっかりとした道になっていると聞いたルートもあります。また、もともと踏跡のついているルートもありました。

級は山本の独断によるヤブグレードです。但しヤブは一様ではないので本来は数値化にはかなり無理があります。

- 1 劔岳北方稜線（赤谷山－劔岳本峰）… 3 級
- 2 小窓尾根（池の谷への分岐－ニードル手前）… 4 級（頑張っても 6 時間かかる）
- 3 白萩尾根… 5 級
- 4 赤谷尾根側稜（往復）… 4 級
- 5 大窓の頭西稜… 4 級＋
- 6 白ハゲ西稜 3 級
- 7 白ハゲ東稜（5 月）
- 8 赤ハゲ東稜（5 月）
- 9 ハッ峰Ⅲ稜… 4 級
- 10 前劔岳東尾根（右稜＋左稜）… 3 級
- 11 猫又山西稜… 3 級
- 12 毛勝山大明神尾根… 3 級
- 13 ガンドウ尾根（下降）… 5 級
- 14 北仙人尾根（5 月）
- 15 燕岳西尾根（旧カモシカ新道）… 3 級
- 16 有明山南東尾根… 3 級
- 17 南アルプス深南部（不動岳－光岳）… 4 級
- 18 塩見岳北股尾根… 3 級
- 19 奥秩父両神山西岳新道… 2 級
- 20 天丸山－雁掛峠－赤岩峠－八丁峠－両神山（大ナゲシ北稜－赤岩峠）… 2 級
- 21 越後三山越後駒ヶ岳郡界尾根… 4 級
- 22 越後三山越後駒ヶ岳マキグラノツルネ… 4 級

UIAA安全委員会の2025年次総会と関連小委員会・記念講演会

北 村 憲 彦 ((公社)日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSCA) UIAA委員会情報部会)

1. まえがき

2025年4月14日～17日にシャモニ(仏)のENSAで、国際山岳連盟の安全委員会(UIAA安全委員会)が開催された。この年の年次総会で安全委員会は設立50周年を迎えた。この年次総会と関連の小委員会に出席し、また記念講演会を聴講する機会を得たので、その様子や内容を概説する。

2. UIAA安全委員会

国際山岳連盟UIAAはUNION INTERNATIONALE DES ASSOCIATIONS D'ALPINISME の略称で、英語表記では International Climbing and Mountaineering Federation (<https://www.theuiaa.org/safety/>) となる。UIAAは1932年設立で、73ヶ国が加盟している。1960年ごろに初めての安全規格が発行され、その後に安全委員会が設置された。

安全委員会では登山の重大な事故に関連する登山道具の課題や事故防止に役立てるために、登山道具の標準規格や評価試験方法を検討している。多くの規格は欧州規格ENを参考に作成されている。今のところ、登山用のロープ、ハーネス、ヘルメット、などの27タイプの登山道具に規格が決められている。

たとえばダイナミックロープにはUIAA101規格、伸びの少ないロープにはUIAA107、スタティックロープにはUIAA110、ハーネスにはUIAA105、登山用ヘルメットにはUIAA106、などで飛び番号で27規格が運用されている。

審査に通った製品には、図1に示すようなUIAA安全ラベル(ロゴ)やUIAAの文字が表記されている。これらはUIAA規格に沿う安全基準を満たした登山用具であることを示している。規格は状況の変化に応じて安全委員会で検討、改訂、更新されている。すべてUIAAが承認した試験機関で、規格で定められた所定の条件で厳正に試験評価されている。この試験機関は2025年末時点で、以下の8カ国に設置されている。イギリス2、オーストリア3、中国2、チェコ2、ドイツ3、イタリア3、フランス2、スペインに1カ所で、合計18カ所になる。

この安全ラベルの意味については動画アニメで各国に紹介されている。2024年に日本語版も準備され、Youtube(図2のQRコード利用)を視聴できる。AIの自動翻訳版なので、多少変な読み上げとなっているが、短時間で分かりやすくUIAA安全ラベルのことが紹介されている。



図1 国際山岳連盟UIAAの安全ラベルの例

UIAA



図2 「UIAA安全ラベルって何ですか？」日本語版

今のところ登山道具メーカー約70社に2,000以上の製品に安全ラベルが発行されている。2025年は25ラベルの辞退などもあり、ラベルの数は変動がある。

クライミングの事故調査の結果などに、あるいはユーザーの動向にも合わせて、評価基準や条件の見直しが続けられている。

現在のUIAA安全委員会の正会員は以下の13国から1名ずつ（スイス、フランス、ブラジル、米国、ドイツ、スウェーデン、イタリア、ポルトガル、英国、オーストリア、日本、トルコ、ベルギー）、準会員11名（米国、オーストラリア、国際、スイス、北マケドニア、アルゼンチン、台湾から各代表組織から1名、米国から個人3名）であった、ここに認証を審査される登山道具メーカーから約20名の参加も加えて項目ごとに議論された。

3. 総会と小委員会

3. 1. 総会前の運営に関する内部委員会および総会

1日目の午前中は、UIAA安全委員会の運営に関する内部委員会、製品ごとの個別案件に関する一部の小委員会（ワーキンググループWG）も平行して行われ、昼食休憩をはさんで14時～17時30分の間に総会が開られた。

このうち内部委員会では総会前に、事前承認された新メンバー（今回はJMSCA）が紹介され、2025年予算が正承認され、続いて小委員会の進捗状況も報告された。またACT labs（米国）も試験機関として承認された。大型試験装置もあるLaboratoires Pourquery（フランス）はヘルメットだけの認証テストを申請しているが、すでにEU圏で11カ所もあり必要性が議論された。

中国からは2カ所に試験評価機関を設置したい旨の申請があり、検討されることになった。（本稿で概説する会議は2025年4月で、その後に正式に機関と

して認証され加えられている）

a) UIAA安全委員会小史

総会では、この委員会の歴史が概説された。背景にはArnold Wexlerの確保理論（AAC、1950）、1961年のダイナミックロープに関する規格第1号など、時代が進むに伴って変化するニーズに応じて安全委員会で議論が重ねられていた様子が示された。

b) 環境保全とクライミング

総会の最後に自然との共生問題などについてフィンランドとスイスから話題提供された。岩場の窪みに棲む野鳥の保護の現状について高い意識で熱心に取り組んでいるようすが紹介された。どのように野鳥の邪魔にならないように自然に入っていくか、営巢の情報などの伝え方について意見が交わされた。クライマーへSNSで情報配信などが有効ではないかということで、試すことも提案された。自然の中で遊ばせてもらっているクライマーにとって謙虚な思考も必要だと考えさせられた。日本でも検討すべきである。また海外の岩場に出かける人には最新情報を確認して、現地の考えに沿ってクライミングする必要がある。

3. 2. 併設の50周年記念講演会

2日目（4月15日）は18時30分から20:00～21:30まで安全委員会50周年記念講演会1「登山と用具、共同の軌跡」はシャルレ、ベアール、ピボット、モリスの対談形式、3日目（4月16日）も同じ時間に記念講演2「登山用具の規格、歴史と進展」はピボット、シャルレ、ボナッティ、ジャノッティの対談と会場からの質疑交えて進められた。この二つの記念講演は一般参加者も自由に聴講でき、約80名の聴衆であった。

これらの講演では、アスレティックなクライミングの進歩を支えた道具の開発が、雪と氷の欧州アルプスがあったから進展したことも実感した。メーカー

2. 登山界の現状と課題

としては同時に安全の問題にも常に向き合うことになり、そのために限られたメーカーの自主的な規格や基準、評価試験の適切さ、妥当性、信頼性などを保証するために共通な安全規格が必要とされたことも必然であった。

その間にも当初には想定できなかった道具の破損、結果的には無理な軽量化、人体へのダメージ低減、材質や製造方法や熱処理の条件など、一般の機械部品などにも要求される強度などにも検討が及ぶようになった。登山者を守り、存分にパフォーマンスを楽しむために、信頼のおける道具づくりを規格面から支えているのが、UIAA安全ラベルの意味であることを理解できた。



図3 UIAA安全委員会創立50周年特別講演会 2025.4.15
写真左からJean-Franck Charlet (ENSA教授、UIAA安全委員長、同委員会名誉会員)、Alain Maurice (Petzl社デザイン本部長)、Denis Pivot (CAMP社、欧州標準化委員会の委員長)、Michel Beal (Beal社 最高経営責任者)

4. 製品ごとの小委員会（ワーキンググループWG）

4.1. ボルトWG

このWGでは、懸垂下降用支点リングやアンカーの溶接不良によるリコール問題、関連のドイツでの溶接ロボットによる品質安定性の向上、めっきされたアンカーの腐食やその試験の困難さなどが意見交換された。リングの溶接部については、最終の表面の滑らかさのために2回溶接されることもある。製

造工程の強度や接合不良などにも注意がいる。

ボルト関連で会議3日目にも各地域特に海岸に近い岩壁でのボルト腐食問題も議論された。日本でも海外近くには良い岩場が多い。そもそも日本は海に囲まれており、海岸から離れても塩分による腐食は心配される。また欧州に比べれば、日本や東南アジアは高温多湿であるから、同様の問題がある。

ボルトやりボルト（ボルトの打ち直し）に関するドイツ山岳会が2022年に検討した報告書が当初200部だけ印刷され、内容を加筆修正して2025年2月にUIAAと共同で改訂版（図4参照）が1500部発行された。このボルト報告書は会議でも紹介され、残部が少ないとのことで希望する出席者の一部に配布された。大変参考になる内容である。以下にレポートの表題と目次を示す。

表題 「ボルト 登攀ルート上のボルト設置や取り換えの案内書」

- 1) まえがき p. 3
- 2) ボルト概説（ボルトシステム、ボルトの規格、ボルト小史、2020年のボルト調査、疑わしいボルトの置き換えの優先順） pp. 4～11
- 3) 接着剤ボルト（ボルト設置、引抜き試験、軟らかな岩への設置） pp.16～21
- 4) 機械的ボルト（引抜き試験、ボルト）設置 pp.22～26
- 5) ボルトの腐食（腐食と耐腐食性、腐食の種類、材料の選定） pp.28～31
- 6) 岩（岩のタイプ、ドイツの様々な岩質） pp.32～37
- 7) ボルトシステムの長所短所まとめ（各ボルトシステムの長所短所、岩質にあったボルトシステム） pp.38～39
- 8) ボルトの設置（岩の性状、ボルトの位置） pp.40～41

- 9) 最上部アンカーとビレイステーション（最上部アンカーと懸垂下降点アンカーの例、ビレイステーションの例） pp.42～44
- 10) 支点に関する環境面の配慮 p.45
- 11) 登攀倫理の配慮（ドイツとオーストリアでの「岩場での安全なクライミング」広報活動例） pp.46～47
- 12) 初登とスポーツ的なルート用のボルト打ち換えに関する宣言（ドイツの例） pp.48～49
- 付録（2018年現在ドイツで流通している試験された各種ボルト用接着剤の特性表、あとがき「自然な登攀」） pp.50～52

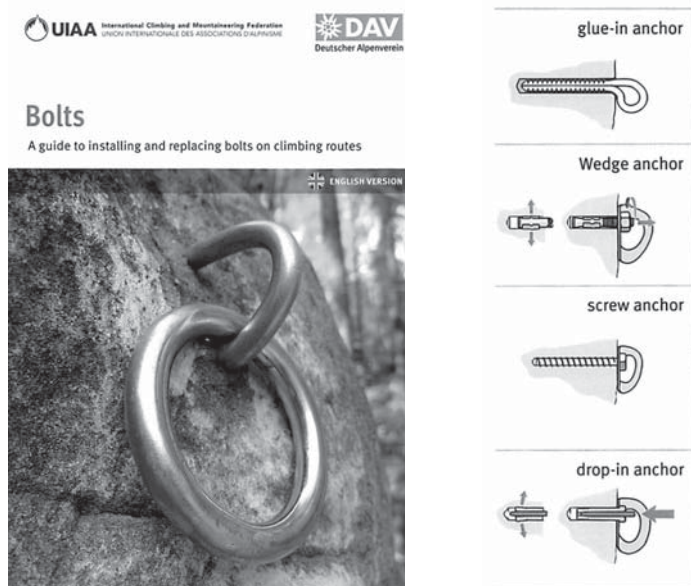


図4 ボルトレポート（全52ページ）表紙と登攀支点用ボルト（メーカー品）例

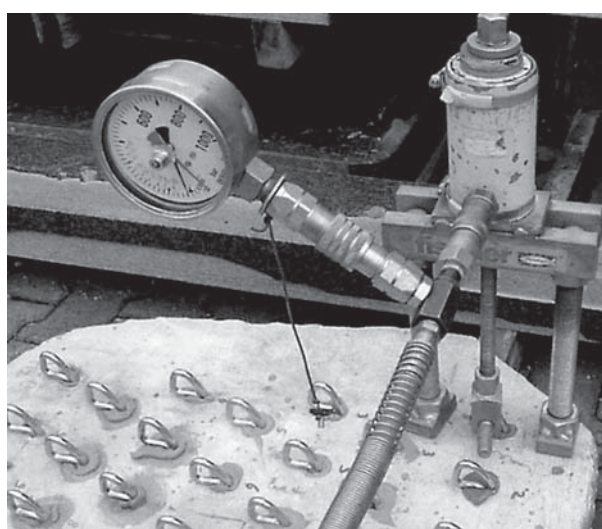


図5 ボルトの軸方向引抜き試験の様子と軟質な砂岩に設置したボルトの試験後

1) Total results

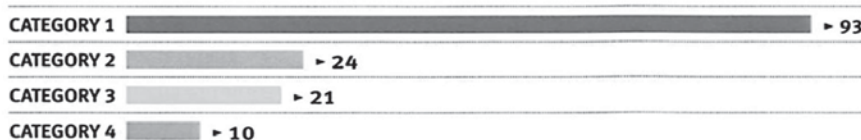


Fig. 17 Results of the 148 tested bolts sorted by the 5 categories defined above.

2) Failure pattern

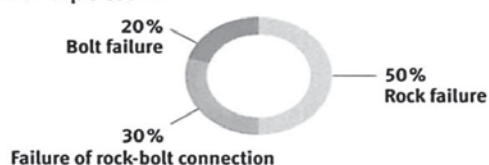


Fig. 18

Category 4 bolts (n= 10) by cause of failure

図6 破損原因ごとのカテゴリ4（実墜落に耐えられない低強度：軸方向3kN未満、軸直角方向5kN未満）ボルト

2. 登山界の現状と課題

4. 2. 繊維・織物WG

a) アイスクライミング競技用のスーツ

ロープやハーネスなどが普段の話題のようなだが、今回はアイスクライミング競技用のスーツが取り上げられた。フェンシング競技スーツ素材が有効で、その効果やフェンシングとは異なり強烈な紫外線に対する耐候性が取り上げられた。この時に回覧された競技用アックスを図7に示す。この先端を競技者が誤って自分自身を突き刺さす外傷への事故例が紹介され、そのためにも競技用のスーツを検討することが求められた。

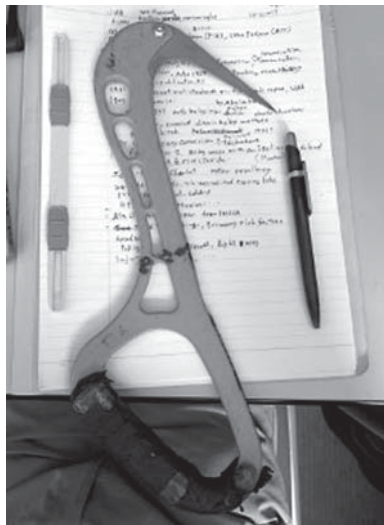


図7 競技用のアイスクライミング用アックス 鋭く細い刃先で全体に薄く軽く、持ち手は古いアッセンダーのような形状をしている

b) クライミングロープ

シャープエッジロープ切断WGでは、最近複数回起きたイタリアの登攀事故例が始めに紹介された。そこで岩角などシャープエッジに対するロープの強度テストの方法についても具体的に提案され、エーデルリット社の大型テスト機の改良など来年の今後でも議論されることになった。

c) 伸びの少ないロープ

スタティックロープWGでは、スタティックロープ、セミスタティックロープ、ハイパーロープなどの用語の混乱についても議論された。アメリカ合衆国ではハイドロスタティックやローストレッチ、レストレッチなどの用語も使われている。レスキューではハイパースタティックと呼ばれることもある。欧州規格ではローストレッチロープとして区別され

ている。キャニオニングや救助用、ケービング用にはスタティックロープが便利である。これらの用途では、フィギアエイト（8の字結び）での使用が前提で、引張強度8 kN 以下にならないようにすること。直径10 mm のスタティックロープでは結び目を引くテストも必要なども確認された。

4. 3. アイスクライミング用のスクリュー

アイスクライミング用のアイススクリューが予想外の低荷重で破損した問題も取り上げられた。議論は深まらなかったが、おそらくトルクと引張との組み合わせ応力下で容易に材料が降伏したのではないかと推察された。低温な氷に接触面が張り付くと振じり抵抗が増えると予想され、このような応力条件となる可能性は高い。さらに検討が必要である。

4. 4. ブレーキ器具

確保器具のブレーキ抵抗に関して、スポーツクライミングのように固定されていないビレーヤーが跳ね上がる高さを指標にしたブレーキ性能の評価結果について、メーカーの担当者が熱心に報告していた。実験で扱われた新しいブレーキ器具は、基本原理はこれまでより大きな変化はないが、巻き付け回数や巻き付け距離、巻き付け角度合計などの点で工夫されていた。着脱は面倒になるが、軸とカムの組み合わせよりは単純で壊れにくい構造に設計されている。

4. 5. ヘルメット

ヘルメットの頭頂部の衝撃力は8 kN 以下と決められている。さらに側方強度ではショックアブソーバーの役割を持たせるよう同じ8 kN 以下で良いか、3.5kN あたりかなども議論された。今回に安全規格の改訂について審議され投票され、規格後の適用日も議論・承認された。ここではメーカーとして対応できる日程も考慮して、規格の発行日を何日にするかも調整していた。現実的に対応するための当面の処置であろう。基準強度については、欧州規格も参

考に進めることが確認された。このヘルメットはクライミングだけでなく、キャニオニングでも必要な検討として取り上げられていた。今後の新たに必要となりそうなWGにスキー用ヘルメット、関連して兼用靴とスキーやアイゼンとのバイディング器具なども検討対象として挙がっていた。

4. 6. クライミングジム

クライミングジムのマットに関する議論から、ジムのクライミングウォールなど施設規模の安全性WGについても意見が交わされたが、今後に持ち越された。

4. 7. 雪崩トランシーバー（ビーコン）

電源、発信、受信などの切り替えボタンが分かりにくいものも販売されている。もし雪崩が発生したら、慌てても一目で認識できるような表示などを共通化についてもっともな意見があった。また、進歩の早い機器だけに、バッテリーや防水などもあるが、規格の見直しや情報の更新ために小委員会を作って議論することになった。

5. 地元フランスの警察の救助訓練見学

4日目最終日（4月17日）には、図8に示すようなENSAの体育館で、フランス警察の山岳救助隊がロープによる引き上げ救助や張り込み救助の訓練を運よく見学できた。昔チームと現代チームで対抗し

て、競う形式で訓練していた。昔チームは50年前くらいの服装や装備と思われる。当時のニッカボッカ着用で、手巻きのウインチで引き上げていた。一方、現代チームは電動工具のモーターで巻き取り機を回していた。圧倒的なスピードの現代チームが昔チームより優っていた。電動工具は比較的小型で持ち運びも便利である。小分けにバッテリーも持てるので、搬送そりで人を搬送する場合になどを想定して、日本でも活用を検討すると良い。

6. 登山用具から目指す安全で高いパフォーマンスの登山（あとがきに代えて）

この委員会では、安全な登山用具の品質を保証する面から議論が尽くされていた。小委員会の様子は図9のようで、ラウンドテーブルで活発に意見交換されていた。登山用具にかかわらず、品質保証のために規格はユーザーとメーカーの双方に重要である。ユーザー（登山者）は理想的なレベルを求め、メーカーは製品設計と生産の両面から実力に応じた規格に落ち着かせたいのが規格の世界で生じる。たしかに委員会でも議論の端々で小さな駆け引きと感じる場面が少しはあった。ただ議論をしている人たちは、わずかな空き時間にもENSAの体育館の人工壁やガイヤンの岩場、スキーに行ってくるような仲



図8 ENSAの体育館でフランス警察が山岳遭難救助の訓練中



2. 登山界の現状と課題

間であった。その点で言えば、メーカーでありユーザーでもある委員会メンバーが規格を考えているので、事故の報告なども交え、どうすれば事故防止できるのか、常にユーザー第一で安全で登山者のパフォーマンスを支えようとする姿勢を感じた。

日本では、クライミング用品のほとんどは外国からの輸入品である。高いボルトを購入してリボルトするとすると経済的な負担が重い。たとえば、もし日本やアジア諸国のような高温多湿な地域の風土に適した安価なボルトなど登山用具などを開発するなら、試験評価が容易でないことが課題である。

ENSAや他の試験機関にあるような設備の設置には大規模な予算が要る。また評価する人材も育成しなくてはならない。そのような場合には、安全委員

会での議論やUIAA安全ラベルの活用も有効といえる。

注) UIAA安全ラベルへの申請は年会費400 EUROで、製品に対して1ラベルあたり40 EURO（2025年末現在）である。

この場には、メーカー、山岳ガイド、各国組織からの委員などが図9のように集まって互いの考えや意見を交換でき、貴重な事故事例、経験、実現可能性などについて議論されている。

道具は製品の品質保証だけでなく、道具の特性を十分に活かすためには、使用者の正しい使い方や保管の仕方なども重要である。道具を手に入れたら、技術も得たということでもない。その道具に必要な技術は何かを考え、それを実現する使い手の技能は、登山で成果を上げるために必要な、体力と技能と意

欲の掛け算の要素の一つである。いずれが0でも積は0になる。事故の原因になれば、0では済まない。ユーザーとしては登山道具の課題を見つけ、報告することも大切である。また同時に、エラーの生じにくい適切な使い方や技能の研鑽を推進する教育的な面も大事にしなければならない。

※本稿は、JMSCAの登山月報で速報した原稿をもとに詳細を加筆した。JMSCAには会議に参加することを推していただいたことに謝意を記す。



図9 UIAA安全委員会の中に登山道具ごとの小委員会で検討している様子（2025.4.15）



図10 UIAA安全委員会50周年記念講演会後の記念撮影（2025.4.17）

登山道の管理と責任

溝 手 康 史（みぞて法律事務所）

1. はじめに

登山には、ハイキング、縦走、冬山登山、クライミング、沢登りなどの種類があるが、明治以降、日本の登山界を牽引してきたのは、欧米から入ってきたアルピニズム的な登山だった。そこでは岩、沢、雪山などが登山の対象であり、登山道に対する関心が低かった。

しかし、現在では、登山が大衆化し、多くの登山者が登山道を利用して山歩きをする。これはアルピニズム的な登山ではなく、レジャー（娯楽）としての登山であり、そこでは、登山道が登山のおもな舞台である。登山指導者は、アルピニズム的な登山の愛好者が多いが、一般の登山者を指導する場面では登山道のあり方が指導内容に影響する。また、近年、登山を観光の対象として重視する自治体が増えており、登山道の整備、管理のあり方が重要な問題になっている。

登山道の整備の仕方次第で登山の内容と難易度が変わる。登山道に多くの鎖を設置すれば、「鎖を登る登山」になり、多くのはしごを設置すれば、「はしごを登る登山」になる。鎖もはしごもなければ、困難な登山道やクライミングルートになる可能性が生じる。

警察庁の統計では、令和6年中の山岳遭難者数は、転倒、転落、滑落、道迷いが約7割を占めるが、そのほとんどが登山道周辺で起きていると考えられる。そのため、利用者の多い登山道で転落、滑落、転倒、道迷いなどが起きると、登山道に鎖、はしご、ロープ、標識、テープ、柵、階段などが設置されること

が多い。それが繰り返されると、登山道が初心者向きになりやすい。他方で、利用者の少ない登山道は、放置されることがある。

登山道の整備の内容は重要な事柄だが、日本の登山道の多くが管理者不在である。この点は、登山が観光と違って大きな経済効果を期待できないこと、登山道の管理責任に対する不安、登山道の整備に費用がかかることが関係している。登山道の整備、管理を行うのは、登山道の管理者であり、管理者がいなければ、登山道の適切な整備、管理ができない。

2. 登山道の管理者

(1) 登山道の管理権

登山道の設置、維持、管理を行う権限が登山道の管理権である。土地所有権は土地を全面的に支配する権利であり、日本の山は、国、自治体、企業、神社、森林組合、個人などが所有している。山の土地所有者に、山をどのように管理するかを決定する権限があり、登山道の設置、管理、変更、廃止を決定する権限がある。山の土地所有者は、登山道の敷地部分を他人に貸し出し、あるいは、その管理を他人に委任することができる。その場合には、借受人や受任者が登山道の管理者になる。

登山道の管理者は、登山道の設置、維持、メンテナンス、規制などを行うことができ、登山道に、鎖、ロープ、はしご、標識、柵などを設置するかどうかを決定できる。土地所有権や登山道の管理権を無視して、登山道の通行料、通行制限、通行禁止などの措置をとることはできない。

2. 登山界の現状と課題

しかし、日本では、管理者不在の登山道が多い。国立公園の公園計画に記載された歩道のうち、約5割が管理者不在である（令和4年度事業執行者不在登山道等における管理等現状把握業務報告書、環境省）。これは、国立公園の公園計画に記載された歩道に関する数字であって、国立公園の公園計画に記載されていない登山道や自然公園以外の山域の山の登山道は含まれていない。また、この数字は、公園計画記載の観光用の遊歩道を含んでいる（一般に、遊歩道は管理者が明確である）。これらの点を考えれば、全国の登山道のうち、管理者が定まっている登山道の割合はかなり低いと考えられる。

管理者不在の登山道が多い理由として、登山道の管理に費用がかかることと、登山道の管理者になれば事故が起きた場合に管理責任が生じる不安がある。

(2) ボランティアによる整備

管理者不在の登山道では、山小屋、地元の有志、山岳団体などがボランティアで整備することが多い。ボランティアで整備する場合には、整備する人の嗜好、資金、時間、従事者の数などが整備内容に反映しやすい。山小屋のない山域や人気のない登山道は、整備されず、放置される傾向がある。はしご、鎖、立派なロープ、使い古したクライミングロープ、安価な工事用ロープのいずれを設置するかは、資金の額と整備する人の好みに左右される。

かつて、登山界では、「登山道にはしごや鎖があっても信用するな」と言われていた。かつては、登山をする人は限られていたので、老朽化したはしごや鎖で問題が生じることはほとんどなかった。しかし、現在は、登山がレジャーとして大衆化し、登山をする人の階層が広がっており、真新しい鎖やはしごについて、「信用するな」と言うのは無理である。登山道に設置された工作物をメンテナンスするか、それができない工作物は撤去する必要がある。それをボ

ランティアで行う場合には、ボランティア活動を統括する登山道の管理者が必要である。

(3) 自然公園法の規制と登山道の管理

日本の有名な山岳の多くが自然公園内にあるので、自然公園法上の管理と登山道の管理の関係が問題になる。

自然公園法では、自然公園内に歩道を設置するには、公園計画で公園事業として定めなければならない（自然公園法2条5号）。公園計画は環境大臣や都道府県知事が決定する（同法9条22項、5項）。また、自然公園の特別保護地区、特別地域に工作物を新築するには、環境大臣や都道府県知事の許可が必要であり（同法20条3項1号、21条3項1号）、橋、鎖、はしご、柵、標識などを設置するにはこれらの許可が必要である。ただし、自然公園に指定される前から存在する登山道、山小屋、工作物はこれらの規制の対象とならない。古い橋、鎖、はしご、柵などは自然公園法上の許可を得ることなく設置されたものが少なくない。

しかし、自然公園法上の権限は登山道、橋、鎖、はしご、柵などの管理権を意味しない。自然公園の公園事業として公園計画で登山道を定めたとしても、それはあくまで計画であって国や自治体が登山道を管理することを意味しない。

日本の自然公園は地域制を採用しており、自然公園に公有地と私有地が含まれている。地域制公園は、土地所有権に関係なく地域を指定する公園をいう。これに対し、営造物公園は、土地所有権や使用权を前提にした公園をいい、アメリカの自然公園は営造物公園である。

国立公園の敷地のうち約4割は国有地ではない。自然公園であっても公有地でなければ、国や自治体などに土地の管理権がない。橋、鎖、はしご、柵などの設置を環境大臣や都道府県知事が許可した場合

でも、これらの工作物の管理権は工作物の所有者や設置者にあり、国や自治体にこれらの管理権が生じるわけではない。

(4) 登山道の規制

日本では、通行禁止、入山規制などの事故防止のための登山の規制が多いが、登山道の管理者ではない者が規制をしても、法的な拘束力がない。行政が行う規制の中に、行政指導としての規制が少なくないが、行政指導は行政が市民に対し行う指導、助言、アドバイスであり、法的な拘束力がない。ボランティアが行う規制も法的な効力がない。登山道の管理者が利用規則を定め、あるいは、条例で規制をすれば、法的拘束力がある。

3. 登山道の管理責任

登山道の管理者不在の原因のひとつに、登山道で事故が起きた場合の管理責任に対する不安がある。ここでの管理責任は、営造物責任と工作物責任がおもなものである。

営造物責任は、「公の営造物」（おおやけのえいぞうぶつ）の設置、管理の瑕疵がある場合に管理者が損害賠償責任を負うというものである（国家賠償法2条）。「公の営造物」は、国や自治体が所有または管理する設備をいう。

工作物責任は、土地の工作物に設置、管理の瑕疵がある場合に、工作物の占有者や所有者が損害賠償責任を負うというものである（民法717条）。ここでの「土地の工作物」は、土地に接着して築造された設備をいう。「土地の工作物」は、堤防、人為的に作られた穴、水溜まり、傾斜、盛り土なども含み（「不法行為」、幾代通、筑摩書房、158頁）、山を掘削して作った登山道は「土地の工作物」である。民法717条の「土地の工作物」の範囲は、日常用語の工作物よりも広い。

営造物責任の設置・管理の瑕疵と工作物責任の設置・保存の瑕疵は同じ意味であり、「通常有すべき安全性」を欠くことをいう。「通常有すべき安全性」は、その社会において相当とされる安全性を意味し、その内容は、多くの裁判例を見ることで明らかになる。「通常有すべき安全性」の内容は、社会や時代によって変わる。50年前と現在では、国民が期待する安全性のレベルが変わっており、「通常有すべき安全性」の内容は以前よりもそのレベルが高くなっている。法的責任は、社会を規律する社会的なシステムの一部であり、「通常有すべき安全性」の内容もそれに規律される。「通常有すべき安全性」の内容は、その社会で要求される安全性の水準に適ったものであることが求められる。

営造物責任は工作物責任の特則であり、公の営造物に当たらない場合には、工作物責任の適用が問題になる。竹木の栽植または支持に瑕疵がある場合にも、工作物責任の規定が適用される（民法717条2項）。木や竹が倒れて他人に損害を与えた場合などがその例である。

本稿では、営造物責任と工作物責任を合わせて管理責任と呼ぶ。一般論としては、国や自治体が管理している登山道、橋、はしご、鎖、柵、標識などは、「公の営造物」に該当する。また、これらは「土地の工作物」である。

しかし、これらを国や自治体が管理していなければ、「公の営造物」ではない。登山道、橋、はしご、鎖、柵、標識などは、それらの設置者、所有者が管理者であり、登山道の管理者が当然にこれらの管理者になるわけではない。所有者、管理者が不明の場合には、管理責任を問うことができない。

これまで、裁判で管理責任が問題になったのは、吊り橋、柵などであり、登山道の地形自体の管理責任が問題になったケースはない。自然の地形がもた

2. 登山界の現状と課題

らす危険性は、登山者が承認して利用すべきものであり、登山道の形状等に起因する転倒、転落、滑落、落石、落雷、崖崩れ、渡渉失敗などによる事故が起きている、登山道の管理者に責任は生じない。

4. 登山道等の管理責任に関する裁判例

(1) 西沢渓谷転落事故

1970年5月に西沢渓谷の歩道に設置された柵が折損して歩行者が転落し、死亡する事故が起きた。この歩道は、登山道を観光用に整備して一部を遊歩道にしたものであり、遊歩道としては危険箇所が多い。事故当時、この歩道を1年間に約15万人の観光客が訪れていた。歩行者が西沢渓谷の歩道から滝を見ようとして柵によりかかったところ、柵が折損して転落した。

裁判所は、「事故現場は柵がなくても通行可能であるが、柵が設置されていれば、それに歩行者がもたれかかることが予想できるので、柵に一定の強度が必要だった」と述べ、歩道の管理者である県の損害賠償責任を認めた（東京地裁昭和53年9月18日判決）。

(2) 大杉谷吊り橋崩落事故

1979年9月に大杉谷の登山道の吊り橋のワイヤーが切れて橋が崩落し、橋を渡っていた登山者1名が死亡し、1名が重症を負う事故が起きた。事故が起きた吊り橋（常倉吊り橋）は1962年に県が設置して管理していたが、経年劣化による橋の強度が低下しており、「一人づつゆすらないで静かに渡ってください」と記載した看板が設置されていた。しかし、事故当時、10名の登山者が橋を渡り、事故が起きた。大杉谷の歩道は、パンフレットなどで観光名所として紹介されているが、崖、鎖が多く、経験者向きの登山道である。

この事故について、裁判所は、この吊り橋が、「通

常有すべき安全性」を欠くとして、橋の管理者である県の損害賠償責任を認めた（神戸地方裁判所昭和58年12月20日判決）。

(3) 奥入瀬溪流落木事故

2003年8月に、奥入瀬溪流の歩道付近の休憩場所にブナの枯枝が落下し、観光客が重い後遺症を負う事故が起きた。奥入瀬溪流の歩道は、事故当時、年間約50万人の観光客が利用し、落木事故のあった場所は、ベンチなどが設置されていた。この歩道は観光用の遊歩道である。

裁判所は、事故現場は県が管理する歩道と一体の施設であり、「通常有すべき安全性」を欠くとして県の管理責任（損害賠償責任）を認めた。また、国は落木のあったブナの木の前管理者だったとして、国の管理責任も認めた（東京高裁平成19年1月17日判決）。

(4) 尾瀬落木事故

2006年10月に、尾瀬ヶ原の下田代十字路から尾瀬沼方面に向かう木道で、歩道付近のブナの木が枝が落下して登山者が死亡する事故が起きた。事故のあった場所は国有地であるが、木道は県が管理しており、国と県に対し、損害賠償請求の裁判が起こされた。

登山者に落下したブナの枝は、歩道から約6メートル離れた場所にあるブナの木の前であり、事故当時、風雨が強く、最大瞬間風速が毎秒10～18メートルであり、それが落木の原因だと考えられる。裁判所は、このような悪天候時には、事故の回避は歩道の利用者が行うべきであり、木道が「通常有すべき安全性」を欠くとは言えないとして管理責任を認めず、損害賠償責任を否定した（福島地裁会津若松支部平成21年3月23日判決）。

事故当時の尾瀬の歩道の利用者数は年間約34万人、事故現場の歩道の利用者数は年間数万人と推測され

る。事故の起きた木道は登山道に分類される。

(5) 尾白川溪谷歩道転落事故

2015年10月、旅行会社がバスツアー（参加者90名）を実施し、山梨県の尾白川溪谷の歩道を68名のツアー客が歩いた。69歳の女性のツアー客が歩道から転落して死亡し、旅行会社に対し、安全配慮義務違反を理由に損害賠償請求の裁判が起こされた。裁判所は、この歩道は一定の危険性のある登山道であり、旅行会社はその旨の説明を行っていたこと、このような危険性はトレッキングに内在することを理由に、損害賠償請求を棄却した（東京地裁令和元年7月31日判決）。

この裁判は歩道の管理責任を問題としたものではないが、危険性のある登山道で集団ハイキングを行ったことが事故に関係している。この歩道では、過去にも時々事故が起きており、山梨県北杜市作成の登山マップ（本稿に添付）では、登山道を5段階に分類した中で3番目のグレードの歩道として表示している。旅行会社主催の集団ハイキングは、消費者に、「安全、安心」のイメージをもたらしやすい。登山者の意識と登山道の形態の間にギャップが大きければ、事故が起きやすく、法的紛争になりやすい。

(6) 愛別岳滑落事故

2019年10月に、北海道の愛別岳（2,197m）の登山道で登山者が滑落して死亡する事故が起きた。事故が起きた場所は最大傾斜が約35度あり、凍結すれば滑落しやすい場所であり、そこは管理者不在の登山道だった。この登山道に入る分岐点には、愛別岳を示す設置者不明の標識が設置されていた。国立公園内の歩道を事故が起きないように管理し、登山道の分岐点にある標識を撤去、ないし、危険表示をすべきだったとして、国と北海道に対し、損害賠償請求の裁判が起こされた。

裁判所は、事故が起きた登山道は管理者不在であ

ること、標識が設置されていた分岐点は管理者がいるが、登山者は自分でルートやリスクを判断すべきであるとして、分岐点の標識のある登山道は「通常有すべき安全性」に欠けるものではないと判断した（札幌高裁令和6年2月27日判決）。

5. 歩道の形態別管理

(1) 登山道と遊歩道の区別

裁判例では、観光客が利用する遊歩道と登山道で裁判所の考え方が異なる。遊歩道での事故では、歩道の管理責任を認めた裁判例が多い。したがって、登山道と遊歩道を区別して管理することが必要である。この区別をしなければ、歩道の整備に限界がないので、登山道が遊歩道に近づき、完全に遊歩道化すれば、事故の管理責任が認められやすい。また、遊歩道との区別がなければ、事故を防止するために、登山道に際限なく工作物を設置する傾向が生じやすい。

しかし、日本では登山道と遊歩道の区別があいまいであることが多い。その原因として、観光政策として登山道の利用者を増やすことが重視され、そこでは、観光と登山の区別がない点があげられる。しかし、観光は安全であることが要請されるが、登山は自然の危険性を前提に行う活動である。遊歩道は安全であることが必要であるが、登山道には一定の危険性がある。この違いを意識して、歩道を設置、管理する必要がある。

(2) 登山道の形態の区別

さらに、登山道の形態を分類し、形態別に整備、管理する必要がある。それをしなければ、登山道を整備する指針に欠け、登山道に大量の工作物を設置する傾向が生じる。また、登山道の形態を区別することは、登山者がルートを選択する際の指標になり、事故防止に役立つ。

2. 登山界の現状と課題

歩道の形態

歩道の種類	整備の程度		危険性の程度	具体例
遊歩道	観光用の歩道		安全である	立山室堂、上高地、八ヶ岳の坪庭 阿蘇山の中岳付近の歩道
登山道	整備された道	初心者向き	危険性が低い	尾瀬、富士山、上高地～涸沢、北八ヶ岳、旭岳など
		経験者向き	計算可能な危険性	穂高岳、南八ヶ岳、妙高山、戸隠、剣岳別山尾根 大杉谷など
	熟練者向きの道		予測しにくい危険性	西穂高岳～奥穂高岳間、穂高岳大キレット 槍ヶ岳北鎌尾根、剣岳長次郎雪渓、妙義山縦走路など

(注) あくまで登山道の危険性の程度について述べている

登山道は、初心者向き、経験者向き、熟練者向きに分けることができる（さらに細かく分類することも可能である）。大雑把に言えば、登山道の危険個所に階段やはしごを設置すれば初心者向きの登山道になり、危険個所にはしごではなく鎖やロープを設置すれば、経験者向きの登山道になる。はしごも鎖も設置しなければ、アルピニズム的な熟練者向きの登山道やクライミングルートになりやすい。

登山道に橋、はしご、鎖、ロープなどを設置するには費用がかかり、そのメンテナンスの費用、労力、責任負担が生じる。登山道を、初心者向き、経験者向き、熟練者向きに分けて管理すれば、設置とメンテナンスの費用と負担を抑えることができる。スイスやニュージーランドなどでは、登山道を形態別に管理している。後記の山梨県北杜市作成の登山マップでは、登山道を5段階に分類して表示している。

登山道の管理者がいなければ、登山道の形態を区別して管理することができない。現在は、管理者不在の登山道をボランティアで整備するので、登山道に、ロープ、鎖、はしご、柵、標識を設置するかどうかは、ボランティアで整備する人の好みが反映しやすい。明治以降、登山者の多い登山道では、なし崩し的に登山道の人工物が増えてきた。槍ヶ岳では、明治の初期にウェストンが登った頃、明確な登山道はなく、アルピニズム的な熟練者向きの登山

ルートだった。その後、鎖が設置されて、経験者向きのコースになった。それでも鎖に不慣れな者が事故を起こすので、大量のはしごが設置され、現在は、山頂付近は、はしごを登降するコースになっている。これは初心者向きの整備である。戸隠山には長い鎖が多いが、これをすべてはしごに替えれば、はしごを登降する初心者向きのコースになる。登山道の形態別管理をせず、整備をなり行きにまかせれば、利用者の多い登山道は初心者向きの登山道になり、利用者の少ない登山道は、放置される結果、熟練者向きのルートになりやすい。

日本の登山道の特徴として、険しい地形や岩稜を誰でも登れるように鎖やはしごなどを設置して整備する点があげられる。その結果、誰でも山頂に達することができるが、岩稜や鎖場が苦手な人が事故を起こしやすい。

歩道の形態と整備の関係をまとめたものが上記の表である（表の具体例は、仮の分類である）。

(3) 登山道に設置された人工物の管理責任

これまで、登山道の地形的形状の管理責任が問題になったケースはない。登山道で起きた事故について管理責任が問題になるのは、登山道に人工物が設置されている場合である。

登山道に橋、階段、柵、落石防止ネット、鎖、はしご、ロープ、標識があることは、登山道の「通常

有すべき安全性」に含まれない。これらが欠けても、通常、登山道の管理責任は生じない。アメリカやカナダなどのバックカントリーにあるトレイルでは、橋や標識のないトレイルが珍しくない。橋のない登山道は、川を渡渉することが登山道の「通常有すべき安全性」の内容になる。登山道に標識がなければ、地図とコンパスを使ってルートファインディングをする形態の登山道になる。

しかし、登山道に橋、柵、落石防止ネット、鎖、はしご、ロープ、標識などの工作物を設置すれば、それらの管理責任が問題になる。従来、日本では、登山道の管理者があいまいな結果として、ボランティアで登山道に多くの工作物が設置されてきた。それらのメンテナンスがなされる場合もあれば、されない場合もある。低山では、多くの老朽化したロープが放置されている。

登山道に設置された堅固な橋は安全性が要求され、橋の欠陥により事故が起これば管理責任が生じやすい。管理責任が生じるのは、登山道の管理者ではなく、橋の管理者である。

標識については、登山者は、地図、コンパスなどでルートファインディングすべきなので、標識に欠陥があっても、事故との法的な因果関係が認められる場合はほとんどないだろう。

柵は、本来、登山道に必要なものではないが、登山道に展望台を作り、その周囲の転落防止用の柵が折損して事故が起これば、管理責任が生じる可能性がある。

真新しいはしごや鎖が崩壊して事故が起きた場合には、管理責任が生じる可能性がある。これは、登山道の管理者ではなく、工作物の設置者、管理者が責任を負う。登山道の管理者ではない者がボランティアで鎖やはしごを設置する場合でも、事務管理に基づいて、「すぐに崩壊するような鎖やはしごを設置し

てはならない」などの注意義務を負う（民法701条）。

老朽化した鎖、はしご、ロープについては、登山者は老朽化した鎖、はしご、ロープの危険性を承認すべき面があるので、管理責任が生じないことが多いだろう（設置者、管理者不明の場合が多い）。登山道の管理者は、当然には、古い既存の鎖、はしご、ロープの管理者にならない。登山道の管理者が既存の古い工作物の管理を開始すれば、以後、管理責任を負う。登山道の管理者が鎖、はしご、ロープを設置すれば、それらの管理責任を負う。

登山道に設置する鎖、はしご、ロープなどは、それ自体が自然環境を損なうので、登山道の形態に応じて、必要最小限にとどめるべきである。登山道の工作物の量が増えれば、メンテナンスの負担が増える。

登山道の工作物のメンテナンスは、登山道の管理者が山岳団体などに委託することが現実的だろう。

6. 今後の展望

登山道の管理者を定めることは、山の土地所有者、自治体、国、山岳団体などが協議をすれば、可能である。登山道と遊歩道の区別、登山道の形態別管理もそれほど難しいことではない。欧米の山岳先進国では、これを行っている。

問題は、これまで登山に関する政策を国や自治体の重要な施策として位置づけてこなかった点にある。従来、日本では、登山は観光の一部として地域振興政策に含まれ、登山独自の政策がなかった。行政の関心は、もっぱらいかにして登山者を増やすかという点に向けられてきた。山頂に立派な展望台を設置するのは、観光の考え方である。

また、従来、登山道の整備に関して、環境保護の観点は必ずしも重視されなかった。日本では、もっぱら事故防止の観点から、登山道に、鎖、はしご、

2. 登山界の現状と課題

ロープ、階段、柵、落石防止ネットなどが設置されてきた。しかし、これらの工作物は、それ自体が自然環境を損なう。登山道の整備では、自然環境への配慮と、メンテナンスの負担を考慮して工作物の設置を最小限にとどめる必要がある。

登山や登山道の管理では、地域振興や事故防止とは別に、環境保護や国民の幸福追求の実現という観点が必要である。登山道は、国民の幸福追求の活動としての登山に不可欠な設備である。スポーツ基本

法24条は、国や地方公共団体に、ハイキングその他の野外活動に関して必要な施策に努めることを規定しており、国や地方公共団体は登山道の適切な管理をする責務がある。

近年、登山道法制定の動きがあるが、地域振興だけでなく、国民の幸福追求の実現の手段としての登山道の維持、管理という観点が必要である。

参考文献

- クライマーズ・ブック刊行会（2016）ウェストンが残したクライマーズ・ブック、信濃毎日新聞
ウォルター・ウェストン（1995）日本アルプス登攀記、平凡社
篠塚明次（1974）土地所有権と現代、日本放送出版協会
渡辺尚志外（2002）土地所有史、山川出版社
環境省（2022）令和4年度事業執行者不在登山道等における管理等現状把握業務報告書
登山道法研究会（2022）これでいいのか登山道、山と溪谷社
登山道法研究会（2023）めざそう、みんなの「山の道」
クルト・ラウバー（2015）マッターホルン最前線、東京新聞
金原富士子（2009）ヨーロッパアルプス 登山・ハイキング、本の泉社
畠山武道（2006）自然保護法講義（第2版）、北海道大学出版会
加藤峰夫（2008）国立公園の法と制度、古今書院
寶金敏明（2009）里道・水路・海浜（4訂版）、ぎょうせい
幾代通（1977）不法行為、筑摩書房
加藤則芳（2000）日本の国立公園、平凡社新書
中島慶二 外（2023）アウトドア六法、山と溪谷社
溝手康史（2018）登山者のための法律入門、山と溪谷社
溝手康史（2022）ボランティア活動の責任、共栄書房
溝手康史（2024）登山道を誰が管理するのか、デザインエッグ
溝手康史（2024）山岳事故の法的責任（新版）、デザインエッグ
溝手康史（2025）登山道の法律Q&A、デザインエッグ

減災の視点から見た、登山の技術・知識を普及する意義

田 淵 幹 敏（株式会社 ナチュラルスタイル 事業部長／山徨社 代表）

○ 始めに

日本は国土の約7割が山岳地域であり、山は、食料・燃料・資材等の供給源として、そして信仰の対象としても、古くから私達の暮らしと密接に関わってきた。

古来より人々は生活の為に山に入り、その長い歴史の中で、山中で安全・快適に暮らす為の知識や技術もまた蓄積されてきたのである。

近代登山に於いては、守り伝えられてきた伝統的な知見に新しい科学技術や理論が加わり、道具もまた飛躍的な発展を遂げ、登山者の安全や快適さに大きく貢献している。

これらの知識や技術・道具は、登山以外の多くの分野にも活かす事が出来るものだ。

例えば登山と健康の関係については、鹿屋体育大学の山本正嘉名誉教授が「登山と身体の科学 運動生理学から見た合理的な登山術（<https://www.kodansha.co.jp/book/products/0000392957>）」に於いて、その効果を丁寧に説明されている。

また、京都先端科学大学の満石寿教授と共に発表させて戴いた「Effects of Adjusting Backpack Shoulder Stabilizers on Psychological Responses and Autonomic Nerve Activity in Hiking (DOI: <https://doi.org/10.4236/health.2025.171001>)」では、予備的研究ながら、登山に於けるザックのフィッティングノウハウが上半身の主観的負担や副交感神経活動に有意なプラスの効果がある事が示唆

された。

この結果は、例えば子供達のランドセルやご年配の方のバックの設計・フィッティングに、登山の知見が活かせる可能性を示している。

この様に登山の知見には、登山以外の分野に於いても非常に有効なものが多くあるが、それらを他分野へ伝え活用しようと言う試みは、あまり積極的には行われていない様に思う。

Nature Positiveが国際的にも重要な指標とされる昨今、アウトドアアクティビティである登山の知見を活用する事は、その直接的な効果は勿論、転用先の分野に於ける副次的な価値も提供出来る可能性がある。

また同時に、登山及び登山のフィールドである山岳地域の価値を再提示する効果もあると考える。

私は、

- ① 地域創生・地域活性化
- ② 防災・減災
- ③ 健康寿命の延伸と余暇の充実
- ④ ユニバーサル社会の実現
- ⑤ 教育

の5つを主なドメインとして、アウトドアアクティビティの知見を活用する取り組みを行っているが、本稿では特に「減災」の分野について、登山の技術・知識を普及する意義と効果を示したい。

○ 本稿の要旨

本稿では、第一に「登山の知識と技術が減災に有効である根拠」を説明する。

第二に、災害対策の啓蒙や訓練として実装する際のポイントについて、ごく簡単に触れる。

第三に、「登山の知識と技術を減災に取り入れる効果」を提示する。

○ 登山の知識や技術が減災に有効である根拠

登山の知識や技術が被災時に活用出来ると言う事は、殆どの人が正しいと感じていると思う。

だが、感じてはいても積極的に普及する事が出来なくては、その価値・効果は薄れてしまう。

災害対策に関わる啓蒙や訓練は、多くの場合「行政・自治会・学校」等の公共的・公益的な機関や、企業等が主導する事になる。

この様な機関や企業が主導する場合、その内容に一定程度の根拠が無くては、積極的な導入は難しいのが一般的だ。

そこで先ずは、登山の知識や技術が減災に有効である理由について考えてみたい。

登山に於ける安全管理と減災は、遭難や被災と言

うリスクに予め備え、万が一の遭難時や被災時にはそれを乗り越える、と言う2点に於いて一致している。

どちらも、起こる前から備え、起こった際には乗り越えなくてはならない。

この「備え段階」と「発生段階」のそれぞれに於いて、登山環境と災害は多くの「共通点」を有しているのだ。

それ故に、必要とされる「対策・準備」「心構え・考え方」「対応方法」「耐性」「道具」等も通底する。

これが、登山の知識や技術が減災に有効である最も大きな理由だ。

詳しく見ていこう。

図①は「備え段階」の災害と登山事故について、「発生確率」「発生時期」「被害程度」の3点で比較したものだ。

○ 体感的な発生確率が低く、実感を持ち難い。

○ いつ起こるかも、必ず起こるかも分からない。

○ それなのに、被害はとても大きい。

これらの共通する顕著な特徴が故に、両者に有効な対策や考え方も驚く程に共通する事が分かると思

【図①】登山に於ける事故と災害 — 備え段階での共通点

災 害		登山に於ける事故	
低? 発生確率 不明 発生時期 甚大 被害程度	現実味が少なく、自分が被災者になる事を実感し難い	体感的な確率が低く、自分が遭難する事を実感し難い	
	短中期的にはいつ発生するかは分からない 存命中に 必ず起こるかどうかが不明	いつ起こるかは分からない、 必ず起こるかどうかが不明	
	○ 大怪我 もしくは 致命傷 ○ 衣食住への影響・通常の生活も困難 ○ 金銭的・精神的な負担が大きい	○ 大怪我 もしくは 致命傷 ○ 社会的な非難・仕事や学業への影響 ○ 金銭的・精神的な負担が大きい	
対策・準備		定期的なトレーニング (避難訓練・避難計画・意識統一・他) 一定の経験 (避難訓練・シミュレーション・ボランティア・他) 心構えと、避難道具を準備し使いこなせる事が重要	
心構え・考え方		日常的なトレーニング (体力・知識・技術・他) 一定の経験 (登山やキャンプの経験) 心構えと、良い道具を備え使いこなせる事が重要	
		① 疑わしいときは行動せよ。 ② 最悪事態を想定して行動せよ。 ③ 空振りは許されるが見逃しは許されない。	
		○ リスクを予想 ⇒ 確率を検討 ⇒ 早めの対応 ○ 常に最悪の状況を想定して、準備と決断をする ○ リスクの見落としが致命的になる、備え過ぎて丁度良い	

2. 登山界の現状と課題

う。

防災分野で広く知られる「プロアクティブの原則」は、“先回りして自ら行動する（pro-active）”と言った意味だが、登山で必要な考え方と全く同じと言っても過言では無い。

日常的な訓練や心構え・経験が重要である事、道具の準備が必須である事、そして想像力が大切になる事も共通する。

では「発生段階」ではどうだろうか？
まずは外的な要因から考えてみたい。

図②を見て欲しい。

現在進行形で地震や洪水などの災害が起こっていると言う点は当然異なるが、災害により引き起こされる生活環境にフォーカスすると、ライフライン・公共交通・通信インフラ・衣食住の全てに於いて被災環境と登山環境には高い共通性がある事が分かる。

被災時に近い生活環境がそもそものアクティビティフィールドであると言う事は、当たり前だがその環境に適応する為の耐性やノウハウを、程度の差こそあれ多くの登山者は既に有している事になる。

内的な要因に対してはどうだろうか？

外的環境の変化や他者との距離感の変化、プライバシーの低下を含むデリケートな問題への対処など、被災時には多くの内的なストレスに晒される。

図③は、精神的な耐性及び運動能力や筋力以外の要素も含む身体的な強さが、両者でどの様に異なるかをトイレ問題の例と共に示している。

環境に慣れていると言う事が、精神的・身体的な健康に大きな影響を及ぼすのだ。

例えば、時々起こるトイレトペーパーの買い占めを例に考えてみよう。

とても多くの人々が、大きな労力をかけてお店の棚が空になる程の買い占めを行うのは、その人にとって柔らかに綺麗な紙でお尻を拭けないと言う事が、それだけ大きなストレスになるからだ。

だがもし、ちゃんと選べば葉っぱでもそれなりに快適に拭けると言う事を、経験として知っていたらどうだろうか？

勿論、それでも紙の方が良いと言う人が多いだろうが、少なくとも体調を蝕む程のストレスにはならない可能性は高まるだろう。

【図②】登山環境と被災環境及び対応能力－発生段階での共通点1（外的要因）

	被災環境と一般的な被災者の対応	登山環境と登山者の対応
ライフライン	電気・ガス・水道などが止まり復旧迄に長い時間を要する 配給や支援が頼みの綱、物資の不足で困る人が増える	そもそもライフラインが無い ソーラーパネル・バーナーとガスボンベ・浄水器などを使用する知見・経験を有する
公共交通	大量の帰宅困難者や、疲労・熱中症・低体温症による体調不良者が発生 持出し袋などの準備が無い場合も多い	そもそも公共交通が無い 自分の足で全ての荷物を運ぶ事に対する、経験と耐性と技術がある
通信	電話・インターネット等の通信網が繋がらなくなる 情報や判断の基準が失われ、判断・行動の能力が著しく低下 冷静でなくなる・不安やパニックになる・攻撃的になる	そもそもデジタル通信が使用出来ない 5感から情報を得て判断する事が、実は普段から多い 人によってはデジタル簡易無線やアマチュア無線を持っている
衣食住	衣食住の多くもしくは全てが失われる 生活環境の悪化やストレスで精神的・身体的な不調が生じる TKBの影響が大きい災害関連死は、直接死亡者の数倍になる	普段からザックの中身と今着ている物が衣食住の全て 被災初期を乗り越えた場合には、一定の生存能力を発揮

【図③】登山環境と被災環境及び対応能力－発生段階での共通点2（内的要因）

	被災環境と一般的な被災者の対応	登山環境と登山者の対応
デリケート プロブレム	「劣悪なトイレ環境」⇒「排泄回数減少」⇒「水分摂取を控える」 ⇒「脱水症状」⇒「口腔内細菌増加」⇒「誤嚥性肺炎」 の様な災害関連死が発生	いわゆる野糞・野ションは「雄撃ち（男性）」「お花摘み（女性）」と呼ばれ、 経験豊富な登山者であれば、男女を問わず一定の耐性がある
精神的 健康	低 非文明や逆境への耐性・困難を乗り越えるマインド・暑さ寒さ暗さへの慣れ・生活環境の変化への耐性・ストレス耐性 等	高
身体的 健康	低 脚力を中心とした全身筋力・心肺能力・持久力・暑さ寒さへの適応力・環境の変化への適応力・粗食への慣れ 等	高

避難所のトイレが汚く、排泄延いては水分摂取を我慢してしまう人も多い。

こちらも、図③に示した雄撃ち・お花摘みに慣れていたらどうだろう？

喜んで受け入れると迄はいかなくても、「適切な処理の仕方」も知っているし、いざとなったら外でする方が気持ち良いか！」くらいの気楽さで受け止める事が出来れば、心身の健康への影響は小さくて済む。

葉っぱでお尻を拭く等は冗談交じりの例と感じら

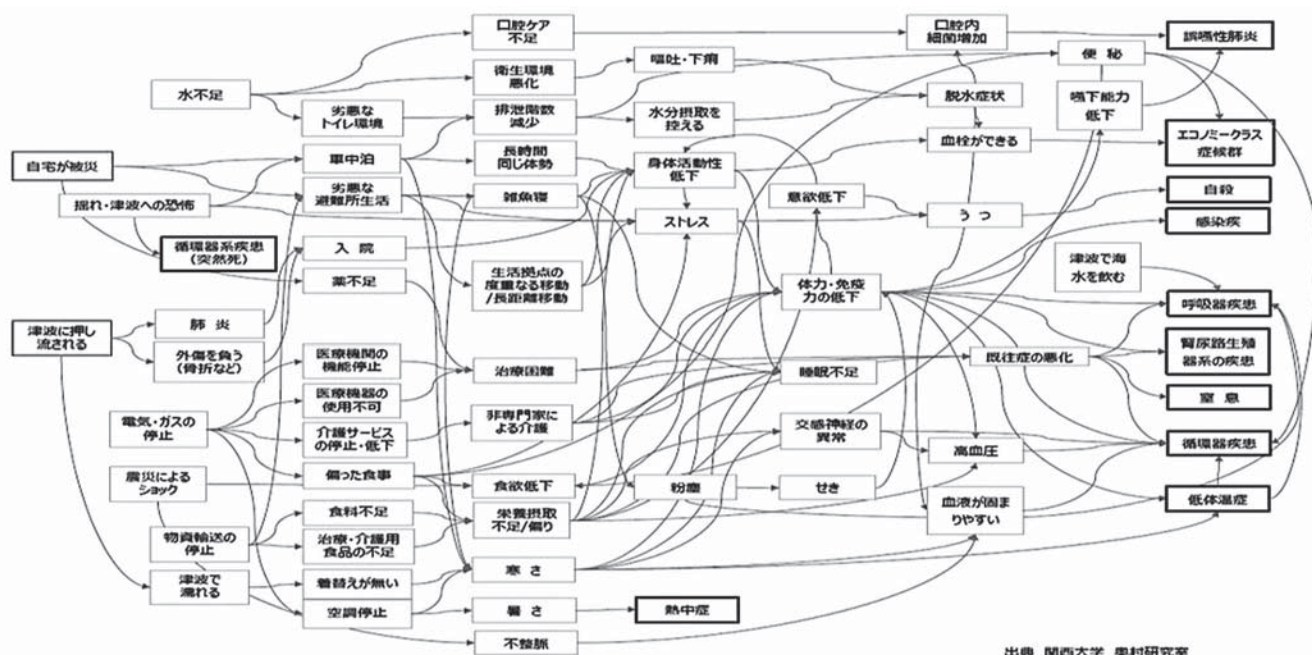
れるかもしれないが、実はこの視座は非常に重要だ。

熊本地震では災害関連死が直接死の4倍強にもなり死者の8割に上っているし、能登半島地震でも直接死の凡そ2倍の方が災害関連死で亡くなった事が分かっている。

図④は、災害関連死 研究の第一人者である関西大学の奥村教授が作成された連関図で、その原因の複雑さ繊細さがよく分かる。

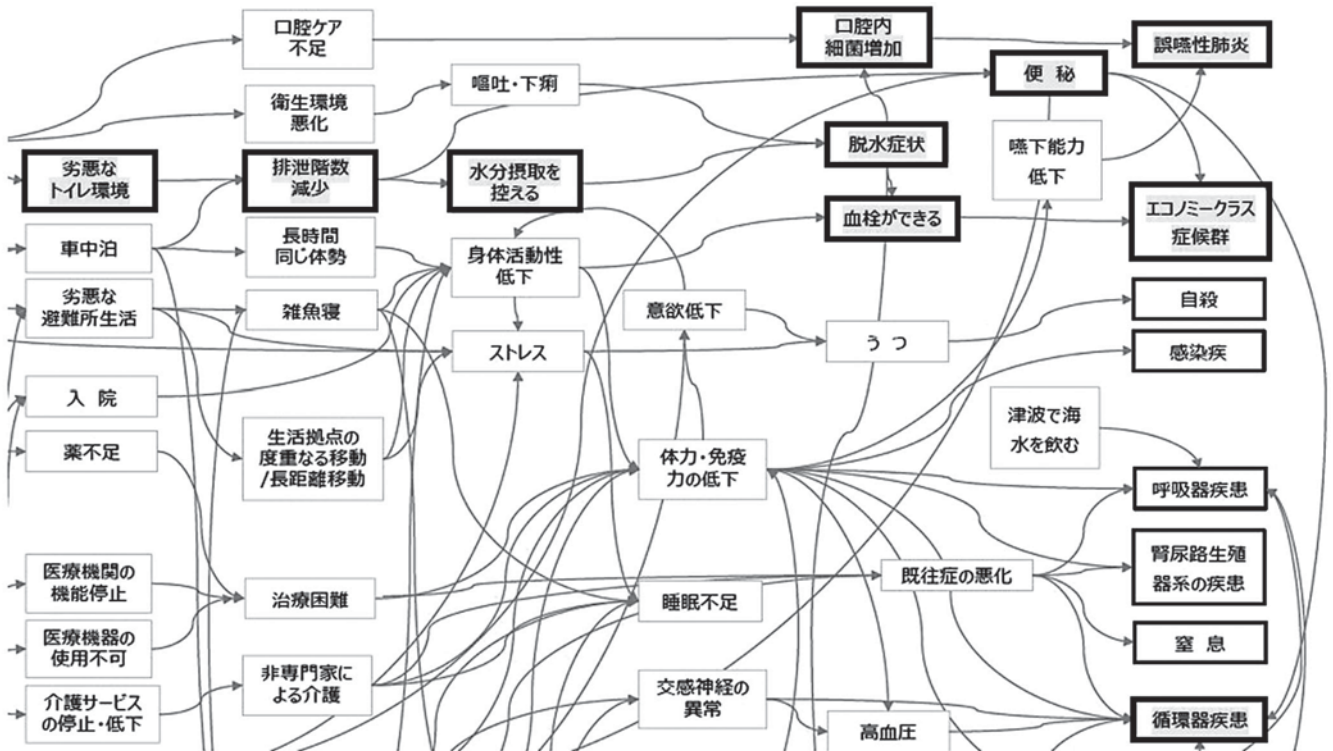
本稿で特に注目して欲しい連関は下記の3つだ。

【図④】災害関連死連関図（出典：関西大学社会安全学部 奥村与志弘 教授）

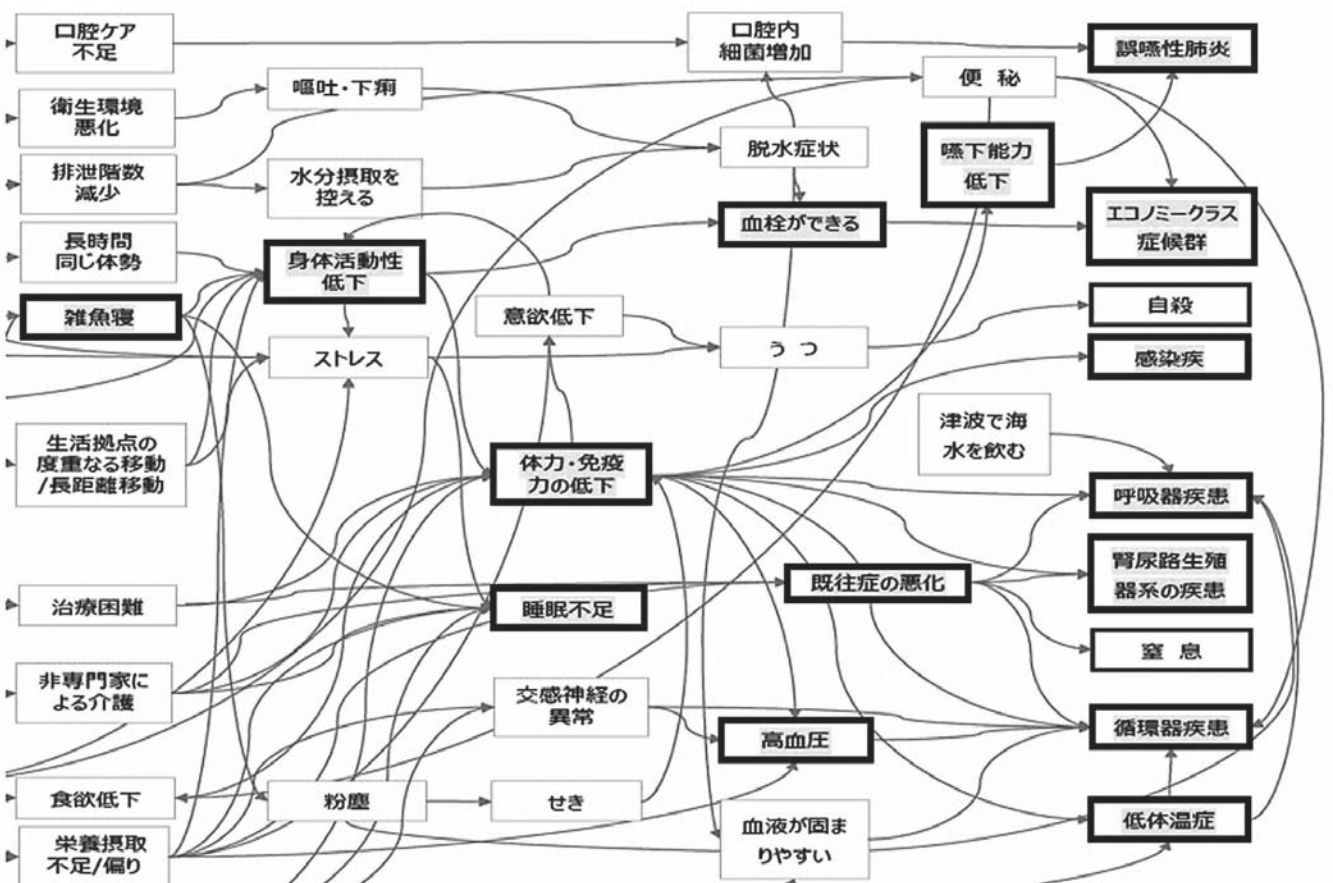


2. 登山界の現状と課題

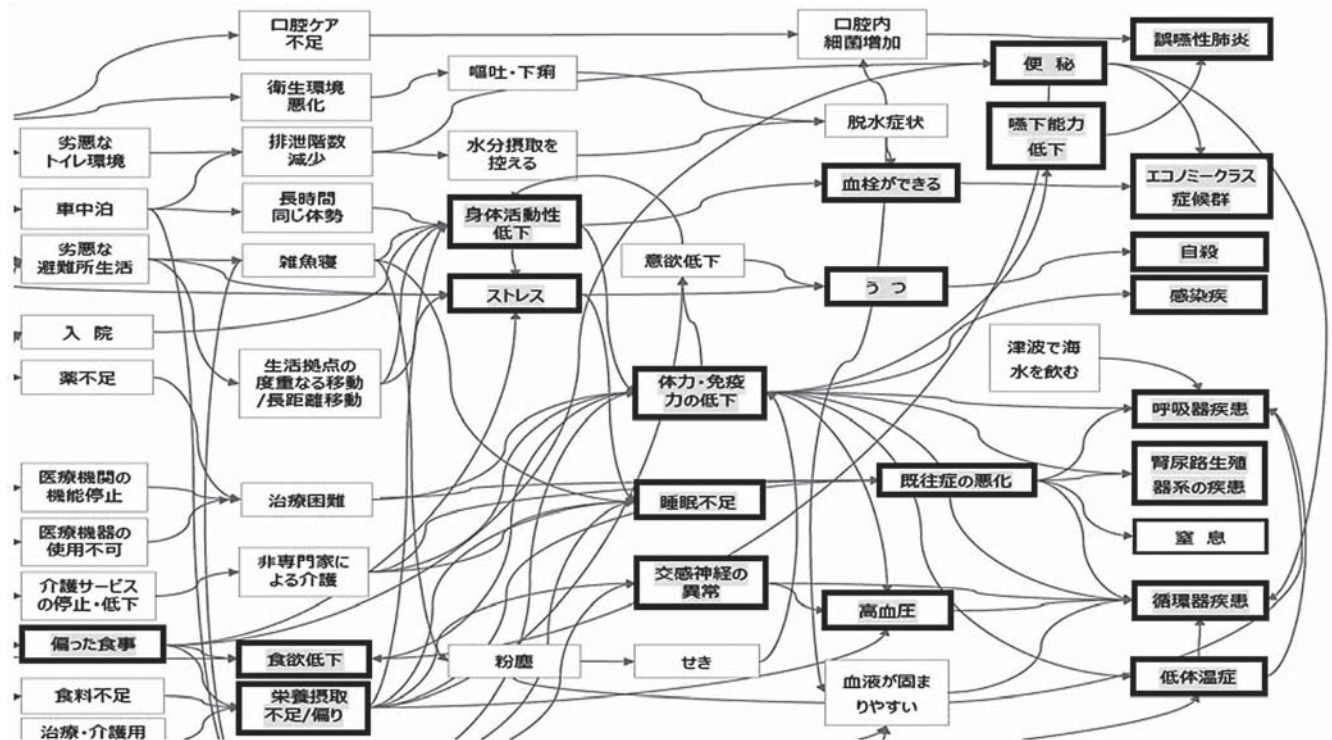
【図④-2】本稿で特に注目する連関－トイレ起因



【図④-3】本稿で特に注目する連関－プライバシー起因



【図④-4】本稿で特に注目する連関－食事起因



「トイレ環境の悪化」や「雑魚寝等によるプライバシーの低下」は、被災者にとって大きなストレスとなり、結果として多くの疾病の原因となっている事が分かる。

また「味の多様性不足も含めた偏った食事」も、栄養不足や食欲の低下を招き、同様に多くの疾病の原因となっている。

日常とは違う不便なトイレ環境や、自宅やホテルの様に十分なプライバシーが確保されない環境下での生活に対して、精神的な耐性と、不便さを最小限にとどめる為の対処法と道具を持っておく事。

これらは長期間に渡ってストレスに晒される被災時には、現実生命を左右する事が分かる。

そして、被災時に近い環境がそもそものアクティビティフィールドである登山は、これらを身に付ける為の体系を有している。

食に於いても、登山では定番のフリーズドライは、昇華乾燥による栄養低下の少ない保存食として知られており味のバリエーションも豊富だ。

登山者には一般的になった「携帯型浄水器」との組み合わせにより、有効な災害備蓄食となり得る。

また、好日山荘で取り扱われる様になり登山者への認知が高まりつつある「ベジート (<https://www.vegheet.jp/>)」の様な、食物繊維が摂取出来る保存食を知っておく事も、有効な対策となるだろう。

研修時などによく、「あなたはアウトドアアクティビティに長けているから、大きな地震がきても生き延びられますね！」と言われる事がある。

だが、災害の直接死を免れる事が出来るかは、その時にいる場所や運の要素が非常に大きい。

どんなにサバイバル能力に長けていても、屈強なフィジカルを有していても、巨大なビルが倒れてきたら避ける事は難しいのが現実だ。

2. 登山界の現状と課題

しかし、災害関連死に関しては大きな違いが生じる。

知識や技術として耐性と対処法を身に付け、それを根拠に「発災直後を生き延びれば、その後は何とか出来る筈！」と言う精神的な強さ・前向きさを持てるかどうかはとても重要だ。

そして災害関連死は、現実には直接死の2～3倍にも上る事が分かっている。

○ 災害対策の啓蒙や訓練として実装する際のポイント

ここまで登山の知識や技術が減災に有効である根拠について説明してきたが、実際にこれを災害対策の啓蒙や訓練に取り入れるに際しては、「では皆さん登山をして下さい！」と言う訳にはいかない。

参加者の参加ハードルが低く楽しいと感じて貰える「体験型のコンテンツ」として、実装する事が必要になる。

例えば、

- 火熾し
- 屋外での調理
- 浄水器を活用した濾過
- LIFE BEACONなどの活用
- ツェルトやテントの設営
- ロープワーク
- 疲れずに歩く技術
- ギアの紹介

等を、大人向け・子供向け・親子向けなどにアレンジしてコンテンツを造成する。

入口としてアウトドアアクティビティに興味を持って貰い、楽しさを知って貰う事がとても大切になる。

この時に重要なのは、「楽しさを兼ねながらも実効力を伴うコンテンツ」とする事だ。

但し、必ずしもそのコンテンツの内容自体が、直接的に災害対策に有効である必要は無い。

コンテンツを通して得る事が出来るマインドも、非常に重要な目的だからだ。

もう一点、「登山と言うアクティビティが有する専門性に、興味を持って貰える」コンテンツとする工夫も大切な要素になる。

技術が伝えられてきた背景や、簡素化・平易化された実効力の低い技術との違い等を、手を抜かずに伝える事で登山の普及にも繋がるコンテンツとなる。

○ 登山の知識と技術を減災に取り入れる効果

では、この様なコンテンツを通して減災を学ぶ事のメリットは何だろうか？

通常の防災訓練や一般的な災害対策の啓蒙と比べて、どの様なアドバンテージがあるのだろうか？

先ず言える事は、「楽しい」と言う事だろう。

下図⑤の様な特徴は、「興味」を持ちやすくし、「参加したい」と思い易くなる。

災害レジリエンスは、個人・家庭・地域・組織等、あらゆる層に於いて必須のものだ。

だがその印象はどうしても義務的になり、必要性和想いがリンクし難い。

【図⑤】参加のし易さや楽しみ易さに於ける利点

防災・減災の取組みは…

⇒ 問題意識の高い皆さん以外に、広く興味を持って貰い難い事が課題



アウトドア アクティビティを取り入れる事で次の様な効果が期待出来る

- ① 被災時だけではなく、日常でも活かせる知識・技術の修得が可能！
- ② 一人は勿論、家族・親子・カップル・友人など、皆で楽しめる！
- ③ 防災・減災への効果に関わらず、それ自体が楽しい！
- ④ 非日常的な体験や、見た事の無い景色を見る事が出来る！
- ⑤ 自然の中での活動なので、爽やかで気持ちが良い！

登山と言うアウトドアアクティビティの要素を加える事で、この印象が一変する。

これは、参加者だけでなく主催側にとっても大きなメリットになる。

次に実効性の高さが挙げられる。

下図⑥は一般に「命の要素」として知られるものだが、登山はこれらの全てに対して生命維持のノウハウを有している数少ないアクティビティと言える。

呼吸については高所登山や強風対策など限定的な知見であり、火災への対応ノウハウを持たない点は考慮が必要だが、その他の3点については災害対策として非常に有効な知見を有している。

下図⑦に示す通り、道具が充実している事も、アドバンテージになる。

登山と減災分野の道具は、用途としては共通する物がとても多いが、その利便性や機能性には大きな

差がある。

先ず入手のし易さだが、ごく一般的な防災グッズを除き防災用品はカタログ販売やEC（Electronic Commerce）のみで現物が見られない事が多く、販売店も限られる。

性能面では、登山用品はより軽量である事が多い。

防災用品は避難所での利用や企業・行政による備蓄資機材を想定している事が多いのに対し、登山用品は個人による携帯を想定している為だ。

この軽量性が、スペースや重量に制限のある一般家庭での導入を検討する際に、大きなアドバンテージとなる。

当然持出し易いし、車に積んでおくなどの対応も容易になる。

例外もあるが、登山用品の方が機能性・快適性も高い事が多いだろう。

あくまで被災時を乗り越える危急用品と、過酷な

環境下で十分な機能と快適性が重視される登山用品の違いが反映されている。

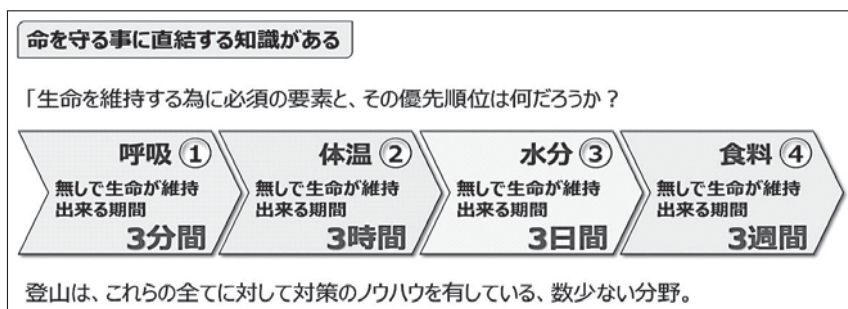
直接的な影響は少ないが、お洒落である事もアドバンテージになるだろう。

近年の登山用品はデザイン性が高く、カラーバリエーション等も増えてきているので、「使いたい！」と思える商品を選択できる事も大きな魅力になる。

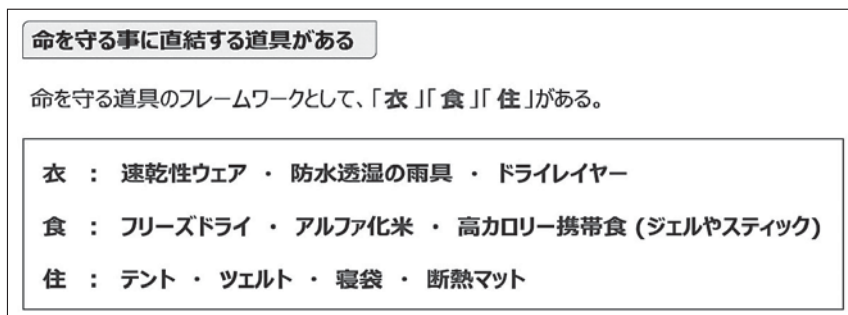
これらの特徴は、フェーズフリー（Phase Free）にも繋がる。

非常時だけしか使わない道具は、

【図⑥】実効に於ける利点 - 1



【図⑦】実効に於ける利点 - 2



2. 登山界の現状と課題

【図⑧】実効に於ける利点 - 3

肉体的だけでなく、精神的な“強さ・しなやかさ”が育まれる

予測やコントロールが効かない自然を相手にする為、

環境や逆境に対する耐性が自然に身に付いていく傾向が強い。

また、置かれた状況を自身の力で乗り越えようというマインドセット（思考・行動）
を持つ傾向が強くなる。

有効に使いこなせない・壊れていた・電池が無かった等の問題が起こり得るし、コストパフォーマンスも悪くなる。

日常的にも使える道具を採用する事でこれらのリスクを低下させると同時に、「普段も使っている道具が使える」事で被災時のQOL（Quality of Life）を高めストレスを低減させる効果も見込まれる。

副次的には、登山業界の活性化延いてはフィールドである山岳地域の保全や商品の改良などの効果も期待出来るだろう。

最後に、精神的な強さ・マインドセットへの影響について言及しておきたい。

キルケゴールは「絶望は死に至る病」と言ったが、被災時に於いても当にそうだろう。

出来る事が無いと言う無力感・諦めは、希望を失わせ前向きな気持ちを奪う。

精神的な疲弊は、やがて身体にも及ぶ。

上図⑧に示した様に、逆境に対する耐性を高め、創意工夫・試行錯誤し、自身の力で乗り越えようと言う「心のあり方」が楽しみながら身に付き易いと言う登山の特徴は、災害レジリエンスを高める上で非常に重要なアドバンテージであると考ええる。

○ 終わりに

ここまで述べてきた通り、登山の知識・技術には、被災時に於いて実効性が高く安全や健康に直結するものが多い。

ただ、知識や技術と同様もしくはそれ以上に大切な事は、自然の中で

の活動を通して「生きる力を身に付ける」と言う事ではないだろうか。

知識や技術だけではなく、「慎重さと楽観が同居する」「しなやかな心の強さ」を身に付ける事。

ライフラインが止まった劣悪な環境下でも、「自分には出来る事がある！」「前を向いて工夫しよう！」

「辛さを嘆くより、誰かを助けたい！」と思える“命の強さ”を育む事が、私達自身と家族や友人を助ける事になると信じている。

本稿が、登山が内包する技術・知識そして心の力を、楽しみながら減災に活用する一助となれば望外の喜びである。

障害者の登山に関する課題と展望

池 谷 航 介 (国立大学法人岡山大学学術研究院共通教育・グローバル領域准教授)
(岡山大学ユネスコチェア・副チェア)

1. 障害者の登山に関する問題

(1) 根源的な問い

国連（2015）で採択されたSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）のもと、「誰ひとり取り残さない／No one will be left behind」というスローガンは、日本でもコンセンサスが浸透してきている。人種や思想、障害の有無等といったことに関わらず、全ての人に対して様々な参加を保障するという理念自体に異論を述べる者は少ないだろう。

しかしながら、全てのアウトドア活動において、「誰ひとり取り残さない」参加が保障できるかというと、どうだろうか。

特に登山等、通常の参加でも多かれ少なかれ危険を伴う行程があるものについては、そもそも想定範囲を超えているという意見が大勢を占めるのではないかと考える。例えば歩行困難がある場合の代替方法として、予算に糸目を付けず現代的なテクノロジーを駆使すれば、もしくはサポート人員を必要なだけ配置すれば、コースを周遊して目的の地点へ近づけるかもしれない。けれども、真の価値は、急峻な岩稜、激流の渓谷、深い海洋、様々な困難さを自身の体力や技術で乗り越えるプロセスと切り離すことはできず、それがアウトドア活動に勤しむ人々を惹きつけて止まない本質であるといっても過言ではない。当然ではあるが、行程が極地になればなるほど弛まぬ体力づくりと技術の研鑽が基礎要件として求められ、心身に何らかの障害がある場合は大きな障壁となってしまう。つまり、ヘリコプターやモビ

リティを使うなり、大規模なチーム編成を行ってサポートを得るなり、VR映像に没入するなりといった方法で行程中の景観等にアクセスすることができたとしても、プロセスから得られる価値の享受が困難なことは自明であるといえる。それゆえ、多くのアウトドア活動において、暗黙に基礎要件をクリア可能な心身の状態にある者のみが参加対象の想定内であり、排除的な条件がわざわざ明記されておらずとも、その状態にない者が長らく「蚊帳の外」であったことは否めない。もちろん、日本においてもいくつかの障害当事者等による挑戦は散見されてきた。詳しくは2章で後述するが、学術論文に限定してもいくつもの取組に当たることができるし、その他の文献や記事、あるいは記録にない実践も含めると、さらに多くの挑戦があったことと推察される。しかしながら、アウトドア活動において多様性の包摂が着々と進んできたわけではなかった。この理由は、チームの編成、特殊な機材の用立て、それに伴う必要な予算といったことが条件化してしまうためであると考えている。障害者の登山史において挑戦に踏み出した個々人の努力には敬服するし、自己あるいはチーム内で得られたものも相応の価値を生起したと思料するが、「蚊帳の外」であった人々に「近々始めてみよう」という現実感を提供するものであったかという点、その限りではなかっただろう。

少し機運が変節してきたのは2010年代以降ということになる。特に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が成立した2013年から、2024年の一部改正施行に至る期間において、「日常生活や

2. 登山界の現状と課題

社会生活における障害者の活動を制限し、社会への参加を制約している社会的障壁を取り除くことが重要である」(内閣府、2023)という参加機会の均等が法令として示されたことが大きかったといえる。

アウトドア活動に限らず、全ての社会参加において(入門者がいきなり上級コースに立ち入ることはないにせよ)希望者には等しく門戸は開かれている。「できないのではないか」、「前例がない」といった予断を排しつつ、障害ゆえに入門すら制限される状況があるならば是正する必要があるだろう。直ちに高山の頂に至ることができるかということではなく、どのように入門を保障していくのか、また、真に全ての人が山々や自然の素晴らしさを享受できるようにするにはどのような方略が必要かについて、以下に述べる課題を踏まえつつ論考したい。

(2) 自然地域におけるユニバーサルツーリズム推進に関する課題

国連によって「誰もが参加できる観光」の促進が提唱されたのは1999年に遡る。同年に採択された世界観光倫理憲章(1999)では、環境や文化遺産への影響を軽減しつつ観光産業の発展を目指すための規範が示されることとなった。特にユニバーサルツーリズムに関しては「多様性に対する寛容と尊敬の態度」(1条)、「子供、高齢者、体の不自由な方々、少数民族、及び先住民族に関する人権については、特に促進すべき」(2条)、「家族、青少年、学生、高齢者による観光と体が不自由な方のための観光は、奨励され、円滑化が図られるべき」(7条)、「過剰な手続きや差別を受けることなく、観光と文化的な場所へ訪問できるべき」(8条)等、複数の条項において言及が見られる。2007年には国連機関を中心としたグローバル・サステナブル・ツーリズム協議会が発足し、憲章の理念をより具体化する意味で「持

続可能な観光の国際基準(GSTC-D)」が制定される。日本ではこの国際基準に準拠すべく、観光庁・国連世界観光機関駐日事務所(現アジア太平洋地域事務所)(2020)は「日本版持続可能な観光ガイドライン(JSTS-D)」を刊行し、「B8多様な受入環境整備」の項においてユニバーサルデザインの普及や障害者に対する配慮の必要性についての示唆を行っている。

他方、自然地域へのツーリズムにおいては、同憲章の「生態系や生物多様性を保全し、野生動物の絶滅危惧種の保護に資するように、設計され、計画されるべき」(3条)という「保全・保護」と観光産業を進捗させる「開発」とのバランス保持が重要事項とされてきた。ありのままの自然にこそ観光資源として高い価値が存在するが、人々の受け入れのために開発が進むとその価値が減衰するといったジレンマに対し、科学的な根拠に基づいてオーバーツーリズムを制限する試み等が各地で実施(例えば奈良県西大台ヶ原エリアや沖縄県西表島)されてきている。しかし、ここにユニバーサルツーリズムという観点を加えると、自然地域の「保全・保護」と「(段差を埋めたり舗装したりといった)開発」との間で、さらなる葛藤状態を孕むことになる。「誰ひとり取り残さない」と標榜するだけならたやすいが、実際問題として自然地域のアクセシビリティを検討した場合、「誰」が「どの基準」でバランスを判断するか(あるいは、その判断が持続的に正しいものとなるか)、双方の落としどころを見出しにくいといった課題がある。

(3) 安全配慮義務を踏まえた主催者(指導者)責任と専門性の担保に関する課題

登山ツアー等を主催あるいは指導する場合、参加者の安全について十分に配慮する義務(安全配慮義

務)が生じる。主催事業中に生じる可能性がある危険を予見する義務(予見義務)及びその危険によって生じる結果を回避する義務(結果回避義務)も求められ、その義務を怠ると過失責任が問われる場合がある。

上野(2022)は、「危険を承諾して参加しているのであるから、内在的危険が現実化した場合には、その責任はスポーツやレジャーをすると決めた本人が引き受けるべき」との考え方があるとして参加者にも一定の自己責任を示しつつ、指導者は「当該スポーツの参加者の安全にも気を配り、参加者の生命身体を保護し、事故が発生しないように配慮するという安全配慮義務を負」っており、その義務範囲は「①指導者と参加者の関係、②参加者の特性、③当該スポーツが持つ危険性、④当該スポーツを行う身体的状況」等を考慮して定められると述べている。

具体的な判例としては、初修者に対するダイビング講習会溺水事故において、指導者が「5秒から7秒」目を離したことに對し、現場の見通しやその他参加者の状況を検証した上で、「受講生の動静を常に注視し、受講生に異常が生じた場合には直ちに適切な措置や救護をすべき義務に違反した過失」を認めたものがある(岩熊法律事務所、2018)。このケースの場合、主催者は参加者から自己責任であることを明記した「免責同意書」を取得しており、書面には死亡を含む責任を主催者や指導者が負わないことに同意する旨も記載されていたが、「無効」が言い渡されている。

これらの司法判断を踏まえ、障害者の登山について検討した場合に、以下のような課題が考えられる。

まず、主催者の義務範囲について、「参加者の特性」と「当該スポーツが持つ危険性」が判断材料とされるという点である。障害ゆえに危険性が高まると予見される場合、催行には常に高度の安全配慮義務

が求められることとなり、字義的に捉えると「予見できる以上、責任を負うことはできない」といった催行萎縮が生じる懸念がある。

次に、結果回避義務に対応するための体制整備について、障害に応じた医療や介助の専門性を予め準備しておく必要性が問われるとするならば、専門人員の配置(あるいは主催者が専門知識を有すること)が困難な場合は催行を見合わせざるを得ないといった懸念もある。

(4) 小括

障害者の登山は、「誰ひとり取り残さない」という国連理念や、全ての事業への参加に係る合理的配慮の提供義務という法令を踏まえると、抜本的な整備を行うべき時節に来ていると考えられるが、上記1.(2)で述べた「保全・保護」と「開発」のバランスに関する課題、1.(3)で述べた安全配慮義務との関連や障害に対する専門性の不足による催行萎縮という課題がボトルネック化しかねないことを指摘しておきたい。また、1.(1)で述べた通り、障害者のアウトドア活動参加は想定外であるということに陥穽してしまっているのは、実のところ主催者側だけではなく、間接的に障害当事者自身もそうである。メディアで目にする障害者の挑戦は素晴らしいが特別な存在であり、自身にとって明日からできる一歩目のモデルケースはなかなか探し当らない。この双方の陥穽をいかにして埋めていくのかといったことが、喫緊に必要なことであるといえよう。

2. 障害者の登山に関する実際

(1) 黎明期(1970年代~1980年代)

これまでに刊行された登山に関する学術論文等を遡ると、日本の登山史にあえて顕在的な形で障害者と明記するものが登場するのは1970年代以降であり、

2. 登山界の現状と課題

これは国連による1975年の「障害者の権利宣言」、1981年の「国際障害者年」、1983年からの「障害者の10年」といった社会的な機運醸成が影響しているのではないかと推察される。

聴覚障害者の登山団体としては1972年に東京ろうあ者山の会が結成されているが、創設期の1981年にキリマンジャロ（5,895m）登頂の後、1984年クック山（3,724m）挑戦時には、障害を理由に危険があるとして、強制下山命令という事態があったことも記録（松永・大森・花田・和田・原・斎藤、1994）にある。視覚障害者の団体としては1982年に結成された六つ星山の会が最古ではないかと網干（2023）は述べており、その後車椅子ユーザーによる富士山（3,776m）登山（古市、1985）、1987年にはがん患者を対象としたモンブラン（4,807m）への挑戦（伊丹、1994）、同じく1987年に両下肢切断者が装具を着用して登山を行った報告（森井・嶋田・若原・小野田・神谷、1987）がある。この時期の文献に見る障害者の登山は、障害があっても果敢に挑戦するというものが多く、障害ゆえにできないとされがちな事項について、障害者であることを明示した上で可能性を証明していくといった文脈が共通していると考えられる。

(2) 発展期（1990年代以降）

他方、上記のようなエクスペディション的な障害者登山ではなく、1990年代になると日本キャンプ協会の障害者等を対象としたモデルキャンプ（石田、2006）や、1993年の生駒らくらく登山歩道の整備（古谷・黒瀬・油井・赤坂、1999）等、これまで登山やアウトドア活動に興味はあってもなかなか機会がなかった層に対する働きかけが散見されるようになる。また、1999年には月刊誌「山と溪谷」（山と溪谷社、1999）において「障害者の山登り」という特集が組

まれ、国内外の事例紹介や障害者と支援者による座談録が掲載されている。一覧にある「障害者のための山岳会」は15団体（知的1 視覚5 聴覚3 総合6）、「障害者が会員として活動している山岳会」は24団体（視覚2 聴覚2 肢体11 病弱1 言語1 総合7）、「障害者登山を支援している山岳会」は6団体（知的1 視覚3 総合2）と、形態や障害種別を見てもこの時点でかなり横断的かつ拡大していることが確認できる。

2000年代に入ると、2001年に日本山岳会東海支部がSON（スペシャルオリンピックス日本）の支部団体と共同で知的障害者とサポーターによる道ヶ岳（906m）登山を実施（前田、2023）し、2004年には認知症や知的障害者、精神障害者を対象としたキャンプ実践について記録（石田、2006）がある。2011年からは埼玉県障害者スポーツ協会と日本山岳会埼玉支部が共同で「ふれあい登山」の取組（高橋、2023）を開始するが、山岳会としては障害者との活動経験が乏しい当初、「引率し、教えなければ」という考えであったものの、次第に「ともに楽しもう」とする気持ちに変容したという言及から、身構えずに多様性を包摂していった経緯が窺える。この報告の中では、家族や障害者スポーツ協会が障害の特性を把握していることを基盤に、山岳会が登山技術の専門家としてサポートを行うことが「極めて有効」であることが示されている。橋本（2023）は、2002年より発足したがん体験者ととともに歩む登山サークルを「がん体験者、医療サポーター、山行サポーターの三者」による活動であると述べており、障害や疾病に関する専門側と活動内容に関する専門側の協働が重要であることが、複数の取組において示唆されていることは興味深い。また、高橋（2023）は、障害者と接する機会が得られるという意味で山岳会員にとっても「ニーズの一致する」取組であったこ

とを強調している。このことに関連して益子・相羽（2017）は、障害者とともに登山等の活動することにより、障害分野の専門知識がなくてもサポートできること（カジュアルサポート）を経験し、「対等な人間関係」の実感が高まると指摘しており、草鹿・榊原・油井・上家（2019）は介護登山の活動によって障害者及び支援者双方のやる気向上や抑うつ状態の改善が見られたと報告している。

以上のように、1990年代以降は自分事として参加をイメージできるような取組や、支援者その他がインクルーシブな活動を経験することで得られる効果等に着目した研究が見られるようになってくる。2020年代に入り、未曾有のコロナ禍という経験を挟み、先述した法令の整備等に応ずる形で2023年の三浦雄一郎氏による富士登山記録（三浦、2024）や作業療法士と登山ガイドの協働による自然を生かした作業療法の効果に関する論考（守岡、2024）、岩岡（2025）による障害者登山のレビューといった、様々な内容の実践記録や論考が相次いで発表されており、「誰ひとり取り残さない」あり方の検討について、これまで以上に機運が醸成されつつあるのではないかと考える。

(3) 小括

本誌「登山研修」の指導あるいは指導者養成に関する歴代投稿を紐解くと、創刊当初から中高年登山ブーム、コロナ禍等、時代時代の世相を背景に、いかに指導者として人々の命を守り、それでいて自然地域の畏怖と魅力を護ろうとしてきた軌跡が垣間見られる。山岳のトップアスリートが日々の研鑽において参照すべき技術の集成と並行し、継続してビギナーや中高年の指導や支援に誌面が割かれてきた。VOL.3（1988）において小倉（1988）は、指導者が「（中高年）登山者の特徴を知る」ことにより、「山

はいろいろの楽しみ方があることを、自分で見つけ出すよう」個々に見合った指導に留意することが必要と言及しているが、この示唆は障害者の登山を支援するという文脈に置き換えても、そのまま参考とすることができるだろう。また、この章で概観してきた先行的な取組や研究の変遷から、支援者側も障害者の達成を是が非でも支えなければ、という考え方から、自分たちもともに楽しむといった、つまりよりインクルーシブなスタンスに変化してきた様子が見て取れる。

3. 今後の展望

(1) 登山参加者の多様化を安全に進めるためのモデルコース設定

近年における長野県山岳遭難データの分析（村越・山本・猪熊・北村・荒川、2025）において、相対的に「転倒・転滑落」と「病気・疲労」の割合が高かったことを踏まえ、「山のグレーディングなどのコース情報（技術的難易度）を利用して自分の体力的・技術的・精神的限界を超えないよう」に促していく必要性が提言されている。自身の状態に応じた適切なグレードで登山を行うべきであるという示唆は、障害者を含む登山参加者の多様化に際し、闇雲に高難度のコースを選択しないことによるリスク回避の側面に加え、自分自身に見合うコースで余裕をもって自然を満喫できるように導くメリットもあると考える。そこでグレーディングの階層として、単に技術的な部分で低難易度であるというだけではなく、多目的トイレ等の必要拠点を備え、目的地到達以外の楽しみ方やスローペースだからこそ体験できる見所等を包含した「アクセシブル・グレード」コースの検討を提案したい。「アクセシブル・グレード」コースの着想に至る探索的な実践として、池谷・原田・楠（2025）は2024年5月から2025年7月にか

2. 登山界の現状と課題

け、日本の世界自然遺産地域（知床、屋久島、西表島）におけるアクセシブルなモデルコースの検討を実施した。この実践研究ではトイレの設置や交通インフラとの接続性といった観点に加え、周遊にどのような魅力や付加価値があるかといったことを項目化し、コースを選定していった。各地でこのようなコースを見出し、ミニマムな部分からであっても誰もが入門しやすい情報の提供ができれば、「次に訪れる誰か」を誘うことにつながるだろう。

(2) 環境開発（アクセシブル）と機器開発（アダプティブ）の統合的アプローチ

また池谷・原田・楠（2025）では、「アスファルト舗装やスロープ敷設といった整備を最小限に限定した上で、通常の車椅子では移動が困難な不整地であってもアクセスできる手段」として、複数のタイプのアウトドア型車椅子等機器を考慮に加えつつ、モデルコースの検討を行っている。自然環境の「保全・保護」とユニバーサルツーリズムをバランスよく両立するためには、全ての移動動線において環境開発（アクセシブル）と機器開発（アダプティブ）の双方から検討することが重要であると考ええる。なお、これらはもちろん自然地域におけるユニバーサルツーリズム実現を主たる目的とするものではあるが、見出された知見は副次的に各地の防災・減災のノウハウに転用できると想定している。上記のアプローチにより、山岳等の自然地域において障害者を含む参加者が往来できるような体制構築は、万一の災害で国土が不整地に戻ってしまった場合のレジリエンスにもなり得ると考えている。

(3) 地域ごとのグラデーションを活かした横断的連携

自然地域は都市とは違い、アクセシビリティに関する汎用の手立てがおしなべてどこの地域にも使え

るわけではなく、3. (2) で述べたように、特に山岳地帯では路面や傾斜、気候、様々な条件に応じて環境と機器の双方を調整する必要がある。その結果、各地で「アクセシブル・グレード」のコースが設定できたとしても、ひとつの地域で全ての多様性に対応するのではなく、地域間、あるいは実施イベントやツアーレベルで主催者同士が連携することにより、どの地域のどのコースあるいはツアーであれば個々の障害等の状態とマッチングが良いのか、といった情報の共有及び発信ができるよう、横断的なネットワークが構築できれば望ましいのではないかと考える。例えば神戸市では、ユニバーサルなアウトドアアクティビティに関して公式観光サイト内でポータルを準備している（神戸観光局、2025）。このポータルでは複数のイベントや事業を見比べることができ、なおかつ主催者同士は定期的な情報交換を行ってお互いの事業内容を把握しているため、参加者はどこへ問い合わせても、自分に見合ったアクティビティに出会いやすいという構造になっている。これまでのユニバーサルツーリズムは、1地域あるいは1主催者でいかにして多様な対応を準備するのかといった検討に終始することが多かったが、今後、地域ごとと主催者ごとはそれぞれに特色を尖らせ、地域と地域あるいは主催者と主催者の連携によるネットワーク単位でワイドな対応ができれば、非常に効率的ではないだろうか。

(4) 総括

国連世界観光機関（英語版2021、日本語版2024）によって「自然エリアでのアクセシビリティの確保とインクルーシブツーリズムの開発状況（優良事例集）」が刊行され、世界の先行事例が取り上げられているものの、「解決策を提供しているプロジェクトやアクセシブルな地域はまだそれほど多くはない」と

いった言及もなされている。特に「自然エリアはその特性上、アクセシブルにするのが特に難しいことを考慮し、自然エリアにおける観光開発をより包摂的で誰にとっても利用しやすいものにするについて、認識を高める必要性」があると総括されており、良く言えば世界的に見ても今後の発展が希求されている、悪く言えばあまり多くの人の視野に入っていない事項であるといえる。自然とアクセシビリティはそもそも背反しており、ユニバーサルツーリズムを自然地域で実施するにあたり、参加者側や地域・主催者側、あるいは双方に対し、属人的な努力や予算、人員といった負担が強いられてきたことは否めない。これらを踏まえ、本稿では過度の属人化を防ぎ、持続的な取組を目指すことができるよう提言している。各地域のユニバーサル化に係る一助となれば幸いである。

【引用文献】

国連（2015）我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ（A/70/L.1）（外務省仮訳）

内閣府（2023）障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針（令和5年3月14日閣議決定）

国連世界観光機関（1999）、世界観光倫理憲章（日本語版）

観光庁・国連世界観光機関駐日事務所（2020）「日本版持続可能な観光ガイドライン（JSTS-D）」

上野園美（2022）ダイビングに係る法的責任を知る 第3回障がい者ダイビング学術及び指導者研究会配布資料、pp4

岩熊法律事務所（2018）スキューバダイビング講習で「責任を追及しない」との書面を提出していた場合の損害賠償請求 2018.10.26 <https://>

kumaben.com/scuba-diving1/（閲覧日2026.1.7）

松永・大森・花田克彦・和田一郎・原久美子・斎藤惇生（1994）追加発言 登山医学 14（1）、pp 65-72

網干勝（2023）障がい者登山の楽しみ（「山仲間アルプ」の登山活動）、登山研修VOL.38、pp 85-88

古市義雄（1985）車椅子の挑戦：車椅子全国縦断・富士登山の記録、銀河書房

森井和枝・嶋田勝英・若原宣彦・小野田英也・神谷成仁（1987）スポーツを楽しむ切断者の人々 理学療法学14、pp215

伊丹仁朗（1994）モンブランの雷—7人のガン闘病者と登山して— 登山医学14（1）、pp38-43

石田易司（2006）精神障害者のための野外活動—日本での実践の試み— 桃山学院大学社会学論集 40(2)、pp67-82

古谷勝則・黒瀬毅・油井正昭・赤坂信（1999）自然公園における肢体不自由者に対応した歩道に関する研究 ランドスケープ研究62（5）、pp693-698

山と溪谷社（1999）山と溪谷765（4）、pp148-170

前田隆久（2023）障がい者支援登山に関する取り組み—全ての人に、登山の楽しさと恵みを—、登山研修VOL.38、pp30-35

高橋努（2023）埼玉県障害者スポーツ協会との共同開催による障がい者登山支援、登山研修VOL.38、pp26-29

橋本しをり（2023）がん体験者と共に歩む登山サークル フロント・ランナーズ・クライミング・クラブ（Front Runners Climbing Club以下FRCC）の活動について、登山研修VOL.38、pp 145-151

2. 登山界の現状と課題

- 益子徹・相羽大輔（2017）登山体験を通じたカジュ
アルサポート研修の有効性の検討 愛知教育大
学障害児教育講座障害者教育・福祉学研究13、
pp23-28
- 草鹿・榊原・油井・上家（2019）介護登山のもたら
す心的効果—親友との山での再会を目指して—
登山医学39、pp100-104
- 三浦豪太（2024）三浦雄一郎 富士山から見るイン
クルーシブ野外活動の実情、登山研修VOL.39、
pp77-84
- 守岡伸彦（2024）「作業療法は、自然を生かした治療
的介入を可能とするか」—私が当研究会に入会
した理由— 作業科学研究18、pp92-95
- 岩岡研典（2025）障がいのあるひととの山登り／山
歩き～共通する考え方と現状、そして課題～
登山研修VOL.40、pp66-75
- 小倉董子（1988）実年（中高年）登山者の実態 体
験レポートから、登山研修VOL. 3、pp7-10
- 村越真・山本正嘉・猪熊隆之・北村憲彦・荒川勉
（2025）2021～2023年の長野県山岳遭難デー
タによる山岳遭難の実態、独立行政法人日本ス
ポーツ振興センター国立登山研修所、pp3-21
- 池谷航介・原田新・楠敬太（2025）世界観光倫理憲
章を踏まえたアクセシブルアウトドアツーリズ
ムの検討—世界自然遺産地域でのアウトドア型
車椅子を用いた実践を通じて— 岡山大学教育
推進機構教育研究紀要 3、pp195-208
- 神戸観光局（2025）ユニバーサルアウトドア情報
https://www.feel-kobe.jp/universal_outdoor/
（閲覧日2026.1.7）
- 国連世界観光機関（英語版2021、日本語版2024）自
然エリアでのアクセシビリティの確保とインク
ルーシブツーリズムの開発状況（優良事例集）

さあ、まだ見ぬ壁が待っている。

～障害者クライミング普及20年、歩み続ける先に描くインクルーシブな社会～

小 林 幸一郎（NPO法人モンキーマジック代表理事）

はじめに

人生の失望と希望の傍らには、いつもクライミングがあった。若かりし日の私の居場所となったこのスポーツは、失明宣告という絶望の淵にあっても、再び前を向く力を与えてくれた。障害者クライミング普及を行うNPO法人モンキーマジックを設立して20年。私たちが今、注力しているのは単なる「クライミングを障害者に普及する」ことに留まらない。それは、障害の有無にかかわらず、クライミングを通じて交流し混ざり合う場を創ることである。本稿では、ここまでの歩みを振り返るとともに、クライミングという営みが拓くインクルーシブな社会の可能性と、その未来への展望を綴る。

第1章：クライミングは失望の日々にも、希望の日々にも、いつもすぐそこに在り続けた

小学校の頃から一番嫌だった科目は体育であった。中学でも運動も勉強もできない私は、劣等感のかたまりのような子どもだった。「あなたの夢は何ですか」という大人からの問いかけには、適当に相手が喜びそうなことを返してその場をやり過ごしていた。やりたいことも夢もない子どもだった。しかし高校に上がり、たまたま本屋で立ち読みした雑誌「山と溪谷」のフリークライミング紹介特集に目が留まった。美しい岩を登る外国人の写真とともに、そこには「多くのスポーツが、誰が速いか、強いかを競うなかで、このスポーツは個々人の限界を押し上げてゆくものだ」と書かれていた。「誰かと比べら

れないんだ、これなら自分にも楽しめるかもしれない」16歳高校2年生の夏、私は勇気を出して雑誌に紹介されていた長野県川上村・小川山でのスクールの門を叩いた。当時はまだ日本にクライミングジムはなく、クライミングは岩場で始めるものであった。たまたま入ったのはトップクライマー池田功氏のスクールであった。そこに集う大人たちも多様で、一人だけ高校生である自分にとっては刺激ばかりであった。これが、私にとって初めて夢中になった「クライミング」との出会いだった。そこには、達成感を得られるスポーツとしての魅力と、そのコミュニティが持つ居場所感の魅力があり私を強く魅きつけた。大学3年生のヨセミテを皮切りに海外の岩場にも出向き、社会人となってからもクライミングは生活の彩りに欠かせないものとなっていた。

異変は28歳のある日であった。車を運転していて見えづらさを感じ、生まれて初めて出向いた眼鏡屋で眼科受診を勧められた。そして、医師から告げられたのは網膜の進行性難病だった。治療方法はなく、私は近い将来の失明を宣告された。「一体、次は、何ができなくなるのか」視力の低下を実感する中で、起きてもしない悪い未来のことばかりと向き合う日々がやってきた。生きることの前でクライミングなど所詮趣味でしかなく、それを続けるかなど、この時の自分にとってはどうでもいい話であった。

そんなある日、友人の結婚式に出席するため米国を訪ねた私は、全盲で七大陸最高峰登頂者がいることを知り、ショックを受ける。視覚障害者には、自

2. 登山界の現状と課題

分が思ってきたよりはるかに大きな可能性があるのではないか、そんな非常にポジティブなショックだった。その人物、エリック・ワイエンマイヤー氏に会ってみたいとホームページを見つけ連絡を取り、再び渡米した。そこで彼は、「アメリカではたくさんの障害者が、クライミングという『できない』と
思っていた経験から、失いかけていた自信を取り戻したり、新しい可能性に気づいたりできている」と話してくれた。私は、細々と辞めずにジムで続けたクライミングの可能性に気づかされた。「クライミングの魅力や価値を知る自分こそ、日本で障害者にそれを伝えることができるのではないか。それをやるのが、私という一人の人間としての価値ではないか」自らの原体験、そして失意の日々の中からのロールモデルとの出会いを経て、2005年、37歳の夏、視覚障害者向けクライミングスクールを運営するNPO法人モンキーマジックを設立するに至ったのである。



キリマンジャロ初登頂の小林とエリック・ヴァイエンマイヤー

第2章：障害者クライミング普及の先にある価値を見て歩みはじめ、歩み続ける

2005年に設立されたNPO法人モンキーマジックは、以下のビジョン、ミッション、バリューを掲げ活動が続けてきた。一貫して、それまで日本に存在しなかった障害者クライミング普及活動を推し進め

ることが私たちの使命であった。

・ビジョン／私たちの目指す社会

障害者クライミング普及活動を通じて、多様性を認め合えるインクルーシブな社会を実現し、より成熟した豊かな社会を創ります。

・ミッション／私たちの使命・目的

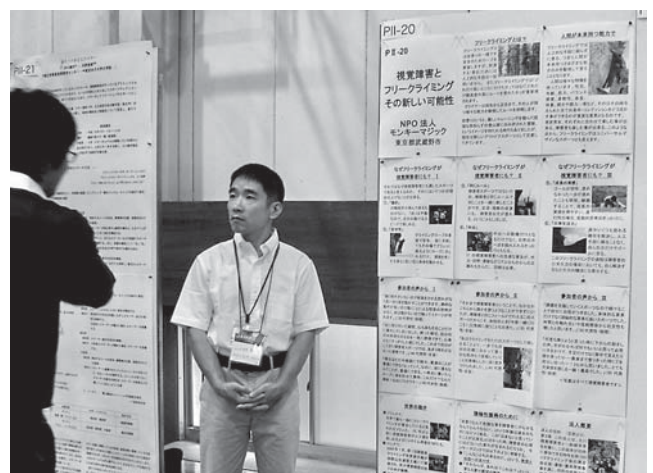
モンキーマジックは、「見えない壁だって、越えられる。」をコンセプトに、フリークライミングを通じて、視覚障害者をはじめとするすべての人々の可能性を大きく広げることを目的とし、活動しているNPO法人です。

・バリュー／私たちの届ける価値

クライミングを通じ、自分の成長を実感できる体験を届けます。

設立当初は自らの原体験に基づき、岩場での視覚障害者向けスクール開催を重ねていた。障害者がこのスポーツに打ち込むことは、生涯スポーツとしての幅を広げるだけでなく、自立支援や社会参画、ひいてはQOL（生活の質）の向上に直結する。私自身がそれを実感しており、確信を持って動き出した。

家族経営のような形で走り出したNPO法人は、アウトドアブランド各社へ支援を募り、ボランティ



学会にて質問に答えている小林

アとして活動を支えてくれる仲間を探した。しかし、参加者を募るために眼科医や盲学校、施設などを回っても、「クライミングなんていう危険なスポーツに障害者を紹介できない」という拒絶に近い反応に苦しむ日々が続いた。だが、その価値に絶対の自信があった私は、まずは周囲の理解が必要なのだと、専門家が集まる学会での発表などを試みるようになった。次第に理解者も現れ、参加者も出始めた。現場を支えてくれるボランティア仲間との出会い、およびTHE NORTH FACEによるチャリティTシャツを通じた支援など、小さな規模ながら活動を継続できる下地が少しずつ整い始めていったのである。

第3章：他者との比較ではなく、内なる自分との対話

クライミングというスポーツの最大の特徴は、それが「他者との比較」ではなく、常に「自分自身との対話」である点にあると私は考えている。目の前の壁にある課題をどうすれば完登できるのか。どの手順で、どう身体を使うのか。離陸した瞬間から登ること以外考えられない「無の境地」。そこには、障害の有無、年齢、経験の差などは一切関係ない。一人のクライマーとして等しく壁と向き合う「個の挑戦」が存在するだけである。

例えば視覚障害者は、仲間の「2時、遠めに小さ



アウトドアスクール開始当初の様子

なカチがある」といった言葉のガイドを頼りに登る。一見するとその声に導かれているようだが、実態は異なる。次のホールドがどこにあるのかという視覚情報を補ってもらうことで、自らをコントロールし、持てる力を最大限に引き出してルートを自らの意志で攻略しているのである。片脚のクライマーも、車いすユーザーも、麻痺により可動域に制限がある人も、それぞれが自らの身体的特徴を最大限に活かし、独自の正解を見出していく。その「自らの可能性を限界まで引き出す」という点において、障害者を含むすべてのクライマーの姿は、人として等しい。これこそが、すべての人がありのままの自分と向き合い、内なる力を引き出している姿に他ならない。クライミングは、誰にでもその人が持つ可能性を最大限に輝かせる舞台を提供してくれるのである。

また「自らの力で高いところへ登る」というルールは極めてシンプルである。この「登りたい!」「あそこに到達したい!」という本能や欲求は、障害、年齢、性別、国籍、文化といったあらゆる境界を越え、人を平等に熱狂させる。誰かが完登すればその場にいる全員が拍手を送り、惜しくもフォールすれば共に悔しがる。グレードに関わらず誰もが同じ感情を共有できる空間では、障害さえも「登り方の特徴のひとつ」に過ぎないと感じられる。このインクルーシブな関係性こそが、クライミングが持つ普遍的な価値であると感じてきた。そしてこれこそが、私がモンキーマジックの活動を通じて20年間信じ続けてきた「クライミングというスポーツの力」の源泉なのである。

第4章：金メダルの輝きは、多様な社会を照らす光に

「パラクライミングという障害者のクライミング競技大会がロシアで開催されるから、出ませんか」2006年、この史上初のパラクライミング国際大会へ

2. 登山界の現状と課題

の誘いが日本山岳協会（現・日本山岳・スポーツクライミング協会）から届いた。そこで視覚障害男子カテゴリーで金メダルを獲得し、その後2014年から2019年にかけては世界選手権で男子B1クラス4連覇という、身に余る成績を上げることができた。鈴木直也氏という素晴らしいサイトガイドのパートナーに恵まれたからこそその結果である。子どもの頃、あれほどスポーツが苦手だった私が、視覚障害者となったことで日の丸を背負い、表彰台の一番上で君が代を斉唱する。その経験は、私に計り知れない成長と自信を与えてくれた。

「楽しんできて！」大会へ送り出してくれる仲間の言葉に、「がんばれるけれど、楽しむ余裕なんてとても持てない」――大会を重ねるほどに、日の丸のユニフォームの重さを痛感し、心の中でそう呟いていた。それほどまでに大会当日に照準を合わせ、心と身体を研ぎ澄ませて過ごした日々は、私にとって何物にも代えがたい研鑽の日々だった。

しかし振り返れば、私がこれほどまでに競技の世界を追い求めたのは、単に自分個人の結果を欲したからではなく、クライミングそのものの可能性と選択肢を実感できていたからに他ならなかった。国際大会への参戦が始まったのは、NPO法人モンキーマジックを設立した翌年のことである。以来、競技者として、また国内大会の運営者として歩んできた日々は、そのままパラクライミングという障害者クライミング発展の日々と重なり、2020年には日本パラクライミング協会の共同代表という責務も仰せつかることとなった。

常に健常者のクライミング競技である「スポーツクライミング」の背中を追い、時には同じ金メダルであっても世間が向ける視線の質の違いに、その社会的価値を問い直す日々でもあった。しかし、アスリートとしての経験と誇りを胸に、現実と向き合い

ながらパラクライミングの価値を少しでも高め、後進により善き思いを届けたい、と走り続けてきた自負がある。その積み重ねがなければ、障害者クライミングという文化がここまで広く社会に受け入れられることはなかっただろうと信じている。

パラクライミングという競技が経験させてくれたのは、大会当日に向けて誇りを持ち、心身の能力を最大限に磨き上げる「研鑽」の価値である。そして私が今、改めて目指すのは、クライミングを通じて障害の有無という境界を越えてゆく「寛容さ」の追求である。障害者がスポーツをすることは、しばしば克服や挑戦といった「リハビリ」や「感動の物語」として消費されがちである。しかし、私たちが壁に向き合う本質的な価値は、それを見る人々の障害に対する既成概念を揺さぶり、無意識に引かれた境界線を溶かしていくプロセスにこそある。同じクライマーという立ち位置には、本来「見えない壁」など存在しないはずなのだ。

2028年ロサンゼルス・パラリンピックでの追加競技決定の報を聞き、私がこの競技に出会った頃には想像もできなかったほど多くの人々が、障害者が壁を登る姿を通じて、人類の可能性を追求する様を目の当たりにすることになるだろう。クライミングがパラリンピックの種目となることで、その本質的な力や可能性がより広く社会に伝わると信じている。



世界大会の舞台上で金メダルを獲得

私は大会の晴れ舞台やメダルの輝きを、単なる優劣の証としてではなく、多様な個性が混ざり合う「未来の社会のあり方」を示す光として捉えている。これこそが、パラクライミング黎明期から関わり、アスリートとして、およびNPO代表として、私が一貫して見つめてきた景色である。

第5章：歩み続けた先に、交流が生み出す「あるべき社会の縮図」

「ロープに結ばれることで、自由に解き放たれる」——これは、NPO法人モンキーマジック設立当初、岩場でのスクールで指導にあたっていた方が語ってくれた言葉である。視覚障害のあるクライマーにとって、岩場までのアプローチは決して容易ではない。時間をかけ、時に手足を駆使して険しい道を進み、ようやく岩壁にたどり着く。しかし、一度ハーネスを装着し、ロープを結んで登り始めれば、そこは安全が担保された空間へと変わる。それまで慎重だった動きは、ダイナミックで自由な「舞」へと変貌を遂げる。世間からは「危険で壮大な冒険」と見られがちなクライミングが、実は視覚障害者にこそ大きな自由と可能性をもたらす。私はその瞬間を何度も目の当たりにしてきた。

そんな中、自然の岩場で経験を積んだ視覚障害のある参加者から、ある切実な相談を受けた。「クライ



マンデーマジック高田馬場スタート当時の様子

ミングは素晴らしい。けれど、私たちが登るためには、モンキーマジックのスクールに参加し続けるしかないのでしょうか」——この問いがきっかけとなり、2012年春、新たな試みが始まった。障害の有無にかかわらず、クライミングという共通の趣味を持つ者同士が出会える仲間づくりのマッチングイベントの立ち上げである。

「マンデーマジック」と名付けたこのイベントは、月曜夜に定休日の都内クライミングジムを借り受け、仕事帰りに誰でも気軽に立ち寄れる場として開始した。当初は集客に苦心したが、参加者は少しずつ増え始め、そこで私たちは想定していなかった2つの大きな反響と出会うこととなる。

一つ目は、視覚障害の人だけではなく、聴覚障害、片腕の麻痺など様々な障害のある人たちが参加し、共にクライミングを楽しんでくれたことだ。途中で聴力を失った男性は、「聴こえなくてもガイドができる！」と言い、私は伝えたいことを紙に書いたり、携帯を使ったりとお互いに分かり合う工夫を楽しんだ。障害が違えども、途中で障害を負ったことで諦めたことや得られたことを分かち合える時間は、インクルーシブを私自身が経験する始まりとなり、異なる障害者、程度の異なる障害者、そんな同士の理解促進が育まれたこと。

二つ目は、障害のないクライマーたちも想像以上に楽しみ、深く関わってくれたことだ。彼らは障害者と共に登り、達成感を共有する経験を通じて、障害者を「助けなければならない人たち」ではなく、共に楽しむ「仲間」として捉えるようになったと語ってくれた。この経験が、彼らの中にあった固定観念を、理屈ではなく実感として書き換えていったのである。

「同じ課題に挑み、達成感を分かち合う」——そこには、多様性がごく自然に溶け込んだ「あるべき

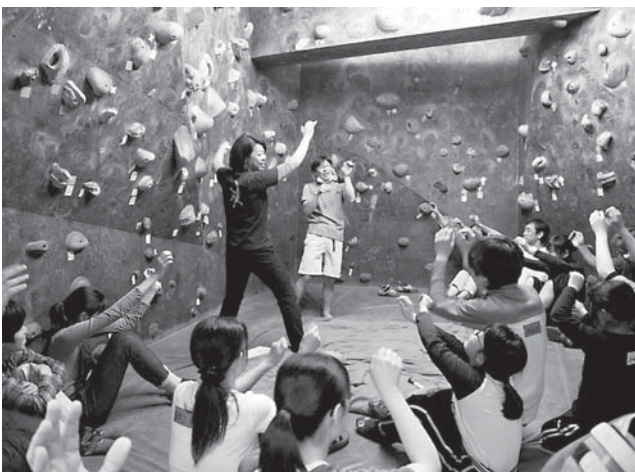
2. 登山界の現状と課題

社会の縮図」があった。クライミングは、障害者の運動機会やQOLを向上させるだけにとどまらない。インクルーシブな社会の本質を、誰もが実感できる場所を提供してくれるのだ。障害者のクライミングスクールから始まった活動は、対象を広げることで社会的な認知も高まっていった。「交流が生み出すクライミングの大きな可能性」に気づかされた私たちは、この交流型イベントを活動の基幹事業へと据え、今日まで歩みを続けている。

第6章：自発的な行動を導く、ともに登る真の体験

マンデーマジックから始まった交流型クライミングイベントは「障害者のためのイベント」ではない。障害の有無にかかわらずすべての人を対象としている。参加者の約6割は障害のない方々であるが、残りは主に視覚障害のある参加者が多く集まっている。近年、クライミングはメディア露出も増え、アパンスポーツとして認知度は設立当初と比べものにならないほど高まった。室内施設で開催することで未経験の方にとっても敷居が下がり、障害の有無を問わず申し込みが増えている。

こうした未経験の方には「初めて講習会」を、初参加の方全員には「H.K.K.講習会」を受けていただく。H.K.K.とは、理事の鈴木直也氏が考案した



初めて来た方は必ず受講するHKK講習会

「方向 (Houkou)」 「距離 (Kyori)」 「形 (Katachi)」 の頭文字をとったものである。「左手から2時、遠く、右下がりのサツマイモ」。このように、最後に触れたホールドを時計の文字盤の中心に見立てて伝えることで、視覚障害者は次のホールドの位置を思い描き、頭の中にルートをイメージできるようになる。

ここで大切にしているのは、「伝えてほしい、でも教えないでほしい」ということだ。初めて参加する方の多くは、「自分が障害者を登らせてあげなければ!」という優しさから、つい手順 (ムーブ) まで教えてしまいがちである。しかし、これでは視覚障害者は指示する人の「操り人形」になってしまう。私たちが伝えてほしいのは、あくまで「見えないから分からない、次のホールドの位置」である。的確に情報を伝えさえすれば、あとの主体性は登るクライマー本人に委ねられる。「もう少し右上だよ!」という一瞬のやり取りの中に生まれるのは、上下関係ではなく、共通のゴールを目指す「対等な仲間」としての関係だ。良かれと思った「過剰な手助け」が、時に相手の可能性を塞いでしまうこともある。クライミングはそんな大切な気づきを与えてくれる。「一人の人間が自らの課題に向き合い、達成を目指すプロセスから見えてくる可能性の拡大と、そこにおける他者の適切な関わり」——これこそが、インクルーシブな社会構築の核ではないだろうか。

この「混ざり合い」の体験は、ジムを一步出た後の日常を確実に変えていく。街で白杖を持つ人を見かけたとき、以前なら躊躇していた人が自然に声をかけられるようになる。クライミングという共通言語を介して生まれた小さな成功体験が、心の壁を溶かし、社会を静かに作り変えていくのである。

第7章：点から面へ、地域に育んでほしい「種」

2025年11月、マンデーマジックは第150回という節

目を迎えた。この一つの「点」から始まった交流型イベントは、今、日本全国へと広がる「面」の動きへと進化している。私たちが目指しているのは拠点の数ではなく、それぞれの地域に、その土地ならではの「インクルーシブなコミュニティ」が自立的に育っていくことである。

2014年、仲間が札幌で「えぞモンキー」を立ち上げたことを機に、大阪、名古屋、福岡など各地へと届ける活動に注力した。試行錯誤を繰り返し、現在では全国21都道府県、24拠点到まで地域は広がった。2024年には全国で151回開催、1464名の参加（うち障害者618名）の実績を数えた。各地域の運営は現地の有志や団体が主宰し、以下のコンセプトを共通のポイントとして掲げている。

1. 地域の人々が主宰して定期的を開催する、地域に根ざしたイベントであること。
2. 障害の有無や年齢・性別・国籍に関係なく、全員が同じ一参加者であること。
3. 新しい人と人がつながり、多様性を認め合い、仲間になれる場所であること。

継続の最大の試練はコロナ禍であった。活動休止を余儀なくされ、離散したコミュニティを再建する



北海道・札幌地域密着の交流イベント「えぞモンキー」は2023年に第100回を達成

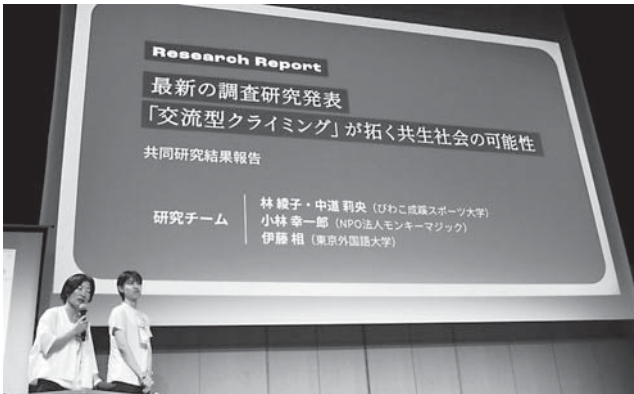
のは容易ではなかった。それでも各地の自走にこだわり続ける理由は、東京のモンキーマジックの「イベント」ではなく、「その街の仲間による主宰」でなければ生まれない価値があるからだ。地元のメンバーが主宰し、地元のジムを拠点とすれば、そこには日常的な交流の土壌が育つ。街で出会ったときに「またジムでね」と声を掛け合える「顔の見える関係性」が地域の中に編み込まれていくことこそが、社会を創る真の力になると信じている。ノウハウはいわば「種」である。それを各地に届け、その土地の風土に合った形で根付かせていく。地域に暮らす多様な人々が関わる中で、種は形を変えながら広がっている。一つひとつの拠点を再び繋ぎ直し、地域主体で自走できるまで支え続ける。その積み重ねが、やがて世界を「誰もが自分らしくいられる場所」で満たしていく面へと広がると確信している。

第8章：科学が解き明かす「交流型クライミング」の客観的価値

20周年という大きな節目を迎えるにあたり、私たちは一つの重要な課題に取り組んだ。それは、これまで現場で確信してきた「交流型クライミングの力」を、個人の経験談に留めず、学術的に評価し直すことである。現在、びわこ成蹊スポーツ大学の林綾子先生、中道莉央先生、それぞれのご専門分野での共同研究が進められており、交流型クライミングが持つ独自の意義が明らかになりつつある。

1. 統計が示す「バリアレス」な心理的効果（量的研究：林綾子教授）林先生は、2024 - 25年に実施したアンケート調査（回答数223名、うち有効回答数210名）を統計学的に分析した。特筆すべきは、「性別や年代、参加形態、障害の有無などの属性によるデータの差があまり見られない」という点である。

2. 登山界の現状と課題



量的・質的研究を行うびわこ成蹊大学の林先生と中道先生

一般的な研究では、属性、特に障害者と健常者の間には自己効力感や社会参画意識に一定の差が生じがちであるが、本研究結果は両者が共に、クライミングの魅力を味わい、交流型クライミングに居場所を感じ、その経験を通じて生きづらさが軽減し、障害への認識が変化したことを示した。数値が共に高く、同様のポジティブな変化を示していたことは、プログラムそのものが全員を対等な「一人のクライマー」として包摂していることの証明といえる。

2. インタビューが浮き彫りにした「対等な関係」

（質的研究：中道莉央准教授）中道先生は、詳細なインタビューを通じて数値では捉えきれない心の機微を分析した。「障害者としてではなく、一人のクライマーとして見てもらえた」「助けるつもりで参加したが、支えられていたのは私の方だった」といった声からは、現場で「役割の流動性」が起きていることが読み取れる。クライミングという共通の難題に向き合う中で、教える・教わるという立場が自然に入れ替わり、固定された支援―被支援の関係を越えた対等なパートナーシップが生まれている。このような相互的な経験の積み重ねによる深い共感こそが、多様性を尊重し合う社会をかたちづくる核となる。

3. 「経験」から「確かなエビデンス」へ本研究の意義は、本活動に「主観的な感想を超えた客観的な価値がある」と論理的に示そうとしている点にある。

科学的な裏付けを得ることで、本活動は教育や福祉、登山界全体の発展に寄与する有力な「手法」としての意義をより強固なものにしている。両先生においては、第27回日本野外教育学会にて「交流型クライミングの普及を目的としたイベントへの参加が参加者の心理的変容に及ぼす影響」、および第45回日本アダプティッド体育スポーツ学会にて「交流型クライミングイベントへの参加による参加者の意識変容」との題名で研究成果の発表をされ、現在論文での報告準備を進めている。（2026年1月現在）

第9章：海を越え、世代を繋ぐ——「交流」という普遍的価値の伝播

全国へと広がった交流型クライミングの種は、今や国境を越え、次世代へとその根を伸ばしている。

1. ある学会で出会った台湾大学教授との縁をきっかけに、2024年、日本で培った経験をアジアの国々へ届ける国際プロジェクトが動き出した。シンガポールの「Merdeka Monkey」や台湾の「Formosa Monkey」は、いずれもモンキーマジックが立ち上げから伴走し、定期開催を前提に定着した拠点である。

シンガポールの主要メディア（CNA）は、現地の参加者の「自分を憐れむのではなく、幸運だと感じる」という言葉と共に、この場が「コミュニティの



初の国外の交流イベントがシンガポールの地で誕生



「クライミングを通じて仲間になろう」がテーマのモンキッズに参加する子どもたち

絆を深め、社会の障壁を溶かす」ものであると大きく報じた。日本発の「交流型」が持つエネルギーは、国境を越えても変わることはない。

2. DDSとHKK：価値を繋ぐ共通言語交流を支えるのは、日本生まれの「HKK」と、その国際版「DDS (Direction, Distance, Shape)」である。手法を標準化する目的は、単に完登を支援することではない。この共通言語があれば、世界のどこであっても見える人と見えない人の距離が一瞬で縮まり、対等な仲間になれるからだ。

3. 「モンキッズ」：次世代が体現する「境界のない日常」2024年春から小・中学生対象の「モンキッズ」を開始した。障害児と地域の児童が共に参加するこの場では、子供たちは大人が教える前にHKKを駆使して対話を始める。彼らにとって多様性とは、教科書で学ぶ知識ではなく、クライミングを通じて肌で感じた「当たり前の日常」そのものなのである。

第10章：クライミングが拓く未来、および価値を繋ぐための挑戦

第8章の研究成果は、クライミングが単なる身体活動を超え、社会を豊かにする強固な「インフラ」になり得ることを示唆している。私たちは20周年を

機に、SDGsのさらに先、誰もが属性に縛られず個を響かせ合う未来の実現に向け、改めて「3つの目標」を柱に据えた。

＜20周年の決意：私たちが掲げる3つの目標＞

- ・「交流型クライミング」の最優先化：単なる普及に留まらず、障害の有無に関わらず「共に登り、共に笑う」交流そのものを活動の核に据える。
- ・「言語」を介したコミュニケーションと価値創造：視覚情報を言葉で共有するプロセスから、新しい社会の繋がり方を提示する。
- ・「国際的なネットワーキングの構築」：日本発のメソッドを世界へ発信し、グローバルなネットワークを確立する。



20周年の節目に次の10年への決意表明を行った

しかし、この未来を描く上で避けては通れない現実がある。モンキーマジックが取り組む「価値創造型」の活動は、心のバリアを溶かすという成果が可視化されにくく、構造的に社会的な支援を得にくい課題を抱えている。研究によって客観的な価値が証明されつつある今こそ、私たちはこの「価値」を社会の共有財産として存続させるための知恵や協働を必要としている。

2. 登山界の現状と課題

＜本稿をお読みいただいた皆様へのお願い＞

私は、モンキーマジックの活動を通じて実感してきた「壁を越える力」、そして時には「壁を溶かす力」を信じています。その先に待っている、笑顔があふれる未来の社会を創るために、一人でも多くの方にご一緒いただけたら、これほど心強いことはありません。

個人でも、組織や企業という形でも構いません。あなたがこの活動に関わり、力を貸してくださることで、私たちの歩みはもっと力強く、加速していくと確信しています。私たちは次の10年、およびその先の未来も、皆さんと一緒に新しい社会の景色を見に行くために登り続けたいのです。あなたが関わってくださることで、私たちの夢は現実に一歩ずつ、確実に近づいていくことができるはずです。皆さんと共に、まだ見ぬ新しい景色を眺められる日を、心から楽しみにしています。

結びに――私にとってのクライミング

メディアの取材で、「小林さんにとってクライミングとは何ですか」と問われることがある。私の答えはいつも同じだ。「一番大事な友達です」と。

それは、いつも仲良くして元気をもらえるだけの関係ではない。時には、大喧嘩して顔も見たくない、しばらく距離を置きたいと思うこともある。しかし、楽しい時も、苦しい時も、常に傍らで私を支えてくれた。無我夢中になった若い時代も、光を失ってからも、その本質的な魅力が変わることはなかった。だからこそ私は、自分の大切な「クライミング」という友達の素晴らしさを、一人でも多くの人に知ってもらいたい。その一心で、これまで活動を続けてこられたのだと思う。

「さあ、まだ見ぬ壁が待っている。」

20年という歩みは、まだ通過点に過ぎない。これからもクライミングという「最高の友達」の手を借りて、誰もが自分らしく輝ける社会を目指し、私も一歩ずつ壁を登り続けていく。

「疫学／一次予防の視点からの山岳遭難対策：全国山岳遭難対策協議会シンポジウム発表の山岳遭難データ分析から」

村 越 真（静岡大学）

1. はじめに

全国山岳遭難対策協議会は、2010年代後半以降、発生した遭難への対応から事前の安全システムや道迷い遭難対策といった地味な対策も含む総合的な遭難対策を共有しあう場となった。午前中は、警察庁による前年の山岳遭難の概況についての報告、遭難対策組織からの事例報告等を行うスタイルは変わらないが、午後はトピックを絞ったシンポジウムやパネルディスカッション形式でホットなトピックを深掘りする形式となっている。この数年のトピックでは、コロナ禍での対応、道迷い防止のための多様な方策、インバウンド対策、デジタルツールの活用、等が扱われている。

今回のトピックは表題にも示した山岳遭難データの分析である。毎年本協議会で警察庁から前年のデータが公表され、遭難の状況を示す貴重な資料とはなっている。しかし、公表されるのは単純集計がほとんどである。現状は分かるが、将来の有効な対策につなげるデータの深掘りが必要である。著者も、これまでに3回、元データ（の一部）を入手し、分析を試みたことがあった（村越、2010、2016；村越他、2013）が、単純集計では見えない遭難の実態を把握できるという手応えがあった。

現場での個別具体の遭難に対応し、そのダメージを最小限にするとともに、その教訓を今後の遭難防止につなげる方法は、医学の世界になぞらえれば「臨床的方法」と言える。そこからの教訓抽出は山岳雑誌の記事から登山組織の内部報告まで数多く見

ることが出来る。一方で、警察庁が発表するような大量のデータに対して統計的手法を駆使して分析すること、個別では見えなかった遭難要因が見えてくる可能性がある。遭難やその態様につながる要因を洗い出す統計的手法は医学では「疫学的方法」と呼ばれる。疫学的方法は、臨床的方法のように「これが原因だったのですね。」と明確には言えないものの、人の目と頭では見つけ出せない遭難につながる要因を見つけ出せる可能性がある。まだ公衆衛生が十二分に発達していない19世紀のイギリスで、コレラ罹患者を地図上にプロットするという疫学的方法で、ある井戸水が原因であること、コレラが経口感染する疾病であることが明確になったことは有名である（ジョンソン、2006/2007）。

国立登山研修所では、遭難者の多くが未組織登山者であり、その漸増傾向に歯止めがかかっていない今、登山者に関わる現状把握と統計的分析の重要性を認識し、昨年度より調査専門委員会の下に調査研究部会を設置した。そして、警察庁と遭難数の多い長野県から公表されている山岳遭難の元データを入手し・分析することで、今後の予防的遭難対策につながる提言を行うことを計画した。今回発表したのは、それによって分析されたデータである。このデータ収集と分析の経緯およびデータの詳細は、本誌「山岳遭難データの分析に至る経緯」をご覧ください。

本稿では、データ分析から得られた2021 - 2023年の遭難傾向、その観点から講義を行った著者と、運

2. 登山界の現状と課題

動生理学を専門とする安藤真由子氏の発表概要、およびその後の著者と安藤氏の対談のポイントについて報告する。

2. 山岳遭難データ分析から見てきたもの

データ分析の結果と午前中に発表された2024年の山岳遭難の概況をまとめると、以下のようになる。

- ①1990年代後半以来の遭難漸増傾向は頭打ち（？）、
- ②遭難数の年代ピークは完全に70歳代に移行した、
- ③道迷い遭難率の顕著な減少傾向、④転倒・疲労の漸増傾向と若年への広がり。

①遭難の漸増傾向の頭打ち：これまでも東日本大震災、新型コロナウイルスの流行など、前年に比べて遭難数の減少がみられた年はあったものの、基本的には1990年以降遭難数は漸増を続けていた。原因となる明確な事象が見当たらないにもかかわらず、遭難数は200人以上減少している。低下傾向が続くのかどうかは、今後数年の検証が必要であり、その意味で「（？）」を附記した。

②遭難数のピークは完全に70歳代に移行：年代別遭難数は、この20年かけて概ね50歳代から70歳代に移行した。これは人口動態や社会生活基本調査のデータと対照すると、団塊の世代の登山者が多く、そのために遭難数も多いという実態があり、それが団塊世代の加齢にともない年代別遭難数にも影響していると言える。高齢化に伴い登山をやめる登山者もいるであろう。①の指摘はその影響も考えられるが、今後も人口動態の遭難への影響については注意深い確認が必要であろう。

③道迷い遭難率の顕著な減少：概ね40%弱であった道迷い遭難は、コロナ期の2020年に約44%にまで上昇した。これは都道府県を超えた移動への自粛が求められる中で、道迷い遭難の多かった近郊での遭難が増えたためだと考えられる。その後この数値は

下がり続け、23年には35%を割った。このころから道迷い遭難の減少傾向を感知していたが、これが今回公表された2024年の概況では30.4%となっている。ここまで比率が下がるのは21世紀になって初めてのことである。

道迷い遭難の減少については、スマホ等の地図アプリの利用方法の普及が考えられる。スマホの高い普及率も、地図アプリの利用もすでに10年近くの歴史がある。しかし、これまで道迷いの顕著な減少は見られなかった。「スマホを所持しているのに道迷い遭難」という事故報告は、山岳雑誌等でも見られた。著者もナビゲーションスキル講習では常々「地図アプリをインストールしているだけではお守りと一緒」と、利用スキルを身に着ける重要性を指摘してきた。デバイスの普及から時間を経て、ようやく道迷い遭難を防ぐための利用スキルが定着してきたのかもしれない。

「利用スキルの定着が道迷い減少の要因」というのは推論ではある。しかし、それを傍証するデータも得られている。道迷い遭難数の減少が若年層（概ね20～40歳代）に顕著なことである。ユーザーインターフェースが貧弱なスマホは、正直かなり使い込まないと、緊急時にやりたいことができない。表示された地図を読解できなければ現在地が分かっても、戻り方も確証が持てない。高齢層への簡便な利用スキルの普及が必要だろう。

④の転倒・疲労の漸増傾向と若年移行：コロナ禍以降、疲労と転倒による遭難数が漸増している。これまでも転倒は高山で60歳代を中心に多い遭難態様であったが、2024年には全国の遭難の20%を占めるまでになった。転倒と滑落を合計すると、減少した道迷いを超えた数となる。また、40～50歳代の転倒による遭難数が増えているのも目立つ。筋力や平衡感覚の衰えや不整地を歩く技術の低下などがその

要因として考えられる。データ分析に続く講義として、安藤氏をお招きした大きな理由は、この転倒・疲労の増加傾向にある。

3. 「転滑落・転倒防止に役立つトレーニング」(安藤 真由子氏講義)

前項で指摘したように、コロナ禍以後、転倒による遭難が増えている。さらに、転倒は滑落につながることもある。また、転倒による遭難は全国的に見ても40歳すぎから増加する傾向にある。安藤氏には、転倒とそこから派生する転滑落を予防するためのトレーニングの考え方やその実施方法について、運動生理学的な視点から講義をいただいた。

安藤氏の講演の内容を要約すれば、「中高年の多くが、よりレベルアップした山にいきたいと思っているが、それに対するトレーニングは不足しており、膝の痛みなどに悩まされている登山者は増えている。対策には、適切なトレーニングが欠かせない」ということになる。では適切なトレーニングとはなんだろうか。

安藤氏の講演を私なりに理解すれば、①目標とする山を決め、その体力的な難易度に合わせた長期のトレーニングプランを立てること、②転倒防止のためには、山に行くことに加え、筋力と敏捷性(アジリティー)を鍛えること、③登山力(持久力)とアジリティーには運動生理学的な指標があり、それを活用すること、となる。

①については、たとえば北アルプスの燕岳(2,763m)に1泊2日で登るのであれば、概ね半年かけて、低山登山(標高差500m)からスタートし月2〜4回登り、初夏には標高差1,000mの登山も入れ、高山の登山も経験したり、二日間連続の日帰り登山を経験して本番に臨むといった長期プランが必要である。

②については、男性では50歳代以降から、女性で

はほぼ全年齢で、一般人よりも脚筋力があるが、コースタイムで登るための筋力が不足していることや、50歳すぎから敏捷性を示す指標の低下が顕著に始まるため、敏捷性を鍛えるアジリティートレーニングも取り入れる必要性が紹介された。筋力の不足は登山時の膝の痛みや踏ん張りが利かないことにつながる。また、転倒の始点は平衡感覚や筋力だと思われるが、転びそうになった時、けがに至る転倒を避けられるかどうかは、多分に敏捷性が影響していると思われる。体力と転倒との関係については、研究も実践も途上だと感じた。

③の持久力については、きつく感じる手前のペースで1時間に登れる標高差が指標となることが紹介された。これらの詳細は、安藤氏の講演で紹介された長野県警察「安全登山safety book」、「『登山体』をつくる秘密のメソッド」(安藤真由子、地球丸)、を参照していただきたい。また敏捷性についても、高さ10cmの踏み台に左右交互に足を素早く乗せる運動がよい指標になることが紹介されていた(詳しくは、宮本ら、2008参照)

4. 参加者オンラインアンケートより

コロナ禍以降お馴染みになったオンラインでのアンケートを今回も実施した。今回のテーマである体力不足、転倒につながる歩き方、地図読図力についての現場の感触(図1〜3)と、それに対する啓発活動の実施状況(図4〜6)を質問した。肯定率(とても思う、ある程度思うの合計)が高いのは読図力で60%を超えている。体力不足が約50%、気になるような歩き方は40%弱と、思ったほど高くない。この結果からだけでは判断できないが、通常時の歩き方では支障があるように見えない人でも、岩がちのところや路面に凹凸が多い場所では思わぬ転倒につながってしまうのかもしれない。

2. 登山界の現状と課題

体力不足については、不足があっても多くの登山者はなんとか下山できてしまうのだろう。遭難実態を見ると、潜在的な課題を抱える登山者は多そうである。

啓発活動等の対策については、いずれの遭難態様も45～50%程度であった。特に転倒防止では「力を入れて」啓発しているという回答が8%と、もっとも少なかった。転倒による遭難の増加はまだ現場でも十分意識されていない現象であり、対策についての自由記述も特別なことは記載されていない。当たり前の積み重ねが重要だとも言えるし、今後も研究の余地があるという解釈も可能だろう。

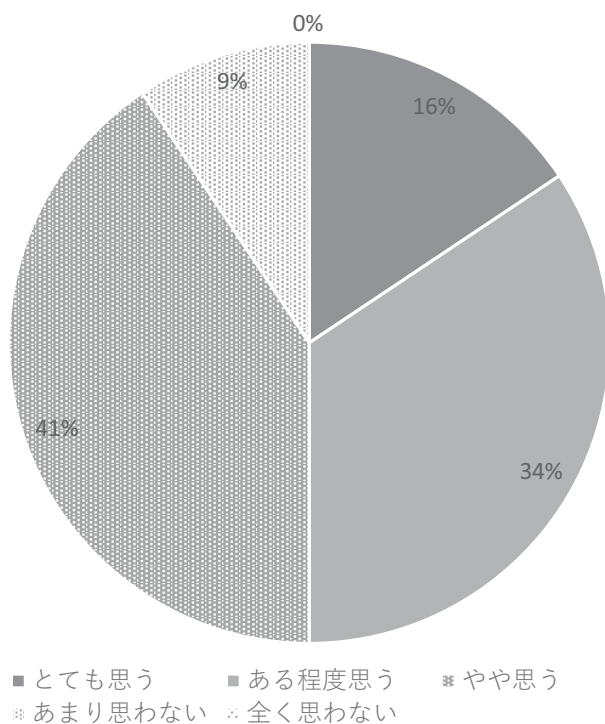


図1：体力に不足を感じさせる登山者が多い

5. パネルディスカッション：山岳遭難のトレンドとこれからの山岳遭難対策

午後の講義とアンケートの回答を踏まえてパネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションでは、著者と安藤氏の講演を踏まえて、近年中高年を中心に増加傾向が顕著な転倒・転滑落を防止す

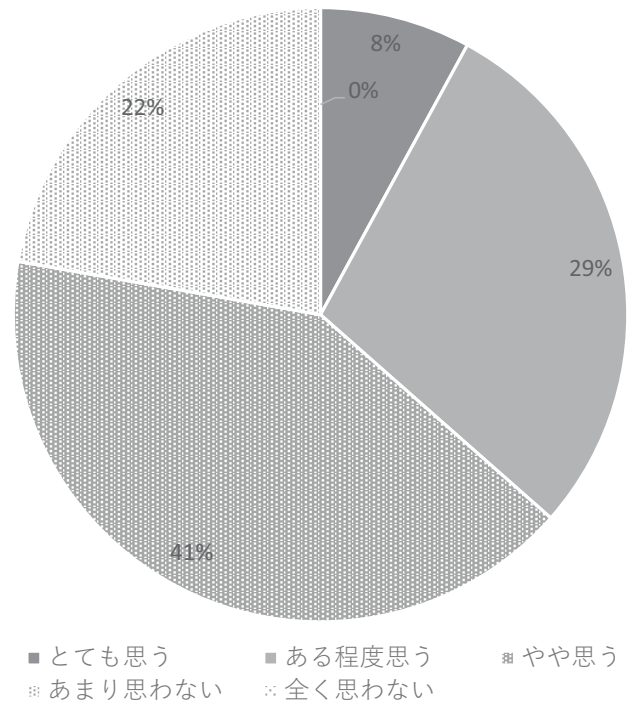


図2：気になるような歩き方をしている登山者を見かける

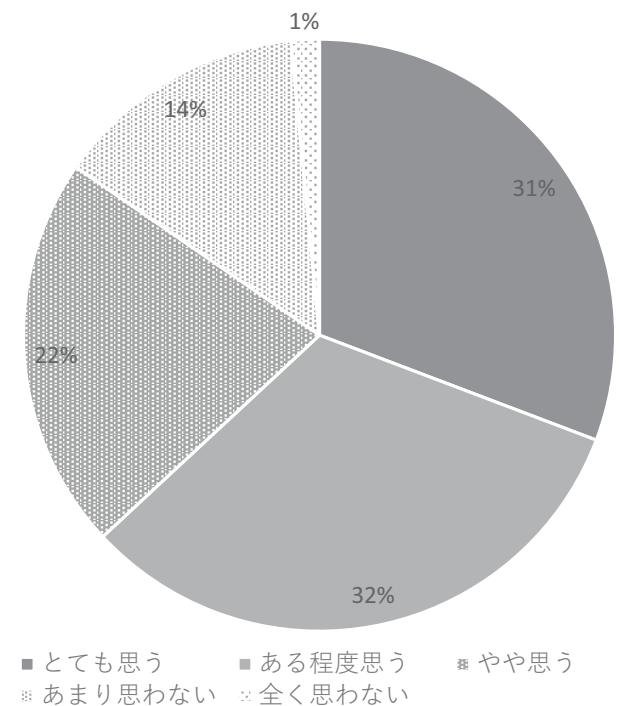


図3：地図読力が不足していると感じさせる登山者が多い

るための方法について深堀した。なお、以下に示すのは当日のディスカッションのメモとそれ以後に著者が考察した内容も含まれているので、当日の発表内容とは齟齬があることをお断りしておく。

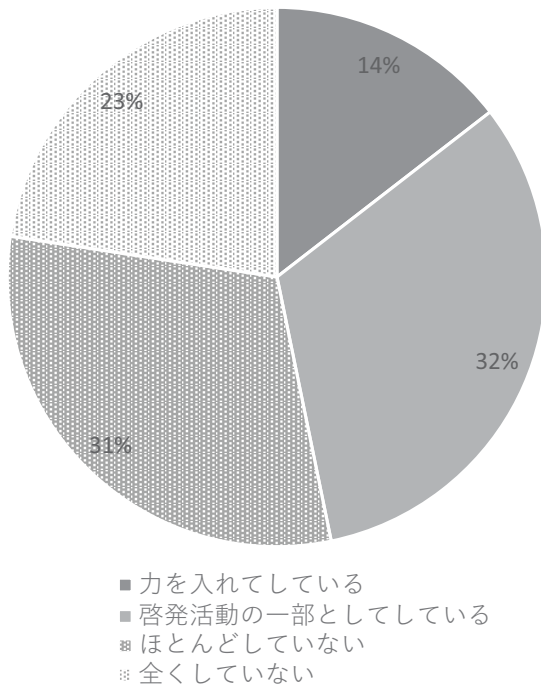


図4：体力不足に対する啓発活動等

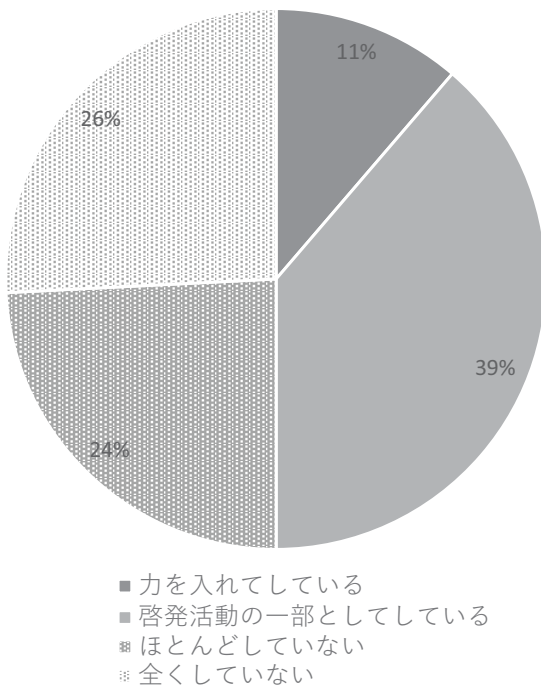


図6：読図・ナビゲーション能力に対する啓発活動

1) 道迷い遭難対策：

データからは、スマホや地図アプリを持つだけでは、遭難防止に十分でないことが伺える。スマホが

活用できる現在でも、読図講習は人気であるが、短期では読図スキルを実用的なレベルに上げることは難しい。地図アプリの機能を確実に活用できるスキルを身に付けておく必要がある。その際、以下の注意が必要である。

①スマホの地図画面は小さい。あらかじめ紙地図や大きな画面で行程の全体像を把握しておくことが望ましい。またエスケープルートなどの検討のためにも、スマホとは別に一覧性に優れた紙地図を持つていくことが重要である。

②地図アプリは現在地把握には優れているが、それだけでは道迷いに対応できない。ログの記録や活用方法を確実に修得し、予定したルートを外れても復帰できるようにしておく必要がある。

③道迷いは、道間違いから始まるが、それがすぐ致命的な事態に至るわけではない。最悪の事態に至るプロセスを知ること、どのような対策がどの段階に有効かを知ることができる。

2) 転倒防止対策

転倒に関しては、敏捷性やバランスなどの体力的な要素の影響が大きい。テストでこれらについての客観的指標を得ることができるので、まずは自分の敏捷性のレベルを知ることが重要である。そのうえでバランスを鍛える簡易な方法として片足立ちがある。敏捷性を確認する方法については、宮本ら（2008）を参照されたい。

転倒に係わるもう一つの要因として、下り方の技術の問題が安藤氏より指摘された。視野やどこに足を置くかは、日ごろ無意識のうちにやっているが、あまりうまくない登山者がいることも事実である。簡易な講習やヒントなどが開発され、提供されることが望まれる。

2. 登山界の現状と課題

3) 疲労防止

安藤氏の発表で示されたデータを見る限りでも、一般的な登山者では、やりたい登山をやり遂げる持久力は十分ではない。これまでに山本正嘉氏は、登山のトレーニングとしてウォーキングだけでは十分でないことを指摘してきた。低山ハイキングでも一般に思われているよりかはるかに強度の高い運動である。

運動生理学の知見を活用すれば、目的とする登山のためのトレーニング強度や量には明確な指針が得られる。コース側の指標は、長野を中心に公表されている「山のグレーディング」であるが、コースの体力的な指標のみであればコース定数を計算することで把握することができる。コース定数は正確さを期したやや複雑な指標だが、簡便には距離に登距離(km単位)を10倍して足すだけでもコースのボリュームをある程度把握することができる。簡便な方法による計算値を確認すると、実際のコース定数の10%減くらいの数値になる。こうした指針の周知と実践での活用は、疲労遭難減少だけでなく、山の楽しみを享受するうえでも重要だろう。

当日指摘されたもう一つの要因として、歩行技術の問題が挙げられる。歩行技術やペースを調整すれば同じ体力でも疲労の程度を抑えることが可能であり、同時にそれは転倒防止にもつながる。この点については、当日の議論の中でも十分に掘り下げるだけの材料がなかった。どのようなペースで歩けばより疲労しにくいかについての運動生理学的な研究が待たれる。

ともに、このようなデータ分析に基づく遭難対策も欠かせない。現場の医師は日々人の命を救っている。それに対して山中伸弥氏は、ノーベル賞後に忙しくなる中で、研究への傾注の必要性を訴えて「(基礎研究で) まだ一人も救っていない」と言ったそう。しかし、彼の研究がいずれは多くの人を救うことは、誰も疑問を持たないだろう。今回の国立登山研修所のデータ分析とその発表が、同様の評価を受ける日が来ることを願う。

<参考文献>

- 村越真 (2016) なぜ遭難するのか？—2012～2013年の山岳遭難データによる疫学的分析」、ヤマケイ登山総合研究所編『登山白書2016』、山と溪谷社、pp.204-210
- 村越真・渡邊雄二・東秀訓・高嶋和彦 (2013) 2010年の登山目的による山岳遭難の実態、野外教育研究、16(1)、45-56
- ジョンソン.S (矢野真千子訳) (2006/2007) 感染地図—歴史を変えた未知の病原菌、河出書房新社
- 宮本謙三・竹林秀晃ら (2008) 加齢による敏捷性機能の変化過程—Ten Step Test を用いて—、理学療法学、35(2)、35-41
- 村越真 (2010) 2007年本州中部における登山目的による山岳遭難の実態、体育学研究、55、177-191
- 長野県警察 (2025) 安全登山safety book
- 安藤真由子 (2015) 「登山体」をつくる秘密のメソッド」、地球丸

6. おしまいに

今年の全国山岳遭難対策協議会シンポジウムは、データ分析という地味なテーマとなった。しかし、遭難とそのダメージを減らすためには現場の活動と

ツキノワグマ対策「with Bear」時代の登山術Ⅱ

～立山地域および薬師岳方面における近年の出没状況と軋轢～

白石 俊 明（富山県立山カルデラ砂防博物館）

1. はじめに

2025年は、富山県内におけるツキノワグマの出没件数が過去10年間で最多となり、初夏から秋にかけては、コア生息地である立山地域および薬師岳方面の山地帯・高山帯でも例年以上に目撃情報が集中した年であった。

特に立山室堂平周辺では、人に対する警戒心が低下した個体が継続的に確認され、観光客を含む人とツキノワグマとの距離がこれまでにないほど縮まった。また、薬師峠キャンプ場（太郎平）や折立登山口では、登山者の食料をツキノワグマが持ち去る事例が発生し、人的被害につながる危険性が高まった。

これらの状況を受け、立山室堂平では環境省職員・立山町職員・猟友会メンバーが常駐して警戒にあたり、見通しが悪く危険が予測される登山道の一時閉鎖措置が取られた。薬師峠キャンプ場においても事故防止のため即日閉鎖され、その後の再開は閉山まで行われなかった。

本報告では、近年確認された立山地域および薬師岳方面におけるツキノワグマ出没事例を挙げながら、クマの行動傾向と軋轢の特徴、登山者や山岳域で活動する施設職員・管理者に実践していただきたい行動・対策について述べる。

2-1. 立山地域の出没状況

2025年7月以降、室堂周辺でツキノワグマの目撃が多発し、環境省は9月1日から室堂に職員を常駐させる対応を取った。9月だけで35件の通報があり、ほとんどが特定の数頭によるものと推測された。特定の数頭とは親子連れ（2頭）と、1頭で行動する体格の立派な成獣であった。行動は主に「植物の実や葉を食べる」「採食場所を求めて移動する」「休息する」などで、人への積極的接近は確認されていないが、人を避ける行動も積極的にはとらなかった。



折立登山口で頻繁に目撃されたクマ。駐車場とキャンプ場の周囲には電気柵を設置。（2025.7.23_日中 撮影：SK）

2. 登山界の現状と課題

■個別事例

8月14日には、室堂平のみくりが池を泳ぐ姿が確認された。



室堂平みくりが池で泳ぐクマ。

(2025.8.14_16:00頃 出典：富山県警察山岳警備隊X)

9月15日には、観光客の目の前を横切る成獣が情報カメラに記録され、遊歩道の一部を一時閉鎖するなど、観光客の安全確保が必要な状況となった。

2023年、2024年の夏山シーズンにも、人馴れしたクマが人目を気にすることなく採食・移動・休息を登山道でたびたび行っていた。

■提案（立山地域）

- 避難・誘導訓練の実施と定例化
- クマへの接近禁止および撮影行為の自粛（クマの人馴れを助長する行為であるため）

- 雷鳥沢キャンプ場への食料保管庫設置、ゴミ一時預かり制度導入
- AIカメラ等を用いたクマ監視システムの導入
- 観光客向けクマ対策教室の常時開催
- クマ対策官の雇用・制度化、追い払いが可能な体制整備
- 宿泊施設等における雑排水・食物残渣の管理徹底（潜在的餌付けの根絶）



立山ノ越付近の登山道を徘徊するクマ。(2024.9.3_10:30頃 出典：富山県警察山岳警備隊X)

2-2. 薬師岳方面・有峰地域の状況

2025年8月19日、薬師峠キャンプ場でツキノワグマが登山者のテント1張と食料を持ち去る事例、食事の場所へ侵入し登山者の食料を採食する被害が発生した。

この個体は人由来の食べ物に執着している可能性が考えられ再訪と再発の危険があることから、当日のうちにキャンプ場は閉鎖された。

同時期に周辺登山道でも複数回クマの居座りが確認されており、8月3～4日には登山者が滞留して渋滞が起きた事例、クマが立ち去るのを待ったため登山者の山小屋到着時刻が大幅に遅れる事例などがあった。環境省・県（警察、自然保護課）・山小屋では山行計画の見直し・複数人での行動・クマ対策装備の徹底などの事故防止策を呼びかけた。



薬師峠キャンプ場で登山者の食料を漁るクマ。（2025.8.19_17:00頃 撮影：登山者）

■個別事例

8月19日17時前頃、テント内で読書中であった登山者が、テント内に顔を入れてきたツキノワグマ1頭に驚き、反対側の出口からテント外へ待避した。クマはテントを荷物ごとすぐ横のササやぶへ約5m引き込み、何かを採食し、しばらくして立ち去った。

約30分後、富山県警察山岳警備隊員および山小屋職員が現場に到着し、ササやぶ内に残されたテントを回収した。やぶ内には荷物が散逸している可能性

があったが、見通しが悪く危険性を考慮した結果、搜索と回収を断念した。

その後、キャンプ場内の別の場所に、同一個体と推測される中型のツキノワグマが堂々と現れた。テント横で食事中だった登山者が待避すると、クマはそのまま食料を漁り始めた。山岳警備隊員と山小屋職員がクマ撃退スプレーを使用しながらクマに接近したところ、クマはやぶへ逃走した。しかし暫くは様子をうかがい、隙を見ては近づこうとする執着した様子が観察された。当時キャンプ場には約50名の登山者が滞在しており、山岳警備隊と山小屋職員らは近隣山小屋への移動を呼びかけた。多くの登山者は協力的であったが、数組はテント場に残留した。しかし当日の夜には、残っていた登山者も自主的に山小屋へ移動した。なお、周辺には親仔グマ（大型1頭と小型1頭）1組も居ついていたが、遠巻きに様子をうかがうのみで、人への接近、食料や荷物を持ち去る・奪い取る行動は確認されなかった。

■その後の対応と観察結果

当時、このキャンプ場周辺には計3頭のクマが存在していたことが目撃情報から明らかとなっている。登山者が増加する夏山シーズンはツキノワグマの自然界の食物が乏しい端境期にあたることから、人由来の食物を目当てにキャンプ場を頻繁に訪れていた可能性もある。被害発生後、野営場管理者の富山県自然保護課はキャンプ場を閉鎖し、富山県立山カルデラ砂防博物館と協力し、通信式AI自動カメラによる常時監視を実施した。その結果、閉山までの間にクマの再訪は確認されなかった。このことから、人由来の食物とその臭いがなければ、クマは再訪しない可能性が高いこと、また誘引物の除去と適切な管理が事故防止に不可欠であることが示唆された。

2. 登山界の現状と課題

■提案（薬師岳方面、有峰地域）

- ・テント内への食料と食物残渣の保管禁止
- ・食料、ゴミの入った荷物を野外へ一時置きする「デポ」の禁止
- ・日没後、日の出前の野外調理の禁止
- ・テント場への食料保管庫設置、ゴミ一時預かり制度の導入、電気柵で防護した調理可能区域の設定
- ・見知らぬ登山者同士でも声を掛け合い、その場で複数人パーティーを組むことの推奨
- ・テント場、登山口、休憩場所周辺のササやぶの刈り払い、見通し確保
- ・クマへの接近禁止と撮影行為の自粛（クマの人馴れを助長する行為であるため）
- ・有峰ビジターセンター等でのクマ対策普及活動の強化
- ・無防備、無警戒の傾向が強い折立登山口直通バス利用者への注意喚起
- ・クマ対策官の雇用・制度化、追い払いが可能な体制整備

3. 「with Bear」時代の装備・知識・訓練

クマの生息域が極端に縮小していた昭和時代、「登山中のクマ遭遇」は大変珍しい話題であつたろう。その後、平成時代に（東北・中部地方を中心に）本州の大部分の山域でクマの生息状況は回復し、令和となった今日では、クマと人の生活圏は隣り合い、時に重複し、「with Bear」の新しい生活様式が日常生活でも必要な時代に突入した。かつてクマ空白域だった頃に登った山を再訪したところ、「熊出没注意」の看板を見かけ驚くこともあるだろう。立山山麓においてはクマとの遭遇は低山や丘陵でもごく普通の出来事で、立山駅前のロータリー内や、スキー場周辺のみズバショウ観察地でクマの糞や採食痕跡

が確認されていて、観光客や登山者による目撃も時折ある。目撃事例は、言い換えればその多くがニアミスであり、僅かでも位置関係やタイミングが違えば「バツタリ遭遇」にもなり得た看過できないインシデントである。「こんな所にクマは棲んでいない。こんな時間帯にクマは出てこない。」といった過去の常識には縛られず、現在のクマの生息状況と生態をつぶさに学び、急増しているクマ遭遇をひとりひとりが想定し行動しなければ、登山においてもクマとの軋轢は避けられない。私は経験を積んだ年数分だけ加齢による瞬発力や判断力の低下を実感しており、クマの不意打ちを受けた際に無傷でいられる自信はない。それを補うため、クマ遭遇時に役立つ情報の収集と、装備の見直しを常に心掛けている。そのいくつかを紹介するので、皆様にも積極的に取り入れていただき、安全で楽しい山行や自然とのふれあいを今後も継続していただければ幸いである。

◆「首ガード・うつ伏せ法」で顔を守る

北陸電力(株)が山中で行動する職員等のクマ被害防止を目的に作成した印刷物（抜粋）を紹介する。これには、襲われてしまった際の防御姿勢や出会った時の対応法がまとめられている。

クマの攻撃は、最初の一撃が最も被害が大きいとされる。攻撃されやすい部位は顔や頭、胸などの上半身前面で、引っかかれたり噛まれたりした事例が多い。顔を攻撃され失明や歯を欠損すると社会復帰が困難になる。何としてもそれを防ぐため、クマの攻撃を避けられない状況に陥った時には、『素早く地面にうつ伏せになり、顔と体前面を隠し、急所となる頸部を手で覆って守る「首ガード・うつ伏せ法」を必ず実践』してもらいたい。この時、ヘルメットをかぶり、バックを背負っていれば、体の露出が大幅に減る。植物が主食であるクマには積極的に人を

◆物陰に隠れる「木化け法」

クマと遭遇した際、距離があればクマの行動を注視しつつ後ずさりをし、物陰

クマと遭遇した際、距離があればクマの行動を注視しつつ後ずさりをし、物陰

北陸電力株式会社 技術開発研究所

初版

クマによる
人身被害を
防ぐために

クマにご注意!

ツキノワグマの特徴

耳 人間よりは長い。

鼻 犬の7倍程度良いと言われている。

口 鋭い犬歯や木の実をかみつぶす白歯がある。

足 走る速度は時速40kmと言われる。追いかけられたら、普通の人間は逃げられない。バランス感覚が良く木登りが得意。

手 最大の武器「爪」は常に伸びる。かき爪で、爪に全体重をかけてフェンスなどを登ることができる。引っかかることで失血死する恐れもある。

成獣 体長 120~145cm
体重 40~130kg

クマは1年中、山で暮らしています
採食については以下の通りです

冬眠 冬眠中は何も食べません。冬眠しない熊もいます。

春 ブナなどの新芽、フキ、アザミ、セリなど

夏 ハチ、アリなどの昆虫類、植物類

秋 ブナ、コナラ、クリ、クルミなどの木の实

冬 冬眠

山行 登山者には特に注意

山車 運行中

交尾期 リュックサック、ヘルメット、ラジオ、クマ鈴、ストック

クマから身を守るための装備チェック

① ヘルメット ② リュックサック ③ ストックや傘
④ 音のするもの(クマ鈴・ラジオ・笛など) ⑤ クマ撃退スプレー など
※使用期限を確認すること

クマに遭遇しないために

POINT 1

クマに自分の存在を知らせる

クマ鈴やラジオ、話し声で常にクマに人の存在を知らせましょう。特に、藪や曲がり角・起伏のある場所などの見通しの悪い所や、風や川の音が大きい所では手を叩いたり大声を出すなどクマに存在を知らせ、不意の出会いを避けることが大切です。*＜車から降りる前にクラクションを鳴らし、周囲を警戒しましょう。＞

POINT 2

クマの痕跡に気を付ける

クマの好物であるドングリ類(コナラ・ミズナラ)やクルミ、ミズギ、カキやその周辺には、爪痕や糞、採食の痕跡が残っています。また、木のて枝を手繰り寄せて木の実を食べた跡の“クマ棚”などクマの活動のサインを見逃さないことが重要です。

好物(コナラ・ミズナラ)

鋭い爪痕

大きく太い糞

採食痕(クリ・クルミ)

クマ棚

杉のクマ剥ぎ

もし、クマに遭遇してしまったら

クマは、顔を留めたり、強力な爪で顔部や顔面を叩くなど上半身を攻撃してくるケースが多いです。まずは、落ち着いてクマと視線をそらす、ゆっくり後退することが肝心です。絶対にクマに背を向けて走って逃げてはいけません。

被害を最小限にする行動を

襲われそうになったら

すばやくしゃがんで、大けがをしないための防御姿勢を!!

後ろ手で組んで首を守ります。

リュックサックが背中を守ってくれます。

足を広げて、クマにひっくり返されるのを防ぎます。

足は踏まれるかも……ガマン。

致命傷を免れるため、頸動脈や顔を守る姿勢をとり、クマが立ち去るまで耐えしのぎます。
ヘルメットやリュックサックを身につけることで負傷を軽減することができます。

● 首ガード・うつ伏せ法
うつ伏せで両手を首の後ろで組み、頸動脈と顔を守る。

● クマ撃退スプレー
写真提供：アクトバック

近くで目撃したら

木などの障害物にすばやく隠れましょう。攻撃をかわすこともできます。この時“クマ撃退スプレー”を使うことで逃げるための時間稼ぎにもなります。

傘を持っていたら、すばやく広げて、存在を大きく見せることも有効です。

2. 登山界の現状と課題

にさっと隠れじっと静止する行動が推奨される。この際、背を向けて走ったり、大声で叫ぶなどクマを刺激する行動をとってはいけない。人が物陰に隠れ静止することで、視覚は秀でていないクマは人を認識できなくなったり、人が見えないことでクマが落ち着きを取り戻したりし、クマ自身からの逃避を促す行動変化が期待できる。万が一、クマが突進してきた場合も、立ち木や看板、電柱などの裏側に避難していれば、直線的な突進をかわせたり、打撃のダメージを軽減できたりする。周囲に細い木しかない場合でも、鳥カゴ状の囲いに入るような位置へ逃げ込み身を縮めれば木立が防護柵になる。このような防御法を「木化け法」と称す。普段から、木に化ける（隠れて静止する）場面を想定しながら歩くと良いだろう。

◆「クマ撃退スプレー」は超安価なお守り

クマに襲われたり突進された際に、市販の道具で最も有効な装備とされる。唐辛子から抽出した刺激成分を高圧で8メートル先まで6秒以上にわたり霧状に噴出することで、クマの攻撃を抑制したり、突進を回避できる効果が高まる。登山用品店で2万円程で入手できるものの高価すぎると敬遠されがちだが、決してそうとは思わない。使用可能な期間は4年程度と長く、それを5人組で購入したならば「2万円÷4年÷5人＝1,000円」となる。年間1,000円の負担で複数回の山行を安全安心にできるその費用対効果を前向きに捉えて欲しい。使用期限が切れたスプレーは、山仲間との訓練で使用し、使い方に慣れておくのが良いだろう。スプレーは数回に分けて使用できるが、残量が不足していたり、スプレーの内圧が低下したりし、次に使用した際に霧が遠くまで到達しない場合もあるので、使いかけスプレーの携行には注意を要す。私は、1グループで

2本以上のスプレーを別々の者が携行し、かつ直ぐに取り出せる腰などへ必ず装着することとしている。なお、購入時にはアメリカ合衆国環境保護庁（EPA）が定めた基準（成分、到達距離、噴出時間等）を満たす“EPA認証つき”のスプレー（商標：カウンターアソールト 等）を必ず選んで欲しい。国内生産品の場合、EPA認証品と同等の性能を有する物は2026年3月時点で1種（商標：熊一目散）のみである。軽量化を謳った小型で内容量の少ない物（230ml未満）は対人護身用でクマには流用できない（役に立たない）。また、風上から使用することが推奨されているが、突発的な使用に際し風向きを気にする必要はないことを強調したい。「風上からしか使用できない」と誤解し、この道具が役に立たないかのように揶揄し携行しないことを正当化する意見もあるが、考えなおしていただきたい。

◆「ストック・傘」の活用

クマに出会った際、長い道具を振り回すと、人の存在を早くきづかせたり、体を大きく見せたりすることができ、クマ自ら逃げ出す効果が期待できる。傘は開いて前に突き出せば、更に体を大きく見せられるし、万が一クマに突進されても、最初の一撃を突き出した傘で受けられれば身体への打撃ダメージを大幅に軽減できる。「登山にストックは不要」と考える方も、クマの生息地へ出かける際にはこれらの携行を勧めたい（散歩や児童の登下校には傘が特にお勧め）。

◆「タオル」は常に取り出しやすく

好奇心の強い若グマや、極度に人馴れし食料を狙うクマが、人を追跡する事例が稀にある。そのような時、所持品をクマの前に投げて気を引いた体験談が多々あるが、決して食物を利用してはいけない。

食物をクマに与えた場合「人に近づくと食物が手に入る」という学習をクマにさせてしまうからだ。その場はしのげても、登山道や登山口の様に多くの人が訪れる場所では、餌付いたストーカーグマをいずれ生み出す。クマに対して投げるものは、首に巻いたタオル・帽子・ハンカチ・ティッシュなど、食べることでできない物からやむを得ない状況においては試して欲しい。緊急時には心細い思いをするだろうから、それに備えてクマ撃退スプレーをぜひ装備に加えてもらいたい。

◆「犬連れ」は危険な場合あり

クマは、外敵に出会った際、ヤブにじっと潜みやり過ごす行動を頻繁に行う。人がクマに気付くことなくそこを通過すれば人身被害にはならないが、犬がクマを発見し吠え立てることで、クマを興奮させ襲われたと考えられる事例が複数ある。北陸地域では、クマの秋の重要な食料となるドングリやブナが不作になると、人の生活圏にクマが現れる大量出沒が数年毎に発生している。その様な年には、犬の散歩中に襲われて死傷する人身事故や、庭先の飼い犬がクマに襲われた事例もある。狩猟者が訓練を受けた猟犬を連れて野山を歩き、野犬まがいの犬たちが集落を徘徊していた時代を知らぬ新世代クマにとって、犬はさほど怖くないのだろう。今日、クマ生息地で登山に犬を連れ歩く護身術は、むしろ危険だろう。

◆出発前には現地クマ情報の収集と予習

リスク軽減のため、出発前には天気予報の確認にあわせて、現地のクマ情報や、最新の装備や対策をチェックする習慣を身につけていただきたい。ホームページ等で情報発信を行っている団体の一例を記す。

- ・日本クマネットワーク（JBN）「YouTubeチャンネル。クマスプレーの使い方」ほか
- ・信州ツキノワグマ研究会
- ・日本ツキノワグマ研究所
- ・環境省「北アルプスにはツキノワグマが暮らしています」
「中部山岳公園クマレクチャー『山岳域におけるツキノワグマの生態と対策』」
「中部山岳国立公園におけるツキノワグマ対策関連資料」
- ・富山県生活環境文化部自然保護課「出沒情報地図【クマつぶ】」
- ・富山県警察山岳警備隊X（SNS）
- ・アウトバック（クマ撃退スプレー等の取扱い）
- ・モンベル「山でのもしものに備える、クマ対策アイテム」

謝辞

貴重な写真や目撃情報等の提供、および調査にご協力いただいた以下の方々に厚くお礼申し上げます。（敬称略 順不同）。

泉山茂之 瀧井暁子 後藤優介 佐々木賢二 佐々木かおり 河野さおり 堀井琢道 山野本陽平 飯田 肇 澤田研太 富山県警察山岳警備隊 富山県自然保護課 立山自然保護センター 有峰森林文化村（株）モンベル 岳人編集部 石井スポーツ 信州ツキノワグマ研究会 日本クマネットワーク 北陸電力（株）新価値創造研究所 （株）ほくつう

実物大



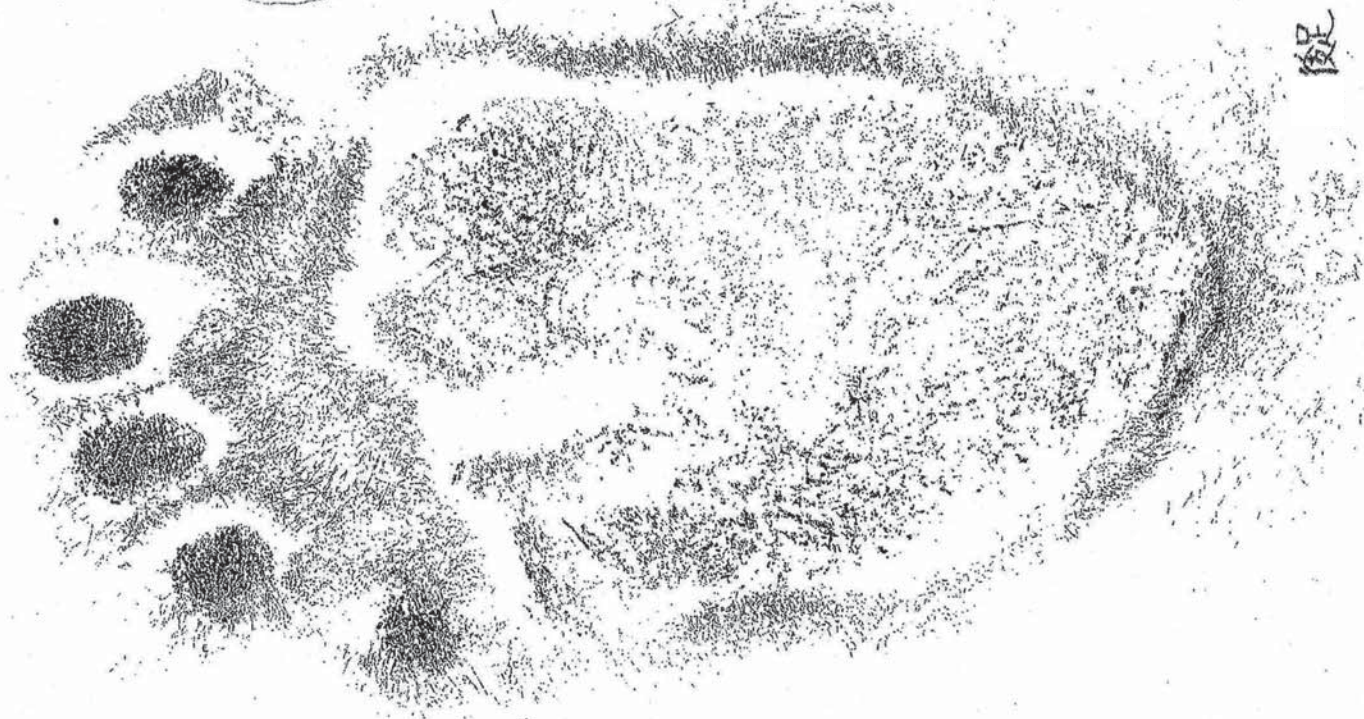
2000. 7. 13

ツキノワグマ (マカブ)

長野県で捕獲

麻酔下でサンプリング採取

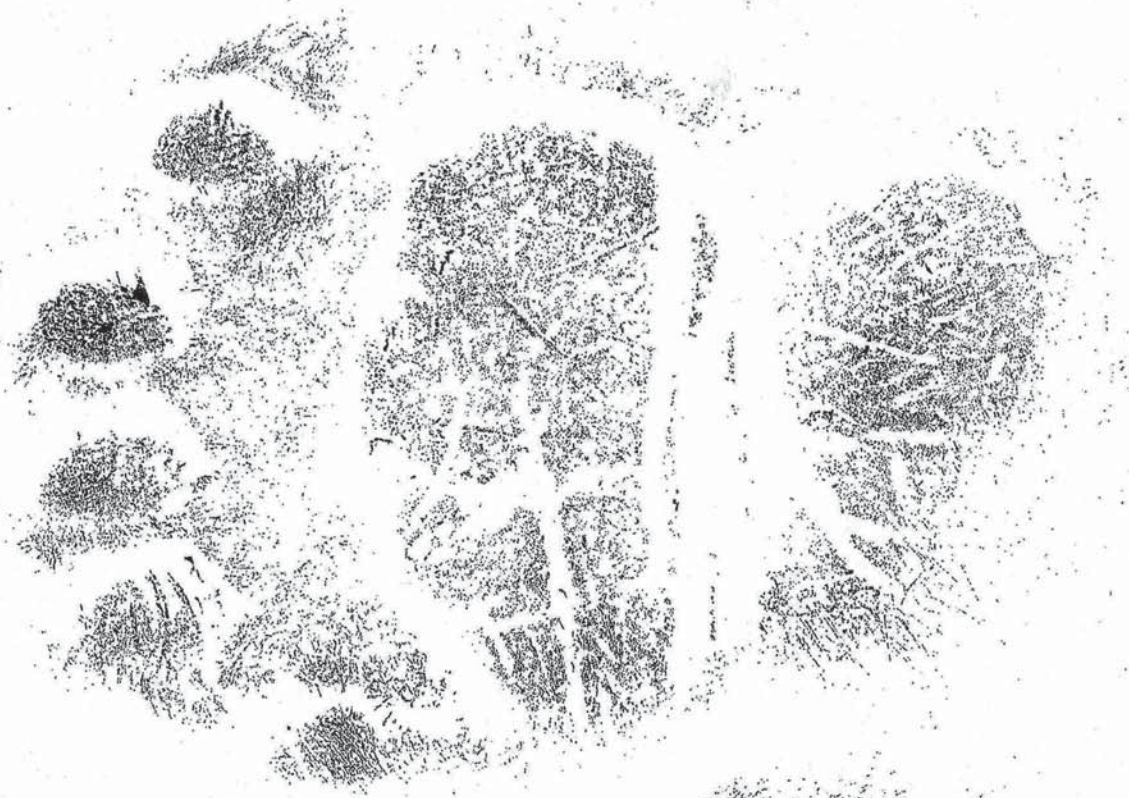
泉山、白石



後足



鼻と口



前足

パキスタンカラコルム Lachet Valley Hasho PeakⅡ East Pillar 初登 ～情報の無い山域において登攀対象を探るプロセスを考える～

鳴 海 玄 希 (ジャパン・アルパイン・ガイド組合)

山 本 大 貴 (関西学院大学山岳会)

鈴 木 雄 大 (THE NORTH FACE ATHLETE、稲門山岳会)

1. 行動概要 (Hasho PeakⅡ 全景と東ピラー登攀ライン)



2. 行動記録

1) 遠征決定からベースキャンプまで

そもそも3人での遠征の話しがでたのは出発の半年前。鈴木と山本はほぼ初顔合わせであった。各自が情報を持ち寄り、興味関心と3人の力量を照らし

合わせながら、対象エリアや山を絞り込んでいく。そんな作業を4か月ほど続け、にわか遠征隊は形になっていった。

3. 海外登山記録

～山本による回想（以降名前のみ）～

鳴海と組むのは、2016年ネパールのカンナチュゴ、2018年インドのセロキシフトワール以来、7年ぶりとなる。お酒に対する揺るぎない姿勢は変わらないが、鈴木や僕の意見の食い違いにも穏やかに耳を傾けるようになり、以前より柔らかさが増したように感じた。

鈴木とは、コロナ禍のWCMで会って以来の再会で、遠征参加は今回が初めてだ。物腰の柔らかい好青年という第一印象に反し、要所では譲らない芯がある。

～鳴海～

いつもは同世代か少し上のパートナーと行く事が

多いヒマラヤ遠征。周りにも歳の近いアルパインクライマーが多く、必然的にパートナーもいつも登っているメンバーになるのだが、今回ついに、ひと回りも違う鈴木雄大と行く事になった。普段は一緒に登ったり滑ったりしているし、オジサン側としては価値観なんかもそんなに変わらず、体力的にもまだまだ!という感じではある。とはいえ向こうは行く先々でことごとく成果を残すイケイケクライマーだ。どんな刺激をもらえるのか、行く前から楽しみではあった。

もう1人のパートナーは山本大貴。僕より4つ年下だ。雄大との歳の差と比べるとほとんど同世代とって差し支えないし、彼とは過去に2回の遠征を



概念図©Himalaya#513より転載

共にしているからか、ジェネレーションギャップ的なものは（少なくともコチラは）ほとんど感じない。

よく考えたら、自分より年下のパートナーと海外遠征を共にしたのも彼が最初であった。この時は山本自身、テクニカルなヒマラヤの壁は初めてだったし、僕は僕でそれまではヒマラヤ経験者との遠征ばかりだったので余裕は無く、一見何にも考えてなさそうな山本に、時折イラついてしまうこともあった（もちろんそれは、彼の何物にも動じず、細かい事を気にしない、極めて僻地、高所向けの性分の現れでもあった）。

行き先の候補には、もっと標高が高い山、もっとアプローチが面倒なエリアの山もあったが、3人の、いや、主に山本と僕の「仕事や家族」との折り合いをつける必要があった。雄大に「この山いけますね。行くなら2ヶ月ですね」と言われても、オジサンチームは家庭や仕事の事情があった。ジェネレーションギャップ、とは違うかもしれないが、「山を決める自由度が若干落ちる」と言うのは事実である。

具体的な登攀対象としては、鈴木と鳴海が標高6,000~6,500mのミックス壁が含まれる未踏ルート、山本はより垂直に近いビッグウォールを素手でフリークライミングしながら山頂まで突き上げる山を候補として挙げていた。そのような対象がラチットバレーに眠っていそうだった。

今回訪れたラチットバレーは、パキスタン北東部の登山基地となる都市、スカルドから東に約160kmジープで移動し、さらにラチット村から徒歩で2日程の行程となる。インド国境にも程近く、そのため近年まで軍事活動以外の入域許可が出ることは稀で、登山隊が訪れることはなかった。過去にこの山域を訪れたのは2015年と2018年。ポーランド隊とアメリカ・ベルギー隊によるもの以外、記録は見当たらない。今回我々も2つのエージェントに相見積もりを

取ったが、一つのエージェントは許可が取れるかどうか分からない、取れたとしてもリエゾンが必要かもしれない（つまり予算は跳ね上がる）と言うものであった。結果的に我々が使った大手エージェントは政治力もあり、歴史も古いためか、なんとなく「適当に」やってくれた感があった。

一応の登攀候補は絞りつつも、現実的には行っただけから対象を模索するスタイルとなった。その中で、ミックスクライミング的な対象が見つかる可能性も考えられたので、BCへは、ポーターレッジからダブルアックス、モノポイントクランポンまで、どんなジャンルのクライミングに直面しても選択肢を残しておけるように全て持ち込んだ。

左右に聳える無数の岩壁を見上げながらの荒い運転を終え、ラチット村から情報の少ない溪谷へと入っていく。ポーターとの一悶着を繰り返しながら進み、二日間のキャラバンでBC適地らしき4250メートルにたどり着いた。

2) 高所順応と登攀対象決定のプロセス

数日後、高所順応へ出発する。未知の氷河なので、登攀対象を探し出す偵察の意味も大きい3泊4日となる。

元々の有力候補であったChangi IIであったが、本来、硬く質のよい岩は遠目からでも節理やラインの可能性をある程度読み取ることができる。しかし、この壁は黒々としており、節理も乏しそうだった。大きなスラブ帯に行く手を遮られる可能性が十二分にあった。氷河横断の危険度、そして南壁の登攀可能性。どちらも無理を押し通してまで当初の目的Changi II南壁に固執する理由はなかった。結論はすぐに出て、ここまでの道中で目にしていた、別の候補へ偵察に向かうことにした。

その候補とは、さらに数キロ以上先に聳えるHasho

3. 海外登山記録

Peak II と、行きのキャラバンで割と近くに（といっても双眼鏡を使って、まあまあ見える程度）見えた通称「オーガ」という、2015年のポーランド隊が入山・トライした6,100mクラスの未踏峰であった。

まずはHasho Peak II 方面へ偵察に行くが、近づくほどに岩の色、クラックの走り方、雪の付着具合……山頂へはダイレクトに伸びているものの、快適なクライミングとは程遠く思えた。

しかし東ピラーだけは、安全面や登攀内容を考慮しても、納得できるラインであった。下部はヨセミテライクな花崗岩を従え、上部は比較的簡単そうな雪のセクションが確認できる。

5,200mの順応キャンプから見た感じ、落下物や雪崩などのハザードは、周辺の壁に比べると低そうだ。

～鳴海～

僕の印象は「壁は良さそうだしクライミングは面白そうだ、ただスケールが少し小さいかな。他の候補も見てもいいかな」という感じだ。山本は結構気に入っていきそうな感じ。雄大の食指はオーガにいてるな、という感じだ。

いずれにしろイマイチ決定打に欠ける候補群だったため、一度全ての荷物を持ってベースへと撤収することにした。

～鈴木～

行きによく見えていたオーガのこれ以上ないほどに鋭利な山容と、凹角にクラックが都合よく走っているような雰囲気はやはり魅力的に感じられた。オーガを登ることになれば、北面にも位置しているため、よりアックスやクランポンを使ったミックス的な対象となり、8割以上が素手で登れそうなHasho Peak II よりは、気合いも日数も必要である。でもこのまま放ってはおけない山だ。そんな気にさせられるような壁であった。たとえ遠方から推察して可能性が低かったとしても、麓まで行けば「これはいけ

る」と変わることもある。

2人は、私よりはオーガの登攀可能性を低く見積もっていたようで、なかなか偵察の実行には即決という感じではなかった。というのも、特に玄希さんは私より12歳上で、ヒマラヤや山全般の経験値も高く、未踏壁を見ただけで登れるかどうか判断してきた経験も豊富である。わざわざ膨大な労力を使ってまで、0～40%程度の登攀可能性を探りに行くのは腰が重そうであった。加えて山本さんは、去年までネパールで氷雪壁系に通っていたので、どちらかというと今年はこの大岩壁が無数にあるエリアでアルパインロックをやりたい気持ちもわかった。しかし、オーガがこのエリア一帯で最も魅力的なもの事実であり、最終的にトライしないことになったとしても、とりあえずは可能性を探りに行こうと賛成してくれた。

～鳴海～

エリアに入って最初に目につくのはオーガである。エリア最高峰であり、鋭利で弱点の無い山容が目を引き。ポーランド隊は顕著なクーロアールを稜線まで登っているが、どう見てもそこから先が大変そうであった。

クーロアールの右手、北東面にもしも節理があれ



ベースキャンプ。奥にはポーランド隊がトライした魅力的な未踏峰も見える

ば登れるかもしれないが、色は全体的にどす黒かった。過去の経験から、基本的に僻地の花崗岩の岩質は所謂「ゴールデングラナイト」、黄金色に輝く少し茶色味があったものが良いことが多く、逆に黒っぽいものは脆く、節理が少ないものが多いと信じていた。オーガの北東面は明らかに後者であり、斜面方位、標高帯からも岩質は低いと見ていた。また傾斜も強い。一方でポーランド隊が登ったクーロアールは東面にあり、登るには日射によるハザードが高そうだし気温が高すぎと思った。「カッコいいけどこりゃ無理だなあ」と言うのが僕の印象であった。しかし雄大はやる気満々であった。「もうあれに決定、ベース下げちゃいましょう」と言う。山本は口をパクパクさせながらにも言わない。「とりあえず見に行ってから決めよう」と僕。

確かに可能性は低いと思った。しかし、経験あるが故に「これは無理」と決めつけてしまうのは可能性の抹殺にもなりうる、と言うのは過去の経験から知っている。

「これは厳しいな」

オーガの基部に立った瞬間、思わずそんな言葉が漏れた。岩が脆く、かつ遠目に見て想像していたのと比べクラックが非常に少なかった。3日前の降雪が緩傾斜帯に薄く乗り、ただでさえ渋いラインに、さらに重い影を落としている。日中の気温で溶けた雪は岩棚を伝い、細い氷柱となって垂れ下がり、壁がどれほど湿っているかを雄弁に物語っていた。

～山本～

尺取虫のようにじわじわと高度を稼ぐことは、技術的にはできるのかもしれない。だが、今年はそういう登りを求めている。昨年、陽の当たらない北面でひたすら耐え続けるように登った反動が、まだ身体に残っていた。できることなら、もっと乾き切った岩を、気持ちよく繋いでいきたいかった。

本命はHasho Peak II。壁のスケール、状態、内容。そこに三人それぞれの嗜好や、チームとしての総合力をあわせて考えると、もっとも妥当なのはあの壁だと、内心では考えていた。

ただ、雄大の思いもある。候補のひとつであるこの壁を自分の目で確かめるために、丸々二日歩いた。遠回りではあったが、納得するためには必要な行程だった。気持ちは驚くほど軽かった。後ろ髪を引かれていた可能性を、一つ減らせたこと。

そして、登るべき山が、ようやく“ひとつ”に絞れたこと。迷いが減った分、足取りは軽く前へと押し出してくれた。

～鳴海～

この偵察行を無駄だとは全く思っていない。むしろ、3人、特にこの壁への想いの強かった雄大含め、全員が心から納得したし、それこそがチームにとって重要であったように思う。今考えると、この偵察行のおかげで世代も経験も異なる3人がまとまったような気もする。

～鈴木～

この課題は死を覚悟で登る未来のボールドなアルパインクライマーに委ねよう。でも選択肢を潰すことも、開拓が一步進んだことを意味する。ここまで来たことは無意味ではない。何より最も魅力ある山



ルート1ピッチ目のルーフクラックと格闘する鈴木雄大

3. 海外登山記録

に一切未練を残すことなく、Hasho PeakⅡに向かえる態勢を全員でつくれたことは成果であった。

いくつかの目ぼしいピークへの偵察を繰り返しながらの順応も5,400メートルまで完了し、未踏の氷河も探索できたので、一応の成果はあった。かなり遠回りをしたが、私達の狙いはHasho PeakⅡに定まった。

「課題探し」。これが未踏のクライミングをする上で一番難しい。それはGoogle EarthやAlpine Journalの写真をチェックするだけで運良く完結する事もあれば、今回のように原始的に歩き回らないといけないことも多い。

数日の雨をベースキャンプでやり過ごし、順化で使った道を再び歩き直してABCへ。やっとのことで本気トライへ漕ぎ着けた。

3) 登攀

スパッと切れ込んだ美しいクラックの見た目とは裏腹に、その手は汚い砂で覆われ、5000メートルを越える高所も相まって直ぐにパンプしてしまいそうになる。エイドも交えながら、剥がれそうな泥つきクラックを優しく押さえつけたり、踏んだりしながら、順調に高度を稼ぐ。



3ピッチ目、クラックの泥を掻き出し前進する

～鳴海～

15時頃、ビレイ点を出る山本に「ビバーク地良いのがあったらそこに泊まろう」と僕が声をかける。若い頃は暗くなっても進み続けることがあったが、今は休養の大切さを知っている。それに細い節理にプロテクションが取れるかどうか肝のロッククライミングで、暗闇の登攀は無駄が多すぎる。日没2時間前にはビバーク地の事を考えないと、いい所を見つけれられるチャンスは限られるだろう。

「いいのありましたよ! 多分座れる!!」嬉しそうに山本が叫んだ。そうか良かったとフォローして行くと、そこはとんでも無く狭い岩の隙間でとてつもなく窮屈そうだ。彼のビバーク地のハードルはとてつもなく低いらしい。



岩風呂のような初日のビバーク地

幅60cm × 200cmの“バスタブ状”の窪地に2人。そしてもう1人は、幅40cm・傾斜した“棚”と呼ぶには心もとないスペースで何とか横になれそうだった。ビバーク採点なら30点。しかし贅沢は言えない。暗闇が訪れる前にもう1ピッチ登って上部を確認したが、先ほどの30点サイトこそ今夜の正解だった。岩に挟まれながら、朝起きるとあちこちが痛い、何となく少し回復した感じもする。5,500メートルだった。

二日目は少し傾斜も落ちる。詰まないように慎重なルートファインディングをしながらも、前日より

もペースは上がり、少し同時登攀をしたのち、やがて垂直のミックスタイプのセクションへ。この辺りは岩質もかなり良くなってきて、シャモニーのようなクライミングを楽しめた。パキスタンの辺境で、5,500メートル地点に聳える上質な花崗岩をスピーディーに越えていく。5.7～9 程度のムーブではあるが、プロテクションを探したり、いいテラスでピッチを切ったり、頭をフル回転させながら登っていく素晴らしいピッチの連続だ。



シャモニーのような三ツ星ピッチを登る鳴海玄希

5 ピッチほど登り、一筋の雪のルンゼに合流する。3 時を回り、全行程を通して最も平らな雪面に乗り上げた。山頂を見上げると、パキスタンで毎回苦勞させられるテカテカの氷壁が待ち構えている。今から登りだすと確実に暗闇の中での行動となるので、まだ陽はあったが、焦らずにビバークする。登ってきたのはずっと岩だったが、流石にカラコルムの6,000m 付近でのビバークは体が芯から冷え切り、深夜2 時を過ぎた辺りからは、足先をずっと動かししていないと耐えられない程だった。

登攀3 日目、今日も快晴。当初の戦略通り、一番硬い靴とクランポン、そして2 本のアックスを持っている山本がここから山頂まで全てリードで、鳴海と鈴木は軽量化したスカルパのリベレテック3.0 という柔らかい靴で強引にフォローをする。クランポンも柔らかく、アックスもアルミ製の片手しか持っ

てきていないので、到底リードはできない。ただ、氷質がしっかりとしたブルーアイスだったので、上からスクリー2 本で確保されていれば安心して登ることができた。

4、5 ピッチ程度ひたすら同じ動きを繰り返し、脹脛が痛くなってきたところで、前方の視界も開けた。これ以上ない快晴無風の素晴らしいコンディションで、Hasho Peak II の山頂に立つことができた。あまりにも眺めが良いので、30 分ほどゆっくりした後、下降に取り掛かる。テントをデポした地点までは、氷もよく、懸垂下降でスムーズに降りられたが、そこからの大変だった。



山頂にて 左より 鈴木、山本、鳴海

ある程度は予想していたものの、下降に使う氷河のクレバスが凄まじい。中には数日前の降雪などによって隠れているものも多く、先頭を務めた鳴海は、膝くらいまで何回か落ちながらも下降路を開拓していく。こういった時の安心感はやはり1 人よりも2 人、2 人より3 人で良かったとチームの有り難みを心底感じる、かなりリスクな氷河の下降となった。時間をかけながらも慎重にABC まで歩き切り、久しぶりに腹一杯飯を食べられる喜びに浸り、好きなだけ水を飲んだ。

～鈴木～

登り終えて壁を見上げると、苦勞して辿ってきた軌跡が手に取るように分かり、その分壁が大きく見

3. 海外登山記録

えた気がした。パキスタンの人跡未踏の氷河で、登る山を手探りで見つけ出し、標高差900メートル近い未踏の壁を登る。標高差やグレードで言えば、たいしたことないような気もするが、やはりそこには登った者にしか分からない不安や楽しさ、冒険的要素が詰まっており、人生でも指折りの、素晴らしく充実したクライミングであった。

～山本～

今回の遠征は、特別な成果を残したわけではない。ただ、自分たちの足で歩き回り、まだ見ぬ山を探し、登れるかどうか、そこに楽しさがあるかどうかを見極めていく――その過程を存分に味わうことができた。

もちろん、氷と岩の世界では日々のクライミングに神経を尖らせ、外的要因におびえるようなストレスフルな登山、その先に訪れる充足感が圧倒的であることは知っている。今回の遠征で満たされたのは、そうした緊張の果ての達成感とは少し違う種類のものだった。

最後の最後に自分たちが納得した壁を山頂まで登りきれたことは確かに楽しかった。けれどそれ以上に、ベースキャンプの脇にある小さな岩で、気ままにボルダーを楽しむような、自由でのびやかな時間こそが心に残っている。もっと良い山があるかもしれない、この先にさらに面白そうな岩があるかもしれない。そう思いながら歩き回り、探し続けること自体が、今回の遠征を豊かにしてくれた気がする。



パキスタン KOZ氷河クライミングツアー

佐藤 裕 介 (THE NORTH FACE ATHLETE、鶴城山岳会)

順応山行中、セラック帯と落石の影響で仕方なく泊まることとなった不安定な標高5,300mの宿泊地では、夕陽が最後まで左岸壁を照らし続け落石が夜になっても続いた。

夕方には想定外の軌道で転がり続けた頭大の落石がテントをかすめパートナーの足元で止まる。あわや直撃という事態に2人で唖然と見つめ合ってしまった。苦労して更に奥まった安全と思われる場所に移動したものの破壊的な恐ろしい落石音を聞きながら落ち着かない夜を過ごした。高所順応の為過ごした5,300mのセラックの狭間で今年のこの谷の異常さを思い知らされた気がする。冬の降雪の少なさと異様な暑さが昨年と全く違う状況にさせたのだろう。パキスタンでの遠征登山は9回目となるがここまで落石の間隙を突きながらの登山は初めてだ。この順応山行で目標としていた6,000m弱のピラー周辺に初めて近づき山の様子を間近に観察して落石の危険性を、身をもって知ることとなった。

昨年、増本・長門パーティーでKOZ氷河への偵察に訪れた際には氷河上の安定度や谷全体での落石頻度は全く異なる状況であったという。今年はBCでさえ夜間でも落石の恐ろしい轟音を聞かされることがあり今回の順応山行2泊目周辺での落石は私たちが怯えさせるに十分だった。2泊目宿泊地近くで落石を落としていた壁の状態と目標としていたピラーに続くルンゼ上の壁の状況が大きく変わるとは思えなかった。ピラーに取付くためには落石の危険性がある壁の下にあるルンゼを辿らなくてはならない。ピラー登攀を行う為に必要な装備・食料を上げなが

らルンゼを登りきるには数日が必要でその間、落石を受けずに切り抜けることは運任せになってしまうだろう。順応登山3日目下山中にもルンゼを横切るタイミングがあと15秒くらいズレていたら落石に遇いそうな危険な状況もあった。問題のルンゼを対岸から観察した後、ルンゼ取付きまで行ってルンゼを見上げてやはりこのルンゼを登攀するのは危険が大きすぎると判断。当初目標としていたピラーの登攀を断念することに決めた。

この谷で落石に怯えることなく出来ることを探した結果、ピラー前衛壁の末端から尾根通しに前衛壁のピークを目指す事を第一目標と定める。傾斜のある前衛壁自体も遠目には魅力的に見えたがしっかり観察すると逆層である上に節理が閉じていてフリークライミングでの登攀は厳しそうに見えたことから傾斜の緩いリッジの登攀を選択した。落石のリスクは許容範囲になるだろうが複雑なリッジの登攀や下降は手間がかかりそうだった。

雪が取れない可能性を考え3日分の水を担ぎ喘ぎながら登攀を初めて長い尾根にロープを伸ばし続けること21ピッチ、約1,100m。アタック日は長時間行動になったものの明らかに脆そうな土色の最後のピークも諦めずに登ることができ満足行く結果となった。

BCに戻ってから直ぐ裏のアプローチ至近の硬い壁に8ピッチ400m程のルート。更に5.12aを含む良いクオリティの楽しいルート(5ピッチ)を新たに引けたことも嬉しい成果となった。

3. 海外登山記録

2025年 8月17日～10月 4日

BC滞在は8月24日～9月28日の33日間。標高6,500mを超え下部に大岩壁を持つコズサルを目指す増本・長門パーティーの登山期間と日程を合わせた為、6,000m弱のピラーを目指していた我々としてはかなり余裕のある日程となり、メインとして設定したトライの後もクライミングを楽しんだ。

順応を経てKOZ氷河では概ね以下のような日程で行動した。

① 9月2～12日 前衛壁ピーク

21ピッチ1,100m 5.10A0

② 9月15～22日 BC 壁左ルンゼ

8ピッチ400m 5.11A0

③ 9月24～26日 BC 壁右壁

5ピッチ120m 5.12a

すべて坂本健二、佐藤裕介の2名で登攀を行った。

3つの登攀ルート詳細は以下の通り。

① 前衛壁ピーク登攀 詳細

前衛壁ピークに至るリッジクライミングでは傾斜の緩い部分が点在していて荷揚げすることは現実的でなかった。加えてリッジ上に雪が全くない時もあった。ビバーク地に雪がない可能性も十分に考えられたので今回はトライ期間の水を持参する必要があっ



前衛壁ピーク

た。自分たちが上げられる重量を鑑みてゴーアップ後の日程を2泊3日と定めると共に下部を持参した5本のロープを予めフェックスすることにした。

9月3日 下部フィックス

前衛壁の末端取付き近くのABCを星空の元、ヘッドライトを灯し早朝出発。まずは傾斜の緩い左上凹角を60m伸ばしピトンでビレイ点を作った。一部傾斜の強く小ハング状を緊張しながら越えると傾斜は緩くなったが小雪がチラツキ出し2ピッチ目を終える頃には予想外の本降りの雪となってしまう。フォロワーが登り終えた時には岩に雪が積もった状態になりとてもクライミング出来る状態では無くなってしまった。雪も降り続いて下降するしかないかとも思ったが少しビレイ点で留まっていると降雪も落ちついてきて晴れ間も出てきた。雪が溶けてくるまで停滞。しばらくすると概ね雪が溶けたが岩は濡れている。割と悪条件に強い佐藤が再びリードすることに。濡れた3ピッチ目を登り始めた。前半は傾斜弱く順調だったが終盤の傾斜の強い部分は苔の着いたフットホールドが滑りまくりエイド混じりで何とかピナクルまで50m伸ばした。小さなギャップをクライムダウンしてから容易な30mを伸ばしてピトンを設置。取付きから良く目立っていた第一岩壁のフェースに取付き豊富なクラックを快適に繋いでロープを伸ばした。終盤はクラック自体が動く脆い部分があり緊張感ある登攀となったが持参した5本のロープ全てをフィックスすることができた。

9月10日 ゴーアップ1日目

2:20 ABC

3:00 取付

13:30 C1予定地からフィックス作業開始

17:00 C1

前回のフィックス後、悪天周期をBCでやり過ごし再びABCに戻ってきた。ABCで泊まって深夜1:30に起床。2:20出発。ヘッドライトで前回フィックスした4ピッチ半をユマーリングし明るくなった頃5ピッチ目の登攀を開始した。リードは2つのマットのみを入れた軽いザック。セカンドは生活道具一式と3日分の水として用意した10リットルの水が加わり多くのピッチは苦しいユマーリングとなった。



前衛壁ピーク 5P目

朝日が昇る前に第二岩壁と呼ぶに相応しい立派な岩壁が現れる。前衛壁のピークまでの間で最も大きな壁だろう。前半はしっかりとしたクラックにロープを快適に伸ばすことができる。第二岩壁2ピッチ目は節理が閉じ気味の部分もあって一部ナツツなどのA0が入り時間もかかった。ビレイヤーはかなり寒く東の稜線から陽が昇るのが待ち遠しい。このピッチで第二岩壁をほぼ登り終えて更にガレた20mを進むと一旦広めの台地状となった。ピークに続くリッジ状には幾つもの岩壁が控えているがテントを張ってビバーク出来る平地が次いつあるか不明である。ここをビバーク地と決めザックをデポし、2ピッチ分のフィックスを張るべく空身で登攀を再開した。リッジ上の断続的な壁を1ピッチ半登ると小ピーク。先のコルに降り立つには垂直の懸垂下降が必要だった。下山時の登り返しが厄介そうだ。コルから簡単

な緩傾斜を佐藤がフリーソロで更に30m伸ばしフィックス完了。その間に坂本が下降時登り返しに使う凹角上にある不安定な浮石を落とす作業をして帰りに備えた。



前衛壁ピーク 7P目

フィックス作業を終え暗くなる前にザックデポ地に戻った。日陰には数日前の降雪の雪が残っていた。ガラガラに大石が転がっていた部分を1時間程掛けて整地し何とか2人が寝られるスペースを作りテントに潜り込んだ。崖が直ぐ脇に控えていて少々緊張するがロケーションは最高だ。

9月11日 ゴーアップ2日目

4:00 C1ユマーリング開始

14:20 前衛壁ピーク（標高5,300m）

21:15 C1

今日もヘッドライトを灯しながらユマーリング開始。明るくなった頃、登攀を再開した。最初のピッチは日中でも日陰となっていて雪が残っている部分が多かった。時折クライミングシューズで雪を踏みしめながらのスタート。ピッチ終盤は傾斜が強く気の抜けない部分が多かった。ピーク2つ分を巻くようにスッキリしたフェースをトラバース気味に登り、リッジから豪快にアンダーフレイクを越えてクラックを進んだ。いかにもリッジのクライミングと

3. 海外登山記録



前衛壁ピーク 重荷のフォローはユマーリングとなった

という感じの複雑なライン取りになったので、登攀ラインとは別の下降ラインとなるだろう。中々厄介そうだ。

16P目はリッジ上の大岩を巻いたり登ったりしながら進み60mロープを一杯に伸ばした後も10mほど同時登攀して当初目標としていた第一ピーク到達。遠目からは相当に脆そうな茶色の岩壁を持った前衛壁ピークが100m程先に見える。時刻は11:30。引き返しのリミットを一応13:30としてスタートしていたがあのピークを登ったら厳しいかもしれない。そもそも登れる代物なのか怪しかったが取り敢えず取付きまで進んでみることにした。黄色がかった茶色の砂くずで出来た尾根を歩いていると硫黄の匂いが鼻をつく。前衛壁ピークの岩壁を見上げると最初はかなり脆そうだがメインの中間部の凹角は岩も白く登れそうに見えた。行ってみよう。

非常に脆い最初の部分は足元を崩しながら何とか這い上がった。崩れ落ちていく岩屑は斜面のガレを巻き込んで岩雪崩の様に発達する。盛大に土煙を上げ谷はそれに覆われた。

次の登攀中の落石を避けられそうな岩の基部でピッチを切り、続く凹角の登攀開始。幾つもの浮石を落としながら60m進むが岩自体は意外と硬い部分が多かった。ピーク直下はまた岩質が変わり茶色の岩

が積み重なった様な脆い岩となる。傾斜もあり一部被っていて慎重にロープを伸ばすとピークに飛び出した。360度見晴らすことの出来る素晴らしい景色を少しの間楽しんだ。既に14:20。テントのあるC1に辿り着くにはヘッドライト行動になることは確かだろうけど、特にルート取りが複雑な上部は明るい内に切り抜きたい所だ。ピークから最初の7mをクライムダウンしてから懸垂下降を始めた。随所に緩傾斜が出てきて、転がっている角の立ったガレは直ぐにロープをスタックさせた。ロープスタックが怖くて60mロープを2本繋げての懸垂下降はほぼしなかったが、それでもロープスタックで登り返しを強いられることもあった。登攀ラインと別のラインを下降することも多くルートファインディングは複雑で下降には時間がかかった。闇に包まれながらも下降を続けテント場に戻れたのは21時を過ぎていた。



前衛壁ピーク 脆そうな最終ピーク

9月12日

C1 6:30

ABC 14:00~15:00

BC 18:00

今日は下降のみ。昨日の長時間行動の疲れもあったしゆっくり起きたい所だったが、今日中にBCに戻りたかったので白み始める頃には起床して行動を



前衛壁ピーク 使用ギア

開始した。懸垂下降後、毎回祈るような気持ちでロープを引き抜いた。ロープスタック&登り返しは2度することになったがそれくらいで済んだのは幸いとも言えるだろう。

安全なABCに着いて休憩後BCに向けて下山開始。フィックスしたロープなどを含めると大量の荷物となってしまいが一気に降ろしてしまいたい。ロープやカムを強引にバックへ外付けしヨロヨロとBC目指した。

② BC壁 左ルンゼルート 8ピッチ 425m 5.11 A0
9月15日 2P目までのフィックス。午前中、2ピッチ登攀。BCに戻って美味しい昼飯を食べるという贅沢なプランだ。



BC壁左ルンゼ全景

7:20 BC
7:35 取付
8:30 登攀開始
13:00 2P目終了点
13:20 取付
13:30 BC

9月20日 3～4P目登攀。

9:30 BC 出発
18:40 BC 到着

初日の登攀後、数日の悪天をBCで過ごして更に2Pのフィックス。このラインの中で最も目立っている右上クラックを登る3P目のクラックは後半部分に土が詰まっていた初見のトライではフリークライミングで登ることはできなかった。時間に追われるトライではないのでエイドしながら掃除をして一旦ビレイ点にロワーダウン。再度フリークライミングでトライした。4P目も意外と傾斜があり55mロープを伸ばすところには夕方になってしまった。

9月22日 ゴーアップ。流石にこの日は早朝からヘッドライトを灯して出発。

4:20 BC
4:35 取付 ユマー
リング開始
6:30 5P目登攀開始
11:00 登攀終了
14:15 BC

1P目坂本リード
58m 5.10
滝右端のスラブから登り始め凹角から
ハングを越えて緩傾



BC壁左ルンゼ1P目

3. 海外登山記録

斜帯を左へトラバース。トラバースの出だしが悪く緊張した。左のバンドに乗ったら左上に見えるワイドフレーク目指して逆層フェースを登る。

2P目 佐藤リード 52m 5.10+

ワイドフレークはフットホールドもあり容易に這い上がる。その上の草付は意外と傾斜がありプロテクションも悪く怖かった。鎌で草を取り除き何とかカムを決めて登った。草付きを越えてからクラックを登るが一部傾斜強く声が出てしまう。序盤はしっかりしたクラックだったが上部は所々脆く慎重にロープを伸ばして小ハング手前まで。

3P目 坂本リード 40m 5.11A0

小ハングを越えるとBCからも目立っている顕著な右上クラックが始まる。フィスト〜バンドサイズのクラックが10m続いたがその先のクラックには土が詰まりテンション。鋸鎌とワイヤーブラシをバックロープで上げて周辺のクラックを大掃除する羽目に。ローダウンして再度トライした。しかし掃除不要だと思っていた終盤傾斜の落ちたスラブ部分が砂砂でリードはエイドが入ってしまう。フォローも何度か落ちそうになりながら何とかフリーでこなした。体感5.11+。

4P目 55m 5.11 佐藤リード

本流のコーナーに入れば容易になるのではと思っていたが、引き続き傾斜強くチムニー状のハングをいくつか越えて行かなければならずリードにかなり時間がかかってしまった。フォローする時間が無く途中で下降開始。BCに着く頃には暗くなってしまった。

5P目 坂本リード 55m 5.10-

凹角沿いに15m進むと浮いたフレーク。それを避けるため右に10mトラバースして上がる。そのままクラックを進み傾斜が緩んだ所で左上した。

6P目 佐藤リード 55m 5.9

5m程の垂壁を左の凹角から越えると一気に傾斜

は緩む。上部バンドを進み大岩上のクラックでビレイ。

7P目 坂本リード 65m 5.10+

バンドを10m進み上部壁の登攀。基本逆層だが適度にプロテクションが取れ快適なフリークライミングを楽しむ。

8P目 佐藤リード 45m 5.7

傾斜の落ちた壁をリッジ上まで。

下降

リッジ裏から懸垂下降とガレた谷の歩きで下降するつもりだったがリッジから反対側を覗くと何本カリッジが谷へ走っていて意外と複雑そう。まずは70m程リッジをクライムダウンしてから懸垂下降。緩傾斜帯をトラバースして再び懸垂下降。トラバースを混じえて結局4回の懸垂下降で谷へ降り立つ事が出来た。下降は全て岩角利用でギアも捨てることなく下降できて満足。

③BC壁右壁 ジョイフルモーメント

5 ピッチ120m 5.12a

遠征期間終盤に築いたマルチルート。傾斜の強い凹角状に行くが岩も硬く楽しいルートとなった。



BCジョイフルモーメント全景

1P目 坂本リード 20m 5.10

出だしのハング上の草付を掃除するのが大変でリードは顔を真っ黒にしながら頑張った。ハング上の数メートルを過ぎるとしっかりした快適なクラックとなり快適な草付きテラスでビレイ。

2P目 佐藤リード 25m 5.10+

出だしのハングはガバガバで快適に超える。クラックを直上しハング下を右にトラバースして左上ランペの上でビレイ。



ジョイフルモーメント 2P目

3P目 坂本リード 15m 5.10

フットホールドが乏しくステアリング中心の左上ランペを15mで大きなテラス。

トライ初日はテラスから右に折り返し草付きの多いフェースを掃除しながら苦労してハング下でビレイ。更に4P目のハングを佐藤がフリーでトライしたが外傾ホールドばかりで3回程フォールして選手交代。坂本もフリーでは駄目でネイリングして終了点まで到達する。初日のトライはここで終了。一旦下降した。

悪天日 1日を開けて再び壁に戻ってきた。50mの空中ユマールを経てテラスに到達。前回フリークライミングで抜けられなかった4ピッチ目のハング越えは2ラインを各自ロープにぶら下がり掃除して再度フリークライミングトライした。

4P目左 坂本リード 25m 5.11+

傾斜は強いがアンダーポケットやホールドがしっかりあり楽しい内容。

4P目右 佐藤リード 30m 5.12a

グラントアップ時もトライしていたラインで左ラインよりは傾斜無いが外傾ホールドばかりで嫌らしいクライミング。リード時はギリギリで吠えながら突破した。

5P目 坂本リード 30m 5.11-

出だしのハングは掃除すると良いホールドが出てきて突破。その後は逆層スラブなのだが雪が降ってきて濡れた岩に恐る恐るロープを伸ばした。傾斜が緩くなった部分で終了。2回の懸垂下降で取付きに降り立った。



ジョイフルモーメント 5P目

グレート・ヒマラヤ・トラバース5,000キロの旅

重 廣 恒 夫（日本山岳会会員）

グレート・ヒマラヤ・トラバース実施の背景

ネパール国内の「グレートヒマラヤトレイル」は、NHKBSでこれまでとは違うドローン視点の映像が放映されたこともあって、多くの人たちに知られ関心を持たれることになった。

私がグレートヒマラヤトレイルの概念を知ることになったのは、1981年1月から11月にかけてピーター・ヒラリー（世界最高峰エベレスト初登頂者エドモンド・ヒラリーの息子）、チュワン・タシ、グレイム・ディングルがシッキムからカラコルム山脈まで歩いた報告書『世界の屋根を歩く＝ヒマラヤ五千キロ初横断＝』を手にしてからである。その後も多くの外国人がヒマラヤを舞台にしたアクティビティーを行っていた。さらに、英国生まれのロビン・ブーステッド率いるチームによって、5年の調査期間を経て2008年から2009年にかけてネパール国内の「グレートヒマラヤトレイル」1,700kmが初めて踏破されたのも大きな刺激となった

私の「グレート・ヒマラヤ・トラバース」構想の発端は1995年に遡る。日本山岳会は創立90周年の記念事業の一つとして、未踏のマカルー東稜にチベット側から挑み初登攀に成功したことにある。登山終了後、次なる未踏の山を求めて、ラサからランドクルーザーでヤルツァンポー河岸を西へひた走り、パイクー湖を経て吉隆鎮の南に位置するネパールとの国境周辺を偵察した。帰路はネパールとの国境に近い道路をシッキムに接近しながら走り抜けラサに戻った。その時同行した読売新聞社の迫田記者から、「最後は何するの？」と聞かれて即座に答えたのが「ラ

ウンドヒマラヤ」であった。

日本山岳会が1992年に初登頂した、ヒマラヤの最東端に位置するナムチャバルワ（7,782m）からK2（8,611m）までの国境に位置する山々の麓をぐるりと1周する壮大な周回計画である。しかし帰国後は、1996年の「日本100名山連続踏破」を皮切りに「中央分水嶺踏査」「ラウンド琵琶湖」「四国分水嶺踏査」「近畿分水嶺踏査」「関西県境縦走」などの縦走登山や、「200名山登山」「ふるさと名山探訪」「ふるさと富士探訪」「中央分水嶺の山を登る」「歴史峠トレッキング」「三県境の山を登る」などのイベント登山。さらに、『新日本山岳誌』に掲載された約4,000の山を目標にした「チャレンジ4,000」などの国内登山（ネパールやパキスタンでのトレッキングや2016年のナンガマリⅡ峰初登頂は別として）に年間120日前後を費やし、いつしかヒマラヤは遠い存在になっていた。

2017年、山岳会の副会長に就任し記念事業担当となった。2025年に迎える創立120周年の記念事業で何をするか模索する中で頭に浮かんだのが、「ラウンドヒマラヤ」ならぬ「グレート・ヒマラヤ・トラバース」であった。2015年の110周年の折にも「グレートヒマラヤトレイル」踏査の構想は提案されたが実現しなかった経緯もあった。ただ地勢的な理由や経費的な面から、ナムチャバルワからの開始や中国側の踏査は諦め、2019年に実施したシッキム側からのカンチェンジュンガ展望トレッキングを幕開けとし、2020年春から世界第3位の高峰カンチェンジュンガから世界第2位のK2までの約5,000kmの踏査を行なうことにした。

グレート・ヒマラヤ・トラバース実施の目的

グレート・ヒマラヤ・トラバースは、探検的ヒマラヤ登山の少なくなった現代において、1956年のマナスル初登頂を嚆矢とした日本山岳会や多くの登山隊がおこなってきたヒマラヤ高峰登山の足跡を辿りながら、ヒマラヤ地域の人と自然とその生活の変貌、地球温暖化による気候変動でその姿を変えつつあるヒマラヤの今を検証する「温故知新」の踏査である。

目的：

1. ヒマラヤ地域の変遷調査（初登頂時代との比較と環境変化）
2. 探検的ヒマラヤ登山による未踏峰・未踏ルートへの挑戦
3. 1枚の地図から夢を描き、計画を作り、実行するチャレンジ精神を時代に継承する

実施状況

第1回目：2020年2月29日～5月16日

タプレジュン～カンチェンジュンガ南面・北面踏査及びパプクカン（6,244m）試登

グレート・ヒマラヤ・トラバースの踏査の実施については、新型コロナウイルスの感染拡大次第で、入国後に踏査活動禁止という最悪の事態も予想されたが、2025年までに完了する全体スケジュールの遂行を考えると躊躇することはできなかった。

2月29日、成田・関空よりカトマンズ空港に到着した。カトマンズでは今回使用する装備・食料のピックアップ、ネパール観光省でのブリーフィングや両替、梱包作業で3日間があっという間に過ぎた。

3月4日～5日、カトマンズからタプレジュンへチャーターバスで移動。食料や燃料の買い足しや、ポーターの雇い入れをおこなって、7日にキャラバンを開始した。タプレジュンからはカンチェンジュ

ンガ周回トレッキングのメインコースを辿ったが、200万人の観光客を当て込んだ観光年（2020年実施）も新型コロナウイルスのおかげで中止となり、自動車道の延伸やロッジの増改築がおこなわれていたにも関わらず、トレッカーの姿はなかった。そのためシェルパガオンを過ぎてからのロッジはまだ開いておらず、小屋番が我々と一緒に移動し小屋を開けてくれたが、我々がいなくなると彼らは村に戻った。

20日、2020年プレモンスーンの登山隊の登山許可証の発行停止と活動停止など、観光年のすべてのイベント中止と、日本への帰国のために日本政府のチャーター便が4月10日に運行されるとの情報がカトマンズのエージェントからもたらされたが、我々は踏査続行をすることにした。

ラムゼーやパンペマまでのトレッキングコースの通行は特に問題はなく南面からのカンチェンジュンガ、北面からのカンチェンジュンガを望むことができ、これから始まるグレート・ヒマラヤ・トラバースのスタート地点に立つことが出来た。しかし、ツェラムからグンサまでのミルギン・ラやセレレ・ラなどの峠の通過やグンサからヤンマコーラまでのナンゴー・ラの通過は予想以上に残雪が多く、無雪期の



グンサでNHK取材班に逢う

3. 海外登山記録

倍以上の時間がかかった。

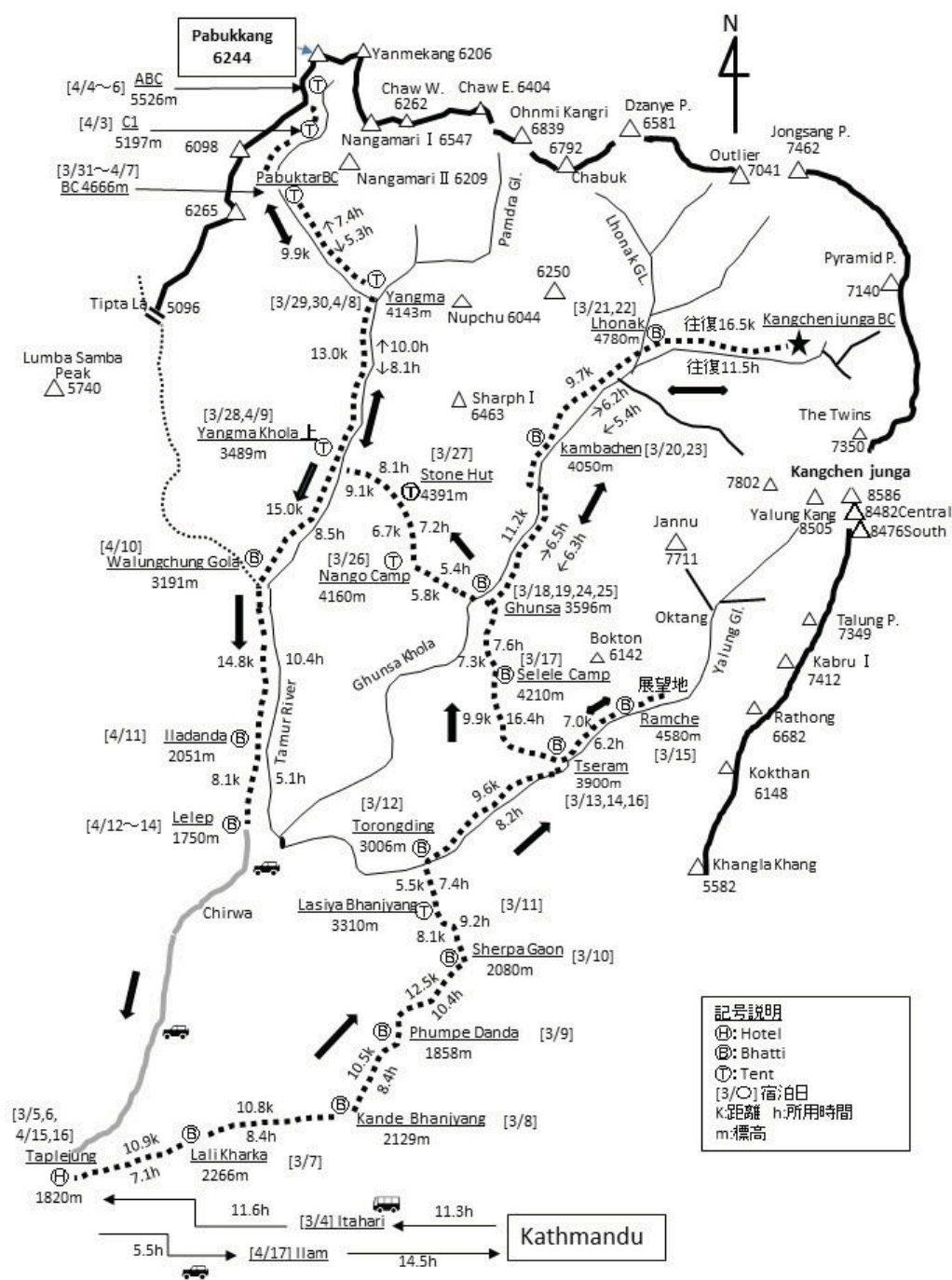
最奥の村ヤンマからのパプクカン（6,244m）の登山は、4日間でネパール・チベット国境に至り標高5,746mのガン・ラに到達して頂上に向かう予定であったが、昔からチベットとの交易路として使われていたヤク道は、深い雪に覆われてルートファイン

ディングが難しく峠

に到達することが出来なかった。そのため北に大きく迂回して稜線に登り頂上に向かったが、思わぬ岩稜と頂上直下の懸垂氷河に阻まれ登頂はならなかった。

帰路、警察官の駐在するオランチュンゴラでは新型コロナウイルスに関する情報は得られなかったが、レレップの警察で都市間の移動の禁止を知ると同時に足止めされることになった。それでも役場関係者の協力を得て4月15日タプレジュンに戻ることができた。その後、在ネパール日本大使館と連絡を取り、通行許可書を入手カトマンズに戻ることが出来たが、19日から5

月14日までカトマンズで足止めになれ、15日にネパール側のチャーター機でカトマンズ空港を出発し、16日朝成田空港に帰還した。



第1回GHT（カンチェンジュンガエリア）概念図

【行程表】グレートヒマラヤトラバース1回目

グレートヒマラヤトラバース1回目

2020/5/18

No.	Day	Place	Height(m)	Time	Meal	
1	2月29日	NRT・KIX～ICN～Kathmandu	1,300			ホテル泊
2	3月1日	Kathmandu	1,300		Restaurant	準備（カトマンズデが等確認）
3	3月2日	Kathmandu	1,300		Restaurant	準備（食料・装備買出し）
4	3月3日	Kathmandu	1,300		Restaurant	準備（梱包・他）
5	3月4日	Kathmandu～Itahari	300	11.34	Restaurant	ホテル泊
6	3月5日	Itahari～Taplejung	1,820	11.55	Restaurant	ホテル泊
7	3月6日	Taplejung	1,820		Restaurant	キャラバン準備
8	3月7日	Taplejung/Lali Kharka	2,266	7.05	Bhatti	
9	3月8日	Lali Kharka/Kande Bhanjyang	2,129	8.41	Bhatti	
10	3月9日	Kande Bhanjyang/Phumpe Danda	1,858	8.35	Bhatti	ママンケまで届かなかった
11	3月10日	Phumpe Danda/Sherpa Gaon	2,080	10.40	Bhatti	ロッジが増築されていた
12	3月11日	Sherpa Gaon/Laslya Bhanjyang	3,310	9.15	Bhatti	宿泊はテント
13	3月12日	Laslya Bhanjyang/Torongding	3,006	7.43	Bhatti	ロッジが増築されていた
14	3月13日	Torongding/Tseram	3,870	8.21	Bhatti	
15	3月14日	Tseram	3,870		Bhatti	悪天のため停滞
16	3月15日	Tseram/Ramche	4,580	6.15	Tent	
17	3月16日	Ramche/Tseram	3,870	6.50	Bhatti	カンチェンジュンガ展望地往復
18	3月17日	Tseram/Selele Camp	4,210	16.37	Bhatti	雪のミルギン・ラ、セレレ・ラ
19	3月18日	Selele Camp/Ghunsu	3,596	7.55	Bhatti	ロッジが増築されていた
20	3月19日	Ghunsu	3,596		Bhatti	
21	3月20日	Ghunsu/Kangbachen	4,050	6.51	Bhatti	ロッジが増築されていた
22	3月21日	Kangbachen/Lhonak	4,780	6.18	Bhatti	ロッジが増築されていた
23	3月22日	Lhonak/KanchenjungaBC/Lhonak	4,780	11.48	Bhatti	バンベマ（5147m）往復
24	3月23日	Lhonak/Kangbachen	4,050	5.43	Bhatti	
25	3月24日	Kangbachen/Ghunsu	3,596	6.30	Bhatti	NHK取材班に逢う
26	3月25日	Ghunsu	3,596		Bhatti	洗濯・充電
27	3月26日	Ghunsu/Nango camp	4,160	5.36	Tent	小屋とトイレが建っていた
28	3月27日	Nango camp/Stone Hut	4,391	7.22	Tent	雪のナンゴラ（4776m）越え
29	3月28日	Stone Hut/Yangma Khola上	3,489	8.12	Tent	
30	3月29日	Yangma Khola上/Yangma	4,143	10.01	Tent	ヤンマの村は変わっていなかった
31	3月30日	Yangma	4,143		Tent	休養日・充電
32	3月31日	Yangma/PabuktarBC	4,666	7.35	Tent	
33	4月1日	PabuktarBC	4,666		Tent	
34	4月2日	PabuktarBC	4,666		Tent	
35	4月3日	PabuktarBC/C1	5,197	5.32	Attack	
36	4月4日	C1/ABC	5,526	6.01	Attack	
37	4月5日	ABC/ABC	5,526	8.22	Attack	5798m往復
38	4月6日	ABC/ABC	5,526	12.56	Attack	5920m往復
39	4月7日	ABC/PabuktarBC	4,666	7.20	Tent	
40	4月8日	PabuktarBC/Yangma	4,143	5.34	Tent	
41	4月9日	Yangma/Yangma Khola上	3,489	8.05	Tent	
42	4月10日	Yangma Khola上/Olangchun Gola	3,191	8.51	Bhatti	ティブタ・ラから自動車道が出来ていた
43	4月11日	Olangchun Gola/Iladanda	2,051	10.36	Bhatti	ネパール側の道路の最北端工事中
44	4月12日	Iladanda/Lelep	1,750	5.12	Bhatti	
45	4月13日	Lelep	1,750		Bhatti	隊荷乾燥
46	4月14日	Lelep	1,750		Bhatti	隊荷仕分け
47	4月15日	Lelep～Taplejung	1,820	5.31	Restaurant	隊員4駆・隊荷トラクター
48	4月16日	Taplejung	1,820		Restaurant	ホテル泊
49	4月17日	Taplejung～Ilam	1,300	5.53	Restaurant	4駆・ホテル泊
50	4月18日	Ilam～Kathmandu	1,300	14.50		4駆・コスモトレック
51	4月19日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
52	4月20日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
53	4月21日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
54	4月22日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
55	4月23日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
56	4月24日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
57	4月25日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
58	4月26日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
59	4月27日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
60	4月28日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
61	4月29日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
62	4月30日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
63	5月1日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
64	5月2日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
65	5月3日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
66	5月4日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
67	5月5日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
68	5月6日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
69	5月7日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
70	5月8日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
71	5月9日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
72	5月10日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
73	5月11日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
74	5月12日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
75	5月13日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
76	5月14日	Kathmandu	1,300			コスモトレック
77	5月15日	Kathmandu	1,300			KTM21:30発RA4331
78	5月16日	～成田（車）三ノ宮				

※所要時間には休憩・昼食を含む

3. 海外登山記録

第2回目：2022年10月1日～11月26日

マカルーエリア（オランチュン・ゴーラ～ティプタ・ラ（5,095m）～ルンバサンバ峠（5,144m）～シェルパニ・コル（6,180m）～ウエスト・コル（6,190m）～アンブラプチャ（5,845m）～ナムチェバザール）踏査

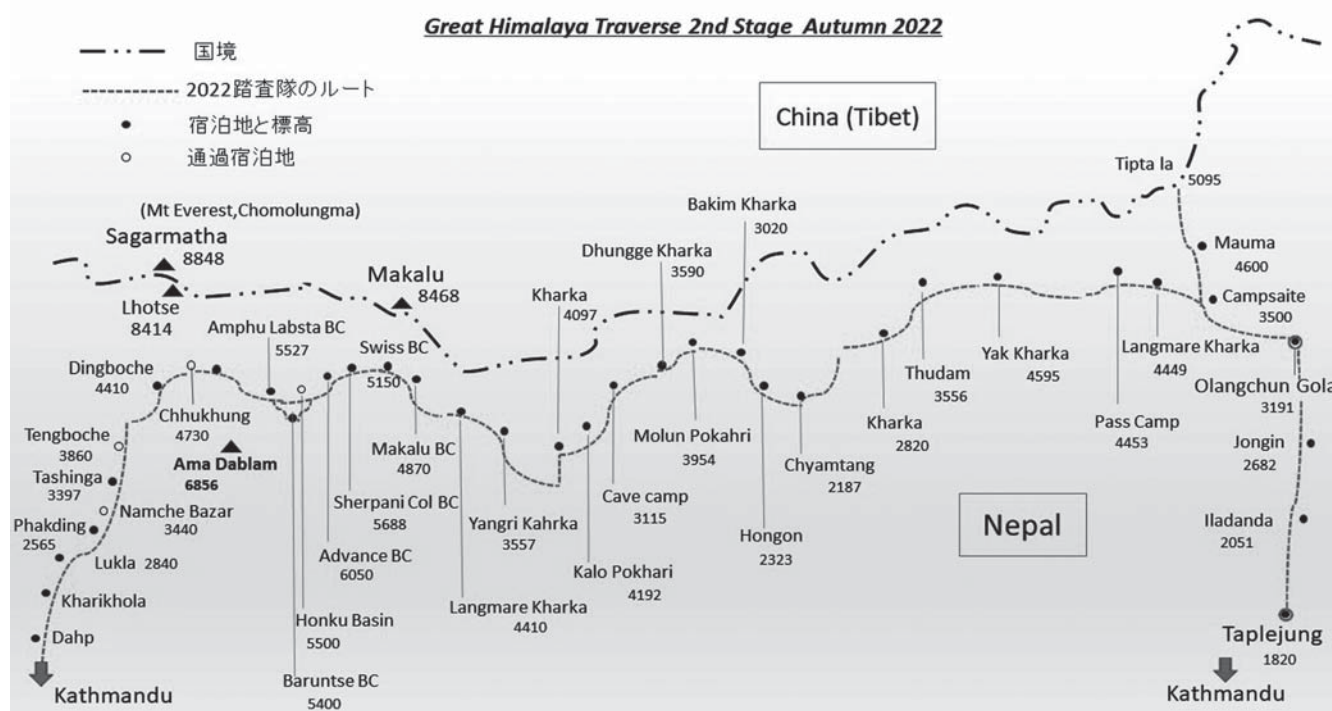
カトマンズ到着以来雨に悩まされたが、10月12日オランチュンゴーラを出発してからは好天に恵まれ、ほぼ予定通りの日程で踏査を終えることができた。

1912（大正元）年、青木文教がラサへの入蔵時に越えたティプタ・ラには国境近くまで到達した。チベット側には国境検問所が設けられていたが閉鎖されていた。2017年、ティプタ・ラから24kmの自動車道路がオランチュン・ゴーラに繋がったという。タムール川の標高3,100mに位置するオランチュン・ゴーラは、地元住民であるワルン族にちなんで名付けられており、チベットとの活発で歴史的な交易路であった。ネパール側の住人は米・塩・油などの生

活必需品をチベットのリュバザールから購入し、カーペットやチーズを輸出していた。国境に向かう左岸に旧道があるが、新しい道路がオランチュン・ゴーラまで伸びていた。しかしここ数年は通行された形跡がなく、随所に壊れた重機やドラム缶が散乱していた。

10月19日、ルンバサンバの峠越えは10日前に降った雪が残っていたが、通行に支障をきたすようなことはなかった。ヤングリカルカまでの行程は現地住民の生活道とはいえ、橋が流されており大きく迂回せざるを得なかったが、急崖の細い道の通過では危険箇所も多く難渋しながら31日に到達することが出来た。踏査中に会ったのは数人の欧米人と、我々の通過時に宿を提供する住民だけであった。しかし、ヌムからマカルーBCを訪れる欧米人やネパール人は多く、ヤングリカルカで泊まったバッチェやマカルーBCのバッチェはごった返していた。

ヤングリカルカからランマレカルカの間では、2017年4月20日にランマレカルカの近くで発生したGLOF



第2回GHT（マカルーエリア）概念図

(氷河湖決壊洪水) で、死者こそ出なかったものの2軒の家屋、2軒のバッチェと古いゴンパが破壊された。周辺には、当時ヤングリカルカにいた住民やトレッカーが閉じ込められたバルン川の洪水の傷跡が残っていた。

11月7日からのシェルパニ・コル、ウエスト・コルの通過は標高も6,000mを越え、寒気も強まって動作も鈍くなり苦勞した。シェルパニ・コル通過時に

出会ったのは、ウエスト・コルを経てシェルパニ・コルを越えてきた1パーティーと、シェルパニ・コルBCで追い抜いて行ったイタリア隊だけであった。しかし寒気は厳しく、極度の高度障害に苦しめられた藤井隊員は11月9日ヘリコプターでカトマンズへ戻った。

12日、チュクンまで下るとアイランド・ピークに向かう登山者の列と、エベレスト街道を往来するトレッカーの多さに驚いた。

コロナ禍による国境閉鎖後、チベットからの生活必需品が輸入されなくなったため10月22日に通過したチャムタンやホンゴンやその北方にある村々は、多くの生活物資を輸送コストの高いネパール側から調達しなければならず、物資不足と価格の高騰に直面し困窮していた。



シェルパニ・コルへの登り

【行程表】グレートヒマラヤトラバース2回目（マカルーエリア）行動記録

グレートヒマラヤトラバース2回目（マカルーエリア）行動記録				
No.	Day	行程	通信手段	特記事項（GPSの標高）
1	10月1日	NRT～Kathmandu	SNS（L）	
2	10月2日	Kathmandu	SNS（L）	
3	10月3日	Kathmandu	SNS（L）	
4	10月4日	Kathmandu	SNS（L）	
5	10月5日	Kathmandu	SNS（L）	
6	10月6日	Kathmandu～Itahari	SNS（L）	
7	10月7日	Itahari～Taplejung	SNS（L）	
8	10月8日	Taplejung	SNS（L）	
9	10月9日	Taplejung～Iladanda	GARMIN IR	
10	10月10日	Iladanda～Jongin	GARMIN IR	2,682m
11	10月11日	Jongin～Olangchun Gola	SNS（Me）	3,267m
12	10月12日	Olangchun Gola	SNS（Me）	
13	10月13日	Olangchun Gola～Campsait	GARMIN IR	3,721m
14	10月14日	Campsait～Mauma	GARMIN IR	4,083m
15	10月15日	Mauma～Tiptara Bhanjyang/Mauma	GARMIN IR	Tiptara手前4,985m
16	10月16日	Mauma～Campsait（半日休養）	GARMIN IR	
17	10月17日	Campsait～Langmale Kharka	GARMIN IR	4,449m
18	10月18日	Langmale Kharka～Pass Camp	GARMIN IR	
19	10月19日	Pass Camp～Yak Kharka	GARMIN IR	4,522m（ルンバサンバ峠5,144m）
20	10月20日	Yak Kharka～Thudam	GARMIN IR	3,555m
21	10月21日	Thudam～Kharka	SNS（Me）	
22	10月22日	Kharka～Chyamtang	IR	2,256m
23	10月23日	Chyamtang～Hongon	SNS（Me）	2,377m
24	10月24日	Hongon（休養日）	SNS（Me）	
25	10月25日	Hongon～Bakim Kharka	GARMIN IR	3,048m
26	10月26日	Bakim Kharka～Molun Pokhari	GARMIN IR	3,968m 曇り午後より雨、雪
27	10月27日	Molun Pokhari～Dhungge Kharka	GARMIN IR	3,572m
28	10月28日	Dhungge Kharka～Cave Camp手前	GARMIN IR	2,924m 橋が流されており迂回に時間を要した
29	10月29日	Cave Camp手前～Kalo Pokhari	GARMIN IR	4,123m
30	10月30日	Kalo Pokhari～Kharka	GARMIN IR	4,061m
31	10月31日	Kharka～Yangri Kharka	GARMIN IR	3,649m
32	11月1日	Yangri Kharka（休養日）	GARMIN IR	
33	11月2日	Yangri Kharka～Langmale Kharka	GARMIN IR	4,465m
34	11月3日	Langmale Kharka～Makalu B C	GARMIN IR	4,847m
35	11月4日	Makalu B C～Swiss B Camp	GARMIN IR	5,206m
36	11月5日	Swiss B Camp～Sherpani Col BC	GARMIN IR	
37	11月6日	Sherpani Col BC（休養日）	GARMIN IR	
38	11月7日	Sherpani Col BC～Sherpani Col下	GARMIN IR	シェルパニコル（6,180m）通過
39	11月8日	Sherpani Col下～Baruntse BC	GARMIN IR	ウエストコル（6,190m）通過。Baruntse（5,435m）
40	11月9日	Baruntse BC	GARMIN IR	高度障害の藤井隊員をヘリでカトマンズへ移送
41	11月10日	Baruntse BC～Amphu Labsta B.C	GARMIN IR	5,529m
42	11月11日	Amphu Labsta B.C～Imja Tsho湖畔	GARMIN IR	アンブラブチャコル（5,845m）通過。5,010m
43	11月12日	Imja Tsho湖畔～Dingboche	SNS（L）	4,290m 藤井さん退院Radisson Hotelへ
44	11月13日	Dingboche	SNS（L）	隊荷整理（登攀装備・コンロ類・コップフェルデガ）
45	11月14日	Dingboche～Lawi Schyasa	GARMIN IR	
46	11月15日	Lawi Schyasa～Phakding	SNS（L）	
47	11月16日	Phakding～Puiya		
48	11月17日	Puiya～Dhap		
49	11月18日	Dhap～Kathmandu		
50	11月19日	Kathmandu		
51	11月20日	Kathmandu		食料整理・スタッフ支払い打合せ
52	11月21日	Kathmandu		スタッフ支払い・スタッフ慰労会
53	11月22日	Kathmandu		医薬品整理・ソーラー電源関係整理
54	11月23日	Kathmandu		個人装備整理
55	11月24日	Kathmandu		個人装備整理
56	11月25日	Kathmandu～		
57	11月26日	～NRT		

*当初計画では10/5にKathmandu出発であったが、
祭り（ダサイン）のため10/6発に計画変更

3. 海外登山記録

第3回目：2023年4月1日～5月31日

クーンブ〜ロールワリン〜ティルマン・パス

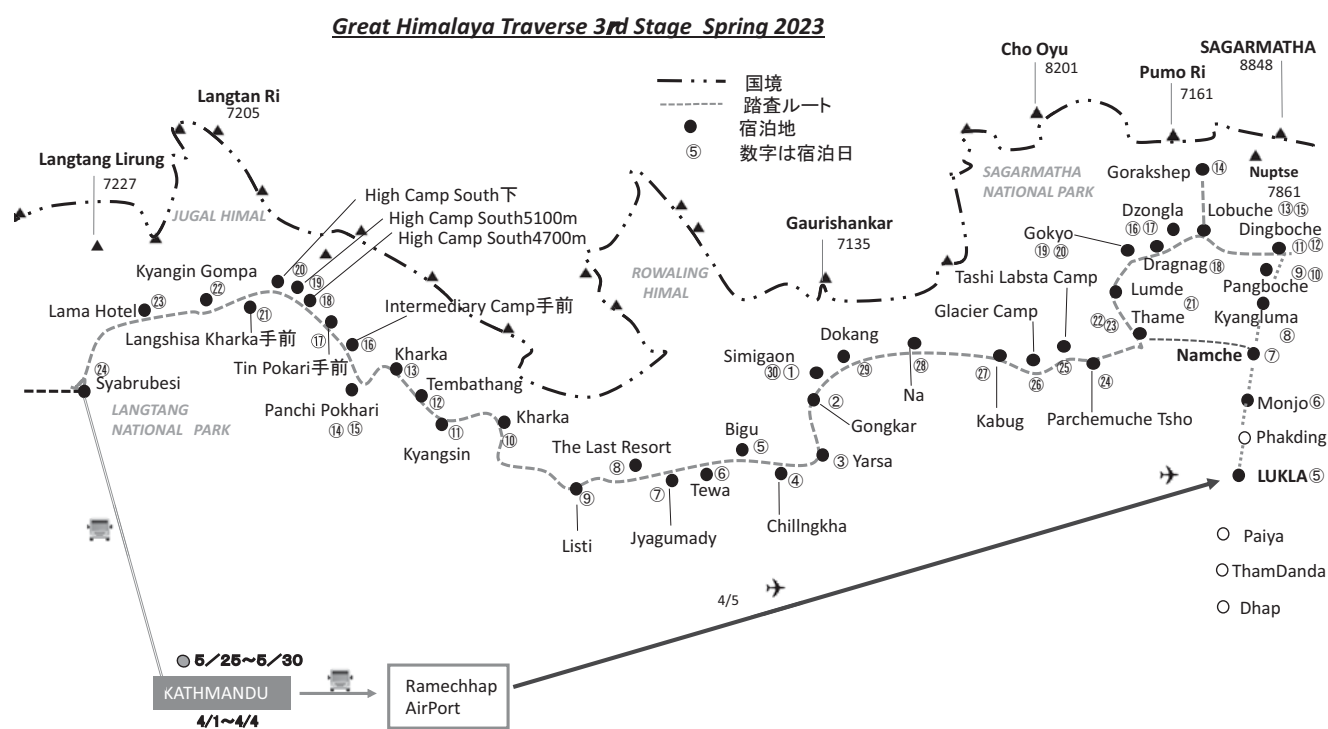
(5,320m) ~ランタンエリア踏査

私が初めてエベレストと対峙したのは73（昭和48）年の秋、第二次RCC（ロッククライミングクラブⅡ）による「日本エベレスト登山隊」に参加し、南西壁に向かった時である。登山隊は総勢47名という、当時では日本のヒマラヤ登山史上最大クラスの規模であった。ヒマラヤ登山の経験のない者8人が先発隊として、4月初旬にカトマンズに向かった。森田勝、長谷川恒男や加藤保男が一緒だった。

その後、何度かトレッキングツアーに同行してのネパール訪問はあったが、GHT 2 回目そして今回の3 回目の訪問ではエベレスト街道の変貌ぶりに驚いた。コロナ禍による登山やトレッキングの禁止という休止期間はあったが、再開後のトレッカーの復活（欧米を主として）ぶりに目を見張った。73年に逢ったトレッキング隊は数隊（そのうち日本人は1 隊）

であったが、50年たった今はルクラからロブチェまで
で間断なくトレッカーの往来があった。73年に偵察
や隊荷の輸送中に滞在したナムチェバザールのシェ
ルパの石作りの家は、すべてホテルに変わっていた。
その時一緒だったシェルパ達も、生存しているほと
んどがカトマンズで暮らしている。街道筋には瀟洒
なロッジや病院が建ち並んでいたが、偵察や輸送の
折に何度か泊まったモンジョの竹村さん夫妻（東京
農大出身で1972年から農園を開拓）の家は取り壊さ
れていた。踏査では50年ぶりのエベレストBC訪問を
楽しみにしていたが、手前のロブチェで風邪による
体調悪化で、一時隊を離脱しなければならなかった
のは残念だった。ナムチェバザールまで下り静養し
た後、別動隊と合流して一旦カトマンズに戻った。
その後日本に帰る2人を見送った後、コンガルまで
車で移動して本隊と合流、踏査を再開した。

ランタン山群は首都カトマンズから最も近いヒマ
ラヤ登山やトレッキングの場として多くの人が訪れ
ていたが、私はこれまでランタン方面には1996（平



第3回GHT（クンブ～ロールワリン～ランタンリア）概念図

成8)年に訪れた時にキャンジン・ゴンパからキャンジン・リ(4,773m)に登っただけであった。しかし、ティルマンのコルを越えた後にランタン谷に下り、2015年の地震で甚大な被害を受けた現場を目の当たりにして胸が痛んだ。

ランタン山群の最高峰はランタン・リルン(7,227m)で、1961(昭和36)年に大阪市立大学隊が挑戦をしたが、リルン氷河で森本嘉一隊長と大島健二隊員、サーダーのギャルツェン・ノルブ(今西壽雄さんと共に登ったマナスルの初登頂者)を雪崩で失い、日本人初のヒマラヤ遭難となった。1978(昭和53)年10月24日、第4次遠征隊の和田城志とシェルパのペ

ンパ・ツェリンが念願の頂上に立った。初登頂者の和田城志は2015年4月25日11時47分(現地時間)、ランタン谷最奥のランタン・リ(7,205m)のベースキャンプ(5,300m)にいた。地震発生と同時に周囲の峰、稜線から轟音を伴った雪崩が発生、雪煙の襲来でいくつかのテントが潰れたが、人的な損傷はなく、28日にはヘリコプターでキャンジン・ゴンパに下山、翌29日キャンジン・ゴンパからドンチェに移動した。ヘリコプターから撮った写真や動画は、被災したランタン谷の悲惨な状況を誰よりも早く世界に伝えることになった。



ティルマン・パスを見上げる

3. 海外登山記録

【行程表】グレートヒマラヤトラバース 3 回目（クンプ～ロールワリン～ランタンエリア）行動記録

グレートヒマラヤトラバース3回目（クンプ～ロールワリン～ランタンエリア）行動記録												
No.	日時	曜日	行程	標高	宿泊	出発時間	到着時間	所要時間	登り累計	下り累計	距離（km）	重廣行動
1	4月1日	土	Kathmandu	1,300	Hotel							
2	4月2日	日	Kathmandu	1,300	Hotel							
3	4月3日	月	Kathmandu	1,300	Hotel							
4	4月4日	火	Kathmandu	1,300	Hotel							
5	4月5日	水	KTM～Ramechhapu～Lukla	2,840	Bhatti							
6	4月6日	木	Lukla～Monjo	2,835	Bhatti	13:34	15:53	2:19	417	241	4.8	
7	4月7日	金	Monjo～Namche	3,440	Bhatti	8:22	12:10	3:48	756	156	4.8	
8	4月8日	土	Namche～Khumjung～Khyangjuma	3,550	Bhatti	8:16	14:55	6:39	666	444	7.1	
9	4月9日	日	Khyngjuma～Pangboche	3,930	Bhatti	8:11	15:08	6:57	954	631	9.2	
10	4月10日	月	Rest	3,930	Bhatti							
11	4月11日	火	Pangboche～Dingboche	4,410	Bhatti	9:28	12:15	2:47	387	54	4.4	
12	4月12日	水	Dingboche⇄5083m往復（順応）	4,410	Bhatti	8:11	13:31	5:20	753	743	4.7	
13	4月13日	木	Dingboche～Lobuche	4,910	Bhatti	8:22	15:16	6:54	707	83	7.5	
14	4月14日	金	Lobuche～EverestBC～Gorakshep	5,140	Bhatti							Lobuche
15	4月15日	土	Gorakshep～Kalapatthar往復～Lobuche	4,910	Bhatti							Lobuche
16	4月16日	日	Lobuche～Dzongla	4,830	Bhatti	9:46	13:01	3:15	32	495	4.5	Lobuche～Phreiche(4,240)
17	4月17日	月	Dzongla	4,830	Bhatti	8:29	12:03	3:34	132	481	5.8	Pheriche～Pangboche(3,930)
18	4月18日	火	Dzongla～Cho・La（5,420m）～Dragnag	4,700	Bhatti	8:26	12:11	3:45	188	777	6.1	Pangboche～Phunke Tenga(3,250)
19	4月19日	水	Dragnag～Gokyo	4,734	Bhatti	8:21	10:36	2:15	365	59	2.5	Punke Tenga～Khyangjima
20	4月20日	木	Gokyo⇄Gokyo Ri 往復	4,734	Bhatti	8:14	10:17	2:03	104	311	4.1	Khyangjima～Namche
21	4月21日	金	Gokyo～Renjo・La（5,350m）～Lumde	4,368	Bhatti							Namche
22	4月22日	土	Lumde～Thame	3,820	Bhatti							Namche
23	4月23日	日	Thame	3,820	Bhatti	12:35	15:02	2:27	176	746	4.9	Namche～monjo
24	4月24日	月	Parchemuche Tsho(4,780m)	4,780	Bhatti	8:01	14:44	6:43	736	689	12.1	momjo～Lukla
25	4月25日	火	5200m付近（Tashi Labsta Camp5,665m手前）	5,200	Bhatti							Lukla～Kathmandu
26	4月26日	水	Glacier Campの手前	4,780	Tent							Kathmandu
27	4月27日	木	Kabug(4,820m)	4,820	Tent							Kathmandu
28	4月28日	金	Na(4,180m)	4,180	Tent							Kathmandu
29	4月29日	土	Dokhang(2,791m)	2,791	Tent							Kathmandu
30	4月30日	日	Simigaon(2,036m)	2,036	Bhatti							Kathmandu
31	5月1日	月	Rest	2,036	Bhatti							Kathmandu
32	5月2日	火	Gonggar(1,440m)	1,440	Bhatti							Kathmandu～Gonggar 車
33	5月3日	水	Yarsa	2,036	Bhatti	8:03	15:37	7:34	1,064	470	9.6	
34	5月4日	木	Chillingkha（L otingの手前）	1,924	Bhatti	7:52	15:58	8:06	662	668	15.2	
35	5月5日	金	Bigu村（Bigu Gumpaの500m下）	2,157	Bhatti	7:46	14:32	6:46	861	556	9.1	
36	5月6日	土	Tewa（峠近く）	3,274	Tent	7:11	16:55	9:44	1,594	474	11.8	
37	5月7日	日	ジャクマディ	2,471	Tent	7:11	15:23	8:12	307	1,109	7.6	
38	5月8日	月	The Last Resort（1,170m）	1,170	Bhatti	7:38	14:54	7:16	321	1,534	11.9	
39	5月9日	火	The Last Resort～Listi（2,260m）	2,260	Bhatti	7:52	12:50	4:58	1,069	4	3.5	
40	5月10日	水	Listi～Khaka	3,014	Bhatti	7:22	16:47	9:25	1,052	340	11	
41	5月11日	木	Khaka～Kyangsin（2,520m）	2,520	Tent	7:32	11:51	4:19	231	730	5	
42	5月12日	金	Kyangsin～Tembathang(2,160m)	2,160	Tent	7:03	14:56	7:53	741	998	8.4	
43	5月13日	土	Tembathang(2,160m)～Kharka	3,236	Tent	7:05	15:13	8:08	1,179	167	6.8	
44	5月14日	日	Kharka～Panchi Pokhari(4,074)	4,070	Bhatti	7:07	14:31	7:24	1,035	207	5.2	
45	5月15日	月	Rest	4,070	Bhatti							
46	5月16日	火	Panchi Pokhari～Kharka（Intermediary Camp手前）	3,976	Tent	7:29	15:01	7:32	407	495	4.9	
47	5月17日	水	Kharka（Intermediary Camp手前）～Tin Pokari手前(4,255m)	4,179	Tent	7:41	15:55	8:14	652	447	5.5	
48	5月18日	木	Tin Pokari手前(4,255m)～High Camp South(4,700m)付近	4,696	Tent	7:44	13:02	5:18	543	18	3	
49	5月19日	金	High Camp South(4,700m)付近～High Camp South(5,100m)付近	5,111	Tent	7:36	15:57	8:21	577	153	3.1	
50	5月20日	土	High Camp South(5,100m)付近～High Camp South下	4,711	Tent	8:28	17:22	8:54	422	824	4.7	
51	5月21日	日	High Camp South下～Langshisa Kharka手前(4,150m)	4,141	Tent	6:44	4:14	21:30	740	1,313	9.9	ティルマン・パス越え
52	5月22日	月	Langshisa Kharka手前(4,150m)～Kyangin Gumpa	3,830	Tent	8:12	17:04	8:51	357	704	12.8	
53	5月23日	火	Kyangin Gumpa～Lama Hotel	2,488	Bhatti	8:27	19:09	10:41	279	1,654	17.7	
54	5月24日	水	Lama Hotel～Syabrubesi	1,503	Bhatti	7:01	14:34	7:33	297	1,327	10.8	
55	5月25日	木	Syabrubesi～Kathmandu	1,300	Hotel	7:10	17:35	10:25:00	3,589	3,386	108.1	チャーターバス
56	5月26日	金	Kathmandu	1,300	Hotel							
57	5月27日	土	Kathmandu	1,300	Hotel							
58	5月28日	日	Kathmandu	1,300	Hotel							
59	5月29日	月	Kathmandu	1,300	Hotel							
60	5月30日	火	Kathmandu 22:30発	1,300								
61	5月31日	水	AM9時30分成田着								260km	

Hotel：9日
Bhatti：34日
Tent：16日

第4回目：2023年10月7日～11月25日

ガネッシュ・マナスル・アンナプルナエリア踏査、
ナムン峠調査

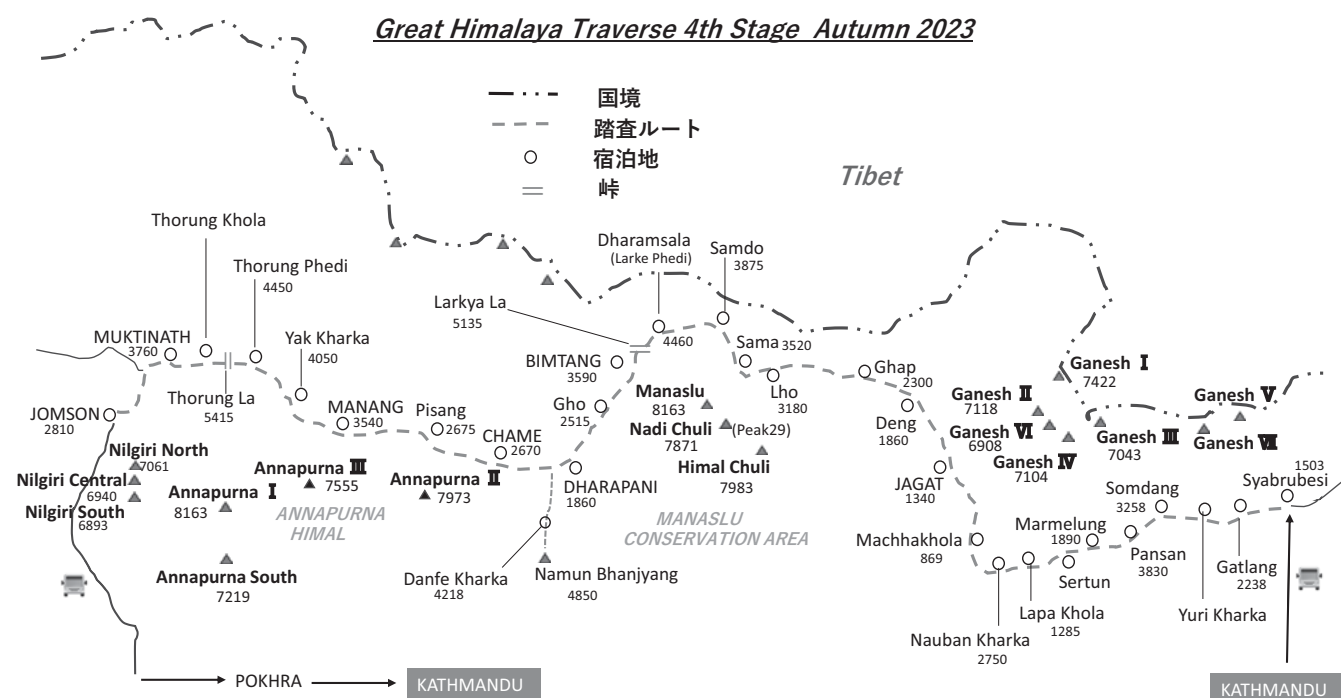
その昔、ヒマラヤ登山を目指すようになった理由の一つに、1950（昭和25）年フランス隊の人類最初の8,000m峰登頂、53（昭和28）年イギリス隊のエベレスト初登頂や56（昭和31）年の日本山岳会によるマナスル初登頂などが契機になったという人が多かった。私もその例にもれず、中学校2年生の時にアンナプルナ隊のモーリス・エルゾグの『処女峰アンナプル』を読み、その翌年ガストン・レビュファの『雪と岩』に触発されて、岩登りを始めたことに端を発する。

カトマンズからチャーターバスで3回目踏査終了点のシャブルベシに復帰した。街にはトレッカーが溢れていたが、東のランタン谷方面に向かう人達が多いのか、西方のガネッシュ山群で会ったトレッカーは3パーティー7人だけであった。途中のパンサン

峠（3,830m）からは、眼前にマナスル（8,163m）～P29（7,871m）～ヒマル・チュリ（7,893m）～パウダ・ヒマル（6,672m）が連なり感動した。いずれも日本隊が初登頂した山である。丁度この頃、ネパール最大の祭りダサインの時期に当たり、カトマンズなどの都市部から帰省する家族や、動物を解体して祭りの準備をする村々を通過した。

マナスル街道に入ると往来する欧米人トレッカーが増えたが、会った日本人は4人だけで、コロナ禍以降急激な円安もあって出足が鈍い感じがした。10月29日、サマ部落から向かったマナスルベースキャンプへの道には、好天が続いたせいなのかもう登山隊の姿はなかった。しかし、ラルキヤ峠（5,135m）を通過するトレッカーは多く、峠での記念写真撮影は順番待ちするほどだった。ビムタン（3,590m）に下るとマナスルを裏側（西面）から眺めるようになり、右手にツラギ（7,059m）やブンギ（6,538m）などの玄人筋に好かれそうな山々が見えて楽しい。

気掛かりだったナムン峠を往復してアンナプルナ



第4回GHT（ガネッシュ～マナスル～アンナプルナエリア）概念図

3. 海外登山記録

街道に戻り、マルシャンディ・コーラ（川）沿いの道を西に進む。マナン（3,540m）までの自動車道路が通じているので車で移動するトレッカーも多く、乾いた未舗装道路なので通行する車が巻き上げる砂塵には閉口した。マナン（3,540m）からルートは北に向かうが後方にはアンナプルナ山群の山々が見えて飽きることがない。地図を抜けての山座同定は、過去に「岩と雪」などで垣間見た記録を思い出す、高齢トレッカーの楽しみの一つである。辿り着いたトロン峠（5,416m）はラルキャ峠を遥かに超える数のトレッカーで賑わっていた。峠からムクチナートに下る途中、左手前方にダウラギリ山群が見え始め、北側には来春に向かう西ネパールの赤茶けた大地と山並みが広がっていた。

ネパールが鎖国を解いた直後の1950年、フランス隊がアンナプルナ I 峰（8,091m）の初登頂を果たしたのは誰もが知る栄光であるが、彼らの当初の目標はダウラギリ I 峰（8,167m）であった。ツクチェから偵察に向かったが余りの峻険さに断念。マルハからティリツォ峠を越えてマナンに至り、その後トロン峠を越えてムクチナートに下山した。そして街道をレテまで下って西面からアンナプルナ西氷河に入って登頂に成功したのである。



サマ部落より暁光のマナスルを見上げる

【行程表】グレートヒマラヤトラバース４回目（ガネッシュ～マナスル～アンナプルナエリア）行動記録

グレートヒマラヤトラバース4回目（ガネッシュ～マナスル～アンナプルナエリア）行動記録

No.	日時	曜日	行程	標高	宿	出発時間	到着時間	所要時間	登り累計	下り累計	距離 (km)	備考
1	10月7日	土	NRT～Kathmandu	1,300	Hotel							
2	10月8日	日	Kathmandu	1,300	Hotel							
3	10月9日	月	Kathmandu	1,300	Hotel							
4	10月10日	火	Kathmandu	1,300	Hotel							
5	10月11日	水	Kathmandu～Syabrubesi	1,503	Lodge	6:31	14:05	7:27	3,148	2,663	81.1	
6	10月12日	木	Syabrubesi～Chaurhattar	2,305	Tent	8:17	14:00	5:43	934	66	4.4	
7	10月13日	金	Chaurhattar～Yuri Kharka	3,420	Tent	7:56	16:36	8:40	1,263	160	12.2	
8	10月14日	土	Yuri Kharka～Somdang	3,258	Tent	7:57	11:57	4	378	516	5.2	
9	10月15日	日	Somdang～Pansan Pass	3,835	Tent	7:55	12:14	4:19	655	75	5.5	
10	10月16日	月	Pansan Pass～Poktang Kharka	2,800	Tent	7:56	11:15	3:19	11	1,049	4	
11	10月17日	火	Poktang Kharka～Sertun	1,928	Lodge	7:53	13:06	5:13	293	1,154	7.5	
12	10月18日	水	Sertun	1,928	Lodge							Rest
13	10月19日	木	Sertun～Lapagaon	1,850	Tent	7:47	14:13	6:26	677	893	10.4	
14	10月20日	金	Lapagaon～Nauban Kharka	2,750	Tent	7:48	17:16	9:28	1,484	460	9.6	
15	10月21日	土	Nauban Kharka～Kashigaon	1,933	Tent	7:51	14:01	6:10	604	1,384	11	
16	10月22日	日	Kashigaon～Machhakhola	869	Lodge	8:17	13:03	4:46	226	1,290	7.3	
17	10月23日	月	Machhakhola	869	Lodge							Rest
18	10月24日	火	Machhakhola～Jagat	1,340	Lodge	7:19	15:45	8:26	1,098	608	16.6	
19	10月25日	水	Jagat～Pewa	1,718	Lodge	7:19	16:01	7:19	1,204	807	15.7	
20	10月26日	木	Pewa～Ghap	2,300	Lodge	8:26	15:23	6:57	965	687	9.7	
21	10月27日	金	Ghap～Lho	3,180	Lodge	7:21	17:37	10:16	1,496	442	15.6	
22	10月28日	土	Lho～Sama	3,520	Lodge	7:26	13:02	5:36	689	315	7.7	
23	10月29日	日	Sama	3,520	Lodge	7:03	15:16	7:03	914	910	10.2	ManasluB・C近くまで往復
24	10月30日	月	Sama～Samdo	3,875	Lodge	7:27	11:00	3:33	407	71	7.4	
25	10月31日	火	Samdo～Larke Phedi	4,460	Tent	7:09	11:43	4:34	710	84	5.9	
26	11月1日	水	Larke Phedi～Bimtang	3,590	Lodge	4:15	16:21	12.6	746	1,496	14.8	Lalke La(5,153m)越え
27	11月2日	木	Bimtang～Gowa	2,515	Lodge	7:44	15:13	7:29	292	1,463	13.1	
28	11月3日	金	Gowa～Thonche	1,965	Lodge	7:53	14:16	6:23	150	731	8.1	
29	11月4日	土	Thonche～Timang	2,750	Lodge	8:01	11:51	3:50	760	86	7	
30	11月5日	日	Timang～Danfe Kharka	4,218	Tent	7:50	15:55	7:50	1,706	98	6.3	
31	11月6日	月	Danfe Kharka	4,218	Tent	7:50	14:57	7:07	730	730	6.5	Namun Bhanjyan(4,850m)往復
32	11月7日	火	Danfe Kharka～Timang	2,750	Lodge	7:54	13:29	5:35	108	1,700	6.6	
33	11月8日	水	Timang～Koto	2,600	Lodge	8:07	10:45	2:38	297	286	6.7	
34	11月9日	木	Koto～Pisang	3,200	Lodge	7:17	15:02	7:45	998	408	16	
35	11月10日	金	Pisang～Manang	3,540	Lodge	7:25	14:33	7:08	653	277	15.2	
36	11月11日	土	Manang	3,540	Lodge							Rest
37	11月12日	日	Manang～Ledar	4,450	Lodge	7:20	14:09	6:49	820	148	11.2	
38	11月13日	月	Ledar～High Camp	4,833	Lodge	7:46	12:04	4:18	742	80	5.5	
39	11月14日	火	High Camp～Mukutinath	3,760	Lodge	4:42	13:54	9:12	603	1,788	12.8	Thorung La(5,415m)越え
40	11月15日	水	Mukutinath～Kagbeni～Jomsom	2,720	Lodge	6:03	11:25	5:23	290	525	9.5	チャータージープ
41	11月16日	木	Jomsom～Pokhara	820	Hotel	7:50	14:57	7:07	1,100	2,349	153.6	チャータージープ
42	11月17日	金	Pokhara～Kathmandu	1,300	Hotel	14:50	15:15				144	Buddha Air U4 620便
43	11月18日	土	Kathmandu	1,300	Hotel							
44	11月19日	日	Kathmandu	1,300	Hotel							
45	11月20日	月	Kathmandu	1,300	Hotel							
46	11月21日	火	Khthmandu	1,300	Hotel							
47	11月22日	水	Khthmandu	1,300	Hotel							
48	11月23日	木	Khthmandu	1,300	Hotel							
49	11月24日	金	Khthmandu～	1,300								
50	11月25日	土	～NRT									

Hotel : 12日

Lodge : 25日

Tent : 11日

3. 海外登山記録

第5回目：2024年4月15日～6月26日

ジョムソン～アッパードルポ～ムグ～フムラエリア
(ロルン・ラ往復)

コロナ禍の2020年春に踏査を開始した。しかしその後新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、1年半の中断を余儀なくされた。2022年秋から踏査を再開し、東ネパールから中央ネパールを3度に分けて踏査した。しかし、4回の踏査で「グレートヒマラヤトレイル・ハイルート」1700kmのうち、約1,000kmを踏破したにとどまった。120周年記念の事業として、2025（令和8）年中に終了するために今回は残りの700kmを一気に踏査することにする。

カトマンズから車で2日かけて、4回目の終着地ジョムソンに戻った。その途中のマルハで、チベット潜入前の慧海師が1900（明治33）年3月から6月まで滞在した家を訪れた。

4月26日、慧海師も渡った「百丈の橋」を通過した。

4月28日、1958（昭和33）年、西北ネパール学術探検隊（川喜田二郎隊長）が6ヶ月間に渡って学術調査をしたツアルカ村に到着した。

4月29日、ツアルカ滞在

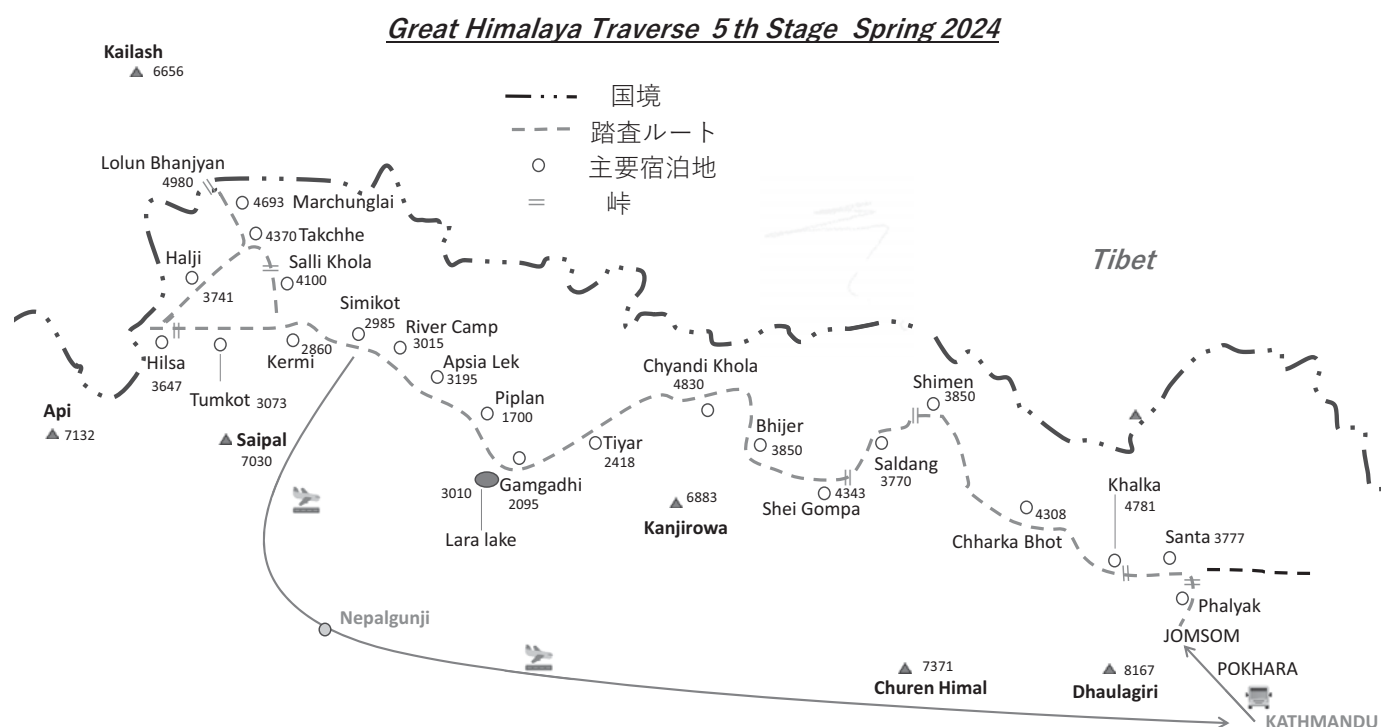
『ヒマラヤに懸ける橋』の根深誠氏が尽力された鉄橋を確認した。

5月9日、シェイゴンパ滞在

隊員は休暇をそれぞれに楽しんだ。キャンプ地の近くで多くの「ハゲワシ」がカツツアル（馬とロバの交雑種）の死骸を啄んでいた。『鳥葬の国』を彷彿させる光景であった。

5月14日、ポーの村を出発して、ニンマ・ギャンツェン峠（5,563m）とリッジ・パス（5,450m）の二つの峠を越えたが、長く険しい行程であった。

5月16日、チャンディー・コーラで「冬虫夏草採り」の大勢の人たちに遭った。ジュムラ辺りから、家族連れで来ているのだという。テントの数から、この谷だけでも1000人を超える入山していると推察できる。



第5回GHT（北西ネパール）概念図

5月24日、ガルマディ滞在
ヒマラヤ山脈で最大のララ湖（2,980m）を訪問。
ネパール人の観光客も多かった。

6月9日、マルチュングライからロルン・ラ
（4,933m）を馬で往復したが、残念ながら念願のカ
イラスを見ることはできなかった。

6月13日、ヒルサに到着。
ネパールと中国の国境の街ではスマートフォンの
時刻表示が、ネパール時間になったり中国時間になっ
たりしたのは驚いた。

6月15日、ヒルサからシミコットまで約90kmの自
動車道をジープで戻った。悪路ではあるが、歩くと
6日間の行程が7時間半ほどだった。

6月16日、シミコットから空路（ネパールガンジ
経由）カトマンズに戻った。



河口慧海も渡った百丈の橋

【行程表】グレートヒマラヤトラバース 5 回目（北西ネパール）行動記録①

日数	月日	曜日	行程	所要時間	標高（m）	備考（峠標高）	宿泊
1	4月15日	月	NRT～KTM				Hotel
2	4月16日	火	Kathmandu			両替	Hotel
3	4月17日	水	Kathmandu			共同装備	Hotel
4	4月18日	木	Kathmandu			個人装備	Hotel
5	4月19日	金	Kathmandu～Pokhara			チャーターバス	Hotel
6	4月20日	土	Pokhara～Jomsom			チャーターバス	Lodge
7	4月21日	日	Jomsom			Rest	Lodge
8	4月22日	月	Jomsom～Phalyak				Tent
9	4月23日	火	Phalyak～YakKharuka				Tent
10	4月24日	水	Yakkharuka～P3810～P4306～Bhima Lojun La～Santa	8	3777	4460m	Tent
11	4月25日	木	Santa		3777	Rest	Tent
12	4月26日	金	Santa～Ghalden Ghuldun Khola Camp	6	4247		Tent
13	4月27日	土	Ghalden Ghuldun Khola Camp～Jungben La～Niwas La～Nulungsumda	7	4987	5550m・5120m	Tent
14	4月28日	日	Nulungsumda Khalka～Chharka Bhot	5	4302		Tent
15	4月29日	月	Chharka Bhot		4302	Rest	Tent
16	4月30日	火	Chharka Bhot～Mola La～Kharka			5030m	Tent
17	5月1日	水	Kharka～Campsait		4210		Tent
18	5月2日	木	Campsait～Chhamdang		4240		Tent
19	5月3日	金	Chhamdang～Tinje		4110		Tent
20	5月4日	土	Tinje～Shimen		3850		Tent
21	5月5日	日	Shimen		3850	Rest	Tent
22	5月6日	月	Shimen～Nangla Pass～Khoma		4060	4260m	Tent
23	5月7日	火	Khoma～Saldang	3	3770		Tent
24	5月8日	水	Saldang～Namugung	7	4360		Tent
25	5月9日	木	Namugung～Sela La～Shei Gompa		4343	5095m	Tent

3. 海外登山記録

【行程表】グレートヒマラヤトラバース 5 回目（北西ネパール）行動記録②

日数	月日	曜日	行程	所要時間	標高 (m)	備考 (峠標高)	宿泊
26	5月10日	金	Shei Gompa		4343	Rest	Tent
27	5月11日	土	Shei Gompa (Round Crystal Mountain)Shey Gompa		4343		Tent
28	5月12日	日	Shey Gompa～Bhijer	8	3850		Tent
29	5月13日	月	Bhijer～Yambur La～Pho	9	4087	4813m	Tent
30	5月14日	火	Pho～Nyingma Gyanzen La～Ridge Pass～Pung Kharka	9	4650	Rest	Tent
31	5月15日	水	Pung Kharka～Yala La～Chyandi Khola	5	4830	5414m	Tent
32	5月16日	木	Chyandi Khola～Takla Khola	7	3785	4450m	Tent
33	5月17日	金	Takla Khola～Chyarga La～Thajuchrur	7	4050	5150m	Tent
34	5月18日	土	Thajuchrur～Shilenchaura Kharka	6	2945	Rest	Tent
35	5月19日	日	Shilenchaura Kharka～Tiyar	3	2418		Tent
36	5月20日	月	Tiyar～Mangri	4	1950		Tent
37	5月21日	火	Mangri～Gamgadhi	4	2095		Tent
38	5月22日	水	Gamgadhi～Rara		3010		Lodge
39	5月23日	木	Rara		3010	Rest	Lodge
40	5月24日	金	Rara～Gamgadhi	5	2095		Tent
41	5月25日	土	Gamgadhi～Bam	5	2700		Tent
42	5月26日	日	Bam～Jogimara	7	3005		Tent
43	5月27日	月	Jogimara～Piplan	8	1700		Tent
44	5月28日	火	Piplan～Apsia Lek	8	3195		Tent
45	5月29日	水	Apsia Lek～Punka Khola	5	3010		Tent
46	5月30日	木	Punka Khola～Margor Lek Bhanjyang～River Camp	4	3015	4037m	Tent
47	5月31日	金	River Camp～Simikot	7	2985		Lodge
48	6月1日	土	Simikot		2985	Rest	Lodge
49	6月2日	日	Simikot～Dharapori	5	2360		Tent
50	6月3日	月	Dharapori～Kermi	5	2860		Tent
51	6月4日	火	Kermi～Salli Khola	6	4100		Tent
52	6月5日	水	Salli Khola～Nyalu La～Talun Camp	5	4380	5001m	Tent
53	6月6日	木	Talun Camp～Traktse	4	4370		Tent
54	6月7日	金	Traktse～Risarba	6	4800		Tent
55	6月8日	土	Risarba		4800	Rest	Tent
56	6月9日	日	Risarba～Lolun Bhanjyan L～Risarba	6	4800	4933m	Tent
57	6月10日	月	Risarba～Jang	6	3900		Tent
58	6月11日	火	Jang～Halji	6	3741		Tent
59	6月12日	水	Halji～Tiljung	2	3577		Tent
60	6月13日	木	Tiljung～Manepeme	6	3950		Tent
61	6月14日	金	Manepeme～Hilsa	5	3647		Lodge
62	6月15日	土	Hilsa		3647	Rest	Lodge
63	6月16日	日	Hilsa～Cho Lagna～Nara La～Yari	6	3663	4107m・4560m	Tent
64	6月17日	月	Yari～Tumkot	5	3073		Tent
65	6月18日	火	Tumkot～Taplung	5	3060		Tent
66	6月19日	水	Taplung～Kermi	5	2860		Tent
67	6月20日	木	Kermi～Dharapori	5	2360		Tent
68	6月21日	金	Dharapori～Shimikot	5	2800		Lodge
69	6月22日	土	Shimikot		2800	Rest	Lodge
70	6月23日	日	Shimikot～Nepalgunji～Kathmandu		1300	飛行機	Hotel
71	6月24日	月	Kathmandu		1300	隊荷整理	Hotel
72	6月25日	火	Kathmandu		1300	隊荷整理	Hotel
73	6月26日	水	Kathmandu		1300	隊荷整理	Hotel
74	6月27日	木	Kathmandu		1300	隊荷整理	Hotel
75	6月28日	金	Kathmandu～				
76	6月29日	土	～NRT				

Hotel : 10日

Lodge : 10日

Tent:54日

第6回目：2024年10月1日～11月24日

インドヒマラヤ（ナンダ・デヴィ南面・西面～ヒンズー教三大聖地～ダラムサラ～ラダック横断）、カンヤツェⅡ峰（6,240m）登頂

10月1日～22日

デリーから電車と車を使い継いでムンシャリまで移動。車道は細く曲がりくねっているが、日本の林道のように、途中ナンダ・デヴィとナンダコートが遠望できた。7日からナンダ・デヴィ東BCに向けてスタート。ナンダ・デヴィ方面は厚い雲に覆れていたが、11日夜半からナンダ・デヴィが現れた。翌日マルトリまで下った。1936年、日本人によるヒマラヤ初登頂となったナンダコット隊も滞在した村である。

当初予定していたダランシ・パスルートは渇水期で水が無いため断念。代替のクアリ・パス（3,720m）ルートは、遠い昔、ロード・カーゾン卿、ティルマンやシプトンも通過している。尾根筋からはナンダ・デヴィをはじめとしてチャンガバン、ドゥナギリ、カメットなど日本人が登頂した山々の展望が素晴らしかった。

ヒンズー教三大聖地巡礼

10月23日～11月3日

インド・ガルワールの最奥の村、マナ村を散策。バドリナート寺院を参拝した。ヒンズー教総本山ケデルナート寺院は、徒歩、馬、籠で参拝する人の数が一日数千人にもものぼると言われている。寺院に参拝する長蛇の列は途切れることなく、本尊を拝むまで5時間半もかかった。29日、ウッタラカシのネルー



第6回GHT（インドヒマラヤ）概念図

3. 海外登山記録

登山学校を訪問した。ガンゴトリ寺院は11月1日に閉門するため参拝客も少なかった。

ダラムサラ訪問

11月4日～11日

マクロードガンジではダライ・ラマ公邸を訪問し、チベット文化に触れた。インド人や欧米人が多く訪れるカレリ湖トレックを歩いた。10日は天候不良でフライトキャンセルに、11日にレーに到着した。現地ガイドと合流し、装備のチェックを受けた。

ラダック踏査（カンヤツェⅡ 6,240m登頂）

11月12日～24日

レーの街は、オフシーズンで閑散としていたが、ホテルが林立し、さらに至る所で新たなホテル建設が行われていた。12日、晩秋のカンヤツェⅡ峰登頂

に向けホテルを車で出発し、マルカ谷で下車。荒涼とした道を歩く。集落では民泊の案内が出され、シーズンには満杯になるという。14日、飯田隊員は体調不良で下山し、その日のうちにレーまで下った。隊員3名は、BCに向かう。15日、午前中、高所順応を兼ねて5,400m付近まで荷揚げをした。16日、午前1時、 -20°C の中、重廣と吉井がガイド2名と共に山頂を目指してアタック開始。中村隊員は、高度障害により夜が明けるのを待って下山し、その日のうちにレーまで下った。登頂隊は、12時半過ぎ登頂、18時過ぎにBCに戻った。重廣は低温下（ -30°C ）での長時間（標高差1,200m、17時間）行動で両手に凍傷を負った。



カンヤツェⅡ峰山頂

【行程表】グレートヒマラヤトラバース 6 回目（インドヒマラヤ）行動記録

グレートヒマラヤトラバース6回目（インドヒマラヤ）行動記録

No.		曜日	行程	標高（m）	峠標高（m）	距離(km)	宿泊
1	10月1日	火	HND～Delhi	300		5,800	H
2	10月2日	水	Delli	300			H
3	10月3日	木	Delli	300			H
4	10月4日	金	Delhi～Kathgodam(By train) Kathgodam(By Car)Almola	1,651		523	H
5	10月5日	土	Almola(By Car)Munsyari	2,272		190	H
6	10月6日	日	Munsyari (Rest)	2,272		6	H
7	10月7日	月	Munsyari(By Car)Lilam(By Car)Ragari～Bugdiyar	2,438		38	T
8	10月8日	火	Bugdiyar～Rilkot	3,161		16	T
9	10月9日	水	Rilkot～Ghandhar	3,419		14	T
10	10月10日	木	Ghandhar～Nanda Devi east Base Camp	3,917		5	T
11	10月11日	金	Nanda Devi east Base Camp～Martoli	3,394		15	T
12	10月12日	土	Martoli～Nahar Devi	2,746		18	T
13	10月13日	日	Nahar Devi～Ragari(By Car)Lilam(By Car)Munsyari	2,272		42	H
14	10月14日	月	Munsyari(By Car)Bageshwar	2,320		125	H
15	10月15日	火	Bageshwar(By Car)Joshimath	1,896		194	H
16	10月16日	水	Joshimath (Rest)	1,896			H
17	10月17日	木	Joshimath(By Car)Auli～Tali Forest Camp	3,351		23	T
18	10月18日	金	Tali Forest Camp～Kuari Pass～Dakwani	3,146	3,722	8	T
19	10月19日	土	Dakwani～Pana	2,764		9	T
20	10月20日	日	Pana～Semkharka	2,633		15	T
21	10月21日	月	Semkharka～Ramni Pass～Ramni	2,557	3,196	10	T
22	10月22日	火	Ramni(By Car)Joshimath	1,892		109	H
23	10月23日	水	Joshimath(By Car)Badrinath～Mana～Badrinath	3,141		52	H
24	10月24日	木	Badrinath(By Car)Joshimath～Pipalkoti	1,391		76	H
25	10月25日	金	Pipalkoti(By Car)Guptkashi	1,447		132	H
26	10月26日	土	Guptkashi(By Car)Gaurikund～Kedarnath	3,555		42	H
27	10月27日	日	Kedarnath (Rest)	3,555			H
28	10月28日	月	Kedarnath(By Horse)Gauricand)(By Car)Guptkashi	1,446		44	H
29	10月29日	火	Guptkashi(By Car)Uttarkashi	1,361		215	H
30	10月30日	水	Uttarkashi(By Car)Gangotri	3,077		93	H
31	10月31日	木	Gangotri(By Car)Uttarkashi	1,242		95	H
32	11月1日	金	Uttarkashi(By Car)Rishikeshi	377		168	H
33	11月2日	土	Rishikeshi(By Car)Delhi	300		241	H
34	11月3日	日	Delhi (Rest)	300			H
35	11月4日	月	Delhi(By Plane)Dharamshala(By Car)McLeodganji(By Car)Naddi	1,767			H
36	11月5日	火	Naddi (Rest)	1,767		34	H
37	11月6日	水	Naddi(By Car)Kareri Village～Jammukot	2,628		42	T
38	11月7日	木	Jammukot～Riyoti～Kareri Lake～Kareri Lake Camp	2,900	⇔2,952	13	T
39	11月8日	金	Kareri Lake Camp～Riyoti Village(By Car)Kareri Village(By Car)Naddi	1,767		43	H
40	11月9日	土	Naddi(By Car)Jammu	386		224	H
41	11月10日	日	Jammu (No Flight))	386			H
42	11月11日	月	Jammu(By Plane)Leh	3,448		362	H
43	11月12日	火	Leh(By Car)Chilling(By Car)Markha Campsaite	3,757		95	T
44	11月13日	水	Markha Campsite～Thachungtse	4,230		15	T
45	11月14日	木	Thachungtse～BC	5,057		6	T
46	11月15日	金	BC (Acclimatization to High altitude)	5,057	⇔5,429	4	T
47	11月16日	土	BC～Mt.Kang Yatse II ～BC	5,057	⇔6,240	11	T
48	11月17日	日	BC～Hankar	3,996		13	T
49	11月18日	月	Hankar(By Car)Chilling(By Car)Leh	3,448		106	H
50	11月19日	火	Leh (Sightseeing)	3,448			H
51	11月20日	水	Leh(By Plane)Srinagar	1,673		233	H
52	11月21日	木	Srinagar (Sightseeing)	1,673			H
53	11月22日	金	Srinagar(By Plane)Delhi	300			H
54	11月23日	土	Delhi	300			H
55	11月24日	日	Delhi～HND			5,800	

3. 海外登山記録

第7回目：

A隊：2025年6月16日～8月10日

バルトロ氷河～ガッシャーブルムBC往復～
ビアフォ氷河～ヒスパール氷河横断

B隊：2025年6月16日～7月22日

バルトロ氷河～ガッシャーブルムBC往復

C隊：2025年6月16日～8月10日

バルトロ氷河～ガッシャーブルムBC往復～
スパンティーク（7,027m）登山

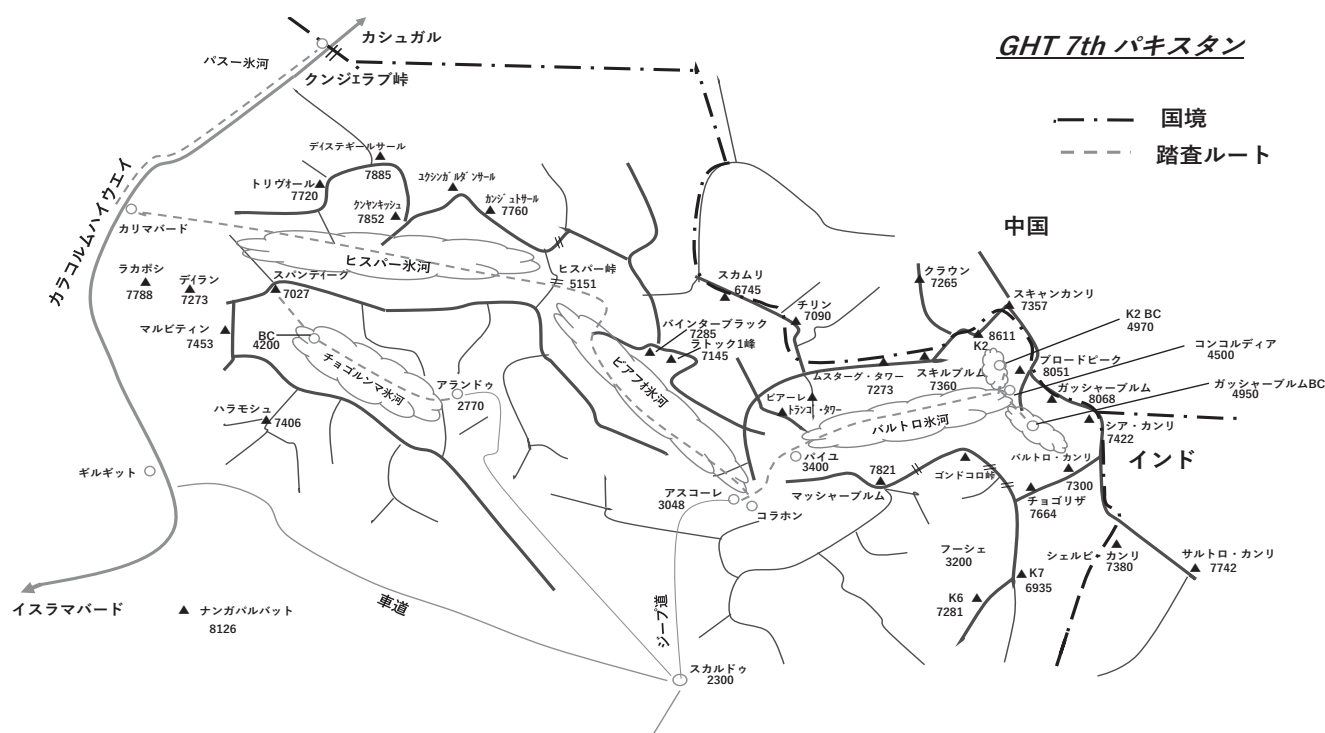
グレート・ヒマラヤ・トラバース最終回は波乱の幕開けとなった。重廣のビザの発給が発行に間に合わず、6月16日関西国際空港で吉井隊員を副隊長に指名、併せて当初計画のA隊のバルトロ氷河からゴンドコロ峠～フーシェ～スカルドウの行程を変更し、B隊・C隊と同じようにK2BCを訪問した後、ガッシャーブルムBCから往路をスカルドウに戻ることにした。

6月18日イスラマバードからスカルドウに移動し

た11名は、予定通り車でアスコールに到着し、22日キャラバンを開始してパイユに向かった。しかし、直後に松田隊員が重度の熱中症が起因する急性腎不全で、25日パイユからヘリコプターでスカルドウの陸軍病院に搬送された。同日、スカルドウに到着した重廣は、意識の混濁した松田隊員を目の前にしてイスラマバードへの移送を決断。27日イスラマバードのShifa国際病院への入院手続きを完了して、28日スカルドウを出発しバルトロ氷河へと向かった。

先行パーティーは26日パイユを出発し、順調にコンコルディアを経てK2BCに到着、その後ガッシャーブルムBCを往復してコンコルディアに戻った。28日スカルドウを出発した重廣はリリゴから馬に乗り、K2BCを往復した後、7月6日夕方コンコルディアでガッシャーブルムBCから戻ってきた先行パーティーと合流した。その後全員でスカルドウに戻った。

スカルドウで3日間休養したのち、C隊2名は16日スパンティーク（7,027m）に向けてアランドウに向かい、A隊5名はビアフォ氷河からヒスパール氷河



第7回GHT（カラコルムヒマラヤ）概念図

の横断を目指してアスコレーに向かった。B隊3名と重廣は17日イスラマバードに戻った。同日夜松田隊員が21日間入院していたShifa国際病院を退院しホテルに入った。20日アスコレーで体調を崩した轟隊員が単身イスラマバードに戻ってきた。21日夜の便でB隊4名が帰国の途についた。22日松田隊員は、成田国際空港で伊丹事務局長らに迎えられ、その足で西新橋の東京慈恵会医科大学付属病院に入院した。重廣と轟隊員はA隊への途中合流を諦めフンザでA隊を待つことにし、23日イスラマバードを出発、スカルドゥを経て24日アリアバードに入った。

A隊4名は、ビアフォ氷河を進みラトック山群やバインター・ブラックなどが猛々しく屹立している岩峰群を俯瞰しながら、70年代後半から80年代にかけて行われた「鉄の時代」のヒマラヤ登攀に思いを巡らせた。ヒスパー峠に向かう頃より氷上のクレバスも多くなり、ロープを結んで安全を確保した。広大なスノーレイクを目の当たりにしながらヒスパー峠を越えた。ヒスパー氷河に流れ込んでいるいくつかの氷河の横断は起伏が激しく苦勞したが、予定より1日早く31日にカリマバードに到着し、重廣・轟と合流しパサーからスストを経てクンジェラブ峠に向かった。C隊2名は、21日より登山を開始したが後半悪天候に見舞われ、29日にC3(6,050m)で2日間待機した後下山した。C隊2名は3日、A隊6名は8月5日スカルドゥに戻り、6日にイスラマバードに移動、残務整理の後予定通り10日に帰国した。

グレート・ヒマラヤ・トラバース総括

- ・2020年春より25年夏まで6（途中コロナ禍により1年半休止）年をかけ、先人たちの足跡を辿り、その挑戦の歴史に触れる温故知新の山旅を目指した。
- ・ネパールの東端にある世界第3位の高峰カンチェ

ンジュンガ(8,586m)山麓からスタートし、インドヒマラヤ、カラコルム山脈を横断して世界第2位の高峰K2(8,611m)へと至る約5,000kmのトレイルを400日かけて踏査した。

踏査で得られた知見

1. 日本と世界のヒマラヤ登山の歴史の再確認
2. 気候変動の深刻な影響の確認
3. 社会・文化の変化の確認
4. 国境間紛争の歴史再認識

※踏査の詳細については、会報『山』・『山岳』・日本山岳会HP（グレート・ヒマラヤ・トラバース（GHT） | 公益社団法人日本山岳会）をご覧ください。



コンコルディアにて

3. 海外登山記録

【行程表】グレートヒマラヤトラバース 7 回目 A 隊（カラコルムヒマラヤ）行動記録

グレートヒマラヤトラバース7回目A隊（カラコルムヒマラヤ）行動記録

	年月日	曜日	行程	出発時間	到着時間
1	2025/6/16	月	HND/KIX～Bangkok～Islamabad		
2	2025/6/17	火	Islamabad		
3	2025/6/18	水	Islamabad～Skardu	8:35	10:50
4	2025/6/19	木	Skardu		
5	2025/6/20	金	Skardu		
6	2025/6/21	土	Skardu～Askole	6:00	13:00
7	2025/6/22	日	Askole～Korophon～Jhola	5:50	15:10
8	2025/6/23	月	Jhola～Monjing	6:00	11:20
9	2025/6/24	火	Monjing～Paiyu	6:05	10:40
10	2025/6/25	水	Paiyu		
11	2025/6/26	木	Paiyu～Khoburtse	6:20	15:35
12	2025/6/27	金	Khoburtse～Urdukas	6:00	10:45
13	2025/6/28	土	Urdukas～Gore II	6:00	14:05
14	2025/6/29	日	Gore II ～Concordia	6:00	15:00
15	2025/6/30	月	Concordia～Broad Peak BC	6:00	11:50
16	2025/7/1	火	Broad Peak BC～K2BC	7:00	11:40
17	2025/7/2	水	K2BC～Concordia	6:00	14:00
18	2025/7/3	木	Concordia		
19	2025/7/4	金	Concordia～Shagring	6:00	13:25
20	2025/7/5	土	Shagring～Gasherbrum BC	5:55	10:05
21	2025/7/6	日	Gasherbrum BC～Concordia	5:40	15:45
22	2025/7/7	月	Concordia		
23	2025/7/8	火	Concordia～Gore I	6:00	15:50
24	2025/7/9	水	Gore I ～Khoburtse	5:50	15:10
25	2025/7/10	木	Khoburtse～Paiyu	5:50	14:00
26	2025/7/11	金	Paiyu～Jhora	5:55	14:45
27	2025/7/12	土	Jhora～Askole	6:30	8:20
28	2025/7/13	日	Askole～Skardu	7:05	13:50
29	2025/7/14	月	Skardu		
30	2025/7/15	火	Skardu		
31	2025/7/16	水	Skardu		
32	2025/7/17	木	Skardu～Askole	6:00	13:05
33	2025/7/18	金	Askole～Namla	6:35	15:30
34	2025/7/19	土	Namla～Shafong	5:40	13:55
35	2025/7/20	日	Shafong～Baintha（Baintha Lukpar Glacier Search）	6:40	8:35
36	2025/7/21	月	Baintha		
37	2025/7/22	火	Baintha～Marphogoro	5:55	11:20
38	2025/7/23	水	Marphogoro～Karpogoro	6:10	10:30
39	2025/7/24	木	Karpogoro～Snow Lake	6:15	11:30
40	2025/7/25	金	Snow Lake～Hispar La（5170m）～Khanibasa	6:00	13:30
41	2025/7/26	土	Khanibasa～Hagure Shangiching	6:00	12:00
42	2025/7/27	日	Hagure Shangiching～Shiqam Baris	5:40	12:45
43	2025/7/28	月	Shiqam Baris～Bitanmal	5:45	11:00
44	2025/7/29	火	Bitanmal～Ghurbua	6:15	10:35
45	2025/7/30	水	Ghurbua～Hisper	6:35	8:30
46	2025/7/31	木	Hispar～Karimabad	8:30	12:10
47	2025/8/1	金	Karimabad		
48	2025/8/2	土	Karimabad（Ultar G～Ultar II 峰・Gulmit・Passu G）Passu	8:30	11:15
49	2025/8/3	日	Passu（Batura G、Khunjerab Pass）Sost	8:00	13:35
50	2025/8/4	月	Sost - Karimabad	8:00	10:45
51	2025/8/5	火	Karimabad～Skardu	8:00	17:45
52	2025/8/6	水	Skardu～Islamabad	11:30	17:00
53	2025/8/7	木	Islamabad		
54	2025/8/8	金	Islamabad		
55	2025/8/9	土	Islamabad～Bangkok		
56	2025/8/10	日	Bangkok～NRT/KIX		

【行程表】グレートヒマラヤトラバース7回目B隊（カラコルムヒマラヤ）行動記録

グレートヒマラヤトラバース7回目B隊・重廣（カラコルムヒマラヤ）行動記録

	年月日	曜日	行程	松田	重廣
1	2025/6/16	月	HND/KIX～Bangkok～Islamabad	HND～BKK～ISB	
3	2025/6/17	火	Islamabad	Islamabad	
4	2025/6/18	水	Islamabad～Skardu	Islamabad～Skardu	
5	2025/6/19	木	Skardu	Skardu	
6	2025/6/20	金	Skardu	Skardu	
7	2025/6/21	土	Skardu～Askole	Skardu～Askole	
8	2025/6/22	日	Askole～Korophon～Jhola	Askole～Jhola	
9	2025/6/23	月	Jhola～Monjing	Jhola～Monjing	KIX～Bangkok～Islamabad
10	2025/6/24	火	Monjing～Paiyu	Monjing～Paiyu	Islamabad
11	2025/6/25	水	Paiyu	Paiyu (H) Skardu	Islamabad～Skardu
12	2025/6/26	木	Paiyu～Khoburtse	Skardu	Skardu
13	2025/6/27	金	Khoburtse～Urdukas	Sukadu (P) ISB SH	Skardu
14	2025/6/28	土	Urdukas～Gore II	Islamabad Shifa HP	Skardu～Askole～Jhola
15	2025/6/29	日	Gore II～Concordia	Islamabad Shifa HP	Jhola～Monjin
16	2025/6/30	月	Concordia～Broad Peak BC	Islamabad Shifa HP	Monjin～Paiyu
17	2025/7/1	火	Broad Peak BC～K2 BC	Islamabad Shifa HP	Paiyu～LiligoCamp
18	2025/7/2	水	K2 BC～Concordia	Islamabad Shifa HP	LiligoCamp～Urdukas
19	2025/7/3	木	Concordia	Islamabad Shifa HP	Urdukas～Gore II
20	2025/7/4	金	Concordia～Shagring	Islamabad Shifa HP	Gore II～Concordia
21	2025/7/5	土	Shagring～Gasherbrum BC	Islamabad Shifa HP	Concordia～K2 BC
22	2025/7/6	日	Gasherbrum BC～Concordia	Islamabad Shifa HP	K2 BC～Concordia
23	2025/7/7	月	Concordia	Islamabad Shifa HP	Concordia
24	2025/7/8	火	Concordia～Gore I	Islamabad Shifa HP	Concordia～Gore I
25	2025/7/9	水	Gore I～Khoburtse	Islamabad Shifa HP	Gore I～Khoburtse
26	2025/7/10	木	Khoburtse～Paiyu	Islamabad Shifa HP	Khoburtse～Paiyu
27	2025/7/11	金	Paiyu～Jhola	Islamabad Shifa HP	Paiyu～Jhola
28	2025/7/12	土	Jhola～Askole	Islamabad Shifa HP	Jhola～Askole
29	2025/7/13	日	Askole～Skardu	Islamabad Shifa HP	Askole～Skardu
30	2025/7/14	月	Skardu	Islamabad Shifa HP	Skardu
31	2025/7/15	火	Skardu	Islamabad Shifa HP	Skardu
32	2025/7/16	水	Skardu	Islamabad Shifa HP	Skardu
33	2025/7/17	木	Skardu～Islamabad	Islamabad Shifa HP	Skardu～Islamabad
34	2025/7/18	金	Islamabad	Islamabad	Islamabad
35	2025/7/19	土	Islamabad	Islamabad	Islamabad
36	2025/7/20	日	Islamabad	Islamabad	Islamabad
37	2025/7/21	月	Islamabad～Bangkok	Islamabad～BKK	Islamabad
38	2025/7/22	火	Bangkok～NRT/KIX	BKK～NRT	Islamabad
39	2025/7/23	水			Islamabad～Skardu
40	2025/7/24	木			Skardu～Aliabad
41	2025/7/25	金			Aliabad
42	2025/7/26	土			Aliabad～Minapin～Hopa Kund Camp
43	2025/7/27	日			Hopa Kund Camp～Rakaposhi BC
44	2025/7/28	月			Rakaposhi BC～Diran BC～Rakaposhi BC
45	2025/7/29	火			Rakaposhi BC～Minapin～Karimabad
46	2025/7/30	水			Krimabad
47	2025/7/31	木			Krimabad
48	2025/8/1	金			Karimabad
49	2025/8/2	土			Karimabad～Passu
50	2025/8/3	日			Passu～Sost
51	2025/8/4	月			Sost - Karimabad
52	2025/8/5	火			Karimabad～Skardu
53	2025/8/6	水			Skardu～Islamabad
54	2025/8/7	木			Islamabad
55	2025/8/8	金			Islamabad
56	2025/8/9	土			Islamabad～Bangkok
57	2025/8/10	日			Bangkok～KIX

H : Helicopter

P : Plane

HP : Hospital

3. 海外登山記録

【行程表】グレートヒマラヤトラバース7回目C隊（カラコルムヒマラヤ）行動記録

グレートヒマラヤトラバース7回目C隊（カラコルムヒマラヤ）行動記録

No.	年月日	曜日	行程	出発時間	到着時間
1	2025/6/16	月	HND～Bangkok～Islamabad		22:10
2	2025/6/17	火	Islamabad		
3	2025/6/18	水	Islamabad～Skardu	8:35	10:50
4	2025/6/19	木	Skardu		
5	2025/6/20	金	Skardu		
6	2025/6/21	土	Skardu～Askole	6:00	13:00
7	2025/6/22	日	Askole～Korophon～Jhola	5:50	15:10
8	2025/6/23	月	Jhola～Monjing	6:00	11:20
9	2025/6/24	火	Monjing～Paiyu	6:05	10:40
10	2025/6/25	水	Paiyu		
11	2025/6/26	木	Paiyu～Khoburtse	6:20	15:35
12	2025/6/27	金	Khoburtse～Urdukas	6:00	10:45
13	2025/6/28	土	Urdukas～Gore II	6:00	14:05
14	2025/6/29	日	Gore II ～Concordia	6:00	15:00
15	2025/6/30	月	Concordia～Broad Peak BC	6:00	11:50
16	2025/7/1	火	Broad Peak BC～K2BC	7:00	11:40
17	2025/7/2	水	K2BC～Concordia	6:00	14:00
18	2025/7/3	木	Concordia		
19	2025/7/4	金	Concordia～Shagring	6:00	13:25
20	2025/7/5	土	Shagring～Gasherbrum BC	5:55	10:05
21	2025/7/6	日	Gasherbrum BC～Concordia	5:40	15:45
22	2025/7/7	月	Concordia		
23	2025/7/8	火	Concordia～Gore I	6:00	15:50
24	2025/7/9	水	Gore I ～Khoburtse	5:50	15:10
25	2025/7/10	木	Khoburtse～Paiyu	5:50	14:00
26	2025/7/11	金	Paiyu～Jhora	5:55	14:45
27	2025/7/12	土	Jhola～Askole	6:30	8:20
28	2025/7/13	日	Askole～Skardu	7:05	13:50
29	2025/7/14	月	Skardu		
30	2025/7/15	火	Skardu		
31	2025/7/16	水	Skardu～Arandu	7:20	15:50
32	2025/7/17	Thu	Arandu～Manpe-Khuro	7:45	13:35
33	2025/7/18	Fri	Manpe-Khuro～Bolocho	7:10	14:30
34	2025/7/19	Sat	Bolocho～Spantik BC	6:55	11:40
35	2025/7/20	Sun	BC		
36	2025/7/21	Mon	BC～C1(11:35)～BC	8:15	13:55
37	2025/7/22	Tue	BC		
38	2025/7/23	Wed	BC～C1	12:20	15:15
39	2025/7/24	Thu	C1～BC	8:10	9:20
40	2025/7/25	Fri	BC～C1	12:45	15:15
41	2025/7/26	Sat	C1		
42	2025/7/27	Sun	C1～C2	6:30	11:00
43	2025/7/28	Mon	C2		
44	2025/7/29	Tue	C2～C3	6:35	11:05
45	2025/7/30	Wed	C3		
46	2025/7/31	Thu	C3～BC	9:30	16:10
47	2025/8/1	Fri	BC		
48	2025/8/2	Sat	Spantik BC～Chogo Brangsa	9:05	19:20
49	2025/8/3	Sun	Chogo Brangsa～Arandu (11:20)～Skardu	8:00	19:45
50	2025/8/4	Mon	Skardu		
51	2025/8/5	Tue	Skardu		
52	2025/8/6	Wed	Skardu～Islamabad		
53	2025/8/7	Thu	Islamabad		
54	2025/8/8	Fri	Islamabad		
55	2025/8/9	Sat	Islamabad～Bangkok		
56	2025/8/10	Sun	Bangkok～NRT		

グレート・ヒマラヤ・トラバース参加者

1. 味岡四郎（関西支部）	1960年7月9日	3回目参加
2. 阿部君枝（千葉支部）	1955年3月20日	7回目参加
3. 飯田邦幸（東京支部）	1954年9月1日	3・4・5・6・7回目参加
4. 梅村一之（福島支部）	1958年7月7日	7回目参加
5. 重廣恒夫（関西支部）	1947年10月11日	1・2・3・4・5・6・7回目参加
6. 榛葉千穂（千葉支部）	1967年11月24日	7回目参加
7. 轟 涼（埼玉支部）	1956年8月17日	5・7回目参加
8. 中谷康司（神奈川支部）	1975年11月11日	7回目参加
9. 中谷みどり（首都圏）	1987年12月14日	7回目参加
10. 中村三佳（関西支部）	1963年7月12日	3・6・7回目参加
11. 藤井正善（千葉支部）	1947年3月18日	2・3回目参加
12. 松田宏也（千葉支部）	1955年12月28日	1・7回目参加
13. 丸尾祐二（静岡支部）	1944年12月4日	2回目参加
14. 柳田泰則（多摩支部）	1967年4月10日	7回目参加
15. 吉井 修（関西支部）	1961年3月4日	1・2・3・4・5・6・7回目参加

重廣恒夫ヒマラヤ登山歴

1973年秋	ネパール	エヴェレスト（8,848m）	南西壁8,380mに到達	RCC II
1976年春	インド	ナンダ・デヴィ東峰（7,434m）	第2登	日本山岳会
1977年夏	カラコルム	K2（8,611m）	南東稜第2登	登攀リーダー 日本山岳協会
1979年夏	カラコルム	ラトック I 峰（7,145m）	南壁初登頂	登攀隊長 京都カラコルムクラブ
1980年春	チベット	チョモランマ北壁初登攀	登攀リーダー	日本山岳会
1984年春	ネパール	カンチェンジュンガ南峰（8,491m）	～	
			中央峰（8,478m）初縦走	登攀リーダー 日本山岳会
1985年夏	カラコルム	マッシャーブルム（7,821m）	北稜～北西壁初登攀	
		ブロード・ピーク（8,047m）	登頂	登攀隊長 関西登高会
1988年春	チベット	チョモランマ（8,848m）	交差縦走	登攀隊長 日本山岳会
1990年秋	チベット	ナムチャバルワ（7,782m）	偵察	隊長 日本山岳会
1991年秋	チベット	ナムチャバルワ（7,782m）	ナイプン峰（7,043m）	登頂 隊長 日本山岳会
1992年秋	チベット	ナムチャバルワ（7,782m）	初登頂	隊長 日本山岳会
1995年春	チベット	マカルー（8,463m）	東稜初登攀	隊長 日本山岳会
2016年秋	ネパール	ナンガマリ II 峰（6,209m）	初登頂	隊長 日本山岳会関西支部

中国四川省ミニヤコンカ山群 ロンシャン (龍山/Longshan、6,684m) 登山報告

桑 原 郁 美 (札幌北稜クラブ)

はじめに

2025年の秋、上野はるか(34歳)、伊佐見奈穂子(34歳)、鈴木彩子(45歳)、桑原郁美(27歳)の4名で中国四川省の未踏峰登頂に挑戦した。頂上を目指してアタックを続けていたが、標高6,230m地点において、ルート上に越えることのできない大岩が行く手を阻んだ。ルート修正が必要な状況であったものの、残り時間および体力の消耗を考慮した結果、これ以上の前進は困難と判断し、撤退を決断した。最終的に登頂には至らなかったが、本遠征には今後の登山計画に資する経験や知見が得られたと考え、ここに報告する。

・パーティ結成

2024年の春、上野が3人のメンバー(伊佐見、鈴木、桑原)を誘う形でパーティが結成された。上野は、中国遠征を計画したときには妊娠が分かっており、産後の自身を理解し遠征を共にしてくれる仲間として、女性がいいだろうと考えていた。上野は、自身が20代の頃に望んでいたように、世代の異なる女性クライマーと遠征を共にし、その手順や経験を共有したいと考えていた。そのため、やや年齢差のある4人での編成となった。

・山の選定

上野は四川省・雲南省での登山経験が数回あり、計画当初の目標は、四姑娘山の全山縦走であった。しかし2025年の春になり、四姑娘山周辺では幕営が禁止されているという情報を入手、四姑娘山登山の中止を余儀

なくされた。その後、本やAmerican Alpine Journal、インターネット上の記録などを参照し、パーティ内で協議を重ねた結果、次の目標をミニヤコンカ山群の未踏峰であるロンシャン(龍山/Longshan、6,684m)に定めた。中村保氏の『East of the Himalaya Mountain Peak Maps』に掲載された朝日に燃えるピークの写真に強く惹かれたことが主たる理由であり、加えて成都からのアクセスが良い点も魅力であった。

ロンシャンは中国四川省のミニヤコンカ(7,556m)の同稜線上3.5km程度南南東に位置している。アメリカのカイル・デンプスターら3名が2015年2月にロンシャン南稜上の6,500m地点まで到達している。他にも、中国隊2名が2024年10月にロンシャンの1.5km程度南南東に位置する朱山北峰に登頂している。この2つの記録から、ルート・キャンプサイト情報や、それらの写真を、いくつか手に入れた。写真に写ったセラックを見ながら、その崩壊の可能性やアイスクリュウの利用可能性、さらには現地における前進可否について、分からないなりに考えを巡らせ、日本では悶々とした日々を過ごしていた。

登山概要および行動経過

・日程

2025年9月28日～10月25日(出国から帰国まで全28日間、山中22日間)

各自の都合から、1か月以内の短期間でおこなった。ちなみに、中国は30日以内の滞在であればビザ

が不要である（2026年1月現在）

・登山工程

（BC はベースキャンプを示し、C+数字はBC より上部に設けた各キャンプサイトを指す。番号は低標高側から付した）

BC（4,030m）設置後、BC からC1（4,750m）までの日帰り、BC からC3（5,400m）までの3泊4日という2回の順応登山を行い、アタックはBC から8泊9日で行った。順応時に荷揚げやルート偵察を行い、一部の箇所にフィックスロープを残した。アタックの8泊9日の期間中にもルート偵察日を設けて、適宜フィックスロープを残しながら前進した。2回の順応登山の間には1日の休養日を設け、2回目の順応登山後からアタック日までの休養日は2日であった。

・登山ルートの内容

BC ～ C1

短い草の生えた歩きやすい尾根、野生動物の踏み跡が散見された。

C1 ～ C2

氷河に不安定な巨岩が堆積したモレーン C2まではアプローチシューズで行動可能

C2 ～ C3

脆い岩場10ピッチを確保登攀（スタカット）＋雪斜面の歩きを同時登攀（コンテ）

C3 ～ C4

氷河&セラック帯 セラック帯5ピッチをスタカットで抜けると、傾斜が緩み氷河歩きとなる

C4 ～ C5

ロンシャン西面の冰雪壁の登り 適宜スタカットとコンテを切り替える



↑ 南面で脆い下部岩壁



↑ C3からセラック帯を登り出す上野



↑ セラック帯最後の壁、20m



↑ C4から見たC5への登攀ライン

3. 海外登山記録

	日付	行程	宿泊場所
1	9月28日	成田 - 成都（天府国際空港）	ホテル（成都）
2	9月29日	shopping in 成都	ホテル（成都）
3	9月30日	成都 - shimian	ホテル（simian）
4	10月1日	simiann hotel - 林道終点	2950m
5	10月2日	林道終点 - BC入り	BC / 4030m
6	10月3日	休養	BC / 4030m
7	10月4日	BC からC1（4750m）の往復	BC / 4030m
8	10月5日	休養	BC / 4030m
9	10月6日	4260mへ荷物デポ	BC / 4030m
10	10月7日	BC からC1（4750m）	C1 / 4750m
11	10月8日	C1 からC2（5070m）	C2 / 5070m
12	10月9日	C2 からC3（5400m） → C2	C2 / 5070m
13	10月10日	C2 からBCへ下山	BC / 4030m
14	10月11日	休養	BC / 4030m
15	10月12日	休養	BC / 4030m
16	10月13日	1 BC からC2（5070m）	C2 / 5070m
17	10月14日	2 C2 からC3	C2 / 5070m
18	10月15日	3 C3 からルート工作（上野&鈴村）	C3 / 5400m
19	10月16日	4 C3 からC4	C4 / 5820m
20	10月17日	5 C4 からルート工作（桑原&伊佐見&上野）	C4 / 5820m
21	10月18日	6 C4 からC5	C5 / 6230m
22	10月19日	7 C5 からC4へ下山	C4 / 5820m
23	10月20日	8 C4 からC2へ下山	C2 / 5070m
24	10月21日	9 C2 からBCへ下山	BC / 4030m
25	10月22日	休養	BC / 4030m
26	10月23日	BC - Shimian Hotel	ホテル（simian）
27	10月24日	Shimian Hotel - 成都	ホテル（成都）
28	10月25日	成都天府国際機場 - 成田（Tokyo）	-

↑ 中国国内における行動経過表

アタック装備

・荷物の重量：BCから上げた荷物の総量は1人あたり23.5kg。実際には2回に分けて荷物を上げており、8泊9日でアタック出発の際の重量は1人あたり15kgほどだった。C3から上げた荷物は1人あたり13kgであった。

・テント：C2まではモンベルのステラリッジテント2型とESPASEデュオアルティメイトを使用。C3からは重量を重視してESPASEのデュオアルティメイト（フライ無し）とHERITAGEのクロスオーバードームを使用。

・食糧：朝食と夕食はモンベルのリゾッタにスープ系や甘いスティックの粉飲料、ナッツなどを追加した。スープ系の飲み物は洋風よりも味噌汁やお吸い物が高所ではよかった。また脱水症と食欲低下に備えてOS1とポカリスエットを持参し、高所での行動水としても、テント内での水分補給にも使用した。

・ギア類：アタック前半のC3までは岩登りのためカム2セット、ピトン、トラйкаムを持参。後半C3からは偵察で氷河帯からの突破が可能となったため、不要なカムなどをC3にデポした。C3からの氷河、セラック、冰雪壁では状況によってスノーピケットと

アイスクリューを使い分けた。また下降で土囊懸垂を想定していたため、捨て縄は多めに持参した。

・ロープ：50mのダブルロープ4本、50mのセミスタティックロープ1本を使用した。セミスタティックロープはフィックス用であり、落石で痛むリスクを考慮し8.0mmと10.5mmを持参したが、10.5mmは重量的に携行することが厳しく、C1にデポすることになった。

そのほか参考情報

・高所順応

今回は登山期間が短いことから、遠征以前にある程度高所順応を行う必要があることを4人で話していた。上野、鈴村は8月に2週間、インド・ラダックの山に行き6,100mまで登り、桑原は9月に雲南省の山で5,400mのピークに登った。伊佐見は8月にヨーロッパアルプスで4,000mにおける宿泊を何度かしていた。そのほか、上野、鈴村、伊佐見は出国前にミウラドルフィンズで2日間4,000～6,000mに設定された低酸素室で低酸素トレーニングをおこなった。低酸素室での経験は順応に直結するものではな

いが、呼吸法や血中酸素濃度の上げ方などを教わり役立った。

登山の行程を組む作業は中村進著「海外登山 Expedition」、山本正嘉著「登山の生理学とトレーニング学」などを参考に行った。

・費用

本遠征にあたっては、現地のエージェントとして、Masherbrum社のDonald Tang氏に多大なるご支援をいただいた。また、日本山岳・スポーツクライミング協会をはじめ、複数の知人・友人の皆様からご支援を賜った。

今山行を振り返って

・パーティ構成の評価

本遠征は、私自身にとって初めての高所登山であったが、今回のパーティ構成は全体として行動しやすく、無理のない形で山行を進めることができた。

BCにはコックはいなかったものの、他のメンバーの料理のレベルが非常に高く、限られた環境下においても食事は大変充実しており、行動の継続に良い影響を与えていた。また、メンバー同士の気配りも

行き届いており、私が下部岩壁の登攀中に落石により負傷した際にも、適切な対処をしていただいた。行動ペースについても無理がなく、意識的にペースを抑えることで余裕のある安定した



↑クオリティの高いBC食

■支出	金額(1人分)
エージェント費用(ポーター/リエゾン/ホテル/送迎/追加荷揚げ/手数料)	343,000
航空券(往復)	90,000
食費(BC/アタック/行動食)	28,000
通信費(インリーチサブスク2台/天気予報サブスク)	8,000
装備購入費	116,000
高所順応(低酸素室利用)	35,000
失ったギア(スリング/新規購入ロープ等)	36,000
雑貨(BCでの生活用品、医療品、赤布等のアタック時小物)	13,000
合計	669,000

■収入	金額(1人分)
JMSCA海外登山支援金	73,000
個人からの支援金	18,000
合計	90,000

■1人当たりの負担額	579,000
------------	---------

3. 海外登山記録

行動が可能となり、高山病を発症するリスクを抑えることにもつながった。

人数の面では、4人パーティであったため、特にロープを使用する場面では待ち時間が生じることもあった。しかしその一方で、体調不良者が出た場合にも、他のメンバーが行動の選択肢を保持できるという利点があり、この点においては4人構成のメリットが生かされたといえる。

・情報の限られた未踏峰での登山経験

本遠征のルートは、いまだ登頂には至っていないものの、過去に6,500m地点まで到達した記録があるルートであった。しかし、得られる情報は限られており、加えて氷河状態の変化などにより、ルート状況は年々変化していると考えられたため、全体としてルートの見通しは立てにくかった。

特にC3からC4にかけての区間は、本ルートの中でも最も判断が難しいパートであり、セラック帯を安全に通過できるかどうかは、実際にセラックの迷路に入り込まなければ通過可否を判断できない状況であった。そのため、多くのギアを携行する必要性が生じ、ルート確認のための偵察行動も増えた結果、アタックに要する日数は当初の想定よりも増加した。

一方で、登山可能な日程には限りがあったため、BCにおいて十分な休養日を確保することができず、疲労が完全に回復しないまま、8泊9日のアタックに入る形となった。これらの要因による疲労の蓄積は、パーティ全体の行動に少なからず影響を与えていると考えている。改めて、情報の限られた山における登山の難しさを、身をもって実感する山行となった。

上野さんから誘われたことをきっかけに始まった本遠征であったが、初めての経験ばかりで、分からないことも多く、不安は尽きなかった。エージェンツ探しに始まり、登山許可の取得、必要装備の選定、具体的な登山行程の検討など、自分一人では到底成し得ない準備ばかりであり、他の3人の力に支えられて進めることができた。なかでも、高所登山および中国渡航の経験を持つ上野から多くの助言を受けながら準備を進められたことは、大きな支えとなった。

また、中国国内に到着してからも、装備や食料の買い出し、ポーターに預けるためのパッキングなど、慌ただしい日々が続いたが、これらについては上野の妹さんが大いに力を貸してくださった。



↑ 迷路さながらのセラック帯

高所遠征登山の準備段階から登山全体に至るまで、仲間とともに考え、行動するなかで、多くのことを学ぶことができた。高所遠征登山への挑戦は、時間的にも経済的にも負担が大きく、容易に踏み出せるものではない。そのような中で、一步を踏み出す機会を与えてくれた仲間感謝するとともに、本遠征で得られた経験を、今後の自身の登山に生かしていきたい。

日本のヒマラヤ登山最盛期

尾 形 好 雄（日本ヒマラヤ協会顧問）

東京オリンピックが開催された1964年に日本人の海外渡航が自由化されると、海外の山々に憧れていた日本のクライマー達は、堰を切ったようにアルプスやヒマラヤへと飛び出して行った。

ところが皮肉なことに65年3月、ネパール政府は、突然、ネパール・ヒマラヤの登山禁止を発表し、門戸が閉ざされてしまう。登山禁止措置は4年半に及び、69年秋から再解禁された。

70年春から満を持した登山隊がネパール・ヒマラヤに殺到し、第2次ヒマラヤン・ブームが起こる。

筆者もこのヒマラヤン・ブームのさなか、自分の所属する山岳会の仲間とヒマラヤへ行ってみようと計画し始めたのが71年であった。

74年にヒマラヤ初見参してから、最後の8,000m峰登山となった97年までの24年間に17回ほどヒマラヤに出かけた。本稿では筆者がヒマラヤ登山に関わった時代の日本のヒマラヤ登山について述べる。

文中の登山隊の（ ）内は、隊長名、HAJ は日本ヒマラヤ協会、JAC は日本山岳会、IMF はインド登山財団の略称。

ヒマラヤ鉄の時代

1970年の第2次ヒマラヤン・ブームの到来と共に登山界で叫ばれたのは、「ヒマラヤ鉄の時代」であった。既に8,000mの未踏峰は無く、巨峰のヴァリエーション・ルートを目指す時代となった。

70年、イギリス隊（C.ボニントン）のアンナプルナI峰南壁、西ドイツ・イタリア隊（K.M.ヘルリヒコフファー）のナンガ・パルバット南南東側稜、

71年、フランス隊（R.パラゴ）のマカルー西稜、72年、オーストリア隊（W.ナイルツ）のマナスル南西壁、75年、イギリス隊（C.ボニントン）のエベレスト南西壁などが華々しく初登攀され、「ヒマラヤ鉄の時代」の幕開けとなる。

こうした風潮を受けて日本隊も8,000m峰のヴァリエーション・ルートに挑戦した。

70年春、JAC隊（松方三郎）がエベレスト南西壁に挑むも断念、南東稜から日本人初登頂。同時期、JAC東海支部隊（原真）は、マカルー南東稜を初登攀。

71年には日本マナスル西壁登攀隊（高橋照）がマナスル北西支稜を初登攀。73年秋には日本の精鋭クライマーを集めた第2次RCC隊（湯浅道男）がエベレスト南西壁に挑むも8,380m迄で涙を飲み、南東稜からの秋季初登頂にとどまる。

ダウラギリI峰では78年春と秋に2つの初登攀が成された。春季に東京都山岳連盟隊（雨宮節）が南稜、秋季には群馬県山岳連盟隊（田中成幸）が南東稜をそれぞれ初登攀する。

81年、早稲田大学隊（松浦輝夫）がK2西稜～南南西稜上部。同年秋にイエティ同人隊（吉野寛）がアンナプルナI峰南壁。82年、日本山岳協会隊（新貝勲）がチョゴリ（K2）北稜。同年秋にカモシカ同人隊（佐々木徳雄）がダウラギリI峰の難攻不落を誇った北西稜をそれぞれ初登攀する。

86年、登歩渓流会隊（清水修）がガッシャーブルムI峰北クーロワール。90年、横浜山岳協会隊（岸本五三男）がチョゴリ（K2）北西壁下部。同年夏、

3. 海外登山記録

岡山大学隊（黒田治久）がガッシャーブルムⅠ峰西稜末端からそれぞれ初登攀する。

95年春、日本大学隊（神崎忠男）がエベレスト東北東稜～北東稜を完登。同時期、JAC隊（重廣恒夫）がマカルー東稜。同年夏、千葉工業大学隊（坂井広志）はナンガ・パルバット北面ラキオト側稜を初登攀。

97年、JAC東海支部隊（田辺治）がK2西稜～西壁初登攀などの記録を残した。

短期速攻、無酸素、単独

1975年夏、ライホルト・メスナーとペーター・ハーベラーの二人がガッシャーブルムⅠ峰を「高所ポーターも固定ロープも酸素も使わずに一撃で登頂した。」と云う衝撃的なニュースが流れた。また、同年秋には英国のディック・レンショーとジョー・タスカーの二人がガルワールのドゥナギリ南東壁を6日間のアルパイン・スタイルで初登攀。このように8,000mの高峰と7,000m峰の困難な壁が一撃で登られ、ヒマラヤにおけるアルパイン・スタイルの到来を迎える。

76年、原真はJAC隊を組織して、当時ソ連がパミールで開催していた「国際キャンプ」に参加してソ連滞在35日間の日程でイスモイル・ソモニ（コムニズム）とコルジェネフスカヤを目指した。原はこの登山を皮切りに高所での実験登山を繰り返し、アルパイン・スタイルの登山を牽引した。

パミールの国際キャンプは、短期間で複数の7,000m峰登山ができるため毎年多くの日本人が訪れた。さらに89年にハン・テングリ（6,995m）が7,010m峰として解禁されると天山国際キャンプも人気を博した。

82年、原真は高山研究所隊を率いてシシャパンマ中央峰を北東稜からアルパイン・スタイルで登り、日本人として初めて8,000m峰のアルパイン・スタ

イル登山を成し遂げる。89年には高山研究所隊（原真）の遠藤晴行・由加夫妻がアルパイン・スタイルでガッシャーブルムⅠ峰に登頂。

94年秋、長尾妙子・遠藤由加ペアがチョー・オユー南西壁をアルパイン・スタイルで登頂。2人に同行した山野井泰史は南西壁新ルートを単独初登攀。

一方、78年になると日本出発から帰国まで1ヶ月で7,000m峰登山が行われるようになる。78夏、HAJ隊（沖允人）は、カシミールのヌンを31日間、同年秋のHAJ隊（稲田定重）は、ガルワールのトリスルを27日間で登頂して帰国した。

また、78年秋には清水清二・加藤保男ペア（ドクターがBCに同行）でマナスルを目指すような少人数登山隊も現れた。

78年春、ライホルト・メスナーとペーター・ハーベラーの二人が今度はエベレストの無酸素登頂を果たす。人類が世界最高峰を自分の肺呼吸だけで登った記念すべき出来事であった。メスナーは、80年夏にチョモランマの北稜～グレート・クーロワールの単独無酸素初登攀という究極のソロ・クライミングを成し遂げる。

日本人の超高峰の無酸素登山は、小西政継が牽引し、世界三大高峰の無酸素登山に挑戦した。80年、山学同志会隊（小西政継）がカンチェンジュンガ北西壁から無酸素初登攀。82年、チョゴリ（K2）北稜の無酸素初登攀（ヒマラヤ鉄の時代で既述）。82年秋、山学同志会隊（湯田一男）がマカルーの無酸素登頂。83年秋、イエティ同人隊（吉野寛）と山学同志会隊（川村晴一）がエベレストの無酸素登頂。これで川村晴一は、世界三大高峰の無酸素登頂者となる。

禿博信は、81年にダウラギリⅠ峰を単独無酸素登頂（北東コル迄はシェルパが同行）した後、82年にチョゴリ（K2）、83年にはエベレストの無酸素登頂を達成するが、エベレスト頂上からの帰途、墜死する。

山田昇は、85年夏にHAJ隊でK2、秋に植村直己物語隊でエベレスト、冬にはマナスルと3季連続無酸素登頂のハットトリックを達成。山田は、88年にも春にエベレスト縦走、秋にシシャパンマ、チョー・オユーの2度目のハットトリックを成している。

96年、戸高雅史がK2を単独無酸素登頂。2000年、山野井泰史はK2の南南東リブから単独無酸素初登攀を成す。

ヒマラヤ縦走

1971年、東京大学隊（高橋詢）は、チューレン・ヒマールの西峰～東峰の縦走を試みるが、力及ばず。その後、同隊で登攀隊長を務めた鹿野勝彦は76年にJAC隊を率いてナンダ・デビィ東峰～主峰の縦走を果たす。さらに84年にカンチェンジュンガ南峰～中央峰の縦走と主峰登頂を成功させる。

76年、芝浦工業大学隊（秋山和也）は、バルトロ・カンリのⅣ峰から最高峰のⅢ峰を越えてⅡ峰からⅠ峰へ縦走し、Ⅱ峰、Ⅰ峰の初登頂を果たし、往路を戻った。同年秋、東京都勤労者山岳連盟隊（近藤和美）は、ガルワール・ヒマラヤのマイクトリとデヴィトリの交差縦走を目指し、デヴィトリ側の3名がマイクトリへの縦走を成功させた。

77年、茨城大学隊（平井広二）は、ヒンドゥー・クシュのウドレン・ゾムの南峰～中央峰を縦走。

79年、法政大学Ⅱ部山岳部OB会隊（土居正勝）は、ルプガール・サールの西峰～中央峰の縦走に成功。

同年秋、カモシカ同人隊（今井通子隊長）は、ダウラギリⅡ峰～Ⅲ峰～Ⅴ峰の初縦走を成した。

81年春、HAJ隊（山森欣一）は、カンチェンジュンガ主峰～ヤルン・カン（西峰）の交差縦走を目指したが、ヤルン・カン側の登頂時間が遅れたため、交差縦走は断念。

88年、エベレストの北面と南面からの交差縦走が日本・中国・ネパールの三国合同隊によって成された。

95年、戸高雅史、北村俊之、服部徹の3名はブロード・ピーク北稜から北峰～中央峰～主峰への縦走を成す。

岩壁登山

一方、この時代はヒマラヤの困難な岩壁も登られた。1971年に当時日本を代表するクライマーの一人と云われた古川正博（清水RCC）を擁した静岡登攀クラブ隊（秋山礼佑）がヒンドゥー・クシュのサラグラール南西Ⅱ峰西壁を初登攀し、これが日本の7,000m峰に於ける岩壁登山の嚆矢とされている。

76年、後にフリークライミング界をリードする戸田直樹はグループ・ド・コルデの仲間を率いてチャンガバンの南西稜を初登攀。同年春、山学同志会隊（小西政継）は、ジャヌー北壁～東稜を初登攀する。

78年、静岡登攀クラブ隊（勝美幸雄）は、バインダー・ブラック南壁を初登攀。79年、ピアフォ・カラコルム登攀隊（高田直樹）がラトックⅠ峰南壁から初登頂。同年、広島山の会隊（寺西洋治）はラトックⅢ峰南東壁から初登頂する。80年、東京大学隊（安田典夫）がシヴリン北稜～北壁。81年、近藤国彦・名越實ペアがクン西壁。83年、婆娑羅衆隊（大浜健次）がシヴリン南稜をそれぞれ初登攀。84年、東京大学隊（永田東一郎）がK7を南西稜から初登頂。87年、バルトロ・キャンプ隊（野中玲樹）がファースト・トランゴを初登攀。88年、バルトロ・クライミング・チーム隊（丸藤正晴）は、トランゴ・ネームレス・タワー南東壁に挑み、ピーク迄150mの地点で断念。

山学同志会の市山篤らは88年、90年とケダルナート・ドーム東壁に挑むも完登は叶わなかった。

3. 海外登山記録

90年、日本隊（南裏健康）がグレート・トランゴ北東ピラーとトランゴ・ネームレス・タワー東壁及び南西壁の登攀に成功。94年、日本バギラティ登山隊（山本一夫）がバギラティⅡ峰南西ピラーを初登攀。95年、山野井泰史・妙子夫妻と中垣大作は、レディース・フィンガー南西壁初登攀。96年にメルー北東壁のシャークスフィンに挑戦した馬目弘仁は、其の後も01年、04年、06年と挑戦し続け、最後は01年に登られたババノフ・ルートから中央峰に登頂。

初登頂、女性登山隊

第2次ヒマラヤン・ブームの到来では、7,000m峰の初登頂も相次いだ。

1970年、大阪大学隊（水野祥太郎）がP29（ガディ・チュリ）、関西登高会隊（野村哲也）がダウラギリⅥ峰、静岡大学隊（芹沢喬）がチューレン・ヒマールにそれぞれ初登頂し、同志社大学隊（太田徳風）はダウラギリⅠ峰の秋季初登頂を果たす。

75年、大阪府岳連隊（野村哲也）がダウラギリⅣ峰、岡山大学隊（榎木栄一）がダウラギリⅤ峰。77年、登歩渓流会隊（加藤春雄）がヌプツェ北西峰。78年、雪と岩の会隊（尾形好雄）がヒマルチュリ西峰、日本勤労者山岳連盟隊（吉尾弘）がガネッシュ・ヒマールⅣ峰（パビール）、大阪市立大学隊（伴朗）がランタン・リルンにそれぞれ初登頂。

以後、79年、岡山大学隊（大森武生）がガネッシュ・ヒマールⅡ峰。81年、HAJ隊（植松秀之）がランタン・リ。83年、弘前大学隊（黒滝淳二）がネムジュン。84年、JAC東海支部隊（湯浅道男）がガウリサンカール南峰。92年、北海道大学隊（丹羽由紀夫）がヒムルン・ヒマール。94年、信州大学隊（藤松太一）がギャジカン。96年、信州大学隊（渡部光則）がラトナ・チュリなどの初登頂が相次いだ。

なお、中国、インド、パキスタン、ブータンの初

登頂は別項に記し、6,000m峰の初登頂は、割愛した。

一方、7,000m峰の主な初登攀は、以下に記す。

75年、明治大学隊（中島信一）がチューレン・ヒマール西稜。78年、名古屋山岳会隊（小川義夫）がダウラギリⅡ峰東稜、明治大学隊（河野照行）がアンナプルナ・ダクシン南西稜。80年、フリースタイル・クライミング・クラブ隊（大塚岩生）がランタン・リルン南東稜。81年、九州歯科大学隊（金沢健）がガネッシュ・ヒマールⅡ峰北東稜、福岡グレッシャー・クライマーズ・クラブ隊（白石宣夫）がニルギリ北峰北稜。86年、酪農学園大学隊（新谷暁生）がチャムラン西稜、日本大学隊（岡田貞夫）がヒマルチュリ南稜などの初登攀が成された。

一方、この時代には女性だけの登山隊がヒマラヤに挑むようになる。

70年、女子登攀クラブ隊（宮崎英子）のアンナプルナⅢ峰を皮切りに74年、日本女子隊（黒石恒）がマナスル。75年、女子登攀クラブ隊（宮崎英子）がエベレスト。76年、日印女子隊（M.アグラワール、須田紀子）がアビ・ガミンにそれぞれ女性初登頂を果たす。

以下に登頂した主な女性登山隊を記す。

80年、群馬女子登山隊（安中秀子）がバギラティⅡ峰。81年、女子登攀クラブ隊（田部井淳子）がシシャパンマ、アルパインクラブたんぽぽ隊（平川宏子）がCB13a（パルドール・ピーク）。82年、富岡女子隊（大岡ひろ子）がピサン・ピーク。83年、ブッシュ山の会隊（山本久子）がツクチェ・ピーク、富士宮山岳会隊（工藤紀代）がCB13a。85年、桐生山岳会隊（森下緑）がメントーサ、日本女子隊（倉松由子）がハヌマン・ティバ、HAJ隊（森美枝子）がムーシュ・ムスターグ。87年、HAJ隊（木下祥子）がヌン。88年、JAC隊（田部井淳子）がシヴァ、女子登攀クラブ隊（橋本しをり）がガッシャーブルム

Ⅱ峰に日本人女性初登頂。89年、田部井隊（田部井淳子）がメラ・ピーク。90年、女子登攀クラブ隊（安原真百合）がダウラギリⅠ峰。92年、HAJ隊（寺沢玲子）がサラスワティ、JAC隊（宮沢美渚子）がクワンデ。97年、HAJ隊（市川春代）と恩田真砂美・大久保由美子ペアがムスターグ・アタに登頂。

冬期登山

1980年代になるとヒマラヤの冬期登山時代が到来する。73年にノシャックの冬期登頂を果たしたポーランド隊（A.ザヴァダ）は、80年2月、エベレストの冬期初登頂を成す。

日本隊も80年12月、明治大学隊（植村直己）がエベレストに挑むもサウス・コルで涙を飲む。82年には北海道大学隊（安間荘）が11月中旬にBC予定地の北東コルに荷上げを開始し、12月13日にダウラギリⅠ峰に登頂。同年12月にはイエティ同人隊の加藤保男は、エベレストに単独登頂を果たすが、帰途遭難する。同時期、HAJ隊（山田昇）は、マナスルに挑んだが強風に阻まれて断念。

83年12月にはカモシカ同人隊（高橋和之）が、秋にローツェで事前登山を行った後、12月からエベレストに向かい山田昇ら3名とシェルパ1名が冬期登頂を果たす。同時期にネパール側と同時登頂を目指してチョモランマ北壁に挑んだカモシカ同人隊（今井通子）は、8,100mで断念した。

84年12月、群馬県山岳連盟隊（八木原罔明）がアンナプルナⅠ峰南壁に向かったが、悪天候に阻まれて断念。

85年12月には山田昇、斎藤安平のペアがマナスルに冬期登頂。同ペアは86年12月にマカルー南東稜に挑むも7,500mで断念。

87年12月、群馬県山岳連盟隊（八木原罔明）が、アンナプルナⅠ峰南壁の冬期初登攀を成す。同隊は、

引き続き91年冬、93年冬にエベレスト南西壁に挑み、93年12月に冬期初登攀に成功する。

93年に冬期エベレスト南西壁を登った田辺治は、其の後、冬期ローツェ南壁に執念を燃やし、01年、03年、06年と立て続けに挑戦し、06年についに冬期南壁を完登し、8,475mに到達。田辺は4年後ダウラギリⅠ峰登山中に雪崩で逝く。

カラコルム・ラッシュ

1971年、バングラディシュの独立に伴う第3次印パ戦争の勃発によってパキスタン政府は自国の登山禁止を発表する。73年秋に再解禁されるがシアチェン氷河周辺は解禁されなかった。75年にシアチェン氷河周辺の山々が解禁されると登山隊が殺到し、日本隊の初登頂が相次いだ。

先ず、日本隊の8,000m峰挑戦は、77年、日本山岳協会隊（新貝勲）がK2。同年、愛知学院大学隊（湯浅道男）がブロード・ピーク。80年、ベルニナ山岳会隊（佐藤英雄）がガッシャーブルムⅡ峰。81年、長野県山岳協会隊（前沢昌弘）がガッシャーブルムⅠ峰。83年、富山県山岳連盟隊（木戸繁良）がナンガ・パルバットにそれぞれ日本人初登頂を果たす。

一方、7,000m峰の初登頂は、下記の通り相次ぎ日本隊の独壇場となった。

75年、広島山の会隊（圓田慶爾）がカンピレ・ディオール、JAC岩手支部隊（笠原潤二郎）がマルビティン中央峰、市川山岳会隊（山本良彦）がK12に登頂して、74年京都大学隊（岩坪五郎）の初登頂に疑義を呈した。静岡大学隊（片山一）がテラム・カンリⅠ峰・Ⅱ峰にそれぞれ初登頂。

76年、大阪大学隊（三澤日出夫）がアプサラサス、東北大学隊（佐藤春夫）がシンギ・カンリ、神戸大学隊（平井一正）がシェルピ・カンリ、学習院大学隊（三井源蔵）がスキャン・カンリにそれぞれ初登頂。

3. 海外登山記録

78年、防衛大学隊（安藤千年）がパスー東峰、HAJ隊（西郡光昭）がバトゥーラIV峰にそれぞれ初登頂。

79年、北海道大学隊（越前谷幸平）がクンヤン・チュッシュ北峰、北海道山岳連盟隊（佐々木孝雄）がプマリ・チュッシュ、ラトックI峰（岩壁登山で既述）、弘前大学隊（花田澄人）がテラム・カンリIII峰にそれぞれ初登頂。

80年、東京志岳会隊（杉本忠男）がユトマル・サール。82年、金沢大学隊（東保幸）がハチンダール・キッシュ。84年、広島山岳会隊（大前恒雄）がウルタルI峰。85年、東京志岳会隊（杉本忠男）がマラングッティ・サール。96年、山崎彰人・松岡清司ペアがウルタルII峰にそれぞれ初登頂を成す。

一方、7,000m峰の初登攀では、下記のような記録が印された。

78年に昭和山岳会隊（島方健次）がハラモシュ西稜。79年、早稲田大学隊（大谷映芳）がラカポシ北稜。81年、千葉工業大学隊（藤井正善）がカンジュット・サール西壁。85年、関西カラコルム隊（賀集信）がマッシャーブルム北稜。91年、早稲田大学隊（大貫敏史）がトリヴォール北東稜などの初登攀が成された。

インド・ラッシュ

インドは第2次大戦後、国境の内側にインナーラインを設け、外国人の立ち入りを規制してきた。1974年にインナーラインが大幅に後退され、入域範囲が広がった。さらに79年秋にガンゴトリ地域がオープンされると、翌80年には22隊もの日本隊がインド・ヒマラヤを訪れた。中でもオープンされたガンゴトリには、半数の11隊が訪れ、シヴリン北稜～北壁の初登攀（岩壁登山で既述）。東洋大学隊（大滝憲司郎）がメルー南峰、飛騨山岳会隊（島田靖）がメルー

北峰にそれぞれ初登頂。立命大学隊（中江啓介）がヴァスキ・パルバット東壁から初登頂。登嶺会隊（宮原末夫）がカルチャクンド、香川県労山隊（高林久蔵）がバギラティI峰にそれぞれ初登頂を成す。

この時代の6,000m峰の主な初登頂は、以下の通り。

75年、上市峰窓会隊（田辺郁夫）がカランカ、HAJ隊（清水澄）がリシパハール。76年、東洋大学隊（大滝憲司郎）がドダ。77年、広島山岳会隊（久保信義）がバルナジII中央峰。78年、明治大学駿台山岳部隊（坂本武）がバイハリ・ジョット南峰。79年、秋田クライマーズクラブ隊（平沢健治）がデヴィ・ムクット。80年、群馬県高校職員隊（村上泰賢）がシャルミリ（CB53）、北海道大学WV隊（大内論文）がザンスカールのZ1。82年、ラッツ隊（伊藤忠雄）がCB14、京都大学隊（宗森行生）がCB31。95年、足利工業大学隊（沖允人）がサラ・シュワ。97年、JAC東海支部隊（鈴木常夫）がクーラなどに初登頂する。

7,000m峰では83年、山学同志会の宮求、久松宏人と東洋大学の鈴木章は、アルパイン・スタイルでサトパント西峰を南面から初登頂。95年、山形海外交流協会隊（植松秀之）がマナ・ピーク北西峰に初登頂する。

一方、7,000m峰の初登攀では76年、JAC学生部隊（牧野内昭武）がドゥナギリ北稜。78年、明治学院大学隊（小堀一政）がヌン東稜。80年、名古屋大学隊（伊藤行人）がヌン北西稜の初登攀などがある。

83年、IMFはナンダ・デビ内院の立ち入り禁止を発表し、周辺の登山が適わなくなる。

第3次印パ戦争の後、パキスタン政府は75年からシアチェン氷河周辺の山々への入域を許可した。それによって7,000m峰の初登頂は前述したように何れもパキスタン側からビラフォンド・ラを越えてシアチェン氷河に至り、登頂したものであった。ところ

が80年代に入ると印パの対応に変化が表れる。80年にインド陸軍隊（K.N.タダニ准将）がヌブラ谷からシアチェン氷河に入り、アプサラサスⅠ峰に登頂。翌81年にはN.クマール大佐の率いるインド陸軍隊がシア・カンリとサルトロ・カンリに登頂する。

こうした背景の中、84年にIMFは、東部カラコルムのマモストン・カンリの登山許可をHAJの日印合同隊（B.S.サンドゥ、尾形好雄）に与え、初登頂を成す。一方、同時期にパキスタンからリモⅠ峰の登山許可を受けた弘前大学隊（飯岡博）は、イスラマバード入りした後、山の変更を求められ、ユクシン・ガルダン・サールへ転進を余儀なくされた。

その後、IMFは85年から東部カラコルムへの登山隊受け入れを開始。85年にはHAJの日印合同隊（フカム・シン、沖允人）がサセル・カンリⅡ峰西峰に初登頂。88年、HAJの日印合同隊（フカム・シン、尾形好雄）がリモⅠ峰に初登頂。93年、広島山岳会の日印合同隊（フカム・シン、名越實）がアク・タシに初登頂。今世紀に入ってから、02年にJACの日印合同隊（H.カパディア、坂井広志）がパドマナブに初登頂している。

中国ヒマラヤのオープン

中国では文化大革命の後、再復権した鄧小平が、「対外開放政策」を打ち出し、それに伴い1979年から中国領ヒマラヤが開放された。

まず、日本隊の中国領8,000m峰への初挑戦は以下のように続いた。

80年、JAC隊（渡辺兵力）がチョモランマの北壁（下部初登攀）と北東稜から登頂。81年、シシャパンマ登頂（女性隊で既述）。82年、90年、チョゴリ登頂（ヒマラヤ鉄の時代で既述）、87年、カモシカ同人隊（高橋和之）がチョー・オユーに登頂。89年、宮城県岳連隊（八嶋寛）がガッシャーブルムⅠ峰に挑

戦。

次いで未開放だった山域での初登頂を目指す登山隊が殺到して、熾烈な登山許可争いも展開された。

7,000m峰の初登頂では、81年、川崎市教員隊（坂原忠清）がムスターグ・アタ北峰。82年、大分県岳連隊（伊東亨）がポーロン・リ、京都大学隊（上尾庄一郎）がカンペンチン。85年、京大・同志社大合同隊（平林克敏）がナムナニ。86年、神戸大学隊（岡市敏治）がクーラ・カンリⅠ峰、東北大学隊（金森安孝）がニエンチェンタンラ、東京農業大学隊（早坂敬一郎）が7,167m峰（崑崙）、HAJ隊（八嶋寛）がチョー・アウイ、HAJ隊（新郷信廣）がカルジャン北峰、HAJ隊（飛田和夫）がギャラペリ。87年、HAJ隊（山森欣一）がラプチェ・カン。88年、同志社大学隊（内藤真一）がカント。89年、大阪市立大学隊（佐藤一良）がスークァン・リ。92年、JAC隊（重廣恒夫）がナムチャ・バルワ。93年、JAC東海支部隊（徳島和男）がクラウン。94年、岐阜大学隊（藤井洋）がチリン。95年、中津川勤労者山岳連盟隊（宮下征夫）がニエンチェンタンラ東峰。97年、日本勤労者山岳連盟隊（近藤和美）がリスム。99年、JAC隊（伊丹紹泰）がリャンカン・カンリなどの初登頂が成された。

ブータン、シッキムのオープン

1982年、国際山岳連盟（UIAA）の総会がカトマンズで開催された。その際、ブータン政府代表団から83年からブータン・ヒマラヤをオープンすることがアナウンスされた。それを受けて早速、日本隊は動いた。

83年、解禁第1号の許可を取得した女子登攀クラブ隊（田部井淳子）は、ジチュ・ダケに挑むも断念し、セプチュカンに転進して初登頂。

84年、HAJ隊（八木原罔明）はジチュ・ダケ東稜

3. 海外登山記録

を初登攀し、南峰に初登頂したが、北峰は断念した。同年、東京北部勤労者山岳連盟隊（小宮昌平）はツォリム・カンに初登頂。川崎橘山想会隊（菅原長久）はガンブーに初登頂する。

85年、HAJ隊（大内論文）がガンケルプンスムに南稜から挑むも6,800mで断念。同年、京都大学隊（堀了平）はマサ・カン、千葉大学隊（吉永英明）がナムシラにそれぞれ初登頂した。86年、川崎市教員隊（坂原忠清）はマンデ・カンに初登頂する。

87年にブータン政府は、ガンケルプンスムの登山禁止を発表。以後、日本隊のブータンでの登山は暫く途絶えるが、91年、千葉大学隊（桜井文隆）がツェンダ・カンに初登頂する。

75年にインドの22番目の州に併合されたシッキムは、インナーラインの問題で北部シッキムへの外国人入域が閉ざされてきた。

91年、HAJの日印合同隊（フカム・シン、尾形好雄）が外国隊としては戦後初めてシッキムのゼム氷河に入り、カンチェンジュンガ北東支稜から登頂した。これを契機に翌年からシッキムの門戸が開放され、日本隊が押し寄せた。

92年、東洋大学隊（大滝憲司郎）はチョンブーに挑むも断念。93年、HAJの日印合同隊（ハルバジン・シン、尾形好雄）がピラミッド・ピーク（パティバラ）に初登頂。同年秋、明治学院大学隊（伊丹紹泰）はトゥインズ（ジンミゲラ）に挑むも事故のため断念。94年、大滝憲司郎が率いる日本隊は、トゥインズに初登頂するが登頂者は遭難。同年、東北大学長峻山の会隊（能勢真人）は、シニオルチューの偵察でゼム氷河に入り、翌95年にシニオルチューに登頂する。

公募登山隊

1980年代に入るとそれまでには無かったコマースヤ

ル・エクスペディション（商業登山）と云われるガイド公募登山隊が現れる。

80年春、スイスのマックス・アイゼリンが自身のダウラギリ I 峰初登頂20周年を記念して一般公募した隊員17名をダウラギリ I 峰に送り、17名が登頂。同年秋には、ドイツのハウザー・エクスペディションが公募隊11名をアンナプルナ I 峰に送り、中央峰に11名が初登頂。同隊は翌81年春にはマナスルに公募隊28名送り、13名を登頂させた。

ネパールで始まった「ガイド公募登山」は、パキスタンや中国の8,000m峰へも拡がっていった。

やがてこの「ガイド公募登山」は、世界最高峰のエベレストでも行われるようになる。90年代に入るとニュージーランドのロブ・ホールを初めとする欧米からの公募登山隊が陸続とエベレスト登山に押しかけるようになる。96年にはロブ・ホール隊に参加した難波康子が、日本人女性二人目のエベレスト登頂者（766番目）になった後、下山時に遭難。公募登山隊のあり方に警鐘をならしたが、2000年代になると公募登山隊は、益々盛況となった。

エベレスト初登頂から40年後の93年12月に筆者が登頂した時が613番目であった。それが2014年になるとエベレスト登頂者は延べ7,000人を超えた。

終わりに

1970年～1999年にヒマラヤへ出かけた日本隊は1,470隊、10,656人（山森欣一調べ）に及ぶ。この30年間は日本のヒマラヤ登山の最盛期で、さまざまなヒマラヤ登山が展開された。それらを限られた紙面で述べることは大変困難なことで、本来なら各キャプション別に執筆したいところであった。文中の各ピークに標高も記載すべきであったが、文字数を減らすために割愛した。人名の敬称も省略させていだいた。

【参考文献】

岩と雪Vol.30、36、38、43、46、52、山と溪谷社
岩と雪・山岳年鑑（1975～1995年）、山と溪谷社
山森欣一（2018）日本ヒマラヤ登山通史、日本ヒマ
ラヤ協会
山森欣一（2012）日本のヒマラヤニストたち、日本
ヒマラヤ協会
池田常道（2015）現代ヒマラヤ登攀史、山と溪谷社
Richard Sale & John Cleare（2000）ON TOP
OF THE WORLD, Haper Colins Publishers
Ltd.

山岳遭難データの分析に至る経緯

村 越 真（静岡大学）
国立登山研修所

1. はじめに

独立行政法人日本スポーツ振興センター国立登山研修所（以下「登山研」という。）では、警察庁及び長野県警察から山岳遭難データの提供を受け、その分析結果を2025年7月に公表¹⁾し、同年9月にスポーツ庁と合同で報道発表²⁾した。

分析結果の詳細については参考文献を参照されたいが、本稿では、なぜ登山研が山岳遭難データの分析を行うこととなったのか、その経緯等を報告する。

2. 2018～2022年度：第4期中期目標・中期計画

登山研は、2009年4月に、文部科学省の直轄組織から、独立行政法人日本スポーツ振興センター（以下「JSC」という。）に移管された。JSCは、文部科学省の外局であるスポーツ庁所管の独立行政法人であり、中期目標管理法人として、5年ごとに中期目標・中期計画を定めて事業を実施している。

登山研は従来、「登山リーダー」³⁾の養成や、全国各地で指導的立場にある山岳会等所属の社会人、山岳遭難救助を担う警察・消防等において指導的立場の者を対象とした、専門的な研修会を開催してきた。しかし、山岳遭難事故件数の高止まりや、スポーツクライミング・トレイルランニングをはじめとした登山の多様化、そして2020年度からは新型コロナウイルス感染症の拡大により、居住地域近隣での里山登山・アウトドアブームが起こるなど、社会事情の変化も加わり、専門的な人材の養成だけでなく、広く一般登山者を対象とした安全登山に資する普及・

啓発活動が求められるようになった。

そこで、2018年度から2022年度までのJSC第4期中期目標・中期計画⁴⁾において、登山研は以下のように事業の見直しや、今後のあり方を検討することとなった。

- ・中期目標（文部科学大臣が定めるもの）

国立登山研修所については、高校登山部顧問教員等の資質向上のための研修会の開催、指導参考資料の作成をするとともに、一般登山者への安全な登山の基礎的な知識や技術の普及・啓発を含め、中期目標期間中に機能や役割について見直しを行う。

- ・中期計画（JSCが定めるもの）

平成30年度において、高校登山部顧問教員等を対象とした研修会の開催や指導者用テキスト等の資料を作成するとともに、毎年度、安全な登山の基礎的な知識や技術に関する啓発資料等により、登山指導者や一般登山者への安全登山に関する情報発信を行う。

国立登山研修所の主催事業を見直し、登山リーダー研修会等新たな枠組みによる登山指導者の育成を検討する。また、国立登山研修所の今後の機能や役割については、平成33年度末までに業務内容を検証し、国立登山研修所が実施すべき業務を整理するとともに、結果を踏まえた見直しの方向性について平成34年度末までに検証する。

これを受けて、登山研では「機能向上検討委員会」を設置し、業務内容の検証や見直しの方向性についてまとめることとした。

2. 機能向上検討委員会とは

2022年7月に、登山研では機能向上検討委員会を設置した。委員は以下のとおりである。

(五十音順、敬称略、所属役職は当時)

大城 和恵 (北海道大野記念病院医師・山岳医療
救助機構代表)

恩田真砂美 (上智大学山岳会)

梶 正彦 (一般財団法人全国山の日協議会理事
長)

加藤 彰彦 (明治大学山岳部部長・明治大学教授)

★北村 憲彦 (名古屋工業大学教授・愛知県山岳連
盟理事長)

佐伯 岩雄 (立山ガイド協会所属山岳ガイド)

杉田 孝志 (立山町教育委員会教育長)

鈴木 雅文 (全国高等学校体育連盟登山専門部長
・愛知県立西尾高等学校校長)

武川 俊二 (公益社団法人日本山岳ガイド協会理
事長)

中崎 健志 (富山県教育委員会教育次長)

萩中 正剛 (富山県警察本部地域部山岳安全課長)

廣瀬 優 (富山県消防防災航空隊隊長・富山北
消防署消防課長)

古野 淳 (公益社団法人日本山岳会会長)

丸 誠一郎 (公益社団法人日本山岳・スポーツ
ライミング協会会長)

山本 正嘉 (鹿屋体育大学教授)

★：委員長

※スポーツ庁健康スポーツ課職員がオブザーバー
参加

機能向上検討委員会は、2022年度に計3回開催した。詳細は、以下のとおりである。

・第1回

日時：2022年7月21日 (木)

13時30分から15時30分まで

形式：Web会議

・第2回

日時：2022年9月22日 (木)

13時00分から15時00分まで

形式：Web会議

・第3回

日時：2022年11月11日 (金)

13時30分から15時30分まで

形式：Web会議

機能向上検討委員会の検討結果の中で、山岳遭難データの分析に関する内容を、以下にまとめる。

- ・登山界の現状や課題、山岳遭難事故防止についてエビデンスに基づいた調査研究、データ分析および情報発信が必要であることから、調査・分析・研究機能を目的とした調査研究体制の強化を図る。
- ・一般登山者の山岳遭難事故対策を強化し、デジタルを活用した研修機能の充実を図る。情報発信力を向上させ、SNSや動画等、インターネットを活用する。まずは認知度を向上させ、内容の充実を図り、その効果を分析検証するなど、短・中長期的な戦略を立てる。
- ・中立的な立場として関係機関（各省庁、自治体、民間企業、山岳関係機関等）との連携、協力体制を構築する。

4. その他

3. 国立登山研修所専門調査委員会・調査研究部会の設置

登山研では従前から「専門調査委員会」を設置し、次に掲げる事項について調査・研究を行っている。

- (1) 登山の指導・技術の向上に関する調査・研究
- (2) 研修の効果的な運営に関する調査・研究
- (3) その他、安全な研修の実施及び目的の達成のために必要な事項

委員の任期は2年で、運動生理学・医学・リスク管理分野等の学識経験者、弁護士等の専門家、山岳ガイド、大学山岳部のOB等の外部有識者20名により構成されている。

機能向上検討委員会での検討結果を踏まえ、JSCでは、2023年度から2027年度までの第5期中期目標・中期計画期間⁵⁾において「山岳遭難事故防止や安全な登山に資する情報について、収集、分析等の調査研究を行い、得られた成果を安全な登山の普及に活用する」ことを定めた。この取組みの一環として、2024年2月に、専門調査委員会内に「調査研究部会」を設置した。調査研究部会の委員は、専門調査委員を兼任しており、以下のとおりである。

(五十音順、敬称略)

※荒川 勉 (株式会社石井スポーツ特別顧問)

猪熊 隆之 (株式会社ヤマテン代表取締役・気象予報士・中央大学山岳部元監督)

北村 憲彦 (名古屋工業大学名誉教授・愛知県山岳連盟理事長)

★村越 真 (公益社団法人日本オリエンテーリング協会代表理事副会長)

山本 正嘉 (鹿屋体育大学名誉教授)

◆渡邊 雄二 (国立登山研修所アドバイザー)

★：部会長 ◆：オブザーバー ※：2024年度限り

調査研究部会は、2023年度及び2024年度の2か年度で、計5回開催した。詳細は、以下のとおりである。

・第1回

日時：2024年2月9日 (金)

14時00分から16時00分まで

形式：JSC外苑事務所対面参加及びWeb会議システムを用いたハイブリッド開催

・第2回

日時：2024年3月27日 (水)

14時00分から15時30分まで

形式：Web会議

・第3回

日時：2024年5月23日 (木)

10時00分から11時30分まで

形式：Web会議

・第4回

日時：2024年11月21日 (木)

13時00分から15時00分まで

形式：Web会議

・第5回

日時：2025年2月6日 (木)

15時00分から17時00分まで

形式：Web会議

一口に「(山岳遭難事故防止や安全な登山に資する

情報について、収集、分析等の) 調査研究」と言っても、対象とするテーマや調査方法は数多くあることから、調査研究部会ではまず登山界の実態把握を既存のエビデンスに基づいて行うこととした。具体的には、山岳遭難データの警察への提供依頼を実施し、警察庁及び長野県警察から、2021年から2023年までの3年間分のデータ提供を受けるとともに、入手可能な関連データを含めた統計学的な分析・定性的な実態把握を行った。

4. 分析結果の概要と考えられる対策

4-1. 警察庁提供データ

2012～2013年の山岳遭難データ分析結果⁶⁾と比較して、

- ①「道迷い」は、特に若年層（20～30歳台）において減少傾向の可能性があること。
- ②「転倒」の増加が顕著であること。
- ③「転倒」の多い年代の幅が、中年（40～50歳台）に広がりつつあること。
- ④「病気」「疲労」が、高齢者（60歳以上）を中心に増加していること。

4-2. 長野県警察提供データ

- ①男女とも、中高年の「転倒・転滑落」が多くなっていること。
- ②男性については、「道迷い」が少なく、中高年（特に50歳台から70歳台まで）の「疲労（のみ）」が多くなっていること。
- ③女性については、中高年（特に50歳台・60歳台）の「転倒（のみ）」が突出していること。

以上が、統計的に「有意」又は「有意」とまでは言えないものの傾向が読み取れる、として取りまとめた。

4-3. 考えられる対策

4-3-1. 「道迷い」減少の要因と対策

スマートフォンが全国民の9割以上に普及し、山岳遭難数の多い60歳台でも9割以上、70歳台でも8割以上の普及となっている⁷⁾。スマートウォッチなどのウェアラブルデバイスも含め多くの機種でGPS（GNSS）センサが搭載され、悪天候時でもある程度正確に素早く現在地や方位、標高がアプリ上で表示されるようになり、その利用方法が広まったことが、「道迷い」減少の要因の一つとなっていることが推測される。

「道迷い」は一時の40%強から30%程度まで減少した。この減少傾向が今後も続き、それがどの程度まで続くかについては、もうしばらく注視が必要である。昔ながらの紙地図は、広い範囲や大まかな地形を全体的に俯瞰しやすいというメリットがあり、デジタルツールは現在地の把握や細かな地形の確認、ルートの先読みに優れ、両方をバランスよく習熟して組み合わせて使用していくことが、必要である。同時に、データからは、中高年層ではその恩恵を十分に受けていないことが想定されるので、デジタルツールの効果的な利用方法を含めた「地図読み・ナビゲーション技術」の教育・啓発が今後のカギとなる。

4-3-2. 「転倒・転滑落」「病気・疲労」増加の要因と対策

登山回数の最も多い年代が70歳台となり、加齢による行動体力（筋力、バランス能力、敏捷性等）や認知機能の低下が、「転倒・転滑落」「病気・疲労」増加の要因の一つとなっていることが推測される。

「転倒・転滑落」「病気・疲労」の増加傾向を止めるためには、自身の体力・技術・精神の限界を越えないような身の丈に合った山を選ぶなど、無理のな

4. その他

い登山計画の作成と実行が必要である。また、それ以上に、登山に効果的なトレーニングの計画的な実施や、日々の運動習慣・健康・体調管理・疾患の治療等による「ライフパフォーマンス」⁸⁾の維持・向上が今後のカギとなる。パフォーマンスの低下を自覚できるような、簡便なセルフチェックの方法の確立も待たれる。

5. 今後の課題

今回の山岳遭難データの分析は「疫学研究」に類するものとなり、分析結果は、山岳遭難に影響する要因を洗い出し、妥当性のある仮説を立てるための入口に過ぎない。具体的に言いかえれば、山岳遭難者「のみ」を対象とした分析からでは、遭難原因を「推測」できるだけであり、本当にその「推測」が正しいかを検証するためには、「遭難しなかった登山者」も含めて調査をする必要がある。疾患の原因や治療方法を研究するためには、疾患に罹患している「病人」と、疾患に罹患していない「元気な・健康な者」とを比較し、オッズ比の統計的検討が必要になるのと同様である。

それでも、妥当で明確な仮説があることで、より実証的な遭難原因の究明が可能となる。今回の分析の成果はこの点にあり、これまで登山界において「一般的に」「なんとなく」想像で言われてきた遭難原因が、データの裏付けにより「確度の高い推測・仮説」として明確になったことにある。

今後は、例えば「スマートフォンや地図アプリの普及が道迷い遭難を減らした」という仮説が正しいかどうかを検証するために、道迷い遭難者だけでなく、「道迷いしなかった登山者」も対象として、スマートフォン・地図アプリの利用率や、地図アプリの利用習熟度をなんらかの形で調査し、利用率や習熟度に応じて道迷い遭難率の低下が見られるのかを

調査・分析することで、仮説が正しかったどうかを検証することができる。⁹⁾

登山研では、2025年度末を目途に、一般登山者を対象とした標本調査を実施し、2026年度中にその結果を取りまとめる予定である。その結果を基に、年代や性別による差異に着目しつつ、きめ細やかに遭難原因を科学的に特定していき、山岳遭難防止のための具体的な施策検討に役立ててまいりたい。

最後に、データを提供くださった警察庁及び長野県警察の皆様、データを分析してくださった調査研究部会員の皆様に、あらためましてお礼を申し上げます。

<参考文献>

- 1) 国立登山研修所専門調査委員会調査研究部会
「コロナ禍以降の山岳遭難データから読み取る年代別の特徴とその対策－警察庁提供データ2021-2023から－」
「コロナ禍以降の山岳遭難データから読み取る年代別・男女別の特徴とその対策－長野県警察提供データ2021-2023から－」
「2021～2023年の長野県山岳遭難データによる山岳遭難の実態」
<https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/kyousai/tabid/76/Default.aspx>
- 2) 独立行政法人日本スポーツ振興センター
「NEWS RELEASE：警察庁・長野県山岳遭難データの分析結果公表について」
<https://www.jpnsport.go.jp/corp/LinkClick.aspx?fileticket=Y4QL5E7lRmw%3D&tabid=837&mid=2091>
スポーツ庁「令和7年度報道発表資料：警察庁・長野県山岳遭難データの分析結果を公表します」
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/

jsa_00210.html

- 3) 「登山リーダー」とは、困難（トラブル）を克服できる登山の経験や技量など個人的能力と、危急時に際してチームを整然と動かす指揮的能力の両方を兼ね備えた、チーム（パーティー）を率いて登山を安全に実践できるリーダーのこと。国立登山研修所『新・高みへのステップ』第1部参照。

<https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/tabid/213/Default.aspx>

- 4) JSC「第4期中期目標・中期計画」

<https://www.jpnsport.go.jp/corp/koukai/tabid/2325/Default.aspx>

- 5) JSC「第5期中期目標・中期計画」

<https://www.jpnsport.go.jp/corp/koukai/tabid/2350/Default.aspx>

- 6) 村越真「なぜ遭難するのか？－2012～2013年の山岳遭難データによる疫学的分析」ヤマケイ登山総合研究所編『登山白書2016』（山と溪谷社、2016年、204～210頁）

- 7) 総務省「通信利用動向調査」（2025年12月22日アクセス）

<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html>

- 8) スポーツ庁「ライフパフォーマンス」とは（2025年12月22日アクセス）

<https://sportinlife.go.jp/lifeperformance/>

- 9) YAMAP MAGAZINE「若年層で「道迷い」減少も、転倒60代から40～50代に広がる | 国立登山研修所が遭難データ分析」（2025年12月22日アクセス）

<https://yamap.com/magazine/69746>

2025年度大韓民国国立公園公団・国立公園教育院との交流事業

国立登山研修所

1. 新型コロナ後初の韓国往訪

2025年12月8日（月）から12月11日（木）まで、韓国・ソウルにある、韓国国立公園公団（以下「公団」という。）・国立公園教育院（以下「教育院」という。）を、国立登山研修所（以下「登山研」という。）職員4名で往訪した。

登山研と教育院は、2010年に「事業協力に関する協約書」を締結し、1年ごとに派遣・招聘を交互に行うことで両国を行き来してきた。しかし、新型コロナウイルス感染症（以下「新型コロナ」とい。）拡大により、2020年度から2023年度までの4年間、交流事業は中断し、2024年度に韓国から日本へ5年ぶりに受け入れを行った。

2024年度は、7月中旬に7名を受け入れ、別山尾根からの劔岳本峰登頂を目指す予定であったが、悪天候により、立山室堂から劔沢にある登山研夏山前進基地までの往復となった。2025年度は、6年ぶりに日本から韓国へ往訪する機会となった。

2. 韓国国立公園公団・国立公園教育院とは

2-1. 両国の組織

教育院は、2025年1月、従来の「山岳安全教育院」から組織改編及び名称変更された組織である。公団全体の職員総数は約2,600名¹⁾。年間総予算は約4,700億円²⁾で、登山研を所管している独立行政法人日本スポーツ振興センター（以下「JSC」という。）と比べると、職員数で約3倍、予算（スポーツくじの販売に係る予算を含む。）で2倍超を有する大規模な団体・組織である。公団の職員は国家公務員では

ないものの、「準公務員」（日本でいう「みなし公務員」）に当たり、中期目標管理法人・非国家公務員型であるJSCとも類似している。

一方、公団とJSCとは大きく異なるところもある。その最たるものが法人としての「所掌」「ミッション」である。

公団は、韓国の「環境部」（日本の「環境省」に当たる。）所管であり、国立公園の維持、運営及び管理を主なミッションとしている。JSCは、文部科学省の外局であるスポーツ庁所管であり、登山に限らないスポーツ全般の振興を主なミッションとしている。

また、公団内には事業部門及び管理部門だけでなく、研究部門（日本の「国立研究開発法人国立環境研究所」に当たる。）を有しているほか、地方にも29の「国立公園管理事務所」（支所）を有している。JSCも同様で、登山研をはじめとした複数の事業部門及び管理部門だけでなく、ハイパフォーマンスポーツセンター内にスポーツ医・科学、情報分野の研究部門「国立スポーツ科学センター」を有しているほか、災害共済給付事業において地方にも5か所の支所を有している。

教育院は、公団という大規模な団体・組織の中の1部署として存在しており、登山研が、JSCという法人の中の1部署として存在していることとも類似している。職員数は、教育院が40名、登山研が7名で、絶対的な人数の違いがあるほか、組織全体の総職員数に占める割合で比較しても教育院の方が充実しており、安全登山や山岳遭難救助に関する韓国国内での施策の重要度が高いことが伺える。

2-2. 両国の山岳遭難救助組織

公団は、「国立公園管理事務所」（支所）において「山岳遭難救助隊」を保有及び運営しており、教育院とは別部署の、公団の職員が救助隊員となり、国立公園内での山岳遭難救助を行っている。韓国の主要な山域は、ほぼ全て国立公園として指定されており、実質（準国家）公務員が、国の山岳遭難救助隊として捜索及び救助活動を行っている。

他に、韓国では、遭難場所を管轄する地元の消防が、公団職員の山岳遭難救助隊と連携して救助活動を行っている。警察は「行方不明者の捜索」のみを行い、山岳遭難「救助」は行わない。

登山研・JSCには、山岳遭難救助活動を行うような部署・職員は存在しない。2023年度から、登山研・JSCの諮問機関である専門調査委員会（外部有識者約20名で構成）内に「調査研究部会」を設け、山岳遭難データの分析等を行っており、詳細については本号の別稿「疫学／一次予防の視点からの山岳遭難対策：全国山岳遭難対策協議会シンポジウム発表の山岳遭難データ分析から」を参照されたい。

日本では、警察庁や消防庁といった国レベルでの山岳遭難救助組織は無く、各都道府県の警察・消防（つまり地方公務員）や、地元の山岳会等をはじめとした民間救助組織、山小屋スタッフなど様々な団体・個人が連携して、事案が重大な場合には自衛隊の協力も得つつ、救助活動を行っている。

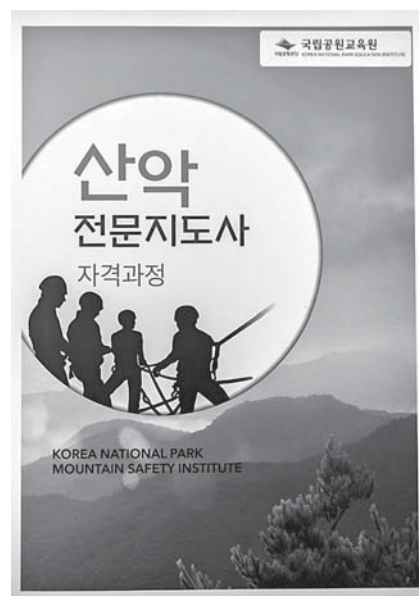
韓国、日本どちらが望ましいかという二者択一の議論ではなく、どちらの仕組みも、両国の社会事情に即した形となっており、それぞれメリット・デメリットがあることに留意する必要がある。本稿では紙幅の都合上、仕組みの詳細や背景の社会事情に関する説明は割愛するが、例えば、総人口に占める首都圏人口の割合は、ソウル市・京畿道・仁川市が国全体の約51.0%³⁾、東京都⁴⁾・神奈川県⁵⁾・埼玉県⁶⁾・

千葉県⁷⁾が国全体⁸⁾の約30.0%であること、国と地方の財政支出の割合が韓国は約54.8%：約45.2%⁹⁾、日本は約45.8%：約54.2%¹⁰⁾であることなど、両国には中央集権的・地方分権的な制度や社会の差異があることに留意した比較や議論が必要である。

2-3. 両国の山岳関連資格

教育院は、「山岳専門指導士」という国家資格に準じた資格制度を運営している。資格の取得に制限は無く、広く一般の者を対象としているほか、消防公務員を対象とした特別クラスがある。資格取得のためには、4日間（32時間）の研修を受講する必要がある、その内容は登山の基礎理論に関する講義（10時間・①読図、②登はん理論、③救助理論、④国立公園の概要等一般知識）と、実習（22時間・①ロープワーク、②クライミング、③ファーストエイド、④岩壁救助）に分かれる。

また、筆記及び実技の検定試験に合格することで資格が取得できる。筆記と実技で、上記①～④の各科目で40点以上を獲得し、かつ、筆記は4科目の平均が60点以上、実技は4科目の平均が70点以上を獲得する必要があるなど、基準が明確化されている。制度の概要やカリキュラムの一部はWeb等で公表もされており、公認テキストも刊行され、研修受講だけでなく検定試験受験にも受験料を支払う必要



「山岳専門指導士」の公認テキスト（約430頁）

4. その他

があるなど、教育課程として体系立てて制度が整備されている。

他に、山岳救助を専門とした研修会も開催しており、公団で遭難救助に当たる国立公園職員を対象としたコース（初級2泊3日、中級・上級各3泊4日）や、消防を対象としたコース（初級・中級・上級各4泊5日）など、資格制度と同様に教育課程として体系立てて整備されている。

登山研においても、「山岳遭難救助研修会」をはじめとした、安全登山・山岳遭難救助に関する研修会・講習会を開催しているが、資格制度の運営は行っていない。日本においては、公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会と公益財団法人日本スポーツ協会が連携して行う、山岳・スポーツクライミングに関する指導者資格制度¹¹⁾や、公益社団法人日本山岳ガイド協会が行うガイド資格制度¹²⁾、その他救助技術や野外救急、雪崩対策などに特化して民間団体が行う研修会やコースがあるが、国としての統一的なカリキュラムや資格制度は存在しない。

山岳遭難救助組織と同様に、韓国、日本どちらが望ましいかという二者択一の議論ではないが、韓国で特筆すべきこととしては、資格を保有していることで、公団職員への採用が有利になる（公団職員採用時の募集要項等に明記）など、キャリアパスまで見据えた、資格保有が実益に叶う制度設計となっていることが挙げられる。

3. 改修中施設の視察と両国最新の登山事情

3-1. 改修中施設の視察

新型コロナ以前の登山研から教育院への訪問は約1週間で、山岳遭難救助の合同訓練や、韓国東部・江原道にある雪岳山国立公園での合同クライミング・日帰り登山などを主に行ってきた。今回は、6年ぶりの韓国往訪ということもあり、両国最新の登山事

情に関する情報・意見交換を主目的とした。また、教育院の所在する国立公園内の主峰であり、ソウル市最高峰の北漢山（標高836m）の日帰り登山を行った。

教育院は、2025年12月末の竣工に向け、施設の新設・改修工事の終盤を迎えていた。登山研の本館に該当するような施設が敷地内に複数あり、訓練施設・職員の事務室・シャワー完備の更衣室・完全バリアフリー対応のトイレ（敷地内にエレベーター有）、教育院職員・研修参加者が利用できる毎日営業の食堂、50人規模の会議室が複数備えてあるなど、施設・設備とも非常に充実していた。

また、1点「登山研を参考にした」という整備内



竣工直前の施設



完全バリアフリー対応のトイレ

容があり、登山用具や救助資機材を格納するための地下の装備庫に隣接して、水道・シャワースペースが設置され、洗浄・乾燥後の整理や格納のためのスムーズな導線となっていた。2018年度に、教育院から登山研へ来訪した職員の意見が採用され、整備が実現したという説明を受け、資料交換やオンラインミーティングには無い、現地相互交流の成果の一つを確認することができた。

3-2. 両国最新の登山事情

今回の往訪に当たっては、登山研から教育院に対して、施設の視察や日帰り登山だけでなく、会議形式でのプレゼンテーションや討論時間を十分に確保できるよう、事前に登山研側からスケジュール案を提示・打診した。韓国に限らず、外国との交流事業や会議においては、事前にスケジュールを詳細に固めないケースや、作成資料の事前共有等はいわれない文化・慣習となっていることも多くあるが、今回は日本国内のビジネス一般においてスタンダードなレベルと思われる資料作成（4種で計約75頁）を事前に行い、訪問の1週間前に韓国側にEメールにて送信、提供した。また、昨今技術革新の著しい生成AIを利用することで、情報収集・要旨作成・日本語から韓国語への翻訳をスムーズに行うことができ、資料には韓国語を並記して提供した。

結果、教育院側においても、プレゼンテーション資料を日本語に翻訳した、登山研提供資料と同程度のボリュームの資料が当日用意され、目に見える・後に残る形での情報入手をすることができた。また、教育院側は事前に登山研作成資料を読み込んでおり、当日の議論や意見交換もスムーズかつ具体的な内容となった。以下箇条書きとなるが、当日の内容を記載する。

① 日本→韓国

- (1) 登山研主催事業において、なぜ高校生を直接対象とするのではなく、高校部活動の顧問・指導者・コーチを対象としているのかに関する説明。高等学校登山夏山基礎講習会・高等学校登山指導者オンラインセミナーの紹介
- (2) 積雪期の研修内容や教材（登山研制作『新・高みへのステップ』）の紹介。雪崩搜索訓練の動画視聴と内容の説明
- (3) 警察庁・長野県警察提供山岳遭難データの分析結果¹³⁾に関する説明。日本における登山道の管理主体、山岳遭難救助の実施主体、登山届の提出方法、主な都道府県の条例等による登山規制、富士山・上高地横尾の入山規制の紹介

※（1）及び（2）については、教育院から登山研、事前に説明の要望を受けた事項

② 韓国→日本

- (1) 韓国の最新の登山事情・文化（特に新型コロナ収束後は、10代・20代の若年層登山者が最も多い割合を占め、若年層の道迷い等の遭難事故が多発していること。）
- (2) 「山岳専門指導士」をはじめとした資格制



両国の交流団

4. その他

度の仕組み。山岳遭難救助に関する研修会のプログラム詳細

- (3) 軽犯罪を犯した青少年に対する、登山を通じた更生プログラムの実施内容
- (4) 日本の「登山届」の仕組みが韓国には無いこと（※一部クライミングルート・ゲレンデのみ申告・届出制度あり）。同様に、日本で普及しているスマートフォンの「登山届提出アプリ」がどのようなものかに関する質疑（韓国では「地図アプリ」はあるものの、「登山届提出機能」は備わっていない。）

※（1）及び（2）については、登山研から教育院へ、事前に説明の要望を受けた事項

4. 北漢山の登山道・登山環境

前述のソウル市最高峰・北漢山（標高836m）の登山道・登山環境についても紹介する。これまでの日本国内・日本語で確認できる報告や記録では、韓国は「規制登山」、日本は「自由登山」と区分をして、両国の差異にフォーカスした内容が多く見受けられた。特に韓国においては、登山口に入山を規制するためのゲートが設置され、入山可能な時間は日中の時間帯に限定され、登山道はアスファルトで舗装され維持・管理が行き届いているというような内容が主であった。今回の往訪では、新型コロナ収束後の変化の有無の確認や、両国の差異だけにとらわれず、類似している部分や、日本の安全登山・山岳遭難事故防止に参考とできるような情報の入手を目的として入山した。

例えば、登山口には、日本の地下駐車場や大型店舗入口にあるような細いゲートが設置されている。これは一見、ゲートの開閉により入山が厳しく規制されているように見える。しかし実際、北漢山や都市近郊の登山道では、入山可能時間は午前4時（日

の出）から午後4時までとされているものの、登山口のゲートは24時間開放されており、ゲートを閉めて入山を規制するのは台風等の荒天時のみであって、年間30日から40日程度という説



登山口にあるゲート

明を受けた。もちろん、立入を制限するような警備員はおらず、登山口付近にある国立公園管理事務所のスタッフが24時間目視又はカメラ等で監視するような仕組みも無い。特に、都市近郊では登山道が数十ルートある山も珍しくなく、全ての登山口で規制することはできず、登山道の少ない地方の国立公園の一部でのみ厳格に行っているケースがあるという説明であった。

また、今回登山した北漢山は未舗装の土のトレイルで、日本のよく整備された登山道と類似しており、アスファルトで舗装された部分もある東京の高尾山や、新しい木段や砂利で整地された神奈川の丹沢・塔ノ岳の事例を見ても、韓国と日本では類似している部分も多く見受けられた。北漢山頂上直下の急な岩場のみ、金属の手摺が両サイドに設置されていたものの、近時の日本アルプスでも主要な登山道では、鎖や梯子がよく整備されており、それほど大きな差異は見受けられなかった。

日本にはあまり見られないものとして、ケガや体調不良の際に使用する「ファーストエイドキット」（絆創膏や包帯など）が、施錠された金属の箱に保管されて登山口から頂上までの登山道の途中に複数設置

されている。箱に表記のある電話番号へ連絡すると、南京錠の暗証番号を教えてもらうことができ、箱を開けて絆創膏等を使用することが可能な仕組みとなっていた。日本においてこの仕組みをとろうとした場合、設置主体や消耗品の管理・提供主体、予算、登山道へのインパクトや景観への影響など、クリアしなければならない課題は複数想定されるが、登山時の事故対策に資する施策の一つとして参考となろう。



ファーストエイドキットの保管箱

もう一つ、登山道に設置された道標に関して、表記方法の一部が国（国立公園）全体として統一されており、500m間隔で設置されていた。（地名のみ記載の簡易的な道標も多く設置されていた。）日本国内においては、各山域・登山道の管理主体は、環境省・農林水産省（林野庁）・都道府県市町村・私有地等の土地所有者・山小屋経営者等のほか、事実上の管理者・管理主体が不在、など様々であり、道標のデザインや表記方法も山域・地域独自となっており、地名・距離・コースタイムなどの表記の有無も様々である。

韓国では、国土を10m×10mの格子状に区切り、ハンゲル2文字と縦・横各4桁の番号で付番する「国家地点番号」¹⁴⁾が運用されており、道標にも必ず掲示されていた。万が一登山中に道迷い等で遭難し、スマートフォンやGPS（GNSS）端末の紛失・

故障・バッテリー切れ・アプリによる緯度経度情報の表示方法が分からない、等が発生しても、500m間隔の道標さえ発見できれば、正確な位置情報を通報することができる。日本でも、国土地理院（基盤地図情報¹⁵⁾）等によるメッシュデータや統一標準コードは存在し、防災分野等で一部活用されているものの、道標への表記や遭難地点の特定には用いられていない。特に山岳遭難防止・山岳遭難救助の迅速化・正確化・省力化ための施策の一つとして、日本においても検討される価値はあろう。



ハンゲル2文字と縦横4桁の番号が振られた道標

最後に、北漢山の特殊山岳救助隊について紹介する。登山口と山頂の中間地点付近に、救助隊員の駐在所が設置されており、日中4名・夜間2名が交替勤務で常駐する体制となっていた。北漢山だけで、救助隊員は約30名（うち女性4名）おり、登山当日は夜間勤務を終え下山する女性隊員ともすれ違った。

新型コロナ収束後、韓国では10代・20代の登山者が急増し、Instagram等のSNSに「自撮り写真」や夜景の写真を投稿するために、夕方から入山し、暗くなり道迷いや転滑落（韓国では「墜落」という。）による事故も多いという説明を受けた。北漢山だけで年間約160件（うち100件近くはヘリコプターによるホイスト救助）の遭難事故があり、東京の高尾山（2024年は年間131件¹⁶⁾）よりも多い状況となって

4. その他

いる。写真のように、駐在所内には大型モニタが複数設置され、登山道に設置されたWebカメラの映像や気象情報が一覧できるように整備されているが、特定の隊員が24時間モニタを監視しているわけではなく、あくまでも事故が発生したときや天候の急変等を迅速に確認・対応できるようにする目的で設置されている。



登山道に設置されたWebカメラの映像や気象情報を表示した駐在所内のモニタ

新型コロナ前の日本では、実現性は乏しかった可能性もあるが、新型コロナ後は日本においてもWebカメラや一般用の防犯カメラが廉価で簡易に入手できるようになりつつあり、個人情報や映像データの取扱い等に関する課題をクリアしつつ、主要な登山道において設置が進めば、登山時の事故対策に資する有効な一つの施策となろう。

5. おわりに

本稿では、交流事業を通じて具体的に日本においても役立つであろう情報を中心に記載・報告してきたが、最後に「交流事業」としてのコミュニケーションの部分にも言及したい。

両国の登山事情・登山文化に関する議論の中で、韓国側から「山は自由に登るものでしょう。」という一言が発せられたことが印象的であった。韓国も日本も、日常の登山に関する基本的な意識・スタンスは類似しており、登山に関する規制やルール、管

理の主体や方法が部分的に異なるだけであって、新型コロナ前までのような差異に着目するだけでなく、類似点もあわせて総合的に比較・検討・参考としていくことが肝要である。

また、今回得られた情報は、事前の資料作成・準備・情報提供等を入念に行った上で、対面で議論をし、一緒に話をしながらゆっくりと登山をしてこそその内容であった。Eメールでのやりとりやオンラインミーティングに限らず、対面での交流を今後も継続することで、隣国の最新の登山事情・情報を定期的にアップデートし、両国の安全登山や山岳遭難防止に役立てることが、本交流事業の最終的なゴールであり成果である。

最後に、新型コロナ収束後初めて、登山研からの訪問を快く受け入れてくださった教育院の皆様と、出張中に登山研に残り職場を維持してくださった職員の皆様に、深くお礼を申し上げます。

<参考文献>

- 1) ALIO公共機関経営情報公開システム「従業員数」(2025年12月22日アクセス)
<https://alio.go.kr/item/itemReportTerm.do?apbaId=C0021&reportFormRootNo=2020>
- 2) ALIO公共機関経営情報公開システム「収入・支出現況」(2025年12月22日アクセス)
<https://alio.go.kr/item/itemReport.do?seq=2025041002977248&disclosureNo=2025041002977248>
- 3) KOSIS「人口状況板」(2025年12月22日アクセス)
<https://kosis.kr/visual/populationKorea/PopulationDashBoardMain.do>
- 4) 東京都「東京都の人口(推計):毎月」(2025年12月22日アクセス)
<https://www.toukei.metro.tokyo.lg.jp/>

jsuikei/js-index.htm

- 5) 神奈川県「神奈川県の人口と世帯」(2025年12月22日アクセス)

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/x6z/tc30/jinko/jimkotosetai.html>

- 6) 埼玉県「埼玉県推計人口」(2025年12月22日アクセス)

<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0206/03suikei/index.html>

- 7) 千葉県「千葉県毎月常住人口調査月報(令和7年)」(2025年12月22日アクセス)

<https://www.pref.chiba.lg.jp/toukei/toukeidata/joujuu/geppou/2025/index.html>

- 8) 総務省統計局「人口推計の結果の概要」(2025年12月22日アクセス)

<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2.html#monthly>

- 9) 一般財団法人自治団体国際化協会ソウル事務所「韓国における地方自治の状況」(2025年12月22日アクセス)

https://www.clair.or.kr/downloads/basic/korea/PDF2_korea_local_st_2025.pdf

- 10) 総務省「地方財政の分析」(2025年12月22日アクセス)

https://www.soumu.go.jp/iken/jokyo_chousa.html

- 11) 公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会「山岳指導者」(2025年12月22日アクセス)

https://www.jma-sangaku.or.jp/sangaku/safe_climb/coach/

- 12) 公益社団法人日本山岳ガイド協会「資格の種類」(2025年12月22日アクセス)

https://jfmga.jp/shikaku_shurui.php

- 13) 国立登山研修所専門調査委員会調査研究部会「コ

ロナ禍以降の山岳遭難データから読み取る年代別の特徴とその対策—警察庁提供データ2021-2023から—」

「コロナ禍以降の山岳遭難データから読み取る年代別・男女別の特徴とその対策—長野県警察提供データ2021-2023から—」

「2021~2023年の長野県山岳遭難データによる山岳遭難の実態」

<https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/kyousai/tabid/76/Default.aspx>

- 14) 行政安全府「報道資料：救助位置を知らせる国家地点番号、危険な瞬間どこでも確認可能」(2025年12月22日アクセス)

https://www.mois.go.kr/cmm/fms/FileDownload.do?atchFileId=FILE_00116864_ENKesF2&fileSn=1

- 15) 国土地理院「基盤地図情報サイト」(2025年12月22日アクセス)

<https://www.gsi.go.jp/kiban/>

- 16) 警察庁生活安全局生活安全企画課「令和6年における山岳遭難の概況等」(2025年12月22日アクセス)

https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/r06_sangakusounan_gaikyou.pdf

国立登山研修所友の会の活動について —研修の考え方を次代へとつなぐ共同体—

恩 田 真砂美（国立登山研修所友の会）

はじめに

国立登山研修所（以下「登山研」という。）は、我が国における登山指導者育成および安全登山普及の中核機関として、長年にわたり重要な役割を担ってきた。その最大の特徴は、登山を単なる技術の集合体ではなく、「判断の連続で成り立つ総合的営み」として捉え、それを教育体系として確立してきた点にある。

登山研の研修が目指してきたのは、個々の技術を越えた、「安全に登山を行うための思考方法」の獲得である。しかし、その思考方法は、限られた研修期間の中で完成するものではなく、修了後の現場経験、成功や失敗、判断の迷いといった要素を通じて、長い時間をかけて更新され続けるものでもある。

この「研修のその後」を支え、研修所の目指す方向性を社会に留めようと試みてきた存在が「国立登山研修所 友の会」（以下「友の会」という。）である。本稿では、登山研の歴史を軸に、友の会の成り立ちと歩み、そこに関わってきた人々の系譜、登山研との協働、近年の活動の展開、そして社会的背景を踏まえた課題と今後の方向性について述べる。

1. 国立登山研修所の成立と思考的基盤

国立登山研修所は、登山事故の増加という社会的背景のもと、登山指導者の育成と安全登山の普及を目的として1967年に設立された。登山が個々人の経験や勘に大きく依存していた時代から、科学的知見、教育学的視点、医学的知識を取り入れ、再現性のあ

る形で伝える必要性が高まったことが、その背景にある。

登山研が一貫して重視してきたのは、「技術の標準化」と同時に、「判断力の育成」であった。天候、地形、積雪状況、パーティ構成、体調、装備など、複数の要因を総合的に評価し、状況に応じた判断を下す能力こそが、安全登山の中核であるという考え方である。

この考え方は、登山を個人的な冒険としてではなく、「社会的責任を伴う行為」として位置づける視点にもつながっている。登山における判断は、自身のみならず、同行者、救助体制、地域社会にも影響を及ぼす。研修所が育成してきたのは、安全登山に必要な技能指導者であると同時に、判断の責任を引き受ける登山指導者であった。

2. 研修の限界と「その後」をめぐる課題

一方で、登山研の研修は期間と定員に限りがある。修了後、研修生は全国各地の山城や現場へ戻り、それぞれ異なる条件のもとで登山や指導に携わることになる。

このとき生じるのが、「研修で学んだ考え方や枠組みを、いかに更新し続けるか」という課題である。登山環境は変化し、装備や知見は進歩し、事故形態も変化する。登山研で得た知を固定化して保持するだけでは、これからの場面での安全は担保されない。

また、現場で得られた新たな知見を、個人の経験にとどめず、再び共有可能なものとすることも求め

られる。研修と現場をつなぐ仕組みがなければ、登山研の考え方は個々人の内部で分断され、やがて散逸してしまう。

3. 友の会の設立（1990年）

——研修の考え方を継承するための自発的組織

こうした問題意識のもと、1990年（平成2年）10月、国立登山研修所の研修修了生および講師経験者等を中心に、「国立登山研修所 友の会」が設立された。

友の会は、登山研の下部組織でも、単なる同窓会でもない。登山研の理念と考え方を深く理解した者たちが、修了後も学びを継続し、相互に検証し合うための、自主的・継続的な共同体として構想されたものである。

設立当時の創立メンバーは、登山技術、指導、研究、実践の各分野において豊富な経験を持ち、研修所で得た体系知を社会に還元する強い意思を共有していた。彼らは、研修所の考え方を「守る」存在ではなく、「現場で試し、問い直し、更新する」主体であった。

4. 友の会を形づくってきた人々

——創立メンバーから歴代メンバーへ

友の会の歴史は、制度や事業だけでなく、それを担ってきた人々の連なりによって形づくられてきた。

創立メンバーは、登山研草創期の理念を体現する存在であり、登山研の学びを共有し模索し続ける必要性を自覚した世代であった。その後、1990年代から2000年代にかけて新たなメンバーが加わり、研究会の運営、研修所事業への協力、機関誌『登山研修』の普及など、多様な形で活動が支えられてきた。

2010年以降は、登山研との協力関係が制度化され、役員、運営委員、研究会運営など、関与の形はさらに多様化した。しかし、その根底にあるのは一貫し

て、「登山研の考え方を継承し、更新し、次代へ手渡す」という共通の認識である。

5. 登山研との協働と制度化（2010年）

——理念共有から実務支援へ

2010年（平成22年）12月、友の会と国立登山研修所との間で「事業協力に関する協定」が締結された。この協定は、人とのつながりに依存していた協力関係を制度的に整理し、より持続可能な協働体制へ移行させる重要な節目となった。

協定締結以前、修了者同士のネットワーク形成、研究テーマの情報提供などを通じて研修所を支援してきたが、役割や責任の所在は明確ではなかった。協定により、友の会は登山研の下部組織ではなく、「理念を共有し外部から補完する協力団体」として位置づけられた。

協定締結後、友の会が担ってきた具体的支援は多岐にわたる。

第一に、研修事業の周知・普及支援である。研修修了者ネットワークを活用し、研修内容や受講意義を伝えることで、登山研と現場との距離を縮めてきた。機関誌『登山研修』の頒布や関連資料の配布も、その一環である。

第二に、人材・知見の橋渡しである。研修講師候補者の情報提供、現場で得られた新たな課題や事故傾向の共有、研修内容改善に向けた意見交換などを通じ、登山研が制度上取り込みにくい情報を補完してきた。

第三に、共催事業・啓発活動への参画である。安全登山サテライトセミナー（Plus）などの共催事業において、登山研の知見をより広い層へ届ける役割を担っている。

これらの協働は、登山研の考え方を固定化された知識として保存するためのものではなく、変化に応

4. その他

じて更新し続けるための仕組みである。その意味において、2010年の協定は、友の会が「研修のその後」を制度的に支える存在として位置づけられた重要な転換点となった。

6. 近年の活動と役割の拡張

——研修の考え方を社会に伝え現場と繋げる

2010年代後半以降、登山を取り巻く環境は大きく変化している。登山人口の高齢化や初心者層の増加、情報環境の急速な変化、さらには気候変動に伴う気象・積雪条件の不安定化など、登山の前提条件そのものが揺らいでいる。

こうした状況の中で、友の会の活動は、従来の「研修修了者の学び合い」ととどまらず、研修所の思想をより広い社会へと展開する方向へと拡張してきた。

安全登山サテライトセミナー（Plus）への参画は、その象徴的な取り組みである。友の会は、これらのセミナーにおいて、企画段階から関与し、テーマ設定、講師候補の提案、対象者の想定、広報協力などを通じて、研修所と社会との接点づくりを担ってきた。特に、現場で実際に生じている課題や事故傾向を踏まえたテーマ提案は、研修所の体系的知識をより広い層へと翻訳する役割を果たしている。

また、友の会は登山研における考え方の「翻訳者」としての役割も担っている。機関誌『登山研修』の頒布や紹介、講演・セミナーの開催などを通じて、登山研の考え方が単なる理論ではなく、実践的判断の枠組みであることを伝えている。

近年の活動におけるもう一つの特徴は、関与形態の多様化である。研究会のテーマ設定の工夫や、オンライン参加への対応を取り入れ、全国どこからでも参加でき、初めての人でも参加しやすいような工夫を行ない、より多くの登山者と経験知を共有する

ための仕組み作りを試みている。

7. 課題と今後の方向性

——社会的背景の変化と友の会に求められる新たな役割

友の会は、設立から30年以上を経て、いくつかの課題に直面している。なかでも、会員の高齢化と会員数の減少は、喫緊の課題である。しかし、これらは友の会固有の問題というよりも、日本社会および登山界全体が直面している変化の縮図ともいえる。

日本社会は現在、少子高齢化、人口減少といった大きな構造変化の只中にある。これらの変化は、登山人口や登山文化の担い手の構造にも直接的な影響を与えている。登山人口の高齢化は、登山が中高年層に支持されてきたことの裏返しである一方、従来の登山文化を支えてきた層が体力的・時間的制約を抱える段階に入っていることを意味している。

一方で、若年層の登山参加は消滅しているわけではない。SNSやデジタルメディアを通じて登山に触れる入口は多様化しているが、その参加形態は、従来の山岳会などへの所属を前提としない、より個人化されたものへと変化している。この変化は、友の会のような会員制組織にとって、新規参加のハードルを高める要因となっている。

登山環境そのものも変化している。気候変動に伴う気象の不安定化、積雪状況の変化などは、従来の経験則が必ずしも通用しない状況を生み出している。また、登山に関するネット上の情報量は増えた一方、「情報が多いこと」と「適切な判断ができること」の乖離は拡大している。

近年、安全登山は個人の自己責任論だけでは語れなくなっている。登山事故は、遭難者本人だけでなく、救助機関、自治体、地域社会に大きな影響を及ぼす社会的事象として認識されるようになった。そ

の結果、登山指導者や経験者には、単に自身が安全に登るだけでなく、周囲に対して適切な判断や行動を示す「社会的役割」が期待されている。

デジタル技術の進展は、オンライン研究会や講演を通じ、地理的・体力的制約を超えて学びを継続する可能性を開く。同時に、これまで現場で共有されてきた経験知を、記録として蓄積・整理し、次世代へと継承する契機ともなり得る。

友の会は、「教える組織」ではなく、設立当初より「問いを共有する場」として機能してきた。現場での判断に悩む経験者が問いを持ち寄り、世代や立場を超えて検討する場こそが、登山研の考え方を生きたものとして更新し続け、今後ますます多様化する登山者から求められていく可能性がある。

おわりに

国立登山研修所が築いてきた登山における考え方は、一過性の研修によって完結するものではない。それを社会に留め、更新し、次代へと橋渡ししていくために、友の会は存在してきた。

人が変わり、時代が変わっても、その本質的役割は変わらない。登山研と友の会が相互に補完し合いながら、これからも新しい時代に即した登山文化の有機的な発展に寄与したい。

以 上

参考資料

国立登山研修所友の会：

<https://www.tozankentomonokai.com>

5. 既刊「登山研修」索引

VOL.40-2025（令和6年度）

1. 登山に関する調査研究

- (1) 登山における歩行の特殊性を考慮した日常でのストレッチングと筋力トレーニングのあり方～足首の動きに着目して～ …… 照内明良
- (2) 六甲タイムトライアルについて …… 三輪文一
- (3) 登山研修所における積雪観測結果
(2023～2024年冬期) …… 飯田 肇 他
- (4) 釧路雪渓の近年の変動Ⅲ …… 飯田 肇 他
- (5) 気候変動によるフランス・アルプスの登山の変容 …… 吉沢 直
- (6) セティゴルジュ踏査（2022-2023年 ネパール アンナプルナ山群）でのタクティクスと使用したキャニオニングの技術について
…………… 田中 彰
- (7) 日本のクライミングの進展1965年から
…………… 須田義信
- (8) パリオリンピックにおけるスポーツクライミングの成果 …… 安井博志
- (9) 富士登山に関する提言～富士登山を山麓の地域振興に活かす仕掛けづくりについて～
…………… 佐藤大輔

2. 登山界の現状と課題

- (1) 長野県山岳総合センターにおける山岳遭難事故防止の取組みと今後の課題 …… 杉田浩康
- (2) 障がいのあるひととの山登り / 山歩き～共通する考え方と現状、そして課題～
…………… 岩岡研典
- (3) アイスクライミングゲレンデの現状
…………… 馬目弘仁
- (4) 富士登山の現状と医療支援について～2024富士宮口での診療活動を通じて～
…………… 大城和恵

- (5) 穂高岳山荘における事業承継と山小屋の将来について（コロナ後の山小屋の変化を含む）
…………… 今田 恵
- (6) 外国人登山者から考える日本の減遭難－全国山岳遭難対策協議会シンポジウムから
…………… 村越 真

3. 海外登山記録

- (1) ネパール ダウラギリ山群ツクチェピーク前衛峰北東壁登攀（6,490m） …… 伊藤仰二
- (2) ペルー・キタラフ南面登攀の記憶
…………… 王鞍慧介
- (3) ツイⅡ西壁初登と、ここ3年の海外遠征で学んだこと …… 鈴木雄大
- (4) フォレソビ（6,645m）北壁登攀
…………… 山本大貴
- (5) チョッパバマレ東稜登攀 …… 國宗広太郎
- (6) カンチェンジェンガ山群、パンドラ峰北東壁～アルパインクライミングと「運」～
…………… 鈴木啓紀
- (7) ネパール ニルギリ北峰 未踏の西側の記録
…………… 青木達哉

4. 既刊「登山研修」索引

VOL.1-1985（昭和60年度）からVOL.39-2024（令和5年度）のタイトル、過去のバックナンバーは国立登山研修所HPを参照してください。

(<https://www.jpnsport.go.jp/tozanken/>)

QRコード



編集後記

本年度も様々な視点からの記事を御寄稿いただきました。
公私とも御多用の中、御協力いただきました執筆者並びに編集委員の方々に厚く御礼申し上げます。

本誌に掲載いたしました国立登山研修所専門調査委員会の調査研究部会の山岳遭難データの分析結果を御覧いただくと、山岳遭難の現状を把握するための根拠になるものをお示しできたのではないのでしょうか。これを元に専門家の皆様がそれぞれのお立場から安全登山に資する提案を発信され、広がっていくことを願うばかりです。

今後も「登山研修」を充実させるとともに、手に取っていただける方が隅々まで読んでいただけるよう邁進してまいります。

(文責 沓掛)

[登山研修] 編集委員会

編集委員長

恩田真砂美 上智大学山岳会 会員

編集委員

飯田 肇 富山県立山カルデラ砂防博物館学芸課長

尾形 好雄 公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会元専務理事

横山 勝丘 信州大学学士山岳会 会員

水腰英四郎 十全山岳会 会員

山本 正嘉 鹿屋体育大学名誉教授

渡邊 雄二 国立登山研修所アドバイザー

(順不同 職名は令和8年3月1日現在)

なお、登山研修所では、次の者が本書の編集に携わった。

米山 隆 国立登山研修所所長

波多野貴大 国立登山研修所管理係長

黒川 和英 国立登山研修所専門職

沓掛栄一郎 国立登山研修所専門職

朽見 太朗 国立登山研修所専門職

※無断転載、複写を禁じます。

登山研修 VOL.41

令和8年4月 発行

独立行政法人日本スポーツ振興センター

国立登山研修所

編集・発行人 米山 隆

〒930-1405

富山県中新川郡立山町芦峯寺ブナ坂6

TEL 076-482-1211(立山町千寿ヶ原)

印刷 とうざわ印刷工芸株式会社

〒930-0008 富山市神通本町1丁目8-13

JAPAN SPORT
COUNCIL

日本スポーツ振興センター